
筑摩叢書 97

武士の娘

杉本 鉞子
大岩美代訳



筑摩書房



著 者

装幀 原 弘 (NDC)

目次

一	越路の冬	三
二	縮れ毛	一〇
三	寒稽古	一五
四	旧と新	二二
五	落葉	二六
六	お正月	三三
七	父の苦衷	四一
八	二つの冒険	四七
九	孟蘭盆	五五
十	酉の日	六四
十一	初旅	七二
十二	旅に学ぶ	七九
十三	外国の人	八四

十四	学	課	九〇
十五	受	洗	九七
十六	渡	米	一〇五
十七	第一	印象	一四四
十八	風習の	ちがい	一六六
十九	思	うこと	一五五
二十	と	なりびと	一四三
二十一	新	しい経験	一五一
二十二	異	郷の花	一六三
二十三	千	代	一六九
二十四	東	京の家	一七六
二十五	困	ったこと	一八四
二十六	お	祖母さま	一八九
二十七	無	縁 仏	一九七
二十八	日	本の婦道	二〇三
二十九	姉	の家	二一〇

三十	死	蔵の	宝	二八
三十一	黒	船		三五
	訳者	あとがき		三九

武士の娘

一 越路の冬

外国の方々は、よく日本を日の照る国、桜の花さく国とおっしゃいますが、これは大方の観光客が、年中気候の温和な東部や南部ばかりを見物されるからでありましょう。裏日本の海岸などでは、十二月から三、四月まで雪につつまれてしまふところがございます。

私の郷里、越後の国では、冬は何時も大雪ではじまり、しんしんとおやみなく降りつづき、藁葺屋根の太い棟木のほかに、何も見えなくなるまでにあたりを埋めつくしてしまいます。そうすると、藁笠をつけた人足達が、手に手に木鋤を持って、道路の一方から他方へぬける雪のトンネルを掘ります。冬の間じゅう道のまんなかの雪はとりのけられもせず屋根を凌ぐほどに高く積っていました。人足達は時々、信濃川まで雪を流しに参りますためにこの雪の山に段々をつけました。私達子供はそれをよじのぼっては、その頂きを駆けまわったものでした。そして、時には、雪

に埋れた村落を救いにゆく武士のさまをしたり、掠奪に出かける義賊を真似て忍び足に歩きまわったり、色々な遊びをいたしました。

が、私達子供が喜んで心躍らせた時季は、雪のくる前、町中が冬支度に忙しい頃でありました。この支度には何週間もかかり、毎日、学校のゆきかえりに立停っては、人足達が忙しそうに路傍のお地藏さまや小さい祠に、藁で作った冬衣を着せるのを眺めたものでございました。庭の樹木も植込も石燈籠も藁でつまれました。お寺の壁まで藁で包み、ところどころを竹の押ぶちで抑えたり、大袈裟な藁縄の網をかけたりました。日毎に街の様子が改まり、お社の石段の上の大きい狛犬に藁がこいがすむ頃までには、町中は大きさも形も様々な藁のテントにつつまれて、グロテスクな様に変り、三カ月も四カ月も家々を埋めてしまふ大雪の来るのを待ちかまえていたものでありました。

大きな家は大い、昔風の廂の深い藁葺屋根でしたが、街々の商家の、柿葺の屋根の横木には、春の雪解のはじまる時のなだれを防ぐために、石が載せてありました。この廂屋根が長くつき出して、冬になりますと、上部に油紙をはった障子板を歩道にはめますので、そこは忽ち床の

ない廊下に変り、人々にはげしい吹雪の折にも、ことなく往来ができるのでした。光はこの油障子を通して射して参りますので、その廊下は僅かながら雪明りがして薄暗くはありましたが、真暗というのではありませんでした。街角の雪のトンネルの交叉点では大きい文字なら読める明るさでした。それで、たびたび学校の帰途、仲好しのお友達とトンネルの間で本を抜けては、雪あかりを頼りに勉強したという昔の学者をまねてみたりしたものでございました。

その名も「山の後方」を意味する越の国は、蜿々とつらなる三国山脈に隔てられていますので、封建時代の初めまでは、ここは氷にとざされた僻地と考えられ、地位も高く権勢ある人々で、罪人扱ひもしにくいものを流すには恰好の地とされたものでした。こうした人々の中に、その時分の改革者があつたわけでした。当時の日本は、政治上にも、宗教上にも、革新ということに対しては、仲々きびしく、殊に大宮人の中で、進歩的な考えをもつ人々や、覇気のある僧侶たちは、一樣にいとわしい汚名を被せられ、何処か僻遠の地に送られ、永久にその志を挫かれたものでありました。越の国に流された政治犯の人々も、仕置場の彼方の小さな墓地に埋れたり、貧しい農民の中にその姿を消して

しまうのでした。富も位もただならぬ若者が巡礼の姿に身をやつし、行方も知れぬ父のあとをたずねて、越路の村々をさまよい歩いたなどという悲しい物語の数々が、今も日本の文学にのこっております。

それにくらべますと宗教改革者達の生活は楽でした。大方は人々にたち交つて、黙々として目立たぬように働きたがら日々を送るという風でありました。流罪に一生を終りながらも、新しい仏教の宗派を起した祖師達は、偉大な方でありましたので、やがてその信仰は広まり、遂に越後は日本きつての新宗派の根拠地として知られるようになりました。そんなことから私もごく幼い頃から、お寺さまのお説教は聞きなれており、自然石に彫り込んだお像や、山かげの洞穴の中のお地藏様など——これらはみな、昔のお坊様の倦むことを知らぬ手になったものでありましたが——をも見なれていました。

私の家は長岡の城下町にあり、私どもの家族は父、母、祖母、兄、姉、私を加えて六人でありました。それに、父の下男頭の爺や、私の乳母のいし、外にきんとんという女中もいました。法事などのときは昔からの出入りのものが手伝いに参つたものであります。また私には他家へ嫁いきの窓がつけてありました。昼間は門はあいておりましたが、夜はこの戸を叩いて「頼も頼も」の声がかかりますと、たとえそれがよく聞き知つた近所の人の声でありましたも、昔かたぎの爺やは必ず馳けてゆき、小窓からのぞいて、その客の顔を確めた上でなくては、扉を開けようとは致しませんでした。

門から玄関までは、凹凸の多い飛石づたいになっており、その石と石との間には、私が生れて初めて見た外国の花——爺やは「巨人の釘」と呼んでいましたが、草丈の低い、丸い花のさくものでした——が咲いておりました。誰かがこの花の種子を爺やに呉れたのですが、爺やは多分このお庭へ異国の花など植えてはもつたないとも考えたのでしょう、氣を利かして人の足に踏まれる通り道を選んで蒔いたのでした。ところが、大変丈夫なこの花は、昔のようにどんどんひろがったのでした。

私の家がこんなに一時凌ぎの間に合わせものでありましたのも、御維新の悲劇の一つのあらわれともいえるかと存じます。越後長岡藩は幕府政治を支持した藩でございました。この人々にとっては、至尊が御親から戦さのことで政治向のことにかかわり給うことは余りにももつたないこ

だ姉達がありました。婚家はみんな遠方でございました。唯、一番上の姉だけは長岡から人力車で半日程の所に住んでおりましたので、この姉は時折り訪ねて参ることもあれば、時には私も姉についてその家へゆき、数日泊つてまいることもありました。この姉の家は農家で、ずっと昔には三ツの山も持つていたとか聞いております。武家の娘はよく農家に嫁いだものでありますが、これと申しますのも、農は土に次ぐ階級として尊ばれ、「米のなる木のその山里は、神代ながらの大黒柱」などという百姓衆の元氣なうたを幼い頃からよくきかされたものでございました。

私共は町はずれのむやみにひろい家に住んでおりました。私が物心ついてからでも、時折り建増しをしていましたので、部厚い藁葺屋根は切妻のところ傾き、壁には凹凸だの、しみのついたところのありました。大小様々の部屋が曲りくねった細い廊下で奇妙なつながり方をしておりました。家をとりにまく石の築地の上には、低い板塀がついておりました。大門の屋根は四隅で軽く反り、朽葉色の藁屋根のそこそこには、苔さえむしておりました。扉は頑丈な鉄の蝶番で支えられ、それが装飾的に扉のなかばまで伸びていました。門の両側は塗壁になっていて、細長い格子つ

とと考へ、祖先代々忠勤をはげんでまいりました將軍家のために戦つたのであります。当時父は祖父の急死により、七歳の時から相続していた家老の地位にありました。国家老という重い責任をもつ身でありましたので、御維新の騒ぎの間、父は随分と苦勞をいたしました。

越後が負け戦だと知つた時こそ、長岡方の悲運の瞬間でありました。夫の信奉していたところが破れて、とらわれの身となつたことを知りました時、母は、家族をつれてのがれ、家屋敷が敵の手に落ちることをいとうて、自らこれに火をかけ、山かげから我が家の焼け落ちるのを見守っていたと申します。

戦の嵐もすぎ、中央政府の樹立をまけて、公の地位を退きました父は、陸に上つた魚にも似た家の子達に、僅かに残つた家財道具をまとめて分け与え、その後この仮住いを下屋敷に建てたのであります。それから、近くの僅かばかりの土地に桑畑をつくりなどして、身を農夫に落したことを誇りにしておりました。武家育ちの父は、商売については全く無智でした。それに金銭にかかわることは、武士の恥辱と見るならわしもありまして、事務的の事一切は、忠実な、然しこれも全く無経験な爺やの手にゆだねて

了い、父は読書や昔の思い出に耽りながら、新しいこと、その時分という文明開化の品々を初め、革新的な思想を紹介したり致しました。が、この父の理想は、時代に無関心な隣人には甚だ迷惑千万なことばかりと思われたに違いありません。

そういう間にも、父はたった一つの贅沢をやめようとは致しませんでした。御維新前には、御家老は参勤交代の制により、二年に一度はお江戸へゆかなければなりませんでしたが、今は非公式の旅行と変り、父は笑つて、この旅行のことを「文明開化の窓」と申しておりました。この言葉はよくこの旅行の意味を語っていると思ひます。と申しますのは、この父の年毎の旅は、家族一同に日毎に進みつつある日本の姿をおぼろげながら、描いてくれたものでした。それに、父は珍しい東京の様子を話してきかせるばかりでなく、色々なお土産を買つてまいりました——召使達には小間物、子供達には玩具、母には便利な道具の数々、祖母には見たこともないような輸入の品など。一度、父はお土産に、燧石のいらぬ附木と五色七色の泡玉の作れる小さい四角なお菜（石鹼）を持って帰りましたが、その時のうれしさは今でも忘れることができません。

この旅には、いつも爺やがついてまいりました。そして、事務的の一切のことを引受けておりました関係から、商人との接触もでき、外国人が日本人相手の商売でつかうやり口なども聞きかじつていたようでありました。外国人の商い上手は誰も認めていたことで、日本人は損をさせられながらも、感嘆して、何とかして真似てみたいものだと願っていたようでありました。爺やほど正直な人も世間にはあまりなかつたでしょうが、この爺やが、大切な主人のためにとという忠義一方の考えから、家名を汚すようなことをしでかしてしまい、それが片付くまでには何月もかかり、相当のお金もつかったことがありました。実際、今でも私は、その事件は、きまりがついて後も、誰にもはっきりとのみこめなかつたのではないかと思つております。爺やにとつては、生涯、むずかしい謎のように思えてならなかつたことでございましょう。

その事件というのはこうです。

ある時、爺やが外国人相手の仲買人で、近隣二帯の村落から、蚕の種紙を買ひ歩いていた人と知り合ひになりました。種紙には、所有者の名前かその家の紋所を特殊な墨で記し、その上で、蚕蛾にあの芥子粒のような何千粒もの卵

を生みつけさせたものであります。それを整理してから仲買人の手に渡したわけでした。

非常なお金持だつたこの仲買人が、爺やに、もし種紙の蚕の卵の代りに芥子の種子を置き換えたら、随分いい儲けができて御主人をお金持にするだろうと話し、そして、これが外国人の商売の手で、今、横浜商人がみな使っているものだと言明致しました。「この新しいやり口を使ってこそ、日本は富強な国になり、鼻の高い異人達も、身体の小さい日本人を打負かすことができなくなるだろう」とまでいったのです。

父の桑園はかなり手広く、近隣の村々のお蚕さんへ桑の葉を供給しておりましたので、この仲買人は父の名をつかうことは好都合でしたでしょうし、一方かわいそうな爺やは、賢い新方法で商売をしているのだと、喜び勇んでいたのですから、全く便利な道具に使われていたわけでありました。その男は何百円にも上る台紙を用意し、——それには全部、父の紋所がしるしてありました——その代金は大方その男の懐に納つたことでしょう。ともかく、家でそれと知つたのは、背の高い緒ら顔の異人が、妙な筒ぼ袖の着物を着こんで、父に会いに参つた時でありました。その面会

の日のことは、今もよく憶えています。この時をのがしては、もう生涯異人を見る機会はあるまいと、姉と二人で、無作法なこととは知りながらも、小さい指先をぬらして障子に穴をあけ、見なれない異人の姿をのぞきみたものでございまして。

私はこの異人が責めらるべきであるとは一寸も思っておりませんし、まして仲買人も、別に悪気があったわけではなく、巧妙な手段で異人と張合ってみようという、ごく単純な気持からだっただろうと思っております。その頃には、何かとこんな思い違いが多かったようでした。ともかくも父はこの代金を支払い、家名に瑕瑾を負わせるようなことは致しませんでした。事情の一切をよくのみこめなかつただろうと私は今も思っております。当時、主思いの忠義一途の家来が、無智から失敗をするということの、これもその一例になるのです。

冬の夜長には、私は度々、お台所へゆき、皆が仕事をしているのを眺めたり、お話をきくのが好きでした。七歳の頃かと思いますが、或る夜、曲りくねった廊下を通過して、召使の夜なべ仕事をしているところへ急いでおりますと、ドサッドサツと屋根から雪を下す音に交って、人声がきこ

えて参りました。夜に入ってから、屋根の雪を下すのは珍しいことでしたが、爺やも屋根の上で、人足頭に、どうしても今夜のうちにしなければならぬのだと、強いきいつけているのでございました。

「こんなに降っては、明け方までには、家が潰れてしまいうだろう」という爺やの声がきこえました。

人足の一人は、もうお寺の夜のおつとめの頃だと呟いておりました。なるほど、じき近くのお寺からのゆるやかな鐘の音を私は耳にいたしました。が、ともかく、爺やが後へ退こうとはいたしませんので、人足達は雪かきの仕事を続けました。私は、爺やの命令に楯つく人足の大胆さに驚いたことでした。子供心にも、爺やは物知りで、いつでもその言うことはよく当るものだ、感心していたのですから。こんなに爺やの偉さに尊敬を払っていたばかりか、私はまたこの爺やを心から好んでいたのです。それにも理由がなかったわけではありません。爺やは忙しい中にも、麦稗細工を作ってくれたり、庭石に腰かけて、爺やの仕事を見ている私に、何かお断をしてくれましたので。

召使達が夜なべをする部屋は広く、半分は板敷になっており、そこに蓆が敷いてありました。糸を繰ったり、



石臼をひいたり、その他、台所の仕事は何でもここですることになっており、残り半分の土間では荒仕事をやるよう

になっていました。部屋の真中に大きな囲炉裏が切つてあり、傍には、薪を入れた籠がいくつもおいてありました。すすけた高い梁から自在が下っていて、炊事用の器がいろいろとそれにつるされてありました。炉の煙は、天井の真中どころの煙出しから出てゆき、その煙出しの上には、雨除けの小さい屋根が別についておりました。

私がおの広い部屋に這入って参りますと、そこは笑い声やお喋舌の音がまじりあって、仕事場特有のざわめきにみちておりました。ここの隅では、女中が明日、御仏前へ供えるお団子の粉にお米をひいており、あそここの隅では着物の古ぎれで雑巾をさしており、また二人して箕で黒豆と白豆をよりわけているものもありました。少し離れたところにいしが坐って、しきりに糸車を廻していました。

9 越路の冬 召使達は「エツ坊さまのおいで」といって、喜んでいましたので、私の顔をみますと、一人は急いで座蒲団を用意し、一人は乾いた栗の毬を炉にくべするなどして、いそいそと歓迎してくれるのでした。私は囲炉裏の中の栗の毬のもえさが、少しずつ色を変えながら、やがては白い灰にな

ってしまうのが面白くて、暫くはじつと見つめていたものでした。

「エツ坊さま、こちらへいらっしやいませ」とやさしく声をかけてくれるのはいしでした。いしは莫座へ身をすべらして、自分の座蒲団を私にすすめました。いしは、私が糸車を廻すことが好きなのを知っていましたので、私を自分の前に坐らせ、大きな手を私の手に添えて、篠をにぎらせてくれるのでした。車を廻すと、指の先の篠から糸がするするとつむげてゆくのでしたが、あの柔かい糸の感触を、いまだに忘れることができません。私の繰った糸は節だらけだったのでしょうが、爺やが入ってきましたので、私はじきにその方に心を奪われてしまいましたから、いしは助かったことでしょう。爺やが土間の方に蓆をひろげると、腰を下し、伸ばした足の指先に縄の一端をはさんで、縄をなうのでした。

「爺やさん、お客さまがおいでなんですよ」といしが声をかけますと、爺やはすばやく面をあげ、縄をなう手はゆるめずに一寸お辞儀をし、笑いながら紐の先きにぶら下げた雪沓をさし上げてみせるのでした。

「あら！」と大声をあげた私はとび上り、大急ぎで爺やの

ところへ馳けてゆきました。

「私の雪沓ね？ もうできたのね！」

爺やはその雪沓を手渡しながら、「はいはい。エツ坊さま。丁度間に合うようにできました。どうやら、今夜の雪は今年の根雪になりそうでございますよ。明日、学校へお出かけの折りには、どこにも道がなくなっていますから、小川や島の上を歩いて近道をしていらっしやいますように」というのでした。

いつものことながら、爺やの予言はあたりました。翌朝、雪沓をはかすにはとても学校へ行けませんでした。それに、前夜、人足に強いて雪かきをさせましたので、家もつぶれずに済みました。夜のあけぬうちに積った雪は五尺以上で、深く掘り下げた道を埋めつくし、街の中の雪山の頂もまた高さを加えておりました。

二 縮れ毛

ある日、召使たちが口々に京都の大火事のことを話しあいながら、お寺参りから帰ってまいりました。何でもその火事で、本願寺さまも丸焼けになったとのことでした。本願寺と申せば日本で一番信徒も多い浄土真宗の本山でございますので、その再建の声は忽ちにひろまり、寄進の金品は日本の国中から集りました。なかでも、越後の国はその昔、親鸞聖人さまが佐渡の島から放免になられて、一番先に御布教なされたところだけに、ここは喜捨の心に燃え、殊に長岡はその中心でございました。

月の朔日、十五日は勤め人は仕事を休むことになっておりましたので、寄進を集めるのには都合のよい日でした。寄進と申ししても、大抵は銘々の手で作ったものを持ちよるので、こんな日に人々が雑沓する様子を見ているのは面白いものでした。長岡の町の人々ばかりでなく、近在の山からも里からも出て来る人達は、それぞれに籠や

包みを背負ってつづき、一日中、人足の絶えることもありませんでした。竿束や縄を背負ってゆく人、長い竹をたばねて肩にかけてゆく男、機場から出てくる女は絹や木綿の反物を重そうにさげ、お百姓は手車に五穀を積んで曳いて来るのでしたが、女房達の多くは、赤ん坊をおんぶしながら、そのあとを押していました。こうした奉納品は特に作られた大きなお飯家の中に納められ、日に日にその量は増えてゆきました。

ある日、私はいしと一緒に門口に立って、寄進につづく人々を見ていましたが、女達が申し合わせたように、藍染めの手拭をかぶっているのに気づきました。女中達は、お掃除や台所仕事をする時のほかは、手拭をかぶらないものですから、不審に思っ、私は尋ねました。

「どうして、みんな手で手拭をかぶっているの？」

「あの人たちはみな、髪の毛を切っているのでございますよ」といしは答えました。

「じゃ、みんなやめなのね」と、私は驚いて訊き返しました。と申しますのは、当時の習慣で、女は夫に死なれると、根本から髪をきり落し、その半分を夫とともに葬ることになっておりました。

私は生れて初めて、こんなに沢山のやもめを見たように思っ、驚きましたが、やがてこの人達の切った髪の毛は、再建される本願寺さまの御堂の棟木にする材木を引く、大きな毛綱をあむのだということをかされました。

宅の召使たちもみな、多少、髪の毛をきりましたが、お百姓さん達のように熱心でなく、どうにかまげが結いあげられるだけの髪は残していました。それでも、一人の女中は余り信仰に熱心で、沢山の髪を切落したため、お嫁入を三年ものばしたりいたしました。もちろん、その頃の男の人は、縁起を気にして、やもめのように髪を切りおとした女を家内にするだけの勇氣はなかったようでありました。どの御宗旨の人も、女はみなこの尊い奉納の仲間入りをしたいと願う有様でしたので、私の家は真宗ではありませんでした。母も姉も幾分ずつ髪の毛を納めました。それは寄進の品々を納めるお飯家に納められ、そこで長い太い毛綱が編まれました。そして、寄進の品々を京都へ送る前には、とても盛んな奉納の儀式が営まれました。

この日の人出は大したものでありましたが、幼い私の眼には、世界中の人が長岡へ集ったのではないかと思われる程でした。近郷近在は申すに及ばず、近国からも押よせた人

人は狭い街にあふれ、いしは私をつれて、この人ごみの中をお寺へつれて行ってくれました。やっとよい場所に辿りつき、私はいしの手をしっかりと握ったままで、お寺の大門の外に控えた牛車の上のお厨子を、おどろきの眼をみはって見上げておりました。つやつやした大きな金箔を置いた黒の漆塗のお厨子の扉は左右に開かれ、合掌して立っていられる阿弥陀さまの穏かなお顔が拝まれました。お厨子の台のまわりの框には、「お浄土の五彩の雲」をかたどった彫刻があり、金、銀、淡紅、紫、朱の色美しい沢山の蓮の花が、その雲の間にただよっているものようにみえました。それはえもいわれぬ美しさでございました。農家の自慢の二頭の牛は胴には色めも鮮かな絹の布をまとい、角からも装具からも長くたれ下った小布がひらひらとはためいておりました。

急にあたりが静まり、わずかにのこるざわめきの声にまじって、鐺鉦ちやうぎんの音とかんだかい笛の音が流れて来ました。「ごらんあそばせ、エツ坊さま。阿弥陀さまが御開帳で御出ましになるのでございますよ。こんなことは滅多にあることではございません。全く今日はありがたい日でございます」と、いしが申しました。

お厨子をのせた牛車が動きはじめますと、あたりの空気をゆすって、「南無阿弥陀仏」と低いお念仏の音が起りました。私は尊さに心打たれ、低く頭をさげ、掌を合わせて小声でお念仏をお唱え申し上げたのでございました。

車の前方に結えつけてある紫と白との布のねじり縄は牛の傍のわくを通過して、ずっと前の方の読経しているお坊さまの方にまでびていきました。そして男も女も子供も、子供を背負った母親達までも、われもわれもこの縄に手にかけておりました。私はその中に、仲好しをみつめたので、「いしーいしー」と大声でいって、夢中でいしの袖がきれるほどひきました。「あそこに定子さんがいらっしやるワ。私も定子さんと一緒にお縄を持ってもいいかしら？ ねえ、ねえ」

「お静かにあそばせな。お嬢さま。おとなしくなさらなければいけませんよ。いしがお供をして、あのお縄をおとらせ申しますから」

いしと私は行列に加わって歩きだしました。敵かに読経をつづけるお坊様たちのあとについて大きくゆれながら進む車のお縄をしっかりととり、畏敬の念に満たされて、狭い街をねり歩きました。あの時ほどに、狂喜にも似た興奮

を覚えたことは、私の生涯にはまたとないことかと思っております。

奉納の儀式の様子はほんやりとしか憶えておりません。お飯屋には、色々の奉納品が山と積まれておりました。お厨子は奥に運ばれ、大きな卍を染めぬいた紫の幔幕の前に安置されました。金襴の袈裟によそおいをこらしたお坊様達は水晶の珠数をつまぐりながら、お経を唱えつつ、ぐるぐると廻り歩きました。香煙があたりをつつま、ものやわらかな木魚の音が響き、いたるところ低いお念仏の声がみちみちていました。

ただ一つ、今も記憶にはっきりとのこっているものがあります。それは、須弥壇の上の阿弥陀様のすぐ前の台の上に、ぐるぐると巻いてあった幾千人もの女の髪の毛で作った綱でございます。私は、町を多勢のやもめが歩いてゆくを見た日のことや、召使たちが薄い髪を気にして結いあげていたことなどを、それからそれと思ひ起し、やがて家族のものが髪を奉納した日のことを思い出すにつけ、私の小さい胸を痛めたことを、はっきり憶えております。と申しますのは、姉たちの素直な長いつやつやした髪にまじって、私の毛は短く、それがみにくく縮れていたのでござい

ます。

それからながの年月を経ました今日でも、いたいけな少女だった私が、縮れ毛の故に、痛ましい試煉の数々を受けなければならなかったことを思い出しますと、哀れをもよおして、身を刺される思いがいたします。縮れ毛は日本では知られておりました。定まった髪結い日には年上の姉をおいて年下の私が先ずお世話になったものでした。髪を洗った後、すぐに髪結さんは熱いお湯に美男葛びなんがくをひたしたものと固い伽羅油がらあぶらを私の髪にしませ、それからぎゅうぎゅう後にひっぱり、しっかりと結えておくのでした。それがすんでから姉たちの髪を結うのですが、その間には、私の髪の毛はこわばり、眉はつり上るのですが、一時は髪の毛が伸びますので、それをきれいな元結いで稚児輪わらわに結びあげることができたわけです。物心つく頃から、私はいつも夜は木の枕にそつと頭をつけて注意して休んだものでありましたが、翌朝になると必ず襟あしにはこまかい巻毛があらわれ、まげにはあやしげな波が打っているのをごさいました。床の間の軸に描かれてあったお局の長い真直な下げ髪を、私はどれほどうらやましく思って眺めたことでもございましょう！

いつのことでしたか、例の髪の毛を直していた時のことでした。傍で私をなだめてほしいに、口答えをしたことがありました。優しいしはすぐゆるしてくれましたが、これを漏れかけた母によばれました。お辞儀をして母の前に坐った私は、むっとふくれていました。母はきびしく私をみつめて申しました。

「エッや、縮れ毛がけもの毛に似ているということは判りでしょうね。武士の娘がけものに似ていてよいでしょうか」

私は面目のうございました。それ以後、二度とくせ直しのことで不平をいったことはありません。

七つのお祝いの席で、私は大変恥しい思いをさせられました。が、思い出しても今も尚、胸の痛む思いでございます。その日、親類の女客を招き、新しい晴着を着飾った私が正座についておりました。髪も念入りに結びあげておりましたが、あいにくと雨の日でしたので、小さい巻き毛が襟あしのあたりに見えていたのかと思います。叔母の一人が「おエッさんに立派な着物を着せてみても、ほんとにむだなことですね、かえって縮れ毛が眼につくばかりですもの」という声が、ふと耳に入ったのでした。

大人は余り考えなくとも、子供の心にうける打撃は誠に深いものでございます。その時私は自慢の晴着の蔭に消え入りたいうでございましたが、でも真直に向うをみつめたまま、身動き一つせず耐えておりました。いしが御飯をもってお給仕に入って来て、私の方をみましたが、いしも叔母の言葉をもれききましたのか、その眼は悲しそうに沈んでおりました。

その夜、私の着替えを手伝いに入っていました。は、手拭いをかぶっておりました。こんなことは、礼儀正しいしにしては珍しいことでありましたので私は驚きましたが、やがてそのわけが判りました。いしはお祝のご馳走が終るとすぐ、平生から信心しておりました神社へ参り、特に豊かな自分の髪を切ってお社に奉納し、私の縮れ毛ととりかえ給えと祈願したのでございました。何という親切な心根でございましょう！ 今もなお、いしの切ない犠牲の心に私は深い感謝を献げております。

愛しんだ子に恥をかかせまいとして献げた純真な魂の、無智とはいいなながら愛すべき心の心づくしを、天があわれみ給わないと誰がいうことができましょう。ともかく、いしの願いはきかれたのでございましょう。幾年後、運命

の手は、縮れ毛が恥でも悲しみでもないこの異国に私を導いたのでございました。

三 寒 稽 古

私の幼い頃には、幼稚園などはありませんでしたけれども、小学校にあがる前に、ほんの手ほどきではありましたが、歴史や文学の基礎ともなるべきものを、かなり学ばされました。私の祖母は大変な読書家でしたので、雪に降りこめられた冬の夜長には、私達子供はうちそろって炬燵をかこみ、祖母の話に耳を傾けたものでした。我が国に伝わる神代の物語、宮本武蔵、田宮坊太郎、小栗判官、岩見重太郎など英雄豪傑のお話、八犬伝や弓張月などの小説のお話、それからまた、むかしのお芝居のお話なども、この祖母の口から聞かされたものでした。姉は女としての、あたりまえの教育を受けましたが、私は、尼となるべきさだめをうけたものと家中の人々に信じられておりましたので、すっかり異った教育をうけました。と申しますのは、私が生れた時、お坊様のお珠数のように、臍緒が頸の周りにまきついていたので、当時このようにして生れた子は、仏

さまからのじきじきの御しめしを受けているのだと信じられていたものでした。祖母も母もこの事は真面目に信じておりましたし、日本の家庭の常として、家事は、とりわけ女の子の教育は、一切女の子の手にゆだねられておりましたので、父は、私に尼としての教育をするという祖母の熱心な望みに対しては、黙って従っておりました。父は自分が信頼していた家の菩提寺の僧を、私の師匠として迎えました。——この方は博学なお方で、私に仏事の形式を教えては下さらず、孔子の教えをこまごまと説いて下さいました。この孔子の教えは、当時一切の学問の根柢と考えられておりましたし、父は、それを道徳の最高のものとも信じておりました。

このお師匠さまは三、七の日に宅へこられました。私は喜んでこの勉強にいそしんだものでした。お師匠さまの服しがい風手、重々しい身のこなし、私自身には敵しい服従を求められていたことなどが、感受性の強い私にびびりたていたのでしょう。それに、周囲の様子も子供心に感銘深かったものでした。稽古日には、その部屋は特に入念に整えられ、いつも寸分違わぬように用意されておりました。今も眼を閉じますと、部屋の様子が手にとるように眼

前に浮び上ってまいります。

広いその部屋は明るく、障子をへだてて、縁側の向うは庭につづいておりました。黒い縁布のついた畳は時代を経た古びてはいましたけれども、埃一つなく掃ききよめられておりました。書物と文机が一つ置いてあり、床の間には孔子様のお像の軸が掛けてあり、その手前の香炉からはゆらゆらと煙がたちのぼっていました。お師匠さまは膝の周りに鼠色の衣をなびかせ、肩には金襴の袈裟をかけ、左手には水晶の珠数をかけてお坐りになっておられました。そのお顔はいつも蒼く、頭巾の下に深く熱心に輝く両眼は柔いピロイドのくぼみのように見えておりました。これほどお優しい、また聖者らしいお方には、未だにお目にかかったことがないように思います。後になってこのお方は、真の信仰を持つ人はまた同時に革新的な心情の持主でもあることを身を以て証明されました。と申しますのは、このお方は、仏教とキリスト教と結びつけた新しい教義を主張されたため、本山から破門されたのでした。保守的ではありながら一面闊達なところのあった父は、偶然か、故意か、この寛い心の僧侶を私の師匠に選んで下さったのでありました。

当時、女の子が漢籍を学ぶということとは、ごく稀れなことでありましたので、私が勉強したものは男の子むぎのものばかりでした。最初に学んだものは四書——即ち大学、中庸、論語、孟子でした。

当時僅か六歳の私がこの難しい書物を理解できなかったことはいうまでもないことでございます。私の頭の中には、唯たくさんの言葉が一杯になっているばかりでした。もちろんこの言葉の蔭には立派な思想が秘められていたのでしょうが、当時の私には何の意味もありませんでした。時に、なまなか判ったような気がして、お師匠さまに意味をお尋ね致しますと、先生はきまって、

「よく考えていれば、自然に言葉がはぐれて意味が判ってまいります」とか「百説あひすか自ら其の意を解す」とかお答えになりました。ある時「まだまだ幼いのですから、この書の深い意味を理解しようとなさるのには分を越えます」とおっしゃいました。

正しくその通りだったわけですが、私は何故か勉強が好きでありました。何のわけも判らない言語の中に、音楽にみるような韻律があり、易々と頁を進めてゆき、ついには、四書の大切な句をあれこれと暗誦したものでした。でも、

こんなにして過したときは、決して無駄ではありませんでした。この年になるまでには、あの偉大な哲学者の思想は、あけぼのの空が白むにも似て、次第にその意味がのみこめるようになりました。時折り、よく憶えている句がふと心に浮び雲間をもれた日光の閃きにも似て、その意味がうなずけることもございました。

このお師匠さまは四書を教えて下さるにも、仏教を説く時と全く同じに、恭しい態度をもってせられ、肉体の安逸というのを一切避けておられました。辞退なさりながらも、教授の間だけは、女中のすすめたお座蒲団に坐っておられました。これというのも、師は弟子より一段上に席をとらねば、師弟両方とも礼をなみすることとされておりましたので、無理にお願いしていたわけでございます。お稽古の二時間のあいだ、お師匠さまは手と唇を動かす外は、身動き一つなさいませんでした。私もまた、畳の上に正しく坐ったまま、微動だもゆるされなかったものでございます。

唯一度、私が体を動かしたことがありました。丁度、お稽古の最中でした。どうしたわけでしたか、落着かなかったものですから、ほんの少し体を傾けて、曲げていた膝を一寸ゆるめたのです。すると、お師匠さまのお顔にかすか

な驚きの表情が浮び、やがて静かに本を閉じ、きびしい態度ながら、やさしく「お嬢さま、そんな気持で勉強はできません。お部屋にひきとって、お考えになられた方がよいと存じます」とおっしゃいました。

恥しさの余り、私の小さい胸はつぶれるばかりでしたが、どうしてよろしいものやら判りませず、唯、うやうやしく床の間の孔子様の像にお辞儀をし、次いでお師匠さまにも頭をさげて、つつましくその部屋を退き、何時もお稽古が終ると父のところへゆくことにしていましたので、この時もそろそろ父の居間へ参りました。時間が見え、父は驚きましたが、事情を知らないままに「おや、随分早くおすみだね」と申しましたが、きずついた私にはまるで死刑をつげる鐘の音のように響いたものでした。あの時のことを思い出しますと、今もなお打きずの痛みのように、私の心を刺すものがございます。

勉強している間、体を楽にしないということは僧侶や師の慣わしでありましたので、一般の人々も身に受ける苦しみはかえって心のはげみになるのだと感ずるようになりました。こんなことからして、私も姉もわざわざ寒三十日の間は、難しいことを、しかも時間も長く勉強させられた

ものでございました。寒の中でも、九日目が一番寒さもきびしい日とされておりましたので、この日は特に精出すことになっておりました。

姉が十四歳の頃でございました。あの寒九のことは忘れも致しません。姉は近く嫁ぐことになっておりましたので、この日の課業はお裁縫で、私はお習字でございました。お習字は大切な教養の一つとされておりましたが、それは唯に技巧にあつたわけではなく——むしろ、習字には絵画と同様な高い芸術的な魅力がありますけれども——複雑なあの運筆を辛抱強く練習致しますことよって、精神力の抑制ということが練りきたえられるものと思われていたからでございます。精妙な筆のあやには、心の糸の乱れや不注意はおおうべくもなくあらわれますので、一点、一劃にも心を落着けて正確に筆を運ばなければなりません。このように心をこめて筆を運ぶことを通して、私共、子供は心を制御することを学んだのでございます。

この寒九の日、東雲に暁の光がさし初めますと、乳母のいしは私を起しました。それは肌をさすような酷い寒さでした。いしに着替えを手伝ってもらってから、お稽古の道具を整えましたが、硯の中の水入れ、筆、墨のたぐいは

丁寧に絹の布でふいたものでありました。学問は非常に貴いこととされていきましたので、それに用います道具の一つ一つさえ、神聖なものとしていたわけでございます。この日には、何もかも、他人手を煩わさず、自分でしなければならぬことになっておりましたが、親切ないしはすすんで手出しは致しませんでした。傍にいて何くれと世話をやいてくれました。用意ができますと、いしと一緒に、庭を見晴らす縁側へ参りました。眺めやる庭の面は、一面に真白な雪でありました。竹の小叢はおもとおも雪を戴いて、まるで雪の積った傘をひろげたように見えていましたのを、今でもよく憶えております。時折り雪の重みに耐えかねた竹が、鋭い音をたてて折れますと、灰色の空にぱつと粉雪が舞い上るのでございました。いしは私を背負い、雪沓を穿いてそろそろ歩いて、私の手が届きそうな庭木の低い枝のところまで連れて行ってくれました。そこで空から落ちたばかりの、けがれない雪をとり、これを硯に入れたとかすのでありました。もちろん私が自分で雪の中に出なければならぬのでありますが、いしがそれをしてくれたのでございます。

居心地よくしては天来の力を心に受けることができない

ということになっていきましたので、火の気の無い部屋でお習字をいたしました。日本家屋の構造は、熱帯地方にその源を発していますので、火鉢一つない部屋の温度は戸外のそれと変りはございません。お手習いは長い時をかけて、入念にいたさなければならぬものでございますから、その朝すつかり指がこごえてしまいました。振り返って、後に控えていたいしが、紫色になった私の手を見つめて、すすり泣きしているのを見ますまでそれと気付かないのです。当時は、私ぐらの年頃の子供をさえきびしくしつめたものでございまして、稽古が終るまでは、私も動かず、いしも亦じつと附添っていたわけでございます。終りますといしは、あなたためであった綿入れの着物に私をくるんで、急いで祖母の部屋へ連れてゆきました。そこには、祖母の手であたたかくてお美味しい甘酒が用意されておりました。私は冷えきった膝を切炬燵の上にかかれたやわらかいお蒲団の下に入れながら、その甘酒を頂きました。いしは傍から、こおった私の手を雪でこすってくれるのでした。

もちろん、こんなきびしい鍛錬が果して必要なものであろうか等という疑問をさしはさむ人さえありませんでした。が、私は余り丈夫な子供でありませんでしたので、母には

時々心配の種になっていたのではなかったかと思ひます。ある時、私は母が父にこんなことを話しているのを聞いたことがあります。

「旦那様、余り丈夫でないエツ坊に、あんなきびしい勉強をおさせになられては、無理ではないかと思つたりしてするのでございますが」

父は私を膝もとにひきよせ、やさしく肩に手をかけながら申しました。

「武家の教育ということ忘れてはならないよ。獅子は幼いわが仔を千丈の谷に蹴落して獣王に育て上げるというからね。それでこそ、生涯の大事をなしとげる力が養われるんじゃないか」

家族のものがどもが私をエツ坊と呼ぶようになったわけは、一つには、私が男の子のような躰をうけたり、勉強をさせられたりしたからでございます。けれども、習ったことがみな男の子のことばかりだったというわけではなく、やはり姉の様に、裁縫、機織、料理、お花、お茶など、家事向のことも身につけました。

でもまた、こうして勉強ばかりしていたわけでもなく、ずいぶんたのしく遊んだこともございました。子供の間に

は、古くから伝わった季節季節の遊戯がありました——湿気を含んだあたたかい早春の日、夏の夕あかりのおり、またさわやかなみのりの秋、さては冴えかえる寒い冬の日に、冬の夜長のなぐさみにお煎餅の山に糸つきの針を投げて、つりとつた数を争つたり、心を躍らせて競いあつた歌留多のあそびなど、どれもどれも楽しかったことを憶えております。

また、広いお庭や、竹や常緑木をめぐらした家々の並んだ静かな通りに、女の子ばかり集って大さわぎをして遊んだこともございました。「お山のお山のおくんさん」や「宝さがし」に興じたり、男の子のする竹馬のりをしたり、「けんけんつき」をしては、きいろい声をはりあげたりしたものでございました。

でも、短い夏の間の戸外の遊びや、冬の夜長の数々の遊びにもまして、私はお話を聞くことが好きでした。召使いたちは昔から語りつたえられた、鄙びた噺や、お寺様のお説教で聞くさまざまなお話をいくらでもいくらでも知っていたものでしたが、中でも、いしは一番物憶えがよくて素朴な昔噺を数限りもなく知っていて即座にはなしてくれるのでした。つきることもないいしのお噺を聞きながら眠る

のが私の常でありました。祖母の話して下さった、いかめしいお噺は素晴らしいもので、祖母の前に坐って——祖母のお話の間は決してお座蒲団に坐ることなどはありませんでした——小さな手をしっかりと膝に重ねてききいつた頃のこと、今も忘れ難い美しい思い出でございます。ところが、いしのお噺をきく時は、すっかり様子が違っておりました。あたたかい寝床の中にもまるまって、笑いこけたり、途中で口をはさんだり、「もう一つ」とおねだりをしたり致しましたが、やがて時が来れば、いしは笑いながらも、行燈の燈心を一本に細め、紙の下げ戸をおとすことを忘れませんでした。そうするとほのかにやわらかい光につつまれた中で、私はおやすみなさいといい、「きの字」に体を曲げて眠るのでした。武士の娘は眠る時、必ずこのきの字なりにならなければなりませんでした。

武士の娘は眠っている時でさえも、身も心もひきしめていなければならぬと教えられたものでございます。男の子は悠々と大の字になって眠ることもゆるされましたが、女の子は必ず穏かな中にも威厳をそなえたきの字なりにさせられました。これが「制御の精神」を意味したものとされておりました。

四 旧と新

初めて私が牛肉というものを口に致したのは、八歳の頃でございます。殺生を禁ずる仏教が伝わってから千二百年間というものは、日本人は獣の肉はいただきますませんでした。でも近頃では、信仰も習慣もずいぶんと変わりました。どこの料理屋でも旅館でも、お肉を出すようになりました。ところが、私の幼い頃には、牛肉といえはいみぎらわれたものでございました。

今でもよく憶えておりますが、ある日、私が学校から帰って参りますと、家中の者がみな心配そうな顔をしておりました。玄関に入りますと、すぐに、何か重苦しい空気が感ぜられました。母が女中になにか申しつけている声も低く、調子もぎこちなく、唯ならぬ気配でございました。廊下に立っていた召使たちも皆、小声でささやき合っておりまして。まだ家族の誰れにも挨拶をしておりませんでしたので、訊いてみるわけにもゆきませんでした。何かまがご

とのあることの不安が感ぜられました。廊下つたいに祖母の部屋へまゐりますのに、静かに歩こうとしても、仲々に心が落着きませんでした。

量に手をつけて、小さな声で「お祖母さま、ただいま帰りました」と、いつものように挨拶いたしました。祖母は、それに応えて、やさしく微笑しましたが、いつになく厳しい顔つきでした。祖母と女中とは金と黒漆とで塗られたお仏壇の前に坐りました。傍には障子紙を載せた大きなお盆があり、女中はお仏壇の扉にめばりをしているところでございました。

日本の家庭の常として、私の家にも仏壇と神棚とお祀りしてありました。家の内に、病気とか、不幸がありますと、穢れを忌む意味から、神棚はすっかりめばりをするのでございました。けれども、お仏壇はこんな時には、扉はすっかりあげひろげられてありました。これはお釈迦様が悲しむ者をお慰め下さり、極楽へ旅立つ死人を案内して下さると信じていたからでございます。私はこれまで、お仏壇にめばりをするのをみたことがありませんでしたし、時刻も丁度、夕方のお燈明を上げる頃おいでいたしましたから、不審に思ったのでした。いつもこのお燈明の時刻は、一日

黙ってしまいました。

私も黙って女中に紙をほぐしてやられる祖母の曲った背の辺りをみつめたまま、坐っております。幼な心にも心配でたまらなかつたのでございます。

やがて祖母は腰をのばして、私の方へふりむき、ゆっくりした口調で、

「お父さまが家中で牛肉を食べようとおっしゃったのでね。何でも、異国風の医学を勉強なされたお医者さまが、お肉を頂けば、お父さまのお身体も強くなり、お前たちも異人さんのように、丈夫な賢い子になれるとおっしゃったそうだね。もうじき牛肉が届くという事ですから、仏様を穢してはもったいないと、こうしてめばりをしているわけなのです」と申しました。

その夜、私達一家は、肉の入った汁をそえた、ものものしい夕食を頂きましたが、お仏壇の扉はすっかり閉ざされており、ご先祖様とご一緒でなかったことは、ものさびしゅうございました。いつも上座につかれる祖母も見えず、歯の抜けたような空席が、奇妙な感じでございました。その夜、私は祖母に、何故、みんなと一緒に召上らなかつたのですかと尋ねますと、

の中でも楽しい時でございました。と申しますのは、でき上った夕げのご馳走を先ずもりわけ、小さいお膳にのせてお仏壇にお供えし、それから、家中のものが銘々に箱膳の前に坐り、ご先祖様もご一緒に居合わせて下さるのだと思いなながら、話し合い、笑いかわして食事をする慣わしだったからでございました。それですのに、お仏壇にめばりをしてしまうというのですから、不思議でたまらず、恐る恐る声をふるわせながら尋ねました。

「お祖母さま、どなたか、どなたかお亡くなりになりそうなのでございますか」

祖母は半ばおかしそうな、半ばびっくりしたような顔をいたし、

「エッ坊や、そんなに思い切ったものいいかたは、まるで男の子のようではありませんか。女の子というものは、そんな不作法な口の利き方をしてはいけません」と申しましたので、私は、

「相済みませんでした」とは申しましたものの、やはり気になりますので、もう一度「でも、お仏壇にめばりがしてあるではございませんか」と尋ねました。

祖母は「そうですね」と溜息まじりに申したきり、後は

「異人さんのように強くなりたくもなし、賢くなりたくもありません。ご先祖様が召上った通りのものを頂くのが祖母には一番よろしいが」と、悲しそうに申しました。

姉と私は二人で、そっとお肉の美味しかったことを話し合いましたが、他の誰にもこんなことは申しませんでした。二人とも、幼いながらも、大事なお祖母さまの心にそむくことはいけないことだと思っていたのでございましょう。

日本人が肉食をするようになりましてから、西の世界から久しくわたくしどもをぎりはなしていた伝統の壁も、随分と打ちこわされました。そして、こうした急激な変化には、大きな代償が支払われたのでございます。が、これもいたし方ないことでしょう。御維新後は、多勢の武士が、それまで扶持されてまいりました制度からきりはなされ、一朝にして零落してしまいました。そればかりか、金銭にかかわらないことを根強く教えられた武士達は、当世には全く水を離れた魚同様でございました。この人々のうちには、年若く青雲の志に燃えて一旗挙げようとした方も多勢ございましたが、世に申す武士の商法で、失敗だらけでございました。

戸田さんという方も、そういう中のお一人でありました。

この方は、宅の近所に住んでおられまして、たびたび、私どもの弓場で弓に興ぜられたり、馬で遠乗をされたりして、お親しくしておりました。私はこの方が大変好きでございましたので、祖母がこの方のお考えは余り先走り過ぎていて、型破りだと申したわけが判りませんでした。

ある日、この戸田さんが、弓をひく手を止めて、父と何か商売のことで議論しておられました。傍にいた私は、父の愛犬の「白」の背にのろうとして、ひっくり返ってしまいました。戸田さんは私をおこし、的のすぐそばの芝生の近くに立たせて下さいました。それから、大きな弓をもって来て、手を添えながら、私に矢を射させて下さいました。矢は美事に的を射ぬきました。

すると、戸田さんは「これはお上手！ お嬢さまは弓の名人におなりになりますよ。やっぱりお父さまのお子さまだけありますね」と大変な賞めかたでした。

その夜、父は笑いながらこの話をいたしました。私はお鼻高々だったので、母は考えこんだような顔附をいたし、祖母は悲しそうにかぶりを振り、私の方へ向いて「余り男の子のようなおしこみをなさっては、お嫁にもらい手がなくなりすがの」と申しました。

こんな風で、穏かな私の家庭でも、新しいものと、旧いものとの衝突は絶えませんでした。

戸田さんは独立心のある方でございましたので、身分の障りにならないだけの注意はしていच्छいしましたが、新しい社会の事情に順応しようとしては、幾度も失敗されました。その後格式も打ちすてて、利益の上りそうな事業に手を出そうと決心されました。丁度この頃、牛肉が栄養上大へんよろしいということがいわれかけておりました。熨斗をつけても、誰も貰い手のないような場所ではありましたが、戸田さんは、かなり広い土地を持っていられたので、これを牧場にして、遠い地方から牛を手に入れました。そして二三の経験者もやとい、牛乳屋兼牛肉屋という商売を始められたのでございます。

ずっと以前には、屍を扱う人は、ごく賤しい身分の人に、限られておりましたので、格式を重んずる戸田家の人々は、この商売には反対でございました。暫くは、誰も彼も、戸田さんの顔さえ見れば、何ともつかない恐怖の念を感じたものでありましたが、やがて牛肉が滋養に富むということが認められ、これを食膳にのぼせる家庭も追々に数を増しましたので、戸田家の商売も栄えました。

牛乳販売の方は簡単でもあり、なかなかうまく運ぶようになりましたが、これとても、初めの頃は一通りのさしさわりで済まなかったものです。大抵の人は牛乳は何か禍をするものと信じきっておりましたので、あれこれ取沙汰されました。私共子供は、召使たちから、今度戸田家にお生れになった赤ちゃんは額に小さい角があるとか、手の指は五本ともくつきあっていてまるで牛の蹄のようになっているとかなどと、聞かされたものであります。もちろんこんなことは作り話に過ぎなかったのですが、恐怖心というものは、よきにつけあしきにつけ、私共の生活に仲々大きな影響を及ぼすものでございますから、戸田家では些細なことにも、全く困りはてるような心づかいが絶えませんでした。

その当時、自分では仲々に物の判った御主人方も、旧弊な女どもの眼を開き、考え方を改めさせようとはしませんでした。ですから、新しいものと旧いものとをめぐって、絶えまなく繰返されたいざごは、ついには悲劇に終ることもありました。戸田家のご隠居様もこの商売を家名の恥と感ぜられ、ご自身を犠牲にして、諫められました。人が主義のために死のうとまで決心すれば、ついに志を達する

ことができると思えられたこのご隠居様は、ある日、家名の故に自害して、ご先祖様のあとを追われました。

戸田さんは不撓不屈の人で、新しいことに手をつけたことは正しいことと信じきっておられました。母上の無言の抗議にはすっかり折れてしまい、店のある魚屋に譲ってしまわれました。が、牛肉や牛乳の需要はだんだん増し、この魚屋はだんだんと富をきずいてゆきました。

戸田家の牛が、ゆったりと草をはんでいた広い草地は、長い間、空地になっておりましたので、学校の帰途、私共子供はこわごわ黒い板がこいの破れ目から覗いて、茫々と草ののびた荒地をみつめては、ひそひそ話をつづけたものでございました。どうしたわけか、私共はこのさびれた草地と、死んで思いを通された戸田家のお祖母さまの魂とを結びつけては、考えてみるのでございました。

ある日、外から帰って来た父は、戸田さんが近村の大地主の用心棒になられたそうだと、話しておりました。戸田さんがこの幸運にめぐり会われたのも、御維新後の数年間、新政府はこれまでそれぞれの藩に分れていた数多い県を統率することに手を焼き、至るところいろいろな不秩序があったのでございます。越後は有名なお米の産地でありまし

たので、農家のお蔵は誠に豊かなものでしたから、小地主でも、御維新のために武士が受けた程の打撃は受けませんでした。けれども、命しらすの泥棒が土蔵を襲い、時には主人を殺して了うなどということもよくありましたので、富裕な農家では、用心棒を備う必要を感じるようになりました。各階級の生活様式のきびしく統制されておりまして、封建制度が破れ去りましたので、それらの豪農はお上からかれこれ干渉をされることもなく、自由に自分の富をつかうこともできるようになったのですから、その人々の間では、武家の方々を用心棒として備うことが流行でもあり一つの誇りともなりました。武士はこれまであがめられてきた身分でもあり、又、一面、練り鍛えられた武芸を身につけていたことですから、この仕事はよく適っていたのでございましょう。

この新しい商売では、戸田さんは警官でもあり、客分でもあるというような扱いを受けられました。白紙に包んで、「薄謝」と上書きした相当の給料を受けられたのです。が、この商売も決して永つづきするものではありませんでした。と申しますのは、新しいお上の力もだんだんこの辺鄙な越後の国までもびて、農村を守って下さるようになって

つたからであります。

その次に、戸田さんは新学令による学校の教師となられたとききました。同僚の先生方は、大抵若い人達で、進歩的な人間であるということがご自慢で、日本の古い教養などは軽蔑しきって、眼もくれないという風でした。こういう中にたちまじって、古武士の戸田さんは、悲しくもそぐわれない存在だったことでしょうが、冷静にものを考える性質の上に、剽軽なところもあるという人柄でしたので、上手にきりぬけてゆかれました。ところが、文部省から師範学校の課程を受けた者以外は教職にたずさわることを得ずという法令が出ました。戸田さんほどの年齢と学問と教養をもった方が、今更、師範学校に入って、浅はかな白面児に——戸田さんはそう考えておられました——試験をされることは耐えられないことだったのでございましょう。戸田さんは辞職され、才を恵まれておられた書道で身をたてることに決心されました。暖簾に美しく屋号をかきこまれたり、屏風や掛軸に漢詩をお書きになられたり、神社のお幟まで書かれたそうでございませう。

私の家にも、いろいろの変化があり、次第に戸田家とも疎遠になりました。戸田家が東京に移られたと聞きました

のは、数年後のことでした。戸田さんは、いろいろの点で進歩した東京ならば、相当に自分を買ってくれるかと思われたのでございませうが、東京は、新しいものにはむやみに興奮しながら、古いものと申しますと、頭から毛嫌いするという風でございました。結局、封建時代の人であられた戸田さんには、どこにも安住の地とはなかったわけでございます。

ずつと後、私が東京の女学校に通っておりました頃、人ごみにもまれて歩いておりますと、ふと「囲碁指南」と達者に書かれた看板が眼につきました。その書風に心惹かれ思わず格子戸越しに家の内を窺いますと、そこに戸田さんが、昔の武士のいかめしさを思わせるように端然と坐って、新興のお金持ちの商人達に囲碁を教えていられる姿が、はつきりと見えました。戸田さんは、すっかり老いこんで、豊かそうにもみえませんが、相変らず屈したところもみせず、剽軽な笑みを湛えておられました。もし私が男でございましたら、入って行ったこととございませうが、若い娘が碁のお邪魔をするのも、余りに弁えないことかと思ひまして、そのまま通り過ぎてしまいました。

それからまた数年後、もう一度この方の姿を見たことが

ありました。ある朝早く、街角で馬車を待つておりますと、左肩をやや下げ気味の——それはかつては大小二刀を帯びた、立派なお武家であった戸田さんの癖でございました——一人の老人が通り過ぎ、すぐ傍の事務所らしいところへ入ってゆきました。やがて、その人は制服制帽をつけて出て参りまして、入口に立ち、人々の出入りの度に扉の開閉を始めました。それが戸田さんでございました。恰好よく洋服を着こんで、威張りかえった若い事務員たちが幾人となく忙しそうに入ってゆきましたが、愛想一つ見せる者もありませんでした。こんなことは、いわゆる、進歩した青年達が身につけた外国風というものでございませうか。

世の中が進んでゆくということは結構なことに存じますが、一時代前には、この青年達の父に当る人々が、凛々しく馬上におさまった戸田さんの前では、頭も上らなかつたことを考えずにはいられませんでした。扉は開いたり閉じたりしておりました。戸田さんは口許に半ば剽軽な笑いを浮べながら、真直に立ちつくしていました。まことに勇敢な、挫けることを知らない戸田さんでございませうこと！この方は、過去の武士を代表していられた方です。今は迎えられそうもない、古い教養の外には、この新しい世代に、

何の捧げるものをも持ちあわせていない故に、不運をも静かに受けて、うらぶれの身を生きぬかれたのでございます。こういう人々もまた、皆、英雄ではございますまいか。

五 落 葉

「落城記念日」の前日、私はきんにつれられて、お濠端へ出かけました。ずっと前には、このお濠端の一部は高く築き上げられていたものでございますが、今、そこは、青々とした稲田になっておりました。でも、大部分は、なお沼地のままで、塵埃捨場になっていました。一ところ石垣の角のやや突出しているお濠には、ピロードのような蓮の葉が茂りあっておりました。きんの話では、もと、お濠の水はとても深く、鏡のように澄みきっており、花時ともなりますと蓮の葉の作る地模様は、白と淡紅のあやを織り出して錦をひろげたようだったそうでございます。

「ねえ、きん。お城はどんなだったの。もう一度話しておくれ」と、私は崩れかかった城壁や高い石垣を上手に望みながら申しました。

「エツ坊さま、それや、どこのお城もみな同じことございましょうが、このお城は私共のお城でございます」

陽気なき人には珍しく、真面目になってしまい、それきり何もいわずに、じっと荒れ果てた城跡をみつめておりました。

私は、丘の方に向けた眼をそのまま閉じて、いしや爺やが度々話してくれた、昔のお城の姿を思い浮べようと思いました。石垣の上には、頑丈な格子窓をはめこんだ白壁がつづき、城壁は、どの方向から攻めこむ敵にも応戦できるように、曲りくねっていました。深い軒の上高く、角の屋根の棟の両端には、尾をびんと立てた青銅の鯉が日光にくっきりと照り映えておりました。老松が枝をはった土手の下には、「底なし」といわれたお濠の水が静かに眠り、亀甲形の石で畳んだ石壁を映していました。

「さあ、エツ坊さま、帰りましょう」

はっとして眼をあけますと、臉上描いた絵は、すべて消え去り、そこには、かつて飛び来る矢やくり出す槍を防いだ土手のみが静かに横わり、丘には、こともなく穏かに野菜畑がしげりあっているばかりでございました。

帰りかけたきんは、大きく辺り一帯をさしながら「以前、その向いの辺りは、お城の外廓あたりにお屋敷のある御家

中方の立派なお庭になっておりました。今は、その美しいものはみんな小さな菜園になってしまいました。お屋敷でのように、やはりお馴れにならない御家中方がご自分で耕していらしやるところもございすよ」と申しました。

きんは家に帰るまで黙っておりました。私も、何かしんとした気持で、きんについて帰りましたが、明日の祭典を想ったの心菜しさも、何とはなしに、しめっぽくなるのでありました。

「落城」という言葉は、日本の文学では、戦に敗れた人々の廃れたお城の悲しくも荒れはてたさまを叙述するのによく用いられるものでございます。戊辰の役後、新政府は人民が新しい制度になすめるようにと、賢くかつ寛大な努力をされたのでありますが、長岡の人々は仲々に昔のことが忘れられなかったようでありました。至尊が九重の雲の上にあられて俗なることにかかわり給うという事は冒瀆であり、幕府が従来通りの道を歩み続ける事ができなくなりました事を日本にとつて、悲しむべき事であると、この多くの人たちは信じておりました。

私が生れましたのは、御維新後数年たってからのことでありましたが、まだまだあの痛ましい日の思い出は人々の

胸から消えやらず、縁と格式を失った家々の悲劇は、絶えず話題にのぼる頃でありましたので、子供時代を通じて、御維新には深いつながりを持っておりました。女中の唄う子守歌は「みやさん、みやさん」とか黒船の唄などで、幼い頃に聞いた話といえは、大概は戦場での手柄話でございました。崩れかかった城壁や、埋れかかったお城の濠など、家の門からのぞきましたし、土蔵は、家の子の用いたという戦さ道具でいっぱいでありました。街を歩いている時などでも、ゆきあう老人は涙まじりに「世が世ならば……」と語りかけるのが常でした。思えば、あのはりつめた戊辰の戦いの時から、私の子供時代——それはまことに進歩のろい時代でありましたが——にかけて、世を去った人も随分ありましたが、昔ながらの忠誠の真心は消え失せてはおりませんでした。

明治二年五月七日は長岡城の落城の日で、その後の数年は、長岡藩にとって、誠に辛苦に満ちたものでございました。あの思い出深い五月七日を記念する催しはいつも旧藩士によって守られました。この町に移住してきた人々や、商人達には、この記念日はただの面白い行事に過ぎなかつたでしょうが、弓矢をとった身には、すたれゆく武士道へ

ました。見物人もできる限り古めかしい身装をし、待っている間も、男達は戦場のように足をくんで坐り、なかなか勇ましそうに見えました。

やがて太鼓の音がひびきわたりますと、父は馬上にご祖先達が従う者共を指揮し采配を打振り、鎧冑に身を固めた大勢の人々をひき従えて出発いたしました。一行は野をよぎり、山を登り、お社にぬかずいて後、草原に集り、模擬戦を終ると、弓術、剣術、槍術など、武道の数々を奉納致しました。

私の家の男の召使はみな、悠久山へ見物に出かけました。女たちは一行の帰りを迎える準備で忙しくしてました。庭には蕙がしかれ、そこ、ここに、戦場をかたどって三叉にくんだ木がたてられ、それにつるした大きな鉄鍋には、掻立汗かきだせという、粒味噌汁がぐつぐつとにえたぎっておりました。黄昏時になりますと、小さな部隊が、蹄の音を響かせながら帰って参りました。私共は晴着を着飾り、大門の傍に立った二つの高張提灯の下で迎えました。父は、私共の姿をみつけますと、鉄扇をひろげて打ふりました。私共はこれに應えて、幾度も幾度もお辞儀をいたしました。「今日のお父さまは、昔の盛んな時のご様子そっくりでい

の、せめてもの手向けであつたのでございました。さんと一緒にお濠端へ行ったその翌朝、私は興奮にかられて眼をさました。その日はいろいろの出来ごとが次々と続いで起りました。朝は玄米ちんちんのご飯を頂きましたが、これは、軍馬の間に用いられたものでした。長岡の藩主をお祀りした社廟のある悠久山の裏山の草原では、模擬戦が行われ

ました。その日武者振りの何ともしかつたことでしょう。もちろん、この時分の家中の人たちは豊かではありませんでした。金めのものはみんな手放してしまっておりましたが、持ちあわせのもので上手に身づくろいいたしました。父を先頭にした行列の進発を今もはっきり目に見るようでございます。古びたれども具足に身を固め、漆塗りの陣笠を頂いて、馬上に納まった父の姿は、子供の私には、堂々とみえたものでした。もちろん、父の馬も、昔のきらびやかな馬具はありませんでしたが、器用な母が絹布や絹紐で馬具をつくって、耕作用の駄馬もどうやら軍馬らしくなりました。また、刀を佩くことは許されませんでしたので、代りに木太刀を帯びていました。この小部隊の出発を見物しようと、町はずれの石橋のところには、人々が押かけており

ました。見物人もできる限り古めかしい身装をし、待っている間も、男達は戦場のように足をくんで坐り、なかなか勇ましそうに見えました。やがて太鼓の音がひびきわたりますと、父は馬上にご祖先達が従う者共を指揮し采配を打振り、鎧冑に身を固めた大勢の人々をひき従えて出発いたしました。一行は野をよぎり、山を登り、お社にぬかずいて後、草原に集り、模擬戦を終ると、弓術、剣術、槍術など、武道の数々を奉納致しました。やがて太鼓の音がひびきわたりますと、父は馬上にご祖先達が従う者共を指揮し采配を打振り、鎧冑に身を固めた大勢の人々をひき従えて出発いたしました。一行は野をよぎり、山を登り、お社にぬかずいて後、草原に集り、模擬戦を終ると、弓術、剣術、槍術など、武道の数々を奉納致しました。

忘れもいたしません、これが私の記憶にある最後の長岡落城の記念日でございます。翌年のこの日は大雨でしたし、そのあくる年には、父の健康がすぐれませんでした。それに、家中の方々も、段々、西へ東へと散り散りになり、記念の儀式を挙げますものびのびになり、ついにこれが最後になってしまいました。

父が御維新の困難な幾年かに受けた打撃は、ついに癒ゆべくもありませんでした。僅か三十二歳の若さで、藩に朝敵の汚名をこうむらせまじとの、強い責任感のために闘いました当時の逞しい佛は、年毎にうすれてはゆきました。勇敢で明るい性格は、なお挫かれることなく父の裡に宿

っておりました。日本が新しい世界に足場を見出そうとして悩みつづけた明治初年には、人々は唯、むやみと古いものを捨て、憑かれたもののように、新しいものにとびついてゆきましたが、父は静かに、己の信ずる道を行っていたのでございました。当時の最も進歩的な方々と同様に、父も日本の将来の成就すべきものについては確く信ずるところがありましたが、同時に、過去に対する深い尊敬の念を捨てることができませんでした——けれども、この点では、あまり同感者はないようございました。が、全体として父は誰にも好かれておりました。そして、生来の鋭い機智をはのみせては、好もしくない批評や、長たらしい議論をふきとばしてしまうのでした。父は重々しい、厳めしい性格の半面、このような頓智を具えておりましたので、地位も力も失ってしまいました御維新の後も、やはりありし日のように、人々には尊敬されておりました。

父とは友人づきあいを致しておりましたお医者様が、ある日、父に向って、上京して、新しい医学をとり入れて評判の高いさる名医に診察してもらってはどうか、とお勧めになりました。父は早速その気になり、例の爺やをつれて出かけることに致しました。

いる焼栗など。私が白のあとを追って急いで行ってみますと、白は爺やの家の入口に鼻を押つけて、いつもお重箱がおいてあった隅のところを、一所懸命にかくのでした。「白や、駄目駄目。お重箱はないのよ。爺やはいないのよ。みんな行ってしまったのよ」と、私も悲しそうに申しました。

私が敷居ぎわに腰を下しますと、白は冷い鼻先を私の袖につっこみ、白も私も世にも哀れなさびしいもののように思われました。私は白のあらい毛の中に手を埋めながら、武士の娘は泣いてはならない、という意味の言葉を思い出そうと、一所懸命努めたものでございました。

ふと「わけもないのに泣くのは臆病者」という言葉を思い出しまして私は飛び上りました。私は白と話し、白と遊びました。白と駆けっこまで致しました。それから家へ入りましたが、家の者たちが、私の乱暴な遊びぶりを快よからず思うていることは判りましたが、私が父の秘蔵っ子でありましたので、誰も何とも申しませんでした。思えば、当時、家の人達は皆、やさしかったようですが、それと申しますのも、誰の胸にも心配の重荷がのしかかっていたからでありました。

父も爺やもいなくなりまして、私は大変さびしゅうございました。あの頃のとり残されたようなわびしさは今もよく憶えております。姉はお嫁入を秋に控えて、忙しく致しておりました。もしあの時分、大好きな「白」がいまませんでしたら、私はどうして暮していられたかと思えます。主人が旅に出て、白もやはりさびしかったのでしよう。白は私によくついておりましたが、女の子が犬を飼うなどということは、大変乱暴なこととされておりましたので、そんなことを口に出したこともありませんでした。でも、ともかく、毎日、勉強がすんでは、白と遊んでもよいことになっておりましたので、私は一緒にあちこち歩き廻ったものでございました。ある日、犬をつれた私が、的場へ出かけて行き、父がいつも好んで歩いた道へさしかかりますと、急に白が駆け出して、大門の脇の爺やの住居の方へとんでゆきました。爺やの妻は、私が憶えない頃に死んでしまったのでありましたが、器用な爺やは、女手のない家の中をきちんと致しておりました。夏の午後など、ござれいに片付いた爺やの家の入口へ参りますと、小さいお重箱に、私の好きそうなものを入れておいてくれました——ちょっと塩をまぶした里芋だの狐色に美味しそうな実をはのみせて

ある日、白の加減が悪くなり、何をやっても食べようと致しませんでした。私は子供心に、何かおいしい物を食べさせたらきつとよくなるに違いないと思ったり致しました。が、あいにくその日はご先祖様のご命日で、お精進でしたので、白の好きそうな残りものもありませんでした。いつも、困った時のくせで、私はいしのところへ参りました。いしは私の心遣いを哀れに思ったのでしょうか、どこからかお魚の骨を持って来て、そつと渡してくれました。私はそれをもってお庭のはずれへゆき、石でこまかく砕いて味噌汁にまぜてから、白がねている雑木小屋へ持ってゆきました。薬の上にていた白は、私をみると、嬉しそうな様子を見せましたが、起上ろうとも致しませんでした。私は寒いのがいやな気が思いつき、大急ぎで、自分の部屋から絹のお座蒲団を持って行ってかけてやりました。

この事がお祖母様の耳に入りますと、早速、私は祖母に呼ばれました。私はお辞儀をして顔を上げた瞬間、お八つによばれたのではないということが判りました。

「エツ子や」——祖母は一寸きびしい調子で申す時はいつもこういう呼び方でした。「お前に大切なことを話してきかせなきゃなりません、聞けば、お前は白にお座蒲団を

かけておやりだとか」

私は、祖母の声の調子に驚いて、静かに頭をさげました。祖母はつづけて、

「白に分を越えたことをしてやっつては、大変な不親切になるということがあるかえ」

私はそれが、よくのみこめなくて、びっくりしたような顔をしていたことと思います。と申しますのは、それからあと、祖母はやさしい調子で犬は畜生でありますから、畜生には畜生の分限があるのです。白犬は後の世に、人間に生れてくるとも申します。それが、今の世で分限を越えたくぐさをする、人間に生れかわるのが遅れるかも知れないのですと、説きあかされました。

輪廻の信仰によりますと、一切の生き物はすべてそれぞれの分限を固く守らなければならないことになっております。ですから、もし私共が動物の分限を越えた扱いをする、それがかえって、不親切になるのでございます。熱心な仏教信者は黙々として、宿世の縁に従ったものであります。それと申しますのも、現世の苦しみは前世の罪業の償いであり、また来世のためであると教えられたからであります。日本の低い階級の人達が幾十代かの苦難を忍び

に忍んでも、明るい諦めの思いを抱いてよくきりぬけてまゐりましたのも、この信念があったからのことでございませし、又、一方、人間よりも輪廻の低い筈の動物が苦しんでいる時にも、それが畜生である故にとりあってはならないと習慣づけられていたので、他からは同情に欠けているかのように、みえることもございます。

祖母にお詫びをいたし、私は急いで、白にあやまりに出かけました。白は、もう薬にくるまって、うずくまっておりました。庭では二人の人足ががい顔をして、私の蒲団を焼いておりました。

かわいそうな白！ 私共一家の手厚い親切をよそに、そのあくる朝、薬のしとねの中で長い眠りについてしまいました。白の魂が私の親切にわざわざいされないでよいところに生れかわってくれますようにと、私は念じました。白のむくろは、お庭の西日の当る大きな栗の木の根元に埋められました。この栗の木の下で、秋になると、私は白と一緒にとび廻ったり、落栗を拾ったものでございました。犬のお墓が人眼についてはいけなかったかも知れませんが、父は東京から帰るとすぐ、小さい墓石をたてて、いとしい末娘の忠僕の記念といたしました。

ああ！ その栗の実が、白の墓石にこぼれかからない中に、あんなにやさしかった父上は、菩提寺の墓所に眠り、朝な夕な、一家の者が愛情と尊敬をこめて、ふし拜んでおりました仏壇には、新しいお位牌が一つ加えられることになりました。

六 お正月

父が亡くなりました年の冬は、随分とさびしゅうございました。死人の靈魂が軒端をさまようといわれています七四十九日の間は、お仏壇にはあかあかとお燈明の灯がゆれ、お香の煙の絶えることもありませんでしたので、父が身近に感じられ、悲しさともさほどに覚えませんでした。それに仏様のため、仏様のためにと申しまして、家中のものが何かと忙しくしていたせいもございましょう。この四十九日の間、母は新仏のためのお義理もすませ、四十九日目には、仏が心残りなくお浄土へ旅立ちが出来ますようにと、たち働いておりました。

けれども、気をはって忙しくしていた四十九日も過ぎ、日々のおつとめの折りの外は、仏壇も暗くなつてしまいました。急にさびしさが身にしみてくるのでございました。子供の私は、父が他の巡礼達と一緒に、真白な経帷子の装束に身をつつみ、すげ笠に草鞋ばきで、安らかな旅をつづ

けていられるように心に描いておりました——そして日毎に私共から遠く遠くになってゆくのでした。

日が経つにつれ、一家も旧の生活に戻りましたが、何もかも変ってしまったように思われました。爺やももう仕事をしながら鼻歌を唄わなくなり、いしの明るい声にも何か元気がなくなっていました。祖母は以前にもましてお仏壇のことをやめてしまいました。祖母は以前にもましてお仏壇のお磨きものばかりしていました。母はいつもながら黙って静かに仕事をしていました。時々もらす微笑にも、さびしい影がよまれました。姉と私は一緒にお針をしたり、読書をしたり致しましたが、もう笑いこけたり、お菓子を頂いたりばかりはしなくなりました。日が暮れて、皆で祖母のお炬燵をかこんで話し合っておりましても、話題は自然父のありし日のことにはばかり落ちてゆくのでありました。召使の部屋でさえ、糸つむぎの音や粉ひきの音にまじってお喋りや笑い声は聞えて参りましたが、陽気な調子はなくなっていました。

こんなものさびしい幾月の間、私は母やいしにつれられてお寺参りに出かけるのが、何よりの楽しみでございました。いつも母の召使のとしがお花をもってお供を致しまし

た。まずお坊さま——私の先生でしたが——のところへ御挨拶に参りますと、お坊さまは茶菓をふるまって下さってから、圓枷桶をさげた小僧さんをおつれになられて、お墓に御回向を下さいました。長岡の人達は昔を忘れない、忠実な方々でしたから、父の死後、長年、知人や昔の家来達がお墓参りをして下さったと見えていつもお墓石がぬれていたと、母が申しておりました。

二月十五日、お涅槃の日、私はいしと一緒にお団子を詰めたお重箱をさげて、お寺へ参りました。このお団子は、お釈迦さまの死を嘆いたあらゆる動物——猫はいませんが——に型どってありました。その日、お坊さまは感慨深げに、家の菩提寺を出てゆかなければならないから長のお別れをしなければならなかったとおっしゃいました。当時、私は、お坊さまが任職として長くお住いになり、随分大切にされてこられたこのお寺をあとになさらなければならぬ理由のみこめませんでした。が、後になって、このお方は、任職としては忠実であられましたけれども、一方真実のためには、赤貧をも嘲笑をもいとわず、「清契の群」にくみしておられたのだと知りました。

大雪のふったある夜、祖母と一緒にあたたかいお炬燵に

あたりながら、私は姉の嫁入支度の蚊帳の芋を續んでおりました。もつれ易い芋糸を、上手に指先をさし入れながら一筋一筋分けることを祖母から教わりました。

ふと思いついた私はおしゃべりを始めました。「お祖母さま、お話ししようと思いが、すっかり忘れておりましたけど、明日、学校で雪合戦をしますのよ。おはなさんが一方の大將で、私がもう一方の大將になるんですよ。そして……」

余り夢中になって、手の方がお留守になり、又、糸がもつれてしまいました。やたらにきゅっきゅっと引張っていますと、糸はますますもつれてしまいました。祖母は手をさしのべながら、

「どれどれ。お前、あの芋糸の歌を知っておいでかえ」と申し、もつれをほどきながら、ふるえ声で歌うのでした。

芋糸の

よれつ もつれつ

むつかしや

うむの心ぞ

なお もつれゆく

「もうお忘れなさるなよ」と申し、ほどけた芋糸の束を返

えされました。

「余り雪合戦のことに夢中になっておりましたので」と、私はいいわけのように申しました。

雪合戦のことは、祖母のお気に召さなかったのか「エツ坊や、一番上のお姉さまはの、お嫁にゆくまでに、蚊帳二つ分の芋糸をお積みだったよ。お前ももう十二におなりだから、もっと娘らしゅうおなりなされ」と申されました。

このお言葉はよく当っておりましたので、恥しい思いをしながら「はい、私も冬の間に、たくさん續んでお姉さまの蚊帳が二つできるくらい溜めて、お正月までにいしに織ってもらいますわ」と申しました。

「そうお急ぎでなくてもよろしいがの」と祖母は余り熱心な私の顔を見て、笑いながら申しましたが、やがて調子を更めて、言葉をつぎました。

「うちに不幸があったからとて、お姉さまのお目出たごとにさし障りがあったはならないと思います。婚礼は五穀の実をおめでたい秋までのばすことになりましたがの」

私は、商人の出入りが少なくなったことや、媒酌人の背の高い永井さんとお話好きの小柄な奥様が余りおみえにならなくなったことに気付いておりましたので、やっとその理

由が判りました。それでは、まだお会いになられたことはありませぬが、お婿さんは秋までお姉さまをお待ちになられるのだ、と一人で考えておりました。姉が家にいられば、面白いことはたくさんありますし、式ののびたことなど気にしてはいなかったようでした。たあいない年頃の姉や私のことをごさいますから、お正月の用意にとりまぎれて、婚禮のことなど、すっかり忘れてしまったのでした。

お正月になりますと、大人は紋附、袴に威儀を正してお年賀廻り、男の子は凧あげ、女の子は羽根つき、歌留多とりとたのしみ、赤ん坊まで急に二歳になって、お祝いにあずかるのでございました。

その年は、父の忌もございましたので、私の家ではにぎやかなお祝いはいたしませんでしたが、さすがお正月らしい和やかさにつつまれて、父の亡くなりまして後、初めて、台所にも陽気な声が聞かれました。糯米のむれるあたたかさ、そうなおい、ポタンポタンと餅つきの音にまじって、爺やいしの「大家のねずみ」の歌声など、新年を迎える嬉しさをしみじみ味わいました。

うれしや

わしらは 大黒さまの身内

百になるども

ニヤの声きかぬ

うれしや

わしらは 大黒さまの身内

お正月の二日はかり前のこと、いしが台所にいた私をさがしに参りました。私は手伝いに来ていたたきと一緒に箕で、丸い豆を篩いにかけているところをごさいました。

この豆は「まめ（健康）の石」と申しまして、節分の夜、袴をつけた爺やが家中にまいて廻ります。たき、いし、と、姉、私、みんな爺やのあとについて「福は内、鬼は外」と呼ばわりながら、勢よく豆をまきちらすのでございました。

いしはお使いに出かけるところでありましたので、母が、私も一緒に街に出て見物してもよろしいと申しました。珍しく暖かかったその日のことは、今もよく憶えております。その年は、冬の初めに雪が少うございましたので、私達は僅か三尺ばかり積った雪の中の小径をつたって、通りをよぎりました。そしてお正月を過ぎてから、トンネルがついたくらいだったのでした。歩道に立てる障子板も、所々と

りのけてあり、青空さえみえて、店の中はいつにない明るさでございました。どこの門にも門松がたち、注連縄がはってありました。そして店々に、色鮮かな季節の品々が並べてあるのが、外からよくみえました。どのお店も大変な人だかりで、皆、意外に暖い陽気にうながされて、近郊近在から出て来た人々でありました。長岡では、それを見越して、素朴な田舎の人々にうけるようなお正月の品々をとりそろえて、まちかまえていたわけでございます。

私には、すべて見馴れた眺めでありましたが、大晦日には珍しい、晴れた空の下で見た故でしょうか、まるでお芝居でもみるような興奮を覚えました。いしが買物に立寄ったところには、十歳か十二歳位の男の子の一群がいました。中には赤ん坊をおぶっていた子もありましたが、皆足駄をはいていて、黒砂糖で固めたおこしを買って、分け合っているところでありました。背中の赤ん坊にも、忘れずに小さいかけらを含ませていたのです。私はこの一群が紙風を売っている店の方へおしかけてゆくを見送りながら、われ知らずおこしの甘さを味わってみたり致しました。また、華かな色の緒の下駄を並べたお店の前には、女の子が集っておりまして。低い軒にぶら下げた藁束に、松葉や梅の花

などの髪飾りをさしてある所もあり、羽子板や羽根を売っているところもたくさんございました。

こうして街をみて歩いた日のことは忘れも致しませんし、こんな日の恵まれたことを嬉しく思っております。と申しますのは、私の幼い頃、日が照って暖いお正月といえ、この一年だけだったからであります。

家の中はまことに物静かでありましたが、お正月の三日日は、親類、知己の訪問を受けて、母は仲々忙しくしておりました。お客様には、お雑煮、鮭の味噌漬、揚豆腐、昆布、よせものなどをおすすめ致しました。お雑煮にはもちろのお餅が入っております。それからお屠蘇をふるまいましたが、これは不老の泉という意味で、新年とともに、新しい生涯が始まるという意味をもたせたものでございました。

三カ日もすみますと、ずつと略式で、昔からの出入の者やもとの召使たちが年賀に参りました。家風として母はお正月の中、一日は召使いたちにご馳走を致しました。その日には、皆一張羅を着飾って居間に集まりました。すると小さな塗膳にお正月料理を数々とりそろえたのが運びこまれ、姉と私がお給仕女になりました。母も手伝いました。

居並んだ、いし、とし、きん、爺や、それに二人の下男もみんな四角ばって、このもてなしをうけるのでした。陽気なきんは、恥しそうにしながらも、母の素振りを真似て、皆を笑わせました。母は淑かな中にも威厳を失わず、きんをみては微笑しておりましたが、姉や私は、女中の真似をして、仰々しく低いお辞儀をしたり、丁寧な身のこなしをしながら、一所懸命とりまわしていなければなりませんでした。こうして、礼儀正しいなかにも、肩のこらない楽しい、一日を過しました。

こんな時、母は、父の信頼の厚かった頭梁さんを招くことがありました。その時分のよい大工と申せば、指物師の仕事はもちろん、建築、設計、造作等なんでも致したものでありました。それに、この大工は、長岡の五郎棟梁で聞えた人で、代々、五郎の名をついでいた、町内名打ての職人でありました。私はこの五郎が大好きでした。それと申しますのも、私に、梯子のような段段のついたお人形の御殿を作ってくれたからでございます。このお雛様の御殿は、私の大自慢の持物でありました。父の没後、初めての年賀に参りました時、五郎は何かもの悲しそうにしょんぼりしておりましたが、母がお屠蘇をふるまいますと、晴れ晴れ

貧乏の神のにげどころなし

と、即座におっしゃいましたな」

と、五郎が狂句を面白がるものですから、つい母もつられて、優しく笑っておりました。女中たちも、大事に思う旦那様のことを賞めるので、じきに相槌を打っては、声をあわせて笑い興じておりました。

けれども、きんが眼を輝かしながら、いしに囁きますと、いしは笑ってうなずいておりました。たきやとしも聞きつけて、一緒に笑っておりました。やがて、私はこのささやき

貧乏の神七福神の仲直り めでためめでたで御門の内は
 というのだと知りました。

古い日本には、厳格なうちにもこうして四海同胞の精神は脈々と流れていたわけでございます。

として来て、急におしゃべりを始めました。ところが、はたと語り止んだと思っておりますと、屠蘇の盃をうやうやしく額のところまでさしあげて、次の間にいた母の方へ、丁寧にお辞儀を致しました。そして、

「奥様、去年は門松も立っておりました、こんな風にご馳走にあずかりましたが、あの時は旦那様もおいでになられました——」といい出しました。

「そうでしたね。何もかも変わってしまった」と、母はさびしい笑いを浮べて申しました。

「旦那様はいつも面白いお方で、思っただけでいらっしやっても、お不仕合わせの折にも、頭がにぶるの、お気むつかしくなられるの、ということはおありなさらなかった。それでございます。こんなにしてご馳走になっていた最中に、旦那様が入ってこられて、よく来たと言ったものにおっしゃいました。私が聞きかじりの下手な一句をよみまして、旦那様に下の句をお願いしました。何でも、めでたい歌で、このお屋敷に福がくるように、皆さまがおめでいらっしやるようにというふうなのでした。

この家を七福神がとりまいて
 と申しますと、旦那様はにこにこしながら

七 父の苦衷

その年のお正月はとうとう雪も降らず、楽しく過ぎました。床の間のお鏡餅は十五日におひらきとなりますが、門松は八日の朝とりのけるならわしになっております。これには、七日の夜のまに樹の梢を一寸のこして、松が地中にしずんでしまうという言い伝えがあります。ところが、その年は、文字通り、この言い伝えそのままになり、八日の朝、起きてみますと、道も庭も一面に四尺ばかりの雪に埋もれてしまい、門松も雪をかぶって、春まではその姿をみせませんでした。

思いがけない大雪でございましたので、その日は、長岡中の人足が総出で働きました。その後、いよいよふりつもつて、二三週間後には、学校通いの子供達は、屋根下の歩道や、雪のトンネルをぬけてゆかなければなりませんでした。ある日、私が学校から帰ってまいりますと、笠笠に雪沓をはいた郵便屋さんが、頭の上の雪の原から、トンネルを

ぬけてすべりこんで来て、

「やあ、お嬢さま、お宅へ異国のアメリカからお便りです」と勢よく申しました。

「アメリカからですって」と、驚いた私は大声で申しました。異国から便りがあるなどということは、私の家では初めてのことでした。これは大変な事だと思いましたが私は、郵便屋さんの姿を見失わないように、一所懸命にあとをつけてまいりました。街幅が狭いものですから、急いでいた私は度々道ゆく人にぶつかったりいたしました。が、宅へ通じる道へ郵便屋さんが曲った頃には、私との距離は大分せばまっております。郵便屋さんは台所口へ廻りますので、私は急いで祖母の部屋へゆき、いつものご挨拶をすませますと、そこへ、女中が手紙を持って入って参りました。ところが、まぢかまえていたその手紙は、母宛てのものでございましたので、私は祖母のいつついで、それを母のところへ届けなければなりませんでした。

手紙の封がぎられるところをみようとして、楽しみにしていた私は、すっかり失望してしまいました。大きな、見えない形の横封袋よこふうたいを持って、母の部屋へ急ぎながら、私はいろいろの場面を心に描いておりました。母は、これをう

嬉しく、小さな胸一つには納めかねたことでもございました。

× × ×

兄が家出致しましたのは、私のまだごく幼い頃のこととみえまして、その日のことだけはよく憶えておりましたが、前後の事情はつかみどころがございません。その兄の婚礼の日は朝から美しく晴れあがり、家中は眼もまばゆいばかりに飾られ、召使たちも家の紋所の附いた着物をきてかしまっております。床の間には、松竹梅の三幅対をかけた島台を飾り、部屋部屋を埋めつくしたお祝いの品々についていた小さな鶴亀の飾りや、松竹梅の小枝をからみあわせたものなどが、おめでたい新生の門出をことほぐようにみえましました。新築された二部屋には、黒塗りの化粧道具や、桐の箆筒がぎっしりつまっておりますが、これらは前日、いくつもの吊台で人足の肩にゆられて届いた花嫁のお道具でございました。

いしは私をつれてあちらこちらと部屋をみせて廻りながら、もうすぐ若旦那さまのお嫁さまがお興入れなさるのですよと、話してくれましたが、床の間に神前のお供物と丹塗の三つ組の盃をのせたお三方とがありましたはか、何一つ置いてないその部屋はひろびろとしていました。

けるとすぐまた祖母のところへでかけるに違いないのですけれど、もうその時は私は祖母の部屋にはいない筈です。祖母は大きな象牙の虫眼鏡むしめがねごしに、この封袋をためつ、すめつみて、また母へ手渡しながら「あけてごらんなきれ」と重々しく申しました。アメリカから来たお手紙なので、祖母は、心のなかではどうしたことかと思ひ迷いながらも、表面はいよいよ落着いていたのであるう、などと。

その夜、一家そろって仏前のおつとめを終ったあと、祖母は下げた頭をいっになく長い間上げませんでした。が、やがて容かたちを改め、まるでお経をよむお坊さまのようなかめしい態度で、暫くアメリカにいられたこの家の若主人が、近くお帰りになる筈だと話しました。兄は、私が物心つく頃にかあし出して、その名を口にする人さえありませんでしたから、私はこの報知しよちに驚いてしまいました。ともかくも、この兄が「若主人」と呼ばれているからには、兄の不始末は水に流され、家の後嗣として、またこの家に迎えられることは判りました。下座にひかえていた召使たちも、祝意をこめたお辞儀をいたしました。が、何か仰えきれない興奮を感じていたようでもございました。でも私には、深いわけは判りませんでした。唯、兄の帰るといふことだけが

いしは始終大門の方へ見にゆきましたが、私もいしの袖にすがって、あとをつけて駆けまわりました。襖はみなりはらわれて、家中あげひろげてありましたので、大門まで一目に見渡すことができました。門には、家の紋所を染めぬいた紺の幕がかかっており、両側にはこの日の慶びを祝って、お提灯がゆらゆらとゆれていました。門柱に近く、袴姿で控えているのは、「七返り半」の使者で、丁度七度目の出迎えをして来たところでしたが、今度は、まだ日が高いのに大提灯をともし八度目に花嫁の行列を迎えにゆこうというところでありました。こんなにして、花嫁を迎える待遠しさを示していたわけでございます。

やがていしが行列の近づいたことを知らせますと、召使たちは、面に笑みをたたえ、静かに大門の方へ急ぐのでありました。花嫁の乗物の軋む音や、車夫の足音が手にとるように聞えておりました。

すると、突然、何か間違いが起りました。いしは私の肩を押えて、ひきさがらせました。父の部屋から出てきた兄は急ぎ足で、私などには眼もくれず、沓ぬぎの下駄をつっかける、すばやく脇門の方へ姿を消してしまいました。それから後、私は兄の姿をみたことがありませんでした。

兄の花嫁として、すでに実家を出ていたその娘は、里へは帰りませんでした。母はこの人を自分の娘として迎え自分で適當なところへ縁づけらるまで、世話致しました。

幼な心にも、この日のことは私には不思議でなりませんでした。が、ずっと後になってからお花を生けたり、軽い仕事を手伝っていた、たまという品のよい小間使が、丁度兄の家出のすぐあとで、ひまをとって出て行ったことに、何かかわりがあるのではないかと、感づくようになりました。たまは気持よく笑ったり、話したりする娘でありましたので、家中の者の氣にいらりてございました。当時、相当の商家の娘は、暫くの間行儀見習いに武士の家庭に住みこんだものですが、こういう人は召使とは違い、仲々に丁寧な扱いをうけたものでありました。たまたもそういう意味で、私の家へ来ていたのです。

兄が家出致しました翌朝、私が朝のご挨拶に父のところへゆこうとしておりますと、顔色も蒼ざめた、たまが父の部屋から出てくるのに出合いました。たまは私に小声で挨拶をしたきりで、静かにゆき過ぎてしまいました。その日の午後、たまのいないことに気がつきましましたのでいしに尋ねますと、もう、宿下りいたしたとのことございました。

たまと兄との間に、どんなことがありましたのか、私は何事も存じませんが、よし、過ちがあったにいたしましても、兄のしたこの中には、何か一筋の勇氣のあとが感じられてなりませんでした。最後の瞬間まで、胸一つにじっともだえを納めていた兄は、たしかに弱い人だったには相違ありませんが、切羽つまった最後のきわに、なお、幼い頃からしつけこまれた厳しい伝統を破って、父の命にさえそむいたのですから、また、父の強い性格をも受けついでいたと申せましょう。当時は、両親の承諾なしでは、結婚ということは成立しなかつたのですから、こんな問題が起れば、いきおい、絶望的な結果に落着くのみでございました。心傷つき、誇りを踏みにじられた父は、自分には息子はないと、いききってしまいました。

それから数年後、兄の噂をきいたことがありました。ある日、父が得意の拳遊びをしてみせて下さり、傍にいた私は、素早く動く父の強い拳固をみつめながら、どうかしてそれをつかまえようとしていました。母はその傍で縫物をしており、三人はのどかに笑い交しておりました。

その時、女中の一人が、佐藤少佐がおいでになられたと知らせて参りました。このお方は東京にお住いで、父が大

変お親しくしていた方でございます。母は私をつれて席はずそうと致しましたが、父の身振りを汲んで、その場に止まりました。

その時のことは、生涯忘れることもございますまい。佐藤少佐は、兄の上京のこと、教導団へ入団のことなどを、いとも熱心にお話しになられ、優等で卒業したこと、今は陸軍下士官になっているとまでおっしゃって言葉をおきりになりました。

父は頭を高くあげ、端然と坐ったままで、きびしい顔には心の動き一つみせませんでした。一瞬静まりかえった部屋の中では、自分の心臓の鼓動さえききとれるほどでした。やがて父は身動き一つせず、静かに「御要件はそれだけですか」と尋ねました。

「はあ、これだけでございます」
「御厚志は誠にありがとう存じます、この家には、娘はありまして、息子はいない筈でございます」

その間中、母は頭をたれ、両手は膝の上にしっかりと重ねたままじっと聴きいておりましたが、父の申すこの言葉をきくと、かすかに身をふるわせましたが動こうともいたしませんでした。

ややあって、父は母の方へ振向き、優しく「おくや、いしに碁盤を運ばせておくれ、それからお客様に御酒を一献」と申しました。

この二人の男の胸中に、どのような思いのありましたかとやら、二人は静かに碁をうち終えましたが、母と私は塑像の如くおし黙って、傍に坐っておりました。

その夜、私の着替を手伝いに参りましたいしの眼は、涙にうるんでいました。

「どうしたの、いし。どうして泣いたりしているの」と私は尋ねました。

袂に顔を埋めながら、がっくりと腰を折ったいしは、声をあげて泣きました。いしがこんなに泣いたのは初めてのことでございます。

「お嬢さま、私が辛いのはございません。つらい時には泣き、おかしい時には、存分に笑えるような身分に生れついで、有難いと思うております。けれども、お嬢さま、お気の毒に、旦那さまは……」と、いしはまたすすり泣くのでありました。

こんなことがありましたのは、ずっと以前のことではない

いましたが、それからどれほどの年月が流れたことですか、とうとう兄が帰ってくるようになったのでございます。

雪も消え、春もすぎて、越路にも夏が訪れてまいりました。随分、兄の帰りをまちわびたものでございましたが、いよいよその日となりますと、朝早くから、お仏壇の扉は開け放たれ、あかあかとお燈明の灯がゆれておりました。祖母は放浪の子を迎えるにも、ご先祖さまとご一緒にと思ったのでございましょう。当時、江戸からの旅と申せば、駕籠や人力車に頼るよりほかなかったのでありますから、到着の時刻も定まらず、お燈明は幾時間もえ続けているのでした。遂に「若旦那さまのお帰りの」と呼び声がかかります。祖母のほかは、一家揃って玄関に出迎えました。そして皆、額が畳につく程に低いお辞儀をいたしました。西洋服に身をつんだ青年が、人力車からとび下り、ちょっとあたりを見廻してから、なつかしい飛石道を玄関の方へ歩いてくるのでございせんか。ふと立停つて、石の間から生え出た巨人のボタンの花をつみとり、微笑を浮べておりましたが、やがて、すぐにそれをぶいと捨て、次第にこちらへ近づいて参りました。

玄関の挨拶は手みじかに終りました。兄は母にやさしく

語りかけ、母は嬉し涙にぬれた頬に笑みをたたえて、じつとその顔をみつめておりました。それから兄は私の方をみて、笑いながら

「エツ坊、相変らず縮れ毛で満月顔だね」と申しました。爺やが手伝つて靴をぬがせ、私共打そろつて内に入りましたが、兄はまず仏間に入り、幼い頃から習い憶えた作法にたがわず、帰宅の挨拶をいたしました。が、余りいそいでいたしますので、一寸変な気持がしました。それから兄は祖母のところへゆきました。

挨拶が終りますと、祖母はまちかまえていたように、父の黒塗りの文箱を差出しました。兄は恭しくおし頂いてから、中の手紙をとり出し、静かにひろげて読んでおりましたが、私はその表情が苦痛とも、喜悅とも、また絶望ともはかりかねて、胸のふさがる思いでございました。おそろく、兄の心中には、この三つの思いが入りみだれていたこととございましょう。その手紙は短いもので「御許にはお家の相続者となられたく、父はひとえに信頼いたし居り候」とのみふるえる手で書かれてありました。

その夜は、近親のものが集まって、お座敷で歓迎の小宴をひらきました。兄は床の間を背に坐り、兄の好みのご馳

走の数々がお膳をにぎわしておりました。いろいろと話はずみましたが兄はイギリスやアメリカの事を少し話したきり、割合に無口でいたように憶えております。私はしげしげと兄を見つめておりました。洋服のお袖がつまつていくことや、黒い靴下などが下働きの人を思わせるのでございました。膝をくずした兄は、少し大声で話しておりましたが、あたりの人達を見る眼付の鋭さが気にかかり何だか落着かず、これまでに描いていた兄とは、すっかり違っていますので、むしろ失望さえ致しました。でも、唯一つ、私の氣に入ることがありました。それは、笑うと、父そっくりのものやわらかな眼差になることとございました。私は、この優しい眼差にであう度に、父とは全く違っているようにみえても、兄は、父のよい半面をうけついでいるのだということ、しみじみ感じさせられました。そして、おぼろげな危惧の念を抱きながらも、心の奥底では、これから先、どのようなことが起ろうとも、この兄を愛し、誠実をつくさなければならぬと悟り、この年まで兄に対しては、いつも変りない誠を捧げてまいりました。

八 二つの冒険

兄の帰国後、アメリカの友達から、時々便りがよせられるようになり、それを家中で珍しがったものでございました。お手紙には、仕事のことや人の名前が書いてあるばかりでございましたので、じきに興味はなくなりましたが、大きな横封袋と細いペン字を走らせた便箋とは大変に珍しかったものでございます。当時の日本の手紙と申せば、みな巻紙に筆で書いたもので、仄かに花模様や浮きでた巻紙に、水茎のあと鮮かに書き流したものなど、誠に美しくございました。後には、花模様を色刷にしたものもできましたが、私の幼い頃には、白地が一番上品なものとしておりました。

兄も、アメリカへ出す手紙には、いつも大きな横封袋を使いましたので、幼い私は、アメリカへはこれでなければならぬものと思ひこんでおりました。ところが、ある日、兄から郵便屋さんへ手渡すようにと託された手紙は、紅葉

の一枝が浮き出た美しい細封筒で、それがアメリカゆきの手紙でございましたので、私はすっかり驚き、

「お兄さま、こんなお手紙でもよろしいのですか」と、おそれるお尋ねをしました。

「どうして、いけない？」

「大きなでなければ、アメリカゆきには使えないのかと思っておりますが……」

「何をつまらない！」といかつく申してから、今度は口調もやさしく、「もう横封袋がなくなつたのでね。東京へ注文したのがまだ届かないからなのだよ」と説明しました。

こうして、やさしい紅葉の葉がアメリカへ渡ってゆくことを思つて、私は乙女らしい喜びを味わつたものでございました。思えば、この時初めて、アメリカとのつながりが、私の衷にできたわけであります。

私はアメリカに対して、別に反感を抱いていたわけではありませんが、大抵の外人相手の商人が、口をそろえて面白くない噂をきかれますので、見知らぬ国ながら、漠然と余りよい感じを持っていませんでした。その上、召使達が、緒ら顔の異人さんは踵がないから履物に木の踵をつぎ足しているのだなどといつてきかせるものですから、ますます

悪い印象ばかりが深められておりました。

異人さんはみな四つ足を食べ、殊に、お金持の人は驚のまる煮をお客さまにふるまうのだともいわれておりました。それからまた、高価に輸入されている赤毛布は、さらつてきた赤ん坊の血で染めたものだからかという噂もひろまつていました。また、異人さんの体が獣くさいのは肉食が原因しているのだとは、田舎ではもとより都会でさえも悪い習わされておりました。これは多分、外国船員の衣類からくるなれぬ羊毛のおいが因であつたのでございましょう。当時、日本には羊もおらず、毛織物もありませんでしたから、かぎなれないにおいがすると、すぐにそれを異人に結びつけたのでしよう。毛織物が、ひろく知られている今日でも尚、田舎の人達は「獣くさい品」といって店で尋ねております。

兄は、こんな噂話を殆んど否定したことがありませんでした。アメリカに渡つてきても尚、兄はそれらのことを信じていたのであらうと思つておられます。在米中、兄は商人以外の人には余りつきあわなかつたことは明らかでございます。いつでしたか、祖母は溜息まじりに「お兄さまは遠いアメリカまで渡つて、商人のことばかり覚えて来られたようじゃの」と申しました、思案ありげに「アメリカは商人は

かりの国かもしれない」とも申しました。

兄がアメリカへ行ったということは事実でございますが、それはあの老大な国の一つの海岸町のまたその一部を見てきたに過ぎなかつたのでございます。

時が経つにつれ、兄は家庭生活から次第に遠ざかつてゆくように思われましたが、さりとて長岡の人達の生活に這入つていったというわけでもありませんでした。兄は何だか誰れとも異つた人のようでありました。時々、心に悩んだり心配しているようにみえましたが、大抵はただ落着かず、不満そうにしています。そんな時、縫物や読書をしている私の傍へ来ては、坐っていました。他の誰よりも私には話し易かつたのでございましょう。時折り兄は自分のことを話しましたので、家出以後の生活も次第に私に判るようになりました。

兄の渡米は、軍隊を去つてからのことで、その頃、東京を沸かしたせていた貿易熱にあおられたのであります。わけなく成功できるものと信じきつた青年達は、いろいろの国へ出稼ぎに行ったものです。こんな頃、兄はある人の口ぐるまにのせられて、アメリカに事務所をもつておられると、さる貿易会社に持ち金全部を投資してしまいました。

そして、アメリカの方の仕事をひきうけてくれれば、社員にしようといわれますと、武家育ちの兄のことでありますから、商売のことは何も判らないままに、すぐそれをひきうけて、出帆したのでございました。目的地に着いて初めてだまされていたことが判りました。貿易会社といつたところは、ごみごみした日本人街の小さな玩具店で、教養などありそうもないお内儀さんが、店をいとなんでいたのですから、社員のことなど、つゆ知らぬ有様でした。

失望と驚きとに全身の力もぬけて、とにかく兄は近くのホテルに身を寄せましたが、そこはうす汚いところで、労働者が安月給とりかと思われるようなたくさんの同胞が、大声で喋りあいながら、賭け事などしてました。学問などもないような人達でしたが、兄には丁寧にしてくれました。それは居心地のよいところではありませんでした。他にどこというあてもない兄はそのままそこに腰を下ろしました。が、じきに持つていたお金はつかい果し、仕事もなく、相当に自信をもつていた英語も一向通じませんので、やがて周囲の生活に身を落してゆくよりほかなかつたのでございます。

泥濘の中から立ち上つて希望の光を見出すという風な人

もあるものですが、兄はアメリカ人についての知識も乏しく、望みも失い、眼にみるものはただ、嫌悪を催すものばかりだったのでございます。

時々、兄もそのごたごたした地区を出て、高い建物や、大きな商店の並ぶ大通りに出てゆきました。多勢のアメリカ人が往来していても、兄に眼をとめる人はありませんでしたので、かえって兄には気易かったようでございます。声高に喋言ったり、いやなおいの煙草をふかしたり、時にはもぐもぐ口を動かしているかと思うと、道傍へぶつぶつと何かはきちらしてはせかせかと歩き廻っている妙な顔をした男達が、兄は厭でたまりませんでした。女といえは、変な服をきて、他人をじろじろみたり、大口をあけて笑ったり致しました。ここには洗練された優美さというものはどこにもなく、ただ、大きく、強く、あらあらしいばかりでございました。兄の眼には何もかも不愉快でした。それで、また、気にはそぐわないながらも、勝手の知れた環境に帰ってくるのでした。

この頃、不幸が兄を襲いました。兄は不意の珍事で頭を打ち、入院致しました。そして、三週間、さっぱりしたベッドにも休まれて、ありがたい病院生活を致しました。退

ありませんでした。

この頃、東京の佐藤少佐からお便りがありまして、父は病篤く、息子が家に帰って来ることを願っている由を知らされました。これをみた兄の心中は私には計りかねますが、兄は数週間も返事をためらったのでありました。が、やがて帰って参りました。

その秋に父の忌明けとなり、ついで、兄の相続もどこのりなく終りましたので、姉の婚礼は取極時をまつて挙げられることになりました。十月初めには、越後の稲はすっかり色づき、みのりの秋を約束するように、おもおもと頭を下げておりましたが、神無月の結婚はさけますので、十月初めの吉日が婚礼の日と定まりました。

十月は神なし月で、神々が各地のお社から出雲の大社に神つどいに集われて、縁組する男女の名前をおきめになられる定めになっていました。これにつきまして、祖母や乳母たちがよく、女の子に話してきかせるお話があります。両親も兄弟もない不幸な若者が、誰もお嫁さんの世話をしてくれませんが、二十歳すぎても、独り身でいました。

十月のある日、この若者は、出雲の大社へ参拝して、自

院しますと日本人町へ帰るほかありませんでした。心も重く唯だ一つ自分の憶えた土地へとほとほと歩いていきますと、その途中、とある街角で、足早に歩いてくる、きびきびした青年にぱったりゆきあいました。二人が急に立寄りますと、その青年は大声で笑い、蒼白い兄の顔をみると、そのままくびすをかえして兄について参りました。

身装は貧しゅうございまして、どこか紳士らしかった兄を、好もしく思ったのでございませうか。この松雄という青年は兄をその住いのアパートにともない、数日後には、自分の会社に兄の働き場をみつつけて下さったのでありました。こうして芽生えた友誼は、やがて末長く変ることのない温いものに育まれたのでした。

上陸当初に、もしそのような助力がありましたなら、實際生活には無智な兄とは申せ、氏も育ちもあり、品位もそなえた青年でございましたから、見知らぬ土地でも、何とかやりとけていたかと思いますが、何もかも手遅れだったのでございます。初めの中は、外見さしてどうということもありませんでした頭の傷が、だんだんと悪化して、とうとう長い仕事には耐えられなくなり、遂に兄は元通りにはなれませんでした。けれども、松雄の親切には何の変わりも

分にも縁組の相手があるのか知りたいものだと思いたちました。そこで、御供えとして初穂の一束をたずさえて、長い旅にのぼりました。やがて神社にぬかずき、高い床下に陣取っておりますと、神々の声が「あの男」「この娘」「あの男」「この娘」と数でも数えるように、呼びあつていられるのが聞えました。その中には、自分の知っている若者の名前もまじって、次々ときこえて参りました。

「やれやれ、俺はまあ、神様の御相談のお邪魔をしていたが……」と呟きましたが興をそそられて退くこともできず、思わず柱のかげに身をよせて、悪いことは知りながらも、一縷の望をかけて、きき入っております。

「あの男」「この娘」と次々と男女の名は組合わされてゆきますのに、どうしたことか、自分の名前は、いつまでたつても出て参りませんでした。

最後に威敵のあるお声が「では、今年は今ままでと致そう」と宣わせられるのでした。

すると「暫時お待ちあれ。太郎がまたのこりました。誰か娘はないものでございませうか」という声が致しました。

若者は自分の名前が出たので、ハッと致しました。

「ああ厄介だな、また、その名が出おった！」と、いらいらしている神様がありました。

「もう、一年のばすと致そう。外に娘がありません」と遠くの方から声がきこえました。

最初の神様の声で「お待ち下されい。栗の木村の名主の家で、近頃女の子が生まれました。家柄は少々かけ離れていますが、この二人をめあわすことにいたしましたしゅう。さすれば仕事も片附くというもので」と申されました。

「左様左様。名前を組合わせておいて、めいめい社へ急ぐことに致そう」と神々は口をそろえて申しました。

「これを以て今年の仕事も終り申した」とまたも敵かな声なきこえました。

一部始終をもれきいた若者は興奮したり、怒ったり、失望したりして、そこをはい出しました。

とほとほと家路を辿りながら、太郎の胸には失望と憤怒がつのるばかりでございましたが、栗の木村に近づいて、干桶をかけたつらねた稲架の間に、ちらちらみえる名主の家の豪華な葺葺屋根を眺めますと、怒りはうすらぐのでした。そして「まあまあこれならさして悪いこともなかるう」と独言をいってみたりしました。あけひろげた入口の前まで

そろそろと参りますと蒲団にくるまった赤ん坊がかわいい手を出しているのがみえました。

「どう少くみても、十二年は待たなきやなるまい！叶わないな。ええ神様にたてついてみてやれ」と、叫んだかと思うと、家の内へかけ込み若者は床の間にあった一刀に手をかけ、素早く蒲団の上から赤ん坊をつきさし、あとをみずに、急いで帰りました。

年月が流れすぎました。幸運に恵まれた太郎は栄えましたが、どうしても花嫁を世話してくれる人はありませんでした。そのうち、また幾年か経ちました。若者は神様におそむき申上げた罰として、ひとり暮しのあじきなさを耐えしのび、ついにあきらめきった心持になっておりました。

その頃、思いがけないことが起りました。お仲人がとても美しい、真面目な働きものの花嫁の世話をしようといつて、訪ねて参りました。太郎は躍り上って喜びました。話しあいには順調に運んで、花嫁を迎えました。この若い妻は非の打ちどころもない、願いの通りの人で、太郎もすっかり満足していました。ある暑い日、縁側で縫物をしていた妻は、袷元をゆるめていましたが、太郎はふとその頸に奇妙な傷痕をみつめました「どうした傷か」と尋ねました。

「これには不思議な物語があるのでございます」とにこにこしながら妻は言葉を統けて「私が赤ん坊の頃のことでございます。火のつくような泣き声をききつけて祖母がかけてつけますと、父の刀が畳の上に投げ出してあり、私の頭から肩にかけて刀傷がついておりました。傍に誰もいなかったことでございますから、どうしてこんな事になったのか判りませんでした。祖母は神様が何かのお計いで、こんな傷をなされたのだと申しておりましたが、大方そんな事でしたらうと思っております」というと、また針の手を動かしました。

思いに沈んだ太郎は、そっとその場をはずしました。太郎は再びあの赤ん坊の顔と、小さい手を思い浮かべながら、神様の御命令にそむくことの恐しさをしみじみと味ったのでございます。

いしはこの話の終りに、いつもこう申しました。

「ですからね、神様のお定めなされたことはおうけするものでございませう」

x x x

姉の婚礼の日が近づきますと、家中大さわぎになりました。花婿の宅は尚一層のとりこみであったことと思われま

す。花嫁が生家を出る儀式も仲々念の入ったもので、幾日もの間、家の中では指図する声や、それに従って動く人々の物音が絶えませんでした。たぎ、いし、としの三人の女中が、嫁入調度の仕度で、始終忙しくしておりました。荷物は人足達の肩にゆられて、一山向うの婚家へ運ばれました。

それから二日後、姉は家を出ましたが、その日は朝早くから髪結さんが見えて、美しい高島田に結びあげ、厚化粧を致しましてから、白無垢をつけさせました。これは、結婚というところが、里方の家に死ぬことを意味するからでございます。また下着に赤いものを着けますが、これは婚家に新しく誕生するという意味なのでございます。母は紋附を、兄は麻袴も凜々しくいでたちました。これが父にそっくりでしたので、私は何か嬉しゅうございました。

花嫁の駕籠が玄関に参りますと、一家のものは揃って仏間に集まりました。嫁してこの家を離れ、他家の人となる姉は、ご先祖においとまごいを致しました。深く頭をたれた姉の傍に、にじりよった母は、美しい、函迫をささしたました。それは松竹梅の模様をちりばめた美しいもので、祖母の手になったものでした。

それから母は、戦いに出でたつ武士のように雄々しく新しい生涯にたち向うようにと、おきまりの門出の言葉はいきかせ、次いで「毎日、この鏡をごらんなさい。もし心に我儘や勝気があれば、必ず顔に表れるものです。よっくごらんなさい。松のように強く、竹のようにもの柔らかに素直で、しかも雪に咲きほこる梅のように、女の操をお守りなさい」と申しました。

この時程に母が感激していたのをみたこともございませんが、姉は厚化粧のかげに、表情のすべてをかくして、唯人形のようにみえるばかりなのも哀れでございました。

一家の者が玄関に居並んで、低いお辞儀をしている中、姉は駕籠に入り、簾の小窓の蔭にかくれてしまいました。姉の乳母が駕籠の後に続く筈でありましたが、遠くに嫁いでいましたのでいしが代り、第一の人力車に乗って姉の後に従いました。それから、媒酌人御夫婦、兄、母が続きました。この行列が出かけますと、としては葬式の時と同じに、門口に塩をばらばらとまき、車輪の音と車夫の足音にまじって、祖母の謡うお謡の一節がきこえてまいりました。「……高砂やこの浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて……」

こうして、わが家の一人としての姉の生涯は終わったのでございます。ですから、このあとで幾度も姉は生家を訪ね、親しみ深いもてなしをうけましたが、いつも客に過ぎなかつたわけでございます。

ずっと後になりました、姉はこの時の行列のことを話してくれました。婚家までは、ほんの二三時間の道のりでございましたが、山越えを致さなければなりませんのでしたので、駕籠が大変揺れ、姉は高島田が気になったそうでございます。やがて平坦な道に出たかと思いますと、突然、駕籠が止り、小窓からいしが顔をみせて、

「お嬢さま、中宿へまいりました。ここで一休みしてから、あちらさまへ伺うことにいたします」と申しました。

母といに助けられながら駕籠を出て、ある農家に入りました。ここは婚家の遠い親戚で、女主人は丁寧に行き出迎え、お赤飯におかしらつきのお魚をそえた食事を出して祝って下さいました。いしが姉の身じまいをつくり、又一行はなだらかな丘を登り、頂上で七返り半の使者に会い、やがて幔幕や高張提灯に飲びの色深い大門に迎りつきました。姉は駕籠が石畳の上を下りていることは感じたそうです。何もみえませんでした、やがて小窓のところか

ら花婿の顔が覗き、それから駕籠の屋根を扇子で打ちますと、それが歓迎のしるしだということは、聞かされて知っております。

この花婿の行事は間髪をいれずになされるものですが、当の花婿はまだ恥しいばかりの十八歳という若さでありましたので、人が迎えにゆかなければ出てこない始末でございました。ほんの僅かの間でありましたが、待たされてい、初めてこわい思いをしたと、姉は話しておりました。やがて足早に近づく音がきこえ、小窓があきました。姉はつつましく伏眼でいなければならなかったのですが、驚いたはずみに、ふと眼をあげて、花婿の顔をちらとみただのでございました。蒼白い顔にはあばたがみえ、額は広く、口許はきりりとしまっていたそうでございます。やがて、小窓はしまり、すかさず頭の上に、こつこつと音がきこえました。

駕籠はかきあげられ、入口のところでもまりました。中の姉は不思議に静かに坐っていたらそれでございます。それは花婿の顔をかいた瞬間、こわい思いは消え——而も永久に——任せきった心持で落ちていられたからだと話しておりました。

駕籠を出て、生涯のわが家に足をふみ入れますと、ひびいてくるおめでたいお謡の節ははや終りに近づいておりました。

「……はや住の江につきにけり、はや住の江につきにけり」

九 孟 蘭 盆

私が七八歳の頃のお盆の初日、いしは私の稚児輪の前へ、新しい簪をさしてくれました。それは、小花をたばねた正面に、柄をはめこんだ銀の簪で、美しうございました。

「これは、お江戸のお祖母さまからお送りいただいたのでございます。何でも、昔の一分銀なんかをつぶしてお造らせになったそうでございますが、仲々お美事でございますこと」といしは説明いたしました。

私はすぐにお江戸の方に向けてお辞儀をし、見も知らぬ親切な贈り主にお礼を申しました。お江戸のお祖母さまというのは、どういう方だか、私には一寸も判りませんでした。が、物心つくことから、毎年お盆には美しい贈物をして下さるので、家とは余程深い関係のあるお方に違ひなからうとは思っていました。が、別段気にもかけませんでした。

孟蘭盆はご精霊さまをお祀りする日で、数々の年中行事の中で、一番親しみ深いものでありました。ご先祖さまは

いつも家族のことをお忘れにならないものと思い、年毎にみ魂をお迎えしては親しみを新たに感じさせられるのでありました。

お精霊さまをお迎えする準備には、昔から清浄を重んじ、万事万端しきたりに従ってなされたものでした。

準備のため、数日間在家中のものがたち働きました。爺やと下男は庭木に鉄を入れ、生垣を刈り整え、お庭はもちろん、床下まで掃ききよめ、庭石を洗いました。畳も上げてお掃除をし、きんやとしは、縁側や玄関はいうに及ばず、天井板や障子の棧や欄間や磨きこまれた柱や床の間まで、お湯で雑巾がけを致しました。障子の破れ目もすっかりつくろい、家中は屋根の上から床下まできよめられるのでありました。

やがて母がお納戸から父の秘蔵の軸を持出して、床の間にかけますと、きんはその前に花瓶をすえて、秋の七草を挿すのでございました。

み霊をお迎えするお仏壇が一番大切なところでした。爺やはまだ夜の明けきらな中に蓮池へ下りてゆきましたが、これは、蓮の花が朝日のさし初めると同時に花を開くといわれているからでございます。爺やの出かけた後でお仏壇

のお掃除をするのですが、阿弥陀さまのお像、お位牌、父上の写真、きりこ燈籠、燭台、珠数など、それぞれの場所に置き直し、女の黙従を物語っているとされる不恰好な木魚もふきこんでつやつやと光るようにするのです。やがて爺やがお仏壇の前へ蒲蓆をしき、両側へ七草を盛った花瓶をおくのです。

でも一番興深く思われましたのは、祖母と二人でお仏壇の前に坐って、お迎えの飾りつけをする時でございます。玉蜀黍の毛で尾やたてがみを、芋幹で角や脚を、生乾きのそうめんを馬具を作り、茄子と胡瓜で牛と馬をつくるのです。そのうちに爺やは、縁が乾いて巻き上りお皿のようになった蓮の葉や、赤や黄色の円い果物を持って参りました。今思えばあの果物はトマトだったようでございますが、その当時は赤茄子といって珍らしいお野菜でございました。

いしが蓮の葉のお皿に、お野菜やいろいろの果物——毛桃は別として——をもちつけますと祖母はそうめんをお仏壇の前の方にかけて、花綵のようにし、所々に茄子や赤茄子をつるしました。

それからいしが盆燈籠を高々と掲げました。これは六角の枠に白紙をはりめぐらしたもので中に紙の切型がとりつ

けてあり、灯を入れますとその熱気で廻転するようになっていました。そして、切紙が上ったり下ったりゆれ動きますが、まるで小鳥の群が中で羽ばたいているように見え、仲々美しいものでございました。

こんな飾りつけや、茄子の牛や胡瓜の馬がどんな意味をもっていたのか、年月を経て、人々の記憶から消え果ててしまいましたけれども、蓮は昔から清浄のものとしていきましたので、その葉をお皿に使ったのでございましょう。それについて、お釈迦さまがまだ大雪山に隠れて御修業中、試験をおうけになった時のことが仏典に出ています。

ある暁方、お釈迦さまが冥想に耽っていらっしやいますと、妙なる歌声がきこえて参りました。耳をすましますと、その歌は衆生済度の道を暗示するかの如くにひびき、お釈迦さまの胸は喜びと驚きにふるえるのでございました。が、はたとその歌声は消えて、まてどまてどあたりはただ静まりかえるばかりでありました。お釈迦さまは怪しまれつつ崖の端に御足を運ばれて霧のたちこめた谷底を見下されました。するとそこには、お釈迦さまの憂いに満ちた御顔をあざ笑うかのように恐しげな妖怪が、顔をもたげているのでございます。お釈迦さまはしきりに、この妖怪に歌

のつづぎを求められましたが、妖怪は頭を振って、人間の肉と血で飢えと渴きをいやさない限り、歌えないのだと申しました。そして飢渴さえいえれば、衆生済度の福音が一切衆生にゆきわたるまで、不思議な法を歌ってきかせようと申しました。

この福音こそ、お釈迦さまが世界中にのべつたえようと思い描いてこられたものですから、永遠にその夢も消えはてた思いでございました。が、やがて、お釈迦さまは「わが肉もて汝の飢えをいやし、わが血もて汝の渴をいやせよ。そうして一切衆生が救われるまで汝の歌を歌いつづけよ」と仰せられ、衣をぬぎすて、千仞の谷底めがけて身をおどらせられました。するとその時、朝の光がこの暗黒の谷を照し、蓮池の面にさしそめました。お釈迦さまのお体が宙に浮いた瞬間その蓮華の蕾の一つが開き、お釈迦さまのお体は、雪のようなその花卉の中に埋れて助かりました。こうして救われたお釈迦さまが、全世界の三分の一以上の広きにわたったかの信仰を伝えられた方なのでした。

蓮の花のもり上ったような雌蕊は、今も「うてな」と呼ばれておりますが、これは座席を意味し、仏壇には必ず蓮の花をお供えすることになっております。

たそがれ時にはみ魂をお迎えますので、日の入り前にすっかり用意をすませました。お精霊さまのお姿を拜んだことはありませんが、何処とも知れぬ暗黒の死の国から、白馬に跨っていらっしやるものと、いい伝えられております。

どこの子供も同じことで、私もご先祖さまをお迎えるのは何となく心うれしく感じておりましたが、父の亡くなりました後は、身にしみて感慨もふかく、家族一同仏前に集いますと、心もときめくのを覚えるのでありました。誰も彼も、召使達も質素ながら新調の着物を着ていました。黄昏の色がこくなりますと、みあかしをともし、障子をひらき入口の戸をあけひろげて、外からお仏壇への途をあけました。

それから、一家揃って大門のところへ参りました。敷石の中央には、爺やの手で十三本の葎幹がくみたてられ、爺やと吉太を一方に、祖母、母、私、いし、きん、としを他方に二列に分れました。やがて皆蹲って、頭をたれて静かにお待ちするのでした。兄が上京中でありましたので、祖母がいしに手伝わせて、燧石から火をとって、迎え火を燃しました。

街中が暗く静まりかえり、門毎に焚く迎え火ばかり、小さくあかあかと燃えておりました。低く頭をたれていますと、まちわびていた父の魂が身に迫るのを覚え、遙か彼方から、蹄の音がきこえて、白馬が近づいてくるのが判るようでございました。迎え火の燃えつきるその瞬間、八月のあたたかい夕風が頬をかすめると、私の心の中にはなごやかな思いがしのびよるのでございました。頭を下げたまま静かに立上った私達は二列のままで道の両側を歩んで引きかえました……真中はお精霊さまがお通りになれるように。仏前へ参りますと、母が鉦をならし、一同なつかしい客を迎えた喜びの中にも、敵かな気持で頭をたれました。前年とくらべますと、家の中はずっと無人になっていましたので、み魂をお迎えたことは、またない大きな喜びでございました。

それからつづく二日は町中がお燈籠で満ち満ちました。銘々誰れでも盆燈籠を手にし、家々は燈籠で飾られ、通りには燈籠が連ねられました。日暮になりますと、墓地という墓地には草燈籠に灯がともされ、まるで群れとぶ螢にも似た眺めでございます。この日こそ、日本中が和んで、だれも魚や鳥や虫けらをさえ殺すことを致しませんでした。

ですから、漁夫も他所ゆきの身装で街を歩き回り、鶏の雛ものんびりととやの中でさざめきあい、子供が小さな手籠に入れて楽しむすず虫も、樹の上に鳴きしきる蟬も、もち竿の恐れもなく、のどをふりしぼって鳴きくらすのでした。慈悲の手はさしのべられて、お坊様の托鉢は満たされ、墓石の上の蓮の葉かげには食物がかくされておりました。盆燈籠の灯が消えますと、乞食がそれを持ち去るのです。そして地獄にある罪人でさえ、救いを求める心が切なれば、このお盆の間には、お慈悲にあずかることになっております。

家の中は心優しい空気に満たされ、わがままな業をする者もなく、笑いさえ嬉しげでした。それも、皆が新調の着物を着、お互いに作法正しく、お精進料理を頂いて楽しみあうことをご先祖さまも喜んでいて下さると思うからでございます。祖母のお顔はいよいよ穏かに母の面は静かなやすらいに満たされ、召使までが笑いさざめき、私の心の中にも、静かな喜びが湧きあふれるのでございました。

十六日の朝まだき、爺やが蓮の花をとり池へ下りてゆき、母は湯気のたつ御供喜膳を仏前に供え、暁の光がほの白い燈籠の灯にかけあう頃おい、一家集まって、お精霊様

にお別れをいたしました。

過ぐる日々、共に分ちあつた喜びの故に、母が最後のお辞儀を終えて後、ご仏前の蒲蓆をとりあげた時には、いいがたい別れの悲しさが胸に迫るのでございました。母はその蓆を二つに折り両端を蔓で結んで舟を作り、真中に苧幹で柱を作りつけました。その舟に、食物を盛った蓮の葉を入れ、お精霊さまの鳥たちへのお土産にもと、おにぎりや生団子をもそえました。胡瓜や茄子の馬や牛、その他の飾りの品をもみな入れ、苧幹の柱には白い燈籠をつるし、爺やがこの蓆舟を持ち、母や私は召使たちをつれて川へ参りました。

夜のあけそめた街々には、人々の往来しげく、空には餌をみつめて喜ぶ鳥が群れとんでおりました。川岸につきますと、私共は橋の上にて、爺やだけが水辺へ下りてゆきました。もうそこにはみ送舟を流す人々がたくさんつめかけておりました。

爺やが燈石を打って燈籠に火を入れようと致しますと、いしは私の耳に「ごらん遊ばせご先祖さまが朝日の光をあび、潮ののつてお舟出をなさりますよ」と囁くのでございました。

鳥の啼く声のほか、辺りの静けさを破るものはありませ

んでした。すると、突如として朝日の光が山の端から射出でました。待ちかまえていた人々の手は一斉に蓆舟をはなちました。人々はみな、餌を見て啼きさわぐ鳥の群の中を漂い渦巻まいて流れゆく舟を見まもりました。中には、まもなく転覆した舟がありました。すると一人の老婆が、「うちのお精霊さまはのり出して、もうあの世へおゆきなされた」といい、あとをもみずに満足げに家路を急ぎました。

あたりの明るむにつれ、浮きつ沈みつ、小さな蓆舟が流れ流れてゆく様を、はつきりとみとることが出来ました。朝日がいよいよ光をまし、山の端をのぼりきる頃、川辺に頭をたれた人々の口からは静かに深い呟きがおこるのでございます。

「さようなら、お精霊さま、また来年も御出なさいませ。おまち申しております」

人々は群をはなれ、銘々、満足げな面もちで家路をさして急ぎました。

母も私も、浄福とでも名附けたい、穩かさを胸に湛えて、川辺を立去りました。いし、とし、爺やの話し声さえ明る

く、後に聞えておりました。お盆を迎えて以来、にこやかに

みえた母の面には、父を見送った後も、以前のような憂わしげな色は戻っては参りませんでした。それをみるにつけましても、父は、私共のところへ参つて慰め、また舟出をされた今も、私共に平和をのこして行つて下さったのだと、しみじみ感ぜさせられたことでした。

その日の午後、いしは私の髪から例の花簪を抜きとり花束の真中の桶のところを指差してみせましたが、そこには定紋が深く刻みつけてあり、彫目の端は寶石のようにきらめいておりました。

「これはお家の紋じゃないのね」と申しますと、
「さようでございます。これは、お江戸のお祖母さまのお里のご紋でございます。とても立派な細工でございます。とお江戸のお祖母さまが送つて下さるものは、いつも大変立派なものや、珍しいものばかりでございます」といしは小箱に納めて片づけながら申しました。

「お江戸のお祖母さまは、お父さまやお母さまには、何にもお送り下さらないのね」と申しますと、いしは、
「さようでございます。お嬢さまにだけお送りになりますね。お盆には、いつでもお嬢さまのことを思い出して下さ

るのでございますよ」と答えました。

この時、お江戸のお祖母さまから頂きものをするのは、家で私一人なのはどうかとふと訝かったことを、後になって思い出しましたが、それとてほんの一瞬のことでございます。日本の子供は、話されもしないことをききただすということを致しませんし、私ども日本人の生活の中には、ただあるがままに受入れていることが大変多うございます。そんなことから私もそれきりこのことを考えてみたこともありませんでした。

かなり大きくなりましてから、お江戸のお祖母さまが父方の祖母であり、あんなにお世話になった家の祖母が、実は私の曾祖母であったことを知りました。

父が七歳の時、祖父が急死いたしましたから、曾祖母が母代りとなって子供の世話をいたしました。若くして夫を失った父の母は家を去つたわけであります。これは日本の家族制度の悲劇ともいふべきことでございます。世の動きが早く、習慣制度が遅れ勝な時代にはよくあることで、総てこういう制度も、できたばかりの時には立派そうにみえましても、案外に思わしからぬ結果を生むことが度度でございます。

明治の御維新は突発的な改革ではありませんでした。日本全国は、勤王、佐幕両党に分れて長年もめにもめていたのでございます。

私の祖父は勤王方でしたが、その妻（祖母）の父は旗本でありましたから、熱心な佐幕党だったわけでございます。個人的には二人は親しくしておりましたが、共にその信念と主君とには忠実な人たちでありました。

祖父は参勤交代で江戸へ上っていた間に急死いたしました。義父の屋敷で手厚い饗応にあずかった後、不思議なほどに激しい苦痛を訴え、そのままとされたと申します。その宴には数多くの熱烈な志士達が列席していたとかでございます。祖父はこの会合の意味を事前に気づいていたのでありましょうか、袴の下には経帷子を着ていたことがその死後判ったときいております。

その頃、全日本の心臓の鼓動は激しく高まっていました。過去幾代もの間に固定されながらも多くの疑問をさしはさまれていました政権について、議論の沸騰していた時代でありましたから、こんな出来事も珍しいことではありませんでした。又祖父のように自若として非業の死をとげた人も少くありませんでした。これが義に忠実な武士の精神であ

り、成敗は天にまかせてことにあたるのが武士の勇気なものです。国が異なれば、すべてを測るものさしも異なるものでありますが、忠義と勇氣のみは、どこの世界にも求められているものでございましょう。

しかし、悲劇は当時僅か二十歳の若い祖母の上にもふりかかって参りました。普通ならば、未亡人としてこの家に留り、七歳の父を育ててゆくべき筈のところでありましたが、事情が事情でございますので表面何事もないようにみえていまして、一切は双方でのみこんでいたことでしたから、誇りと恥とを深く身につけた女として、踏むべき道は唯一つしかなかったのでございます。里方の野心の犠牲となりましたか、その主義の犠牲となりましたか、何れとも定め難いのですが、祖母は静かに夫の家を去り、家の名を戒名に残して里方へひきとりました。当時武士の女として、離縁ということほどの不名誉はなかつたらうと存じます。それは雄々しく戦場に出馬した武士が、戦い前におじけづいて退却したのも同然の侮辱をうけたこととございましたらう。

若い未亡人は、暫くは里方で古の書物をひもといたり、諸々の芸道に精進しながら、静かに日々を過しておりました。

だが、やがて島津家の奥女中として奉仕するようになりまして。

丁度この頃、島津家は歴史上特異な存在として、注目をあつめておりました。と申しますのは、藩主の公の行列を英国商人リチャードソンが、横切ったのを怒り、血気な若侍がこれを手討にしたことから、英国の東洋艦隊全部をむこうに廻して、戦いをいどんだのがこの薩摩藩なのでありました。薩摩藩は日本きっての勢力ある藩で、そのお館は封建時代の常として、大表と大奥の二つに分れておりました。大奥を司るのは奥女中の役で、家臣の多いお館では、この奥女中は大表の諸侍同様、仲々腕利きの人でなければつとまりませんでした。この祖母はこうした大奥の女中うちうち交って、名譽ある地位を得ていたのでございます。

祖母はその才を認められて、姫君のお附きになり、姫君の御輿入の時までお役を勤めました。

私はこのお江戸のお祖母さまにお目にかかったことはございませんが、その面影は私の胸の中にはつきりと浮んで参ります。大きな大名屋敷の中に住み、富貴と榮華にかこまれ、美しい姫君からの尊敬と愛情を受けつつも、祖母はまだ見ぬ孫娘の上を思いつづけていたのでございます。

これは祖母の孫に対する愛情のよび声であつたと思いたいのでございますが、そればかりではなかつたのでございましょう。祖母は女としてたてた誓いを守り通そうと馴れない道を探りつつ、努め励んだのでございます。

自身の過失でもなく、不行届でもなくして、祖母は生涯のつとめを奪われたのでありました。でも挫けることを知らぬ武士にも似て、その心の中に貞節の誓をたて通し、再び仕えることのできなくなった夫の家の精霊を祀るお盆のくるたびに、縮れ毛まで祖母に似ていたと申す孫娘に、身についたものを送って生漉かしたことがなかつたのでございまして。そのかよわさこそ悲劇であり、その努力こそ哀れでありました。でも、祖母は身を終るまで、誠を貫いた人でございました。

島津家の姫君は、祖母が御殿を下ります時、感謝と愛情をこめたお餞別として、御家の定紋のついた御石物を下さいました。私が十歳の年のお盆に、祖母はこれを贈物として届けて下さいました。お精霊さまをお迎えする晩、いしにつれられて部屋に入ってみますと、衣桁には淡青の地に色美しく七草を染めなした麻の衣装がかかっているではございませんか、生れて初めてこんな美しい衣装を見るよう

な心地がして、私は大声で、「おや、いし、こんなきれいな私の着物なの」と申しました。

「左様でございます。お江戸のお祖母さまがお送り下さいましたのでございます」

大き過ぎたその衣装は、としの手で肩にも腰にも深い揚がしてありました。着附をすませますと私は早速祖母と母の御覽に入れ、それから父のところへ参りました。

「お父さま」と障子際に手をつけて申しますと、

「お入り」と中から父の声がありました。

父は読書しておりましたが、振返ってほほえみながら私を眺めておりました。と、驚きましたことに、父は一目私に着物をみますと、座蒲団をすさって静かに「これはこれは薩摩様の御姫君」と低く頭をたれて申しました。

私もすぐに丁寧にお辞儀をして、頭を上げてみますと、

父は笑ってはおりましたが、その笑顔の蔭には、唯に優藩に対する冗談まじりの敬意よりもっと深いもの……：千萬無量の思いを残して去った母への思慕……：が秘められていたのではないかと思われました。

十酉の日

兄の帰宅後、一年ぐらいいったかと思う頃から、兄のアメリカの友から、しげしげと手紙が参るようになり、その度に、祖母と兄と母は長い間話しては、心配そうなるつきをしていました。時々、私は何か自分に関係のあることではないかしらと、おぼろに感じておりましたが、ある日、長い話しあいの後祖母の部屋から障子を荒々しく閉めて出てきた兄をみて、すっかり不安な気持ちにさせられました。兄は急ぎ足で玄関の方へゆきかけて、ふとひき返し、私の顔を黙って覗きこんでいましたが、そのままゆきすぎしてしまいました。

それから数週間後、切手を幾枚もはった横封袋の厚い手紙が届き、また祖母の部屋ではひそひそと相談があり、その後、兄は爺やに廻状を持たせて親戚へ遣わしました。その日、母は考えこんでおりましたし、祖母は細い煙管で煙草を二服するのが癖でしたが、その日は一服するとそれ

西の日の65

その翌日、親族会議がひらかれました。もの心つきます頃から、宅では度々親族会議がございましたが、末っ子で女の子の私はこんな席に出たこともなく、この時も、地所か掛物でも払う相談ぐらいに思っておりました。

きり火鉢によったまま、黙ってきびしい顔つきをしておりました。

その頃、家ではよく物を払ったものでしたから、骨董屋が爺やの案内で土蔵に入ってゆくのを見る度に、姉と私は、今度は小さな包を持って出てくるか、大きな荷物を背負って出てくるかと、あてっこをしたものでございました。幾人もの人がお道具を見にまいりますと、母は愁い深い顔つきになりましたが、父は笑って「いくら立派だって、役に

もたないものを持っているのは昔のことだよ。当節は見苦しくても役に立つものが何よりだからね」と申しました。

けれども、この父が笑わないことが一つありました。地所の相談になると、いつも仲々注意深くなりました。かつては、広々としていた宅の地さかいは、次第に狭められ、塀をこえ、家の近くまで、他人手に渡ってしまいました。けれども、祖母の部屋から向うの山まで見晴す庭だけには

手をつけませんでした。父のみまかりまして後も、兄はその志をまもっていたようでございます。ですから、祖母は一先、竹藪を背景に、泉水やつつじの木叢を眺めて暮したわけでございます。

この時の親族会議は、父がなくなりまして後初めての大きなものでありました。白髪まじりの二人の叔父夫婦、叔母二人、それに、わざわざ東京から参りました若い叔父もまじっておりました。会議は仲々長うございました。

私は部屋にひきとって、手習に夢中になっておりますと、ふいに後から「御免下さい」という、としの声が致しました。振向きますと、興奮の色をその面に見せたとしは、いつもよりも、丁寧にお辞儀をして「お母さまが、お客さま方のお座敷へお呼びなのでございます」と申しました。

その部屋に入りますと、上座に兄、続いて年とった叔父二人、東京の叔父がその次に並び、それに向いあつて、祖母、四人の叔母、母とひかえておりました。はや、お茶が出ておりましたが、私が襖をあけますと、みんなが初めてみるものように、私の顔をじっとみつめるのでございました。一寸びっくり致しましたが、驚きの色も低いお辞儀にかくして、丁寧挨拶を申上げ、母の傍へにじりより

ました。

母は優しく「エツ子や、神仏の御守りあって、お前の嫁入先が定まりました。兄上はじめ皆さまのお計らい故、よくよくお礼を申し上げなさい」と申しました。

私は額が豊にびったりつく程に丁寧にお辞儀をして、また部屋に帰り手習をつづけました。当時婚約は、私個人の問題ではなく、家全体のかかわることとっていましたから、誰方のところへと尋ねてみようとも思いませんでした。その時分の日本の女の子の常で、ごく幼い頃から、私もいつかは必ずお嫁にゆくものと思っていました。それがいつのことかも知らずその時を待っていたのでもなく、恐れていたのでもなく、全く考えてもみませんでした。まだ十三歳にも満たない私のことでございますから、何もかも人任せでありました。当時の女はみなこんな風だったので、ございます。

結納の式は数カ月後にとり行われました。昔風の家では、結納は婚礼同様、神聖なものとしておりましたが、誠に夫婦の契りがそうでありますように、婚約も破るということできないわけでございます。

その日は、静かな中にも、緊張した空気が家中にあふれ定め下されましたがの」と申されました。

松雄の叔父にあたる老人の大森氏は、二三日前に京都からまいり、媒酌人のお宅に泊っていられました。結納の式は日の出の時刻になされるべきものとされておりましたので、午前四ツ時頃、私がお座敷に入ってみますと、大森氏を正座に、祖母、兄、母、媒酌人御夫妻、皆揃っておられました。端坐しておられる大森氏の明るいそのお顔を仰いで、私は何となくお人柄を好ましく感じました。やがて、習慣通りに結納の品々をとりかわしました。そして最後に祖母の手でその白木の台は床の間に納められ、お互いに祝辞をかわしました。その間、私は初めてみる松雄の紋所に見入ったのですが、何の紋だかはっきりとは判りませんでした。

それから、四方山の話にうちくつろいだ祝宴が始まりましたが、私は黙ってかしまつておりました。

その日、私に興味深かったことは、お客さまがお帰りになつてからのことでありました。着替えを手伝いながら、いしはつくづくと私の髪をみて「まあまあ！ エツ坊さま、こんなからから燥いたお寒い日で、ほんとによろしゅうございまして。おぐしが一寸も縮れておりません」と申しま

ておりました。家に何事かあると、すぐに気を揉む召使たち、庭の南隅の南天の木に、てるてる坊主をつるし、念願が叶うたと大喜びをいたしました。いつもは興奮すればする程落ちてみえる母までが、この日は用もないのに、いろいろと指図をして廻るのでございまして。「エツ坊さまのお化粧に気をつけて、むらのないように」と、いしに命じている声もきかれました。髪結さんが参りますと、母は二度も足を運んで、エツ子さまの髪のをくせ直しを特別念入りにするように申しました。

着附がすみますと、先ず祖母の部屋へ朝の挨拶にまいりました。お祖母様の両頬にあふれた笑みは、いつになく優しく、食事の報せがあるまで心ゆくまで、お話し致しました。やがて部屋を出かけた祖母は、私に、今日は酉の日だと仰言いました。

「左様でございますね。結納はいつも酉の日ときまつておりますが、何か理由があるのでございましょうか」

祖母は私の肩を杖にして、そろそろと歩きながら「虚栄心を起しちやなりません、むかしから鳥の羽重ねというから、親戚の方々がお前の一生、金襴どんすが鳥の羽のようにたんと恵まれるようにと、縁起を祝って、この日にお

した。今日ばかりは、私の厄介な髪も家のものを恥しめずにすんだかと思えば、心も軽く、安心してその夜はゆつくりやすむことができました。

こうして結納がすみますと、その日から、私は妻としての躰をうけましたから、毎日の生活はまるで飯事遊びのようなことでございました。いままでも多少はお料理、お裁縫、家事、お作法などのたしなみもしこまれてはいましたが、この時からは、夫の家に入った妻として、それを実行に移さなければなりません。お花なども自分で選び、床の間の掛軸や置物もひとりどとのえ、家の中を習慣通りに整えるのであります。

その当時、私は全生活をあげて、主婦としての準備と躰とに目を過しておりました。目的を話されたわけではありませんが、結納がすめば、これが当り前のこととなっております。唯夫の紋所が剣酢漿草けんかたばらでしたので、この草を粗末にしてはなりませんよと聞かされたほかには、何の説明もありませんでした。それまで私は、お魚は余り好きではありませんでしたが、松雄の大好物だというので、これを頂く稽古もいたしました。姉は婚約の期間が長うございまして上、父の忌で一年間婚礼がのびたものですから、家

にいろいろな準備をいたしました。婚家の紋所が梅でしたので、姉はとくに梅の木を大切にかつ敬うように教えられました。

その頃、私が一番困りましたのは、蒲団縫いでした。私は裁縫は好きでしたが、いつもいしやとしに手伝ってもらって、独力で仕上げたことはありませんでした。女は独力で蒲団が縫えなければならぬことになっていましたので、母は私に人手を煩わさずにつけてみなさいと申しました。

これは誰にもたやすいことではありませんが、丁寧に糸をひき、ひっくり返して角々を整えようとしますと、綿がよって来るのでございます。幾度も繰返して、尚落着かず、とうとう、悲しくなつて袖をぬらしたりいたしました。

もう一つのつとめは、お祝日とかお誕生日には、まだ見ぬ夫のために蔭膳を据えることでありました。その日は、兄から聞いた松雄の好物を、私の手で作り、蔭膳は私の隣りに据え、私よりは先にお給仕するようにいたしました。祖母も母も、いつも松雄と一緒にいるような話しぶりをし、私は夫の傍にいるように、身装や起居に気を配りました。そして夫を敬い、自らは妻として恥なきように努めました。心ときめく当時の思い出の数々は幻にも似ておぼろにか

すみ、唯、誕生日のことがばかりが今も尚、強い印象として心に刻みつけられております。家でも一人一人の誕生祝いは致しませず、新年に家族全体が齡を一つ重ねて誕生祝いを兼ねるのでしたが松雄の誕生日だけは特に憶えて祝いましたが、これは結納から始つたものではなく、母は松雄の兄に対する親切をきいてから、その日にはご馳走を整え、上座に蔭膳を据えて感謝のしるしといたしておりました。母がこの習慣を末長く守りつづけたことを思い、私は遠い異国に渡つてからも、越後の山国の母の家で祝つた夫の誕生日を思い出し、臉の熱くなるのを覚えたものでございます。

こうして私が、妻となるべき修練をつんでおりました年頃、母と私は、殊のほか親しみあつたように思います。母は私に何でも打明けて話すという人ではありませんでしたが、この頃、目に見えない絆が二人の心を結びあわせてくれたように思われます。幼い頃から、母に対する敬慕の心は変わることもありませんでしたが、同時に侵しがたいきびしさを感じておりました。父は私のよき相談相手、友達でもありました。又、やさしい、辛抱強い、心の寛いしには深い愛情を感じておりました。けれども母は太陽のよう

に、一きわ高いところから、手落なく、変ることなく、家内に生きる熱を与えて下さるのでしたが、なれ親しむには、余りに遠いという感じの人でございました。ですから、ある日、母がそつと私の部屋へまいつて、お祖母様のお耳へ入れる前に、一寸話しておきたいことがあると、申しました時、私は驚いてしまいました。その話は媒酌人からのことで、松雄が米国で西部から東部へ行って、独力で商売を始めることにしたので、数カ年は日本に帰られなから、私に渡米するようにということでありました。

母は、困りはてるような時にも、落着いてことに当るといふ人でしたが、こればかりは珍らしい事柄なので、迷つたことでもございましたらう。元来、私の家では遠国から興入した夫人方がありました。それに武家育ちの母は娘の嫁すべき家は天の定めによるものと信じておりますので、嫁として私が海を渡つてアメリカまで行くことは大した問題ではありませんでした。唯、花嫁を迎えて、家風を仕込んで下さる筈の姑や、相当の年配の婦人のいない家にやらなければならぬことが、ゆるがせにできない事柄だったわけでございます。それに、私はもう嫁入つたも同然の人でしたので、婚家のことについては、生家は何の口出しをす

る筋合でもありませんでしたから、この問題を親族会議にかけることもできないのでした。こんなわけで、母は私に相談をもちかけたのですが、私が家の問題に関わりを持ちましたのは、これが初めてでございました。母とこのことを話した時、私はもう少女の世界を越えて女となつたように思いました。

とにかく、さしあたり、異国の生活に対する準備をすることが何よりだ、ということに決しました。親戚の誰彼が興奮して、あれこれ意見を述べて下さいましたが、まず英語を学ぶことだと申した兄の言葉が一番実際のものでありました。それには、私は東京の学校へゆかなければなりませんでした。

その冬は、私の遊学支度で忙しゅうございました。その準備のもの悲しさは、私には思いも及ばなかったことですし、家のものにも味わいきれなかつたことでありましょう。母は夜な夜な、幾代もわが家に伝わつた古風な衣類を一针一针丹念にほどき、いしはその布を染めかえて、学校通いの質素な着物に仕立直してくれました。

いふぶんたくさんのものを、惜しげもなく売りましたので、時には、祖母や母の顔が曇ることもありました。一

方、兄は昔の宝物に対する執着もなくなったかのように、残念らしい様子もなく手放すのでありました。

「宝ものなど、苦勞の種になるばかりだよ。こんなに貧乏しながら、むかしの足輕や仲間共の用いた道具を幾箱も持っていたって仕方がないからね。昔は役に立ったかも知れないけれどこれからは、家の子孫も実業の戦場で戦うんだから、こんなものは無用だよ。当世では一にも黄金二にも黄金、黄金をうるには実業よりほかにはないのだ」と、兄はよく申しました。

当時、私は別に気にも留めませんでした、この頃になつて、精巧な象眼などした刀の鐔が二足三文に売払われたことを思い出しては、惜しい気がいたします。昔日の家の子が誇りして佩いた刀をかけてさえ、古物商の秤がその重みにはね上った様子を、今も尚、眼前に見るような気がいたします。

ある寒い夜、私は祖母の部屋の炬燵にうずくまつておりました。思えば、よくこんな恰好でお炬燵にあたつたものでしたが、それさえ遠い昔の事の様に思われ始めていました。その年は、何だかお祖母様から遠のいてしまつたように思いました。私は祖母の差出すお菓子を楽しんだり、お作

法をしこまれたり、古い伽倻を通していろいろの教訓を与えられたりした頃の子供ではなくなつておりました。祖母は私をかわいがつては下さいましたが、古風なあのお考え

では、私の将来を理解して頂くことはできないのではないかと思われました。が、その夜、祖母と話しあつていますうちに、武士の躰をうけた人は、来るべきどのようなことにも処してゆけるものだということを悟らせられました。

僅かに赤い炭火ばかりがかすかに照している静かな部屋の中で、祖母は、丁度六十年前のその日、花嫁としてこの家に興入れするため、遠い生家を出で発つた当時のことを話して下さいました。その頃、祖母くらいの格式の家のものは、一年一度は必ず行列も美々しく、里帰りをしたものだそうでございます。祖母の里からは、使者が参りまして消息をたずねたり、お正月やお盆には、贈物を届けてきたりいたしました。が、祖母はこの家に嫁して以来、生家へ行ったこともなく、懐しい人々に会つたこともなかったと申しました。交通機関もとのわなかつたその頃は、距離を言い現すにも、旅に要する日数を以てしたものでありました。祖母は満月の夜生家を出て、この家の門をくぐつたのは、次の満月の夜であつたと申しますから、随分長い旅だ

つたと思ひます。

「お前と同じ年の十四でしたが、山を越えたり、大川を渡つたりして、見知らぬ国々を通つて来ましたが、その間には、いろいろ珍しいことがありました。お祖母様のお国は京都よりもっと遠いところで、国境ごとに、関所でずいぶん待たされました。すると、乳母が傍に来てくれたり、供勢の役人や槍持や六人かきの駕籠かきがいてくれたので、別にこわいとも思ひませんでした。こちらへ来てみると、お国とはすつかり違い、習慣も言葉も奇妙に思われ、まるで異国にいるような心持でしたが、それでの、祖母はこの頃異国へゆくお前のことが気になつてなりません。この、エツ坊や」と、祖母はまたとなくやさしい声で「住むところは何処であろうとも、女も男も、武士の生涯には何の変わりもありません。御主に対する忠義と御主を守る勇氣だけです。遠い異国で、祖母のこの言葉を思い出して下され。旦那さまには忠実に、旦那さまのためには、何ものをも恐れない勇氣、これだけで。さすればお前はいつても幸福になれましようぞ」

十一 初 旅

その年の冬は長く、五カ月の間、雪ばかり見て暮らしました。春の初めに、東京の親戚から私の入学手続がすんだと申して参りました。山道に雪崩がなくなり次第、兄は私をつれて上京することになっていましたので、その手紙以来、私は旅に出る日を心待ちにしておりました。

とうとう、信濃川の土手の緑がちらほら雪解けの間に見える時がまいりましたので、仲好しのお友達をさそつて、お別れの摘み草をいたしました。よく晴れた朝、めいめい、紫のお高祖頭巾を被り、裾をからけて、派手な長襦袢をのぞかせながら、手に手に小籠と竹籠をもつて出かけました。駆けまわりながら、さざめきあい、摘んだ若草の種類を誇りあいつつ、川堤を色どる乙女の群は、おちこちの遠い山を背景に、優雅な絵にも似た眺めであつたらうと思ひます。思えば、これが、長岡で過した若い日の最後の楽しい思い出になつてしまいました。

やがて、山道を包んでさし出ていた雪も流れ落ちたとの便りがありましたので、私の出発の日取りも定まりました。うれいような、悲しいような気持で、祖母と母に別れを告げ、涙にうるむ眼をしばたたきながら、いしに助けられて、人力車に乗込みました。列をつくって別れを惜しむお友達の間をぬけて、二台の人力車と馬子のひく荷駄馬とは、八日路の旅にのぼったのであります。

道中、駅々で人力車をかえながら、旅をつづけましたが、時には、馬に乗らなければならないところもありました。私の鞍は高い箱鞍でしたので、兄は馬子に手伝わせて、二つの籠を馬の背にふり分けに縛りつけ、一方に私をのせ、他方に荷物を入れました。曲りくねった山道を辿りながら、籠にもたれて見渡せば、遙か彼方の漁村まで見晴すことができるのでした。道が山奥にさしかかると、深い谷の傾斜に様々の形に区ざられた稲田がつづいて、それが継接したお坊様のお袈裟を思わせるのも面白うございました。薬葺屋根ばかりの小さな村には、数木の木立にかこまれた鎮守のお社がみえたり、流れのそばには半ばかくれた水車が廻っていました。気も澄みわたった山路のことですから、水田に鋤をひく牛の鼻竿や、その牛を追う農夫の鉢巻には

さんだ紅い花さえ、手にとるよう見えませんでした。その頃は、死者のほかには、生花をつける人はありませんでしたから、その人も帰ってから、お仏壇に供えるつもりなのかしらと、思い思いで、その農夫の家の様子など思ひえがいてみるのでございました。

三日目頃でしたか、街の雁木かきも見えなくなり、いよいよ深雪の国を出はされるのかと思われました。屋根の横木に、見馴れた石もなく、何か寒々として、人妻の眉が落ちた時のあの感じにも似た、妙な眺めでございました。でも妙高山の麓をまわる頃には、方々にはだら雪を見ました。車夫が申しますのに、この地方の雪は、七月頃までであるとのことでした。

「この山をのぼると、信濃富士というて上天気の日には富士山が見えるよ——」という兄の声に、私の胸は躍り、一生拝むこともあるまいと思っていた霊山は近づいたのかと思ひましておろかにも頭をめぐらしたのであります。兄のむすびの言葉を聞きますと、胸のあつくなる思いにふるえたのでした。

「——それから反対側には、越後の野が見えるよ」
「随分遠くまで来ましたのね」と私は小声で申しました。

兄は、沈んだ私の顔をちらとぬすみ見て、笑いだししました。

「その反対側の山の向うには、佐渡が島が見えるよ、松雄が思ったほどの人間でなかったらこんな唄をきかせておやり」といって、兄は声音もおもしろそうに、古い俗語をうたうのでした。

「憎い男に着せたいしまは
牢屋格子に佐渡がしま」

こんな下品な唄をうたう兄を見て、戸惑ってしまいました。が、殊に真面目な事柄をこんな風にあらわしてしまうのが悲しく、車にゆられて進む私の気持は沈むばかりでございました。

昔から佐渡が島は罪人の流された処で、人はここを世のはてと思っておりました。それで、こんなざれ唄が、農家の女子供の間で流行ったのであります。

五日目の夜は、長野の善光寺であかしました。数年前、華かに着飾った少女の群にまじってこの尼宮さまが剃刀をかざして立っていられるお袖の下を歩いたことがありますが、これが「得度」の儀式なのでございました。

翌朝、宿を発って間もなく、兄は車をとめ、私の車が追

いつくのを待つて申しました。

「エッ坊、家ではいつ頃、お前を尼にすることを思いとどまったのだらうね」

「さあ、判りませんわ」と私は答えました。

兄はただ淋しい微笑をもらしたきり、黙って考えこんだ私をのこして、又、先に車を走らせてしまいました。

私は判らないと真実をいったのでした。はっきりした目的などなしに、教育をうけてきたものと思っていました。兄の笑い方ではっとした私は、山道を車にゆられながら、深い物思いに沈んでしまうのでございました。私を尼にしようとの祖母の言葉には、黙っていた父も心の中では仲々に承知しがたく思っていたところへ、兄の家出という悲しい事件が起りましたので、父は、私に、家の後継者としての教養をうけさせようと、ひそかに決心していたのであります。それと知った祖母は、大事なこの家の総領息子の身 pensando 心は痛みながらもいつ帰るとも知れない兄のこととは強いて忘れたような顔をしていましたので父の計画は、暗黙の中にはこんでいたのではないかと、思い当りました。長野を出て、一時間もたったかと思う頃、車夫は小さいこんもりとした山を指して、

「姥捨山でございます」と申しました。

それを聞くと私はいしから聞いた親思いの息子の話を懐しく思い出すのでした。

その話と申しますのはこうなのでございます。むかし、この姥捨山の麓に貧しい農夫が独りの母と暮しておりました。

その頃信濃の御領主様はまことに非道な悪い方で、役に立たぬ老人は皆棄てて殺して了えというお布令を出されました。それを知った農夫は悲歎にくれましたが、やむを得ませんので、干飯を袋に入れ、ひさごに水を詰めて母を背負って山路をたどりました。日も暮れますと、まんまるの月が山の端に昇って参りました。そまや狩人の通う小路をわけのぼり、ついに山の頂につきまして、さて母を人背から下ろし涙ながらにお暇乞い致しますと、その母は「お前が帰り途に道に迷わぬように小枝を枝折りにとるところろ落してあるから」と申されるのでした。母を棄てるむざんな子にかけける親の情にたまりかねて、ついに、再び母を背負って家に帰り、小屋の下に室を作って、そこに母親をかくまったのでした。

ところで又、御領主様から二度目の難題が出たのでした。

それは灰でなった縄を献上せよ、というのでしたが、誰れ

一人としてそんなものの作れる人はありませんので、人々はまた途方にくれました。その話を聞いた老母は「平らな石の上に縄を乗せ、風の無い日に焼いてみるがよい」と申しますので、そう致しますと、罎しや灰でなった縄が出来ましたので、若者はそれを殿様に献上致しました。

御領主様はびっくりして「一体誰れがこのようなものを作ることを考えたのか」と訊きただされますので、若者はやむなく、一部始終を申し上げますと、さすがのお殿様も、しばらくお考えになられた末「やはり若い者の力だけでは足りないこともある。亀の甲よりも年の功という諺もあつた」と、ついに心を改められたということでありました。

それから姥捨のお布令はすぐにとりやめられ、老人をすてるなどという習慣はむかし語りとして残っているばかりだと申すのでございます。

旅路が進むにつれて、地方の風俗はすっかり変って参りましたので、はや知らぬ異国に参つたかのような思いがいたしました。あるところでは、村に入るずつと手前のところで「負かったか？ まかたか？」と、しわがれ声で叫ぶのが聞えてきました。狭い人ごみの通りに入ってみますと、

豆や人参や葉や、筍などの籠の間に立っている競売人が見え、その周囲には、大小様々の茄子や蓮などいりみだれて散らばっていました。

兄は振返って笑いながら私の方を見ていました。

「あれは何ですか、みな何をしているんでしょうか」と、私は長い通りを出はなれて、大通りに出ると、訊いてみました。

「野菜の競売だよ。商人がたくさん買いこんで来ては、毎朝ああして一籠いくらで売るんだね。あの蓮根は美事だったね。朝ご飯を頂いていなかったら、食べてみたくなるようだね」

またある時は、不幸のあった家の前を通ったことがありました。門口では、菅笠に半被姿の人足が、お棺を葬儀用の輿に入れるところでした。その上には金糸の入った赤い着物がうちかけてありましたから、亡くなったのは女の子だったのでございましょう。周囲には白無垢に白手拭を被った人の姿が見え、ちらりと見えた家の中には、衝立はかさかさに立てられ小さい仏壇にはお燈明の灯がゆれておりました。

道が大川に近く沿って走っているところでは、断崖が水

際にさし出ているところさえあり、そこに数多くの水車が廻っておりましたが、それは急流にゆきなやんでいる一群の舟のようにみえました。あたりは岩山のようなところでありましたが、これだけたくさん水車で搗き上げのお米はどうなることかと、怪しんだりいたしました。川を離れてみますと、そこは養蚕地で、道の両側には桑畑ばかり長とつづいていました。

その夜の宿ときめていた町に、あと二三時間という所までつきました頃、空模様が怪しくなりました。兄が心配する顔をして、振向きますと、車夫はこの先の村に、素人屋ではありますが、大きな家があり、時々旅人を泊めますと話しました。それで、私達もその家をさして急ぎました。最後の十五分くらいは、まるで人と雲との競争でございました。目指す家について案内も乞わずに駆けこみますと、流すような大雨が降り出しました。

その家は奇妙な建物でしたが、私共兄妹と汗をふきふき自慢しては高笑いする車夫とがうけた手厚いもてなしは大変なものでした。度々旅に出た父も、これほどの歓迎ともてなしとは受けなかつたであらうと思われた程でありました。

十一 旅に学ぶ

暴風雨の一夜を過した家は大きくて、隅々までよく片づいており、家族こそって、仲々の働きものようでありました。主人夫婦に娘二人の居間を除いては、家中どちらへ向いても蚕の棚ばかりでした。いしの田舎の家もお蚕どころでありましたし、姉の婚家の屋敷内にも養蚕をする小さい家がいくつもありましたので、幼い頃から私はお蚕さまを見馴れておりましたが、この晩のようにお蚕さまが桑の葉を食む音を聞きながら眠ったことはありませんでした。その音はまるで枯葉にふりかかる雨の音そっくりでしたので、その夜一晩中夕立の雨にぬれながら野中を走っている様な夢ばかりみておりました。翌朝目醒めました時には、今日もまた人力車に閉じこめられて旅をしなければならぬのかと思ひまして、気もめいるばかりでございましたが、雨戸があくときさわやかな朝日がきらきらと眼を射しましたが、気も晴々といえました。

私が空の色を眺めていますと、丁度私くらいの年恰好の娘さんが蚕糞をもって出て参りました。たすきがけて素足に草履をつっかけたその少女は、そのまま六月の陽光を浴びて庭に立ち私は手染めの寝巻姿で縁側の端に蹲って、二人はじきに親しくなりました。

その子は六枚の蚕座を一人で受持っているのだと話しました。それで、子供ながらも、お蚕さんのことは何でもよく知っており、お蚕さんをおかわいがっておりました。「お蚕さんはきれいで、食物が仲々むずかしいんですよ。自分のことは何でもよく知っていて、まるで人間と同じようですわ」と申しました。

聞いていると、面白いお話ばかりなので、夢中になっていましたが、後に夜具を片づけに来た人の気配が致しましたので、急いで着替をいたしました。

部屋が片づいて朝食の膳が運ばれますと、兄は「エツ坊、ゆうべはよく休まれたかね」と尋ねるのでした。

「随分やかましゅうございましたの。この娘さんのお話では、お蚕さんは大変気難しいそうですね。塵一つあってもいけないし、枯葉が一枚あってもお蚕さんは青い襟巻をして、蚕座のそとへはみ出すそうですわ」

「このお祖母さまにお目にかかったかい」
「いいえ。お祖母さまがいらっしやることなんか知りませんでしたわ」

「昨夜、僕たちがあんなに大騒ぎをして駆けこんで来たので、早くお寝みになられたらしい、出発前に一度御挨拶申上げておきましょう」

朝食を終りますと、主人に案内せられて、そのお祖母さまの部屋へ参りました。お祖母さまは大変お年を召された方で、慎しみ深いものごしの中にも、どこかすぐれた、理知のひらめきを感じられるような方でございました。なんとなく長岡の祖母の姿が胸に浮んで悲しいようなつかしいような気持がしてなりません。お辞儀のなさり方で、やはり武士の御内の方とすぐ領けるのでありました。長押にかけられた長刀の定紋を見ますと兄が私をここへ連れて来た意味がのみこめました。

長刀は武士の娘が身を護る用にも、武芸のたしなみとしても習ったものでした。この長刀には、ある北国の名家の定紋が金の蒔絵で鞘につけられておりました。お祖母さまは、ひかえめな中にも、誇りの色を見せて、長刀は旧主人の姫君のお形見のお品であると申されました。

私共が興味深げにしているのを見られて、お祖母さまは大切にしておられたらしい筈をとり出してこられました。筈と申しますと、刃のない細身の小刀で、手裏剣とともに、太刀の鐔に差込むものなのです。古えの武士の戦術には厳格な方式がありました。武器の使い方に一々定まった方式があつてその掟にはずれて、敵を傷つけましても、何の誇りにもなりません。即ち、太刀のねらいは面、小手、胴、脛の四つ、手裏剣は矢の如くあやまたず、額、咽喉、手頸の何れかに当らなければなりません。が、筈は様々に使われたもので、太刀の鐔に納めれば鍵となり、耳搔形の先は印籠中の薬をすくうために用い、又腹合に作られた筈は野営の折りの箸となり、また、戦場や、退却の折りには頻死の重傷に苦しむ敵や戦友の蹠の動脈を刺して（死を与える）情の業にも使われました。また、藩と藩との争いで、この筈が死んだ仇の足頸に真直にさしこまれていた時は「帰来をまつ」という無言の挑戦を意味したものだといわれています。それには定紋が彫ってありますので、やがては元の持主の足頸に返ったということもあります。筈も中世の物語や仇討にはいろいろの役割を演じました。兄が感慨深くお話に聞き入っているのを見るのもよろこ

ばしく、またこの御隠居さまが眼を輝かし、頬を染めながら昔語りにも見るのを見ましては、私まで嬉しゅうございました。けれども兄が何かいったのに答えて「若いお方は進め進めの号令を待ちかまえていられますが、老人は唯昔の思い出や、甲斐ない夢を追うばかりでございますよ」と仰言った最後の一言にはさびしい思いをさせられました。

再び人力車にのり、その家の人々や召使達に送られ、別れの言葉を交した折り、働きもののお蚕さんにも、心から「さようなら」を申しました。蚕のことについては、これまでの十四年間に憶えたことよりも、このあわただしい一夜の中に学んだ事の方が遙かに多うございました。坦々とした田舎道を車にゆられながら、私の心には忙しく様々の思いが駆けめぐっております。この時初めて、おぼろげながら、どんなつまらない生物もすべて、人間と同じように、自分自身のことについては、よく知っているのだということを悟り得たのでございました。

「まあ！ 旅を致しますと、いろいろのことを学びます」とと独言をいい、膝かけをひきあげて身体を落着け、行手の遠いのを思うのでございました。

それから暫く眠ったとみえます。兄の声に気づきました。面を自分で演じてみるのが好きで、このお内裏さまを棚から下して聞き手に仕立て、部屋中を大股に歩き廻って、何か恐いつとめを果す武士を真似てみるのです。得意の仇討の場面を演じてお雛さまの首に手をかけ、象牙のへらを太刀にみたててきりつけ、同時に首をひきぬぎ、落着はらったきびしい顔附で、用意していた紫の袱紗につつま、小脇にかかえて意気揚々と評定所へのりこむ真似をしたものでした。

私はこの遊びをするにも、父の持物を使えば、何か威厳がそなわるような気がして、度々父にねだって三徳の袱紗を借りたものですから、父もこのいさましい仇討の遊びのことは知っていたことと存じます。ところが、祖母はこんな女らしくない所作ではお嫁に貰い手がなくなると申しては心配するものですから、縁側に祖母の足音が聞えますと、大急ぎでお雛さまの首を元に納めて、大人しくしてました。

小諸の町をぬける時、私はしみじみとお城を見上げました。このお城を出て、駕籠にゆられながら、小諸の祖母は長岡まで来たのでした。半ば木立にかくれた小諸城の灰色

時には、身体をきの字なりにまげておりました。

かなり大きな町に入っておりますが、兄は振向いて、重なりあった屋根の向いの、小高い丘の上のお城を指して、「小諸のお城だよ、家の一尺離はここから来たんだよ」と申しました。

それを聞くと、心は遠く離れた長岡の家に帰り、数代前に小諸からお興入になった祖母の祖母がお持ちになったという、大きなお雛さまを心に描いて微笑みました。その祖母の興入時代には、大名のお姫様でなければ一尺離を持つことができなかったそうでありました。そのお雛さまとお道具はどんなに立派なものであったかと思われませんが、家の暮しが思わしくなく、古物商の出入りのしげかったことですから、この美しい時絵の難道具も——それは中世の日本美術の粹であつたらうと思えます——他人手に渡ってしまいました。おそらく、巧妙な仲買人の手を経て、外国人の手に渡り、今日では欧州やアメリカに散らばって、あちらこちらの家や、博物館で静かに昔の夢を語っていることのでございましょう。

ところで、その内裏離だけは、衣裳も古びて破れておりましたので、後にのこされ、私の部屋の違い棚に飾ってあります。若い花嫁の身で、小諸から長岡までの旅はどんなに長かったこととございましょう。祖母が一カ月も旅を重ねて興入れたと話したことも考え合わせ、私は、自分の将来に思いを馳せたのであります。出雲の神さまは、自分にもこの祖母方と同じ運命を辿らせておられるように思われてなりませんでした。

途中、駕籠に乗かえなければならぬところがありません。大変恥しい思いを致しました。私はあのゆらゆらする駕籠のりと眼まいがして気分が悪くなりますが、あいにく大雨で、人力車では山道が上れなかつたのでございます。それで、とにかく駕籠にのり、一所懸命気を張っていましたが、とうとう気持が悪くなりました。兄は馬から荷物を下し、私を蒲団の間に入れ、蓆で覆いをいたしました。そしてお気の毒にも、兄は私の傍について山道のあるいたのでした。二挺の駕籠を従えて。

頂上では陽がきらきら照ってました。覆いの下から覗いてみますと、私の可愛いがったあの白が雨にぬれた時によくしたように、兄もぶるぶる身をふるわせていましたの

で、申訳なさそうな声でお詫びを申しますと、
「駕籠にのって、気分が悪くなるようじゃ駄目だね。お父さまの偉息子だなんていえなくなるよ」と申しました。

これ聞いて、私は笑いましたが両頬は恥しさのあまり、熱くなるばかりでございました。

兄は私を馬から下して、円錐形の山の上をゆるやかに覆うている煙雲を指して申しました。

「あれが泥棒宿屋の看板柱だよ、覚えているかい」

泥棒宿屋というのは、山の上の小さな旅籠屋で宿賃が大変高いので、この異名があるのだと父から度々聞かされたものでありました。私は随分大きくなるまで、それが立派な旅館だとも知らず、旅人のお金をとる泥棒の巢窟だとはかり思っておりました。

二人は山道を徒歩で下ってゆきましたが、途中、処々山かげに祠のあるのを見かけました。中には誰の手向けか、お燈明が上っているところもありましたが、私はすぐに遠い越後の行者の洞穴を思い出すのでございました。これは、家を離れて初めての長旅で、まことにいろいろと珍しい経験にみちておりました。然しどれもこれも懐しい思い出につながりがございました。それで、アメリカへ行っても、

こんな風ではないのかしらと、漠然と考えてみたりいたしました。

ある日、驟雨のあとで、車夫が幌をとりのけてくれますと、突然射し出た太陽に照らされて緑の山肌に白く「大」の字がよまれました。それはまるで筆で書いたようにみえました。以前この地方に住んでいた爺やの話では、山頂のお社に参詣する人々の祈禱を書いた紙が結びつけてある竹の棒が沢山より集まっているのだということでした。

その近くのさびれた村に、爺やの妹のみよが住んでいましたので、私共は一夜をその家であかしました。そこは妙な家で、田舎宿をしているようでございました。みよと息子夫婦とは門口に出迎え「まあまあ」を繰返して、驚いた喜んだりするのでございました。広い入口を這入りますと大きな土間で、片隅には、樽がたくさん積み重ねてあり、煤けた天井の太い横木からは穀物を入れた袋や餅、干魚など入れた籠が釣下げられてありました。

山から下りて来たばかりの参詣人が、がやがや話しあっている所をぬけ、別に手入れもしていないような小庭を過ぎて、みよの住居へ参りました。障子にはつぎはぎがしてあり、古びた畳の縁布は切れているという部屋でございま

しましたが、きれいに掃除がゆきとどいていまして、さっぱりした感じでございました。みよは勝気な女で、若い頃、働きのない夫と別れて、四人の子供を女手一つで育て上げたのでございますから、ずいぶん苦勞もしたことでありましょう。身分の低いみよのことですから、夫を捨てるということも易々とできたのでございましょうし、夫に両親がありませんでしたので、子供をひきとることもできたのでございましょう。

兄が幼い頃、このみよは家の召使でありましたので、当時の「若さま」を、今眼の前に迎えた喜びは一方ならぬもののようにございました。みよは台所へ出かけて行ったり、あちこち歩き廻っては、心づくしのご馳走をととのえ、いわけをしたりお辞儀したりなどは私共にすすめてくれました。唯一つ、みよが大変困りましたことは、平膳しか持合せていなかったことで、みよが奉公していた頃は一寸したお菓子をすすめる時にも、兄には父と同様漆塗の高杯たかばいを使うことになっていました。でも、みよは気を利かせて、櫛くしを持ってきてその上にお膳をのせ何度もお辞儀をして、心配そうに「どうぞ、ご勘弁下さいませ」といいながら兄にすすめました。兄はお腹をかかえて笑い、將軍さ

までもこれ程の歓待をうけられないであろうと申しました。その夜は三人で楽しく語り合い、夜の更けるのも忘れておりました。兄は昔のこと、わが家のことなどくわしく話しましたが、私には初耳のこともとたくさんあり、読みかけたままにしていた古い本を、ふとまたひもといた思いでございました。兄がこの夜ほど打とけてたのしそうにみえたことはあとにも先にもないようでございます。みよも泣くやら笑うやら、口早に質問したり、話をさえぎったりしていましたが、何か兄の幼年時代の出来事を話しかけていました時、兄は突然「時にみよ、お前の恋い旦那はどうしたね」と尋ねました。

ずいぶんはなはだしい質問をなさると思っではらはらしていますと、みよは落着いて「若さま、身から出た錆なんぞでございますもの、今でも自分の罪のつぐのいをいたしております」と答えました。

みよは改まった顔附で、部屋の隅の大きな簞笥から、家の定紋の入った紫の袱紗ふくしづつみを出して参りました。大事そうにその包みを開いて取出したものは、錦の守袋まもりぶくろでございました。金糸ははつれ、赤い紐は時代を経て色あせておりました。

みよはそれを恭々しくおし頂いて「これは二人が水門から出される晩に、奥様から頂いたものでございます。入用なだけのお金が二朱銀で入っております」

「そうだったね、私も覚えてるよ。まだ小さい頃で、暗い晩だった。お母さまが提灯をさげて、一人で庭から帰ってこられたが、私にはどうした事だかちっともわからなかったよ」と、兄も感激して叫ぶのでした。

みよは、一寸ためらっていましたが、ぼつりぼつりと昔の恋ものがたりを話して聞かせました。

みよが家へ小間使として住みこんだ頃は、まだ年も若く、忠実な爺やの妹だというので、特に母は目をかけていたそうです。が、同じ召使仲間の若者がみよに懸想いたしました。ところが武家では不義は御家の法度とされておりました。罰としては、水門から二人を追放することになっていました。水門と申しますのは屋敷の塀を囲む溝の上に作った柴の門で、ごくごく賤しい人のほかは通らないところとなっていました。しかも、この追放は公のこととされてしまったので、この刑罰にあったものは、世間から見放されてしまうのでした。考えてみますと、昔の刑罰は大変に残酷なものです。が、掟を破らないようにきびしくしてあったもの

のとみえます。

母は家憲に忠実な人でしたが、みよに恥をかかせまいとして、真夜中に自ら中門のくぐりをあけて二人を出してやりました。それで誰もこんなことがあったとは知らないわけでした。

最後にみよはさびしうに言葉を結びました「水門を通るものの心は、神さまにきよめられると申しますが、掟を破ったという心のいたみは消えるものではございません。

この年まで心の中では、罪のつぐのいをいたして参りましたが、唯子供だけは、御屋敷の奥さまのお蔭で恥をかかずに過してまいりました」

一瞬三人はおし黙ってしまいました。が、兄は苦々しく「家の奥さまは、大事な一人息子よりも、召使の方が何倍もかわいかったらしいね」と申し、むっとして座蒲団をはずし、おやすみというのでありました。

翌日の旅は、峡谷の間を縫い縫い曲りくねって流れる谷川にそうた道を進み、それから急勾配の坂道がつづいたと思ふと、はては広々とした浅い川に出ました。その川を舟で渡りましたが、この川のことを話してくれる爺やはいつも興奮したものでした。父が何か急ぎの用で上京していた

時、この川が出水で父は致し方なく、駕籠を台にのせて人足にかつがせて川を渡りましたが、その時一人の人足が溺れたそうでございます。

私は人力車にゆられながら、日本が生みの苦しみを苦しみぬいていた戊辰前後、あのさわがしい時代に、父はこの道を幾度往復したことか、そしてまた、今、その父の殊に愛した長男と末娘とが、身装も質素に、雇い車にゆられながら、唯一人の老いた馬子に荷馬をひかせて、同じ道中にいると思つてみますと、世の中の変化の劇しさを思わずにはいられません。

とうとう高崎に着きました。ここから東京までは、いわゆる「陸蒸気」が通じていました。初めて見る汽車は狭い扉がブラットフォームへ向けて開かれた小さい部屋の連続のようでした。

もう夕刻近かったこととて、旅疲れの私は眠いばかりで、余り記憶ありませんが、汽車に乗る時、家の中へ入るよう思つて、入口で下駄を脱いで入って、兄に叱られたことだけ憶えています。発車する前に、車掌さんが窓からその下駄を入れてくれましたが、こんな間違いをする人が多いのですか、この車掌さんは列車毎に下駄を集めるのが仕

事だったそうです。車中に落着くと、私はすぐに眠ってしまい、目を醒ました時は、もう話にばかり聞いたお江戸の東京に着いておりました。

十三 外国人

東京の親戚では、私をあずかって、ある名高い女学校に入學できるように取計らってくれました。その学校では英国帰りの男の先生が英語を教えていられました。私は数カ月通學してみました。が、この学校は作法や女のたしなみにばかり力を入れますし、それにこの親戚の家というのが大きなお屋敷で、学校から帰った私はこまごました礼儀作法にかかずらってばかりいました。兄は自分の幼い頃の躰が、これと同じで、全く非實際的だと思い、お前はアメリカへゆくのなら、もっと実際のな教育を受けなければならぬと申しました。

こんなことをいい張った兄は、お気の毒に、またまた親類中から誤解されてしまいました。けれども、父の旧友、佐藤少佐が、奥様の母校である宣教師の経営する学校を紹介下さり、兄も一安心いたしました。佐藤少佐が保証人になって下さりまして、二学期が始まるまでの数週間は、

道には、赤ん坊を背負った子守がたくさんいましたが、長岡あたりの子供のように、気楽に遊び廻るということはありませんでした。年も多いのでしょうし、落着いていて、遊びたわむれたり、寄り集って話したり、使い走りをしていても、下駄の音のほかには、さして騒がしくもありませんでした。

坂道を登りきったところに、学校がありました。木造二階建の校舎は、広い運動場のむこうに樹木にかこまれて立ち、周囲には茨の生垣をいただいた土手がめぐらされておりました。私はここで楽しい四年の春秋を過しましたが、勉強致しましたことは、生涯、いろいろの助けになりました。

私は入学当初から、この学校が好きでしたが、まごついたこともございました。それにしてもご親切な佐藤夫人の賢いご忠言と同情とがありませんでしたら、どれほど私は困ったことでありましょう。田舎から出てきたばかりの私には、何もかも目新しく、一所懸命周囲を見廻しても、その眼は鈍く、私一流の固い保守的な標準から物事を判断しては、こたわっているという風でございました。

学校では英語と聖書の外は、日本人の男の先生に教わり

少佐のお宅でご厄介になることになりました。この奥さまはもの静かでおやさしく、ひかえめな中にも珍しく強い性格をひめておられた方でした。お嬢さまをお持ちにならなかつたこの奥さまは、私をわが娘のようにして、いろいろ後々まで役立つようなことをお教え下さいました。

このお宅から学校までは二里程の道のりでありました。よくよくお天気が悪ければ、人力車に乗りましたが、幼い頃、あのお坊さまから教えられたことを思い出して、学びの道にあるものが安逸を求めては恥だと思い、歩くことにしておりました。

早い朝食を終えるときぐ家を出て、丘を下り、古いお寺の続く通りをぬけ、お濠の広い通りに出ました。澄みきつたお濠の水の面には、石畳や老松の影がくっきりと浮び、見るものの心に静かなやすらかさを蘇えらせてくれたものです。私はここをゆるゆる歩くのが常でした。親しみ深いなかに、尊厳があまりない思いをさせられるのは、東京中で、ここ一カ所でした。やがて、陽のよくあたる練兵場に出るのですが、その真中にさびしうに大木が一本、ぼつんと立っていました。その木蔭で、いつも一息いれてから曲りくねった細い坂道を登ってゆきました。この狭い

ました。でも、この先生方にはお教室以外では余りお目にかかることはありませんでした。外国人の先生方はみな女の方でした。みなお若くて、きびきびしていて、面白くしかも美しい方々でした。召していらっしやる珍しい洋服や足にびったりと合った靴、お化粧気のない美しい肌、ゆるやかな波や渦巻をみせてまとめたお髪の色もとりどりので、お伽噺の国を聯想させられるのでした。私はこの先生方に感嘆しながらも、その方々がお作法を弁えていらっしやらないように思われてなりませんでした。生徒は大抵東京の方々でありました。東京では、私の生国のような古風な家庭はごく少いものですから、生徒たちのお辞儀も簡単に、互いに話しあうにもちょっと男の児のような口の利き方をするという風でございました。それは見ていますと面白くもありましたが、先生方の生徒に対する態度の自由なことと、生徒が先生方の前で無造作な所作をなさることにはすつかり驚らしてしまいました。「三尺下って師の影を踏まず」とまで申しきかされて育って参りました私には、打ちとけた挨拶や無遠慮に話しあう声をききますと、先生には威厳がなく、生徒には尊敬の念もないのではないかと、気が致しました。

それに、私が一番戸惑いましたのは、これら都会の女学生たちは、先生から親しく微笑みかけられたり、ちょっとしたやさしい素振などみせられるのを、この上ない喜びとしていたことでありました。私はたまらない気持で個人的な交りからは身を退いておりました。敵しい躰を身につけた私は、先生や友達にさえ、親しみあうことは心苦しく、心おきなく友達と交り先生にも親しみを感ずるまでにはずいぶん時がかかりました。でも、考えてみますと、私のかたくなな心をほぐしてくれたものは、学校内の平民的な規則でした。が、これとても、強制されたものではなく、自然に育くまれて、一つの型ができていたわけでございます。人を呼ぶにも「さま」をやめて、「お」をつけることなどはその一例でした。こんなことから、氏も育ちも問わず、生徒達は一樣に同じ立場に立つことができました。また皆昔風な髪型をやめ、三組にあんでお下げにしてみました。これであのいやな癖直しはしなくてもよくなりましたが、学校中で縮れ毛は私一人でしたので、何かと人眼をひき、からかわれたものでございました。

大方のことは別に気にもとめずに過しましたが、履物では、全く困り果てたものでした。それまで家の中へ入るに

は、必ず履物はぬぐものときめておりましたのに、ここでは、畳敷きの寄宿舎以外はどこでも、履物のままで出入りするのです。私が教室の入口でもじもじと躊躇しないですむようになりすますまでには、かなりの日数がかかりました。それでお友達は入口で待っていて、私のためらう様子を見ては面白そうに笑いこけるのでございました。

こんなにして、身に浸みこんでいた習慣にも、いろいろの変化があり、それらについてはお友達にひやかされもして、昔のエツ坊も、古い生活の殻をぬぎすて、嬉々として新しい世界にすべり出しているのだと感ずることもありました。けれども時々、勉強に無我夢中になって私を「おエツさん」と呼ぶ友の声に驚いて、一瞬、この新しい呼び名の自分を取戻し、ばたばたと草履の音をひびかせながら廊下を駆けぬけますと、ゆるめた髪の毛はさらさらと後になびくのですが、そんな時、私の裡のどこかで、昔のエツ坊はいなくなったのかしらと、ふと、恐しいような気がしたものでございました。

ところが、このような感じも、決して長つづきは致しませんでした。私はやはり越後の娘だと思わずにいられないようなことが、いつも身の廻りにしみ込んでおりました。

時々、発音が東京のと違ってお友達に笑われるのでした。それに、私が幾分かつめらしく、もったいぶった言葉を使ったせいもありまして、それが奇妙な越後訛とまじりありましたので、東京の人の耳には余計におかしくひびいたのでございましょう。お友達がする真似は、いやみのないものでありましたから、怒るわけにもゆきませんでした。愛郷心をきずつけられるようで、大へん辛うございました。発音のどこがどう違いますのか判りませんので、私は途方にくれて、だんだん口数が少くなり、申したいことも、できるだけ手短かにいうような癖がついてしまいました。

佐藤夫人は、次第に無口になってゆく私に気づかれて、上手にその原因をさぐりあてて下さいました。それ以来、夫人はそっと小さい手帳をたずさえられて、それにむずかしい発音、特にイとエのつく物の名を書きつけておかれ、親切に説明して下さいました。

丁度ある夜、兄が居合せてこの私の修業に気がつき笑いながら、私の顔を上げしげと見ておりましたが、

「エツ坊、言葉も言葉だが、その田舎風の着物の方が問題だね、何か買って上げよう」と申すのでした。

私の帯は母の若い時分に初めて舶来したというゴロフク

の布で、としが丹念に縫ってくれたのですが、流し眼に見る友達の視線を身に感ずる程に大きくなっていました。兄が翌日もとめてきました派手な着物を大喜びで着ました。片側に黒縹子のついた帯は郷里の料理屋の女中さんと思わせるのですが、お友達は江戸好みだと賞めてくれましたので、私は大へん自慢で満足致しておりました。着物のことで、こんなに大喜びを致したのは、幼い頃、父の東京土産に頂いた西洋服以来のことでございます。その西洋服と申しますのは深い藍色でとても奇妙な型でございましたが、それが男児服だとは誰も知らなかったのでございます。いしに着せてもらった私は肌ざわりのよくない、窮屈な短衣をものともせず、大得意で歩き廻りました。家中のものが感歎し、召使達はすっかりのまれた形で、眼をみはり、私は「尾羽を広げた孔雀」のように誇らしげに振舞ったものでした。その私の西洋服の逸話というのはあとで女子の服でなく男の児の服だとわかったときにも、西洋では男女同権ゆえ幼時から男の児も女の児も服装から同じくするのだときかされたことを憶えております。

学校の先生方は、親しめば親しむ程、立派な方だと判ってきました。先生方の夫々の異った個性の奥底に流れるか

くれた気品を見出した時日本の作法に欠けていられるからとて、抱いていた批判など、すっかり消えてしまいい、遂には、教育者という名譽ある地位と、陽気な性格とが、何も矛盾するものではないということが、次第に理解されるようになりました。日本人の先生方は礼儀正しくいらっしやいましたが、何か、余りに遠くて親しみにくいところがありました。が、外人の先生方はたえずにこにこしながら、きびきびと体を動かして生徒と一緒に体操場で駆け廻ったり、羽子つきをして遊んで下さり、かわるがわる私共の食堂に出て、一緒にお食事をして下さいました。

金曜日之夜にはよく余興をして楽しむことをゆるされてきました。派手な長襦袢を持出し、昔の武士が陣屋にかけめぐらした定紋つきの幔幕と見立てて部屋の一隅につるしました。それから、互いに衣裳を貸しあって、昔の英雄達の活人画をいたしました。時に、勇敢な生徒は、先生——それはいつも人気のある先生でした——の真似をして笑わせたりいたしました。折々は時代物の無言劇をしたこともありました。白をつかっては、余り女らしくないということになっておりました。当時は、本当のお芝居でも、女優というものは殆んどなく、女の役は男がつとめることにな

っていました。これは役者を河原乞食だなどと呼んでいた時代から、まだ抜けきっていなかったからでございます。

先生方は、こんな時いつも出席して下さい、笑ったり、拍手したり、私共と一緒に、しぐさを賞めて下さったりなさいました。そして見物しながらも縫物や編物で、手は忙しそうに動いておりました——中でも、靴下つきは、私には一番面白いことと思われました。

こうして数々の楽しい生活に感謝しながらも、常に胸を痛めていたことが一つありました。それは、学校の近くにも、佐藤さんのお宅の近所にも、お寺がないことでもございました。もちろん朝毎に、学校の礼拝堂で、美しい崇厳な礼拝がありました。けれども、そこには、ゆらめくお燈明の光を仰ぎ、たち昇るお香の煙を見つめながら静かな祖母のお部屋に家中で集った時のような質朴さもなく、ご先祖様が近くでお守り下さっているという感じもありませんでした。これが何より私にはさびしゅうございました。その上、月の二十九日に、父の命日を記念する所もなく淋しいことと思っていました。

上京前、母は、私のお師匠さまがお書きになった父の戒

名を下さいました。どこへゆくにもその書付は肌身離さず持っていました。寄宿舎に入ってから、始終身につけておくことは仏を汚し、また古い時代ものを新しい世界の雰囲気の中に押し入れるようで、何かそぐわないような感じがしておりました。そんなことに思ひ至りますと、どうしても身につけていることができません、それかといって手離すこともできません、全く迷ってしまいました。

こんなに思い悩んでいた頃、土曜日に佐藤夫人をお訪ね申しました。それは丁度月の二十九日でございます。夫二人でお針をしながら、縁側近くお庭を見晴しておりました。築山の間をぬい石燈籠を廻って木立の蔭へ消えている飛石つたいの小径をぼんやりと見つめながら、私は縫物を膝に落して、思いに耽っておりました。

「おエツさん、何を考えていらっしやるの、何だか心配するね」と、佐藤夫人に声をかけられ、はっとして夫人の方を見ますと、そのお顔にはありありと心遣いの色が読まれました。学校の感化をうけていたのか、私は遠慮もせず困っていたことをすらすらとお話しました。

すると、夫人はすっかり同情して下さい、「お恥しいことに、こちらでもお仏壇がございます。別に耶蘇教信者

というでもないのですけれど、この頃は西洋風をまねて、お仏壇をおかないのが流行になってしまいましたのね、でも、お庭の垣根の向うの尼さんのところにはおあります」とおっしゃいました。

「お庭の向うに尼さんがいらっしやるんですか」と、驚いた私は同じ言葉を繰返しました。

夫人のお話しによりますと、この家の宅地はもと尼寺の所有でありましたが、時代の変遷にあってその尼寺がさびれてしまいましたので、もとお寺の寺男が寝泊りしていた萱葺の家だけは、そこで余生を送りたいと願っている年とった尼さんの庵として残すという条件附で、佐藤家で買いとられたとのことでありました。

その夜、夫人に伴われて、その庵をお訪ねしました。飛石つたいに築山を通り抜け、石燈籠を廻りますと、木の間がくれに、低い生垣にかこまれたその庵が見えておりました。障子ごしにかすかなお燈明の灯かげがゆれ、聞きなれたやさしい木魚の音に和して、低く呟くお経の音が流れて参りました。思わず頭を下げますと、恋しい家のことが思われまして、宵闇の中に人知れず涙をぬぐったことごとございました。

夫人は竹の枝折戸を押して入り、「ごめん下さいませ。お邪魔ではございませんでしょうか」と静かに声をおかけになりました。

読経がやんで、戸をひきあけて現れた尼御は、古びたねずみの衣に身をつつみ、優しい顔附の大変お年を召した方で、丁寧に私共をお迎え下さいました。

一方に金具もつやつやと美しい立派なお仏壇のあるほか、部屋は至って質素なものでした。ながの年月を経たお仏壇は、絶間ないお香の煙に漆の色もいぶって見ええました。お釈迦さまの像の前には、すりきれたお経の本が積み重ねてあり、先刻聞いた木魚も見えておりました。

おやさしい、しとやかな尼御は、家の祖母のような感じでございましたので、私は易々と心の中をお話し申し上げ戒名を書いた紙をお目にかけました。尼御はそれをおし頂いてから恭々しくお釈迦さまの前へおいて下さいました。それから簡単なおつとめをして頂き、戒名はそこにおあずけ申して、その庵を立去りました。その後、月の終りの金曜日にはこの庵を訪ねてこの尼御のものやわらかな読経の声に聞き入っては、せめても、父の命日の記念といたしたのでございます。

十四 学 課

学校の課業は国語でするものと英語でするものとに分れておりましたが、私は幼い頃から国語の方ではかなりきびしく仕込まれていたので、英語に全力を注ぐことができませんでした。英語に関する私の知識は誠に乏しいもので、なかなか読み書きはできませんでした。話すこととなりまずと殆んど相手に通じない始末でした。けれども、翻訳されたものを幾分読んでおりましたし、何より有難い事には、これも父の賜物で、ある年、父が東京土産にもちかえりました一揃の本から、粗雑ながらいろいろの知識を得ておりました。今考えますと、それは様々の英書から抜萃された切れ切れの翻訳文集で、東京の進歩的な書店で発行したものでございました。

私は見たことも無いその本を翻訳して十巻の本として出版した方に、つきない感謝を捧げております。思えば、初めて私の心の眼を西洋に向けてくれたのもこの本でござい

ますし、この年まで、私に数えきれない知識と幸福とを——この知識と幸福がありませんでしたら、私の生活はどんなに落莫としたものになっていたかと思えます——私の生活に与えられたあまたの友との繋がりが生れたのも、この本の媒介があつたからでございました。

この本が私に届いたその日の事は忘れようとして忘れることもできません。父が「文明開化の窓」と呼んでいました東京への旅は家では、一大事でした。帰りますと父は面白い道中のお話をするばかりでなく、珍しい美しいお土産を購ってまいったものでした。これはある年の旅のことでありましたが、母が父の帰りは日暮がたでしようとして申したので私は玄関の上り口に腰かけて、次第に伸びてゆく庭木の影のみ見つめておりました。私は一番長い木影が届きそうな飛石の上に自分の駒下駄を置き、日脚が傾くにつれて石から石へと下駄を移しておりました。こうして斜めに落ちる木影が長く伸びるのを早めますれば、日もまた早く西に急ぐように思われたのでありました。うれしいことに、まだ木影が細長く伸びきらないうちに門の外に車夫の呼ぶ「お帰り」の声を聞きつけ、素早く駒下駄をかたづけ、飛石づたいに駆け出しました。父を迎える喜び

は抑え難かったのでしょう。きちんと片附いていた下駄箱へ乱暴に下駄を投入れたことを思い出します。

汗みどろの車夫は笑みをふくんで足音勇ましく大門に近づいてまいりました。祖母のほか、家中のものが玄関まで出まして、喜びに心は勇みながらも丁寧に迎えの挨拶をいたしました。お辞儀が終るのを待って、父は私を抱きあげて祖母の部屋へ参りました。

この日こそ、私の生涯の「一里塚」の一つとなったのでございます。下男にかつきこまれた柳行、李の中から出て来た美しい数々の品にまじって、私へのお土産には数冊の本がありました。今でもよく憶えておりますが、小さい十冊の本は丈夫な日本紙の絹糸綴で「泰西史鑑」と書いてありました。「ビーター・パレーの世界史」や「ナショナル読本」「ウィルソン読本」などのほか、英文学古典中の詩や短篇から抜萃したものでありました。

珍しいものを手に入れた時の有頂天になった喜びは何日も、何週も、否、何月も何年も私をとらえてしまいました。中にはクリストファ・コロンブスの面白いお話もありました。もちろん、原書通りに訳されてはいなかったのでしょう、日本人に合う様に作り変えてありました。新大陸発見

の事実はそのまま描かれておりましたが、コロンブスは漁夫の子になっていましたし、漆塗のお椀やお箸が水面に流れていたのを見て、それがもとで新世界発見を思いついたとあったように憶えております。

子供時代を通して、この本は私の心に様々のことを吹きこんでくれました。が、女学校に入って英語を勉強するようになりましてから、幼い頃にこの本で読み憶えたお話のつづきや、その中に流れていた思想と同じようなものが、むずかしい言葉の蔭に秘められていることをおぼろげながらもたしかめました時、その喜びは口にも言い難いものでございました。それからは夢中で書物を読みつづけました。机にかじりついて、辞書は傍に置いてありまして、それを繰るのさえもどかしく、そここつまずきながらも、時には判らない言葉をぬかしたり想像の翼をかりながら、不思議にも意味をとってゆき、倦むことを知りませんでした。この読書の魅力は、お月見の宴にもたとえられるかと思いません。漂う浮雲は銀盆の光をさえぎるのですが、丘の高楼に月の出を視まもる人は心をときめかせながら、明るい光の輝き出る瞬間を今や遅しと待ちわびるのでございます。それにも似て心はやりながら、捕えがたくて、半ばかく

された文章の意味を極めたいものと、息をもつかず読み耽るのであります。また、英書を読んでおりますと、幼い頃解かれなままに残されていた問題の解答が得られることもありました。ともかく、英書は私にとって、汲めどもつきない喜びの泉であったのでございます。

当時、たやすく翻訳書が手に入っていたら、私は英語の勉強の為にあれ程の根気強さも持たなかったでございましょうし、又進歩もしなかった事でありましょう。その頃ようやく東京の書店には英語、仏語、独語、露語からの翻訳書が後から後から現れかけようとしておりました。そして、科学書以外は原則としてその道の第一流の人々の手になった古典の翻訳でありました。しかしそれらの書物は求めたとは思いますが、なかなか高価で、手に入れることはできませんでした。それで、たどたどしくも原書を読もうとしますと、学校の図書室で借りるよりはかありませんでした。こうして読書は私の最大のたのしみとなりました。英語を除きますと、私は学課の中で歴史を好みました。殊に旧約聖書は一番好きで、熱心に読み耽りました。その表象的な文飾は日本文によく似ており、その中に出てくる英雄の長所も短所もまた日本の古武士と同じに感ぜられま

した。族長政治もまた、わが国の古代のそれと似通い、その政治形態を基礎とした家族制度も日本のそれを描き出したかのような感がありましたので、疑問となっていた句の意味なども外人の教師の説明の方がかえってむずかしいくらいでした。

英文学の勉強中、思えば数多くの珠玉の篇とも感ぜられましたその中で、一番深い印象を彫みつけられましたものは、テニソンの「ドラ」でございました。おそらく、それは末松謙澄氏がこの「ドラ」にヒントを得てあの「谷間の姫百合」という小説を書かれたからかもしれません。「ドラ」という詩は、ある貴族の嗣子が身分の低い娘ドラを恋して勘当の身にまでなつて結婚いたしますが、氏や育ちの違いからまた第二の悲劇を生むという物語で、私どもにはよく判る親しみ深いものであります。そして、この「谷間の姫百合」の著者は、巧みな美しい言葉をかき、この西洋風な生活と思想とを、上手に日本式なものとしてこなしております。

93 学 課
身分の上下を問わず、ひろく日本の青年達が、過去幾代もの間、上流階級の教養の中心となつていた禁慾主義からの解放を求めていました時代に、この「谷間の姫百合」が

出版されましたので、日本中の人気を呼び、畏れ多くも時の皇后様も御心を動かされ給うて一夜まんじりとも遊ばされずこの小説に読み耽らせ給うたとも承るまでの評判な出版物でございました。

又私が女学校の三年生の頃、恋愛文学の波が東京を洗いたたてたように思います。女学生はむやみと夢中になりました。もし誰かが翻訳書でも買おうものなら、それは学校中の生徒の手から手に渡るといふ風でありました。が、大方は英語に悩みながらも、図書室の小説や詩の中から恋愛の場面をぬき出そうとしたものであります。「イノック・アーデン」は私達が好んで読んだものであります。私どもには、妻の貞節と犠牲とを充分に理解できましたので、アニイがあんなに長い間、フィリップの願いを聞き入れなかった事は尤もだと思ひました。が、イノックの誠実と寛大とは余りにかけはなれた思いがいたし、感心しながらも、男らしさが欠けたようにも評しました。

日本の少女の心とても、外国の少女と異なることはありませんが、長い間、殊に武士の家庭では、男女間のことでは、感情よりも義理を重んずることを躰られてまいりました。それで何の指導もなしに、恋愛小説に読み耽っていた私ど

もは、時として、この未知の問題に対してゆがめられた考えを持つこともありました。私の印象では、西洋の書物に描かれた恋愛はおもしろくまた楽しく、時としてはイノック・アーデンの犠牲に見るような美しいものもありました。それは精神の強さや高貴さという点では、親の子に対する恩愛の情とか、主従の間の忠節とかには、較ぶべくもないように思われました。

私自身の信念を言葉に表わさずにはまれば、何の問題も起らなかったのですが、それが明るみに出されるべき運命にあったのです。私どもは時々ごく家庭的な文芸部の集りを生徒間で催し、その席には先生方をお招きすることにしていました。そしておぼつかないながらもおもしろい会にしようという意気込みで、まずプログラムを作り、各々の役をふり当てることにしていました。その結果時には大胆な女学生の手之余のようなことも出てまいるのでありました。割当てられますと、何でも引受けるという規則になっておりました。ところが、ある時、その規則の故に私が大変困ったことがありました。

その時命ぜられたことは、主要な道徳の一つを主題として三頁以内の英語の小論を書くというのでした。至誠、希

望、慈善、仁愛、思慮、忍耐のいずれをとるべきかと迷い迷いました。聖書の時間に、よく先生が「神は愛なり」とおっしゃったことを思い出し、これを基礎として、何か書こうと思いたち、題目を「愛」と決めました。私はまず聖父なる神の愛から始めその後読んだ書物の影響もあって、心配しながらも、歴史や詩に現れた人々の生活に与えた愛の影響などに言い及んでゆきました。けれども、問題をどう扱ってよいものやら、しかとは判らず、三頁も使わないうちに智慧も言葉もつきはててしまいました。ところが、与えられた仕事には忠実でなければならぬということは、私のうちに浸みこんでおりますので、ともかく三頁になるまで書き続け、最後に「愛は劇薬のようなものです。適宜に使われれば、気持よい強壮剤となり、時には寿命をのばすことさえありますが、誤って用いられると、クレオパトラの生涯や、玄宗皇帝の寵をあつめた楊貴妃の如くに、国を亡すことさえあります」と結びました。

この小論を朗読しますと、一人の先生が「これでは冒瀆になりますね」とおっしゃいましたが、この批評の意味がのみこめるようになりましたのは、ずいぶん後のことでした。

暫くは、暇さえあれば英書を読耽っておりましたが、やがて、幼いころから親んだ懐かしい古えの物語を読んでみたいと思うようになりましたので、さっそく母にその由を申し送りました。母は宅の蔵書の中から、特に私が愛読いたしておりました「八大伝」を選んで送って下さいました。この小説は日本で一番長い小説で、美しい絵を入れた和綴の本では一八〇冊もありますので、母は苦心して其頃流行しかけた洋綴で二冊にまとめたものを探して下さいました。受取った私は大喜びでしたが、ある日、見廻りの先生が私の本棚のこの本に気づかれ、為にならないからおっしゃって、とりあげておしまいになりました。その頃の女学校の寄宿舎はなかなか清教徒流でありました。

十九世紀に滝沢馬琴によって著わされた「南総里見八犬伝」のあの韻律的な素晴らしい文章の調子、私は今まで読んだ書物の中で一番貴く思われたものであります。

あの里見義実が敵の重囲に悩んでいるとき、忠犬「八房」に助けられ、約束を重んじてその最も愛しむ伏姫を与え、それから八犬士の現れる物語は、支那の小説などに暗示を得たものでありましようが、その舞台の雄大なことや文章の雄渾なこと、量において質において、たしかに世界

的な文学と申せましよう。ことに著者馬琴がその執筆中に盲目となったことなど思いあわせて「失楽園」を書いたミルトンにも較べられるような気がいたします。

私は仁義礼智信等八つの徳を象徴する八犬士の伝奇的な物語がいけないといわれ、英文学でたびたび読んだ、動物を人間化した寓話や童話をよしとされるわけが、どうしても理解できませんでした。長い間いろいろ考えた末、思想も言語と同様に、ある国では率直で平明であり、他の国では、漠然と神秘的、夢幻的であるということに思い至りました。

卒業前に、あの大切な「八大伝」は私の手許に帰って参りました。今では紙も破れ、綴糸も切れてしまいました。私の手許において愛読しております。

月日を重ねるにつれて、学校に関係のあることといえば、何でも——初めは嫌いだったことまでも、みな好ましくなりました。その中でも、最初から、心の底から気に入っていたことがありました。校舎をとりまく土地は広く、あちらこちらには、亭々とそびえたつ樹木が立っていました。正面玄関近くの小さい芝生はよく手入れがしてありましたが、その先は広々として、日本庭式な石燈籠もなく、鯉を

放った池もなく、太鼓橋もなく、唯大きな木が伸び放題に枝をひろげ、雑草が茂るにまかせてありました。

故郷の家の庭にも、箒も入れぬところがありました。樹木といえば、吹きさらしの山の松のように枝が曲りくねっており、松葉の散り敷いた中に、飛石が不規則に並び、垣に植えた杉は割竹の間にのぞき、枝折戸は柴を荒縄で結えただけのものでありました。けれども、いつも誰かが、松や生垣の手入を怠らず、毎朝、爺やは踏石を洗い、新しくかき集めた松葉を持って来て敷くのです。ですから、家の庭では、絶えず荒びないように心がけていたのですが、学校のは全くこれと違い、何もかも自由自在に、清新の気に充ち満ちていました。今までの生活と正反対のこの生活を、庭木に見るようにも思い、私はその幸福を心ゆくまで味わうと同時に、人の心の中にもこんな幸福があることを思っています。生々とした気持ちにみだされました。その時の校長先生の思いつきで広い運動場の一部を、小さく区切って、生徒に一区劃ずつ受持させ、好みによって何でも花の種子を買って下さいました。たしか西洋花の種子もあったと憶えておられます。これがまた新しい楽しみでありました。すくすくと自由のびた木々や、茫々と茂りあった雑草に心ひかれ

ていた私は、この新しい土を与えられて、個人の權威というようなものを感じました。伝統を破ることもなく、家名をけがすこともなく、親や師の心をいためることもなく、世界中の何ものをも損うことなく、私は自由自在に行動できるものでありました。それで私はお友達のように、きゃしゃな竹垣をめぐらさず、台所へ廻って料理番のお婆さんから焚木の枯枝を貰って来て、ひなびた垣根を作り、そこに植えたものも花ではなく、馬鈴薯でありました。

こんな途方もない行動が与えた自由奔放な感じと、その結果がどのようなものであったかは誰知るよしもないことです。唯、私の魂の束縛を解き、立って耳を傾けますと、野に生うる木や草の如き自然な笑いと儀式ばらない動作、率直な言葉や表裏なき思いの不思議に錯綜したところから、自由の精神は、私の心の扉を叩くのです。

十五 受 洗

故郷の家では、ずいぶん可愛がられて、育てられました。が、私の胸の中には、いつも、解けがたい疑問が一杯でした。尼としての教育をさずけられてとかく理窟ぼくなりましたが、それでいて私は窮屈におし黙るようになりました。父自身は私の教育について自由な考えを持っていましたが、私自身は、家庭内の保守的な空気に染み、父にさえ、心の奥底にある思いを打明けることはできませんでした。

けれども、時々はこの遠慮深さも破られることがありました。かつて、ご先祖さまの三百年忌を終えたすぐ後、私は父に向かって尋ねました。

「お父さま、家のご先祖さまの一等初めの方はどなたですか」

受 父は真面目な顔で答えました。

「エツ坊や、そういうゆき過ぎたことを訊くものではないよ、正直に答えるが、お父さまにも判らない。孔子さまも

お弟子がちょうどそれに似た質問をした時『未だ生を知らず』とお答えなされたのだよ」

私はその頃、まだ幼のうございましたが、これからは、物を探ねるにも、控えめに女らしくして、男の子のように無遠慮な訊き方をしてはならないと、しみじみ思わされたのでした。

ところが、東京の学校の感化は微妙なもので、私の心は知らず識らずのうちに成長し、やがて、質問することは進歩の第一歩であるということを知ることになりました。そして、生れて初めて、心の中に秘めてきたいろいろの思いを言葉に表現してみようと、自ら企てるようになり、家庭の母姉のような先生方によって、やさしく育まれてゆきました。時を経るにつれて、先生方が、女としては珍しく賢明な方々でいられるという信念を強め、同時に先生方への信頼の情も強まるばかりでありました。そればかりではなく、先生方は、たくまずして人を幸福になされるのだと判りました時、私の将来に対する考えは、すっかり変わってしまいました。私として幼い頃は幸福に過して参りましたが、そこには歓喜とでも名づけたいような心ときめきはありませんでした。いわば夜空をゆく満月を仰いで、日本人ら

しい詩的な恍惚境にひとりながら、同時に「今夜からあの月は欠けてゆく」という思いが、影のように心の中に浮び上ってくるのでありました。お花見に出かけることは、楽しみでありましたが、帰りかけると「あの花も夜半の嵐に散りはててしまう」のかと、溜息を吐くのでありました。何事もこのような調子で、喜びのさ中に、心はしらずしらず悲しみの糸をたぐりよせているのでありました。こういう心の傾向は、おそらく、私が幼い頃にうけた仏教の感化に原因しているのをごさいます。仏教思想の中には、いつも一種の哀感が流れているように思われます。

ところが、女学生生活に入った私は、健かな明るさの息吹を胸一杯に呼吸するようになり、万力の如くに私を捕えていた束縛はゆるみ、うちにたれこめていた憂鬱も消えてゆきました。が考えてみますと、そうならざるを得なかったのをごさいます。先生方は勉強なごさでも、お遊びになつても、お笑いになつても、お怒りになつても、私はその表情の豊かさに驚くばかりでした。私の幼時の思い出の中にある人々は表情に欠けておりました。郷里では滅多に驚くということはありませんでした。人々はお辞儀をし、歩き、話し、笑み交すのですが、そのお辞儀も歩行も話も笑いも、

昨日と今日と何の変るところもなく、一昨日とも、否、遠い昔とも変らないのをごさいます。けれども、先生方は、不思議なことに、いつも同じことがなく、相手によって、その態度も声音も、変化に富んでいらっしやるので、その気持よい変わり方が私の心を捕えてしまい、先生方は桜の花のようなお方だと思ったりいたしました。

日本人は花をめぐるにも、その花のもつ意味を考えての故です。幼い頃から、早春の雪を凌いで咲く梅の花は、困難にも耐える花嫁を象徴するものと教えられていました。桜の花は美しく、しかも萎れることのない花でありました。ほんのそよ風にも、まだ香ばしい花弁を散らして、色美しい浮雲の眺めを添え、地面に散り敷いては、白とうす紅の桜貝の敷物にも似ていました。これこそ、いつも変化のある美しい先生方に似ていると思つたのでありました。

そのような比較をしながら両者の特色をいろいろと思ひ較べるのでありました。そのいづれを学ぶべきかについて見極めを得るにはずいぶん時を要しました。私の心の中では無言の質問が幾度も繰返されたことでありました。

子どもの頃から、女が男に劣っているということは強く教え込まれていました。そして、それは運命と思つていま

したから、疑つたごさでもありませんでした。けれども年を重ねるにつれて罪もない人に不幸が重なって困つていられることをたびたび見るにつけて、子どもの粗雑な考え方にはありましたが、冷酷な運命という大きな力について、思い惑うようになり、ついに、私の心は、これに向つて淡いながら反抗に近い気持をもつようになりました。

御維新前からの悲哀の打続いた後、母は喘息に悩まされておりました。私も一家のものはこれが前世の罪業によるものと信じきつておりました。ある時、母は息の根も止まるかと思われる程に咳きこんだあとで「これもさだめですもの、辛抱しなければなりません」と申したので聞きました。私はすぐにいしのところへ駈けて行って、どうして運命はお母さまを苦しめるのかと、尋ねました。

すると、いしは、眼に涙を浮べて申しました。
「それはいたし方ごさいませぬ。女は罪障の深いものごさいますからね。でもエツ坊さま、そんなごさをおしやるものじゃごさいませぬ。奥さまはちよつともおこぼしになりはしません。黙つてご辛抱なされるのをごさいます」

幼い私には、その意味がよくはのみこめませんでした。不思議なわけのわからぬ力に反抗して、心は燃え上り、体

をいしに膝に押しつければならしがみついて、火花を散らす刀や、むれとぶ矢、戦つて勝つ英雄のお話を早く聞かせてと、せがみたてました。

たとえ面に出さなくとも、反抗心を抱くということすら、神々に対する罪を犯すことになるのだとは教えられていなかったのですから、私の不満はいよいよつのるばかりでございました。けれども、それにつれて、私の心の中には、一つの何ともいえない驚異の念が湧いて、怪しく乱れあうのでした。それは、母もいしも、自分の咎でもなくて、困難に出あうと、女故に当然のこととして、挫けることなく、真面目に受けるばかりでなく、誇らかにさえ見えるのはどういうわけでありましょうか、それが不思議でなりませんでした。

もちろん、当時、そのような事についてはっきりした批判は持たなかったのですが、その頃からひきつづき数年の間運命——私は運命というものを信じていました——とは漠とした、異常な力であると思ひ、これに対しては唯、熱いふかりを感じていました。

年に一度の土用の虫干の日に、又、一つの疑問がわきました。一年中でも虫干の日は暢気な面白い日でありました

から、こんな疑問が起ったのが不思議な気さえいたします。この日には土蔵の中のもの、みな持出し、日当りに張りめぐらした綱には、家の紋のついた、破れかかった旗印や、ご先祖さまが出陣のおり使われた陣幕や、家の宝器や、いしが「昔、昔」といっては話してくれたお伽噺に出てくるような、奇妙な型の衣類などが打ちかけてありました。軒下には色褪せた絹紐など結えつけてある馬具が積重ねてあり、槍、劍、弓矢、籠などは庭の隅に立てかけてありました。橋柱や石燈籠にまで、鎧や兜をかけ、庭中のこるくまなく、道具がひろげてありました。

この混雑が嬉しくて、私は虫干が好きでした。父は私を連れて歩き廻りながら、いろいろのものを見せては、使い方など説明して下さいましたが、やがて体も汗ばみ、陽に照らされて眼もくらむようになりすと、家に入り、乱雑な廊下をぬけて、祖母のお部屋へ参りました。家中で、ここばかりは虫干の日でもきちんと片づいていました。召使達はおしゃべりしながら埃を払っては畳んであちこちと物を運んだりしていました。平素余り単調な私の家では、こんな忙しい日が、かえって気晴しになるのか、召使達もこの虫干を楽しみにしていました。

父と一緒に祖母の部屋に入って、静かな冷い空気に触れますと、混雑の一切を忘れてしまいました。父がほっとして溜息を吐きながら、後手に障子を閉め、すすめられた座蒲団を押しやって、祖母に挨拶いたし、野趣に富んだ庭を見晴らす縁近く、冷い青畳の上に坐られた様子を、今も眼の前に見るような気がいたします。父は団扇を使いながら、そこで祖母と昔語りをするのでした。

虫干の日のおきまりのあつい鯨汗とお茄子で昼食を終えました後、父は真直ぐ自分の部屋へ帰りました。私は父のあとを追いつながら、肩布を着た爺やと下男がお土蔵を出て庭をこちらへ歩いて来るのを見ました。二人は、お寺の経箱のような白木の櫃を大切そうに持っていました。その櫃の前方には黒々と大きな家の定紋が打っており、注連縄がはりめぐらしてありました。私はこの櫃がお土蔵の中の白木の台の上に載せてあったのを、何度も見たことがありました。その中には三百年来の先祖伝来の家の宝が入っていました。前もって母が用意した部屋にそれを持ちこみ肩布をつけた男だけで、静かにその中の品をあらためるのではありません。

やがて、父も袴姿でその部屋に入りますと、夕方までは、

もうお目にかかれなれど知って、私はお縁側の端の方にぼんやり坐っております。虫干の日には、父のゆく処へは、どこへでもついて廻るのでしたが、その部屋へだけは、一歩も踏み入ることを許されませんでした。いつも、そういうことになっていましたので、別にそれを不思議なこととも思いませんでした。

ところが、一人でお縁側に坐っていた私は、そこはかたなく考え始め、暫くすると急に立上っていしのところへ急ぎました。

「いし、お父さまと一緒、どこへでも行けるのに、どうして、あのお宝ものを調べるところへだけは行けないのですか」と尋ねました。

いしは古風な香炉箱の長い総をふり出しながら、調子も重々しく答えました。「それは、エツ坊さまが女の子にお生れになったからでございます」

いしに叱られたように思って、私は、日本の女のうちに代々流れている忍従を心の中にしかと抱いて、そろそろと祖母の部屋の方へ参りました。家中の者が、父でさえ、尊敬している祖母と何かお話しすれば、私の心は慰められるのでした。と、不意に、この家中の尊敬をうけている祖

母でさえこの家宝には手を触れることさえできないのだという考えが、一陣の寒風のように私の心をかすめました。又祖母はお仏壇のお世話はいたしましたが、神様をお祀りする神棚のことになると、いつも父の手でなされたものでありました。父がいけないときは爺やか下男が代り、女は穢れたものとして手を触れることもできませんでした。それですのに神様の中で一番尊まれる神様は女神にいましたことは不思議でなりませんでした。

その夜、私は思いきって父にむかって祖母でもほかの女と同じように、穢れた人かと、お尋ねしました。

「どうしてまたそんなことを考えるのかね」と、父はためらいがちに訊き返しました。

「でも、お父さまはあんなに大事にしてお上げになるので、私も、そんなはずはないでしょう」

父は微笑して、やさしく私の頭を撫でて申しました。

「エツ坊や、そうだよ。そういう風に考えればいいんだよ、けれど、小さい時から教えられた女の道ということ忘れてはなりません。あの教えこそ、何代も何代も時がたつ中にお祖母さまのような立派な婦人を造ってくれたものなのだよ」

それから幾年たったことでしょうか、私も次第にものが解るようになってから、父の言葉の隠れた意味がようやくのみこめるようになり、女とても、女の道を失いさえしなければ、心の中に毅然たる思いを抱いていてもよいのだと思ひ当りました。こんなことを思いついた夜、私は日記に次のようなことを書きつけました。「徒らなる犠牲に甘んじては、唯溜息が出るばかりであり、自重は自由と希望に通ずるものである」

私もその学校では校門を出ますと田圃や畑で、その間に小径がつづき、向うにちらほら農家も見えていました。天気の好い日には折り折り先生につれられて田舎道に散歩へ出かけました。丁度春も浅く田植前でありましたので、私もは、水のかれた田の面にれんげそらがしげりあっている処へ出ました。花を摘みながらおしゃべりしたり笑い合ったりしていますと、通りかかったお百姓さんは物珍しそりに私達を見ていましたが、一人が、

「これはまあ、どういうこった。働けば働ける女の子が、草っ原をぶらついてあそんでいるがな」といえば、他の一人が、

「蝗が山へ登ろうってんだよ。お天道さまがお怒りなさっ

て、焦しておしまいになるわの、こんな娘を嫁にもろうたら、災難だあね」というのでした。

この人達は素朴で文字を知らぬ農夫に違いないのですが、ともかく男の人でした。私達は顔では笑っていましたが、女としての母の生活を見て知っていますので、歩いて帰る途々誰もかれも、多少心が重くなりました。

八幡宮の苔むした玉垣のところ、先生は立停つて、葉のよく茂つた桜の若木を指し示されました。見れば、その若木は古い朽ちた大木の洞から生え出た葉で、もと木は曲りくねつてまるで竜のような形をしていました。その傍の立札には、

「千年の老樹の根から若桜」

の一句が読まれました。

先生は微笑みながらおっしゃいました。

「この桜の木は丁度あなたの方のようなものです。古い日本の立派な文明は今の若いあなた方に力を与えているのです。ですから、あなた方は勢よく大きくなって、昔の日本が持っていたよりも、もっと大きい力と美しさを、今の日本にお返ししなければなりません。これを忘れないようになさいね」

皆、家路をさして急ぎました。生垣の門まで辿りついた時、平素は割合に無口なお友達が、私の方へ向いて、声の調子も強く申しました。

「でも、蝗は陽に照らされながら、山を登るのじゃなくって」

私は、女の尊さを悟るにつれ、自由を愛し自由に向って進む権利を信じていたのは若い頃のこと、真の自由は、行動や言語や思想の自由を遙かにこえて発展しようとする精神的な力にあるのだということが判りました。

さて私がどうして基督教信者になりましたのか、その動機ははっきり判りませんが、それは突然起つた変化ではありませんでした。私の精神の自然の発達に伴って起つたことであろうと思います。ですから、今過去を振り返ってみても、はっきりした疑問というものは、ほんの一、二を数えるのみでございます。読書をしたり、考えたり、感じたりしていますうちに、私の魂は未知の世界にのびてゆき、ゆるやかに、なめらかに、殆んど意識しないうちに、哲理や神秘や諦めの信仰を離れて、自由と快活と希望との高い理想の世界にとけこんで行つたのです。

私の信ずるこの世の最大の信仰の力や栄光について語ろうとは思いません、どなたもご存知のことですから。唯、私のうけた恩恵は、世界中の言葉をもつてしても、到底現わしきれないものでありましょう。

私がこの学校へ入る時、この先生方が異つた宗教の方だということは誰も思いつかず、唯、アメリカの言語や習慣を教えて下さる先生方と考えていました。ですから、私がキリスト教信者になるについて、許しを乞う手紙を差出しました時、母は大変びっくりいたしましたろうと思います。けれども母は思慮深い人でありましたから「これはゆゆしきことがらにて候えば、休暇のお帰りを待ちて、とくとご相談いたす方よろしきかと存じ候」という返事を下さいました。

それで、受洗をのびし、休暇になりますと帰省いたしました。故郷の親戚達はキリスト教については何も知りませんでした。大抵の人は、キリスト教と申せば儀式もない奇妙な宗教で、信者になると、踏絵を踏まなければならぬものぐらいに思っているばかりでした。殊に、老人の間では、単に邪教とばかりよんで毛嫌いが強うございましたが、それかといって、別に激しい憎悪を感じていたというわけ

でもありませんでした。この人達はあの恐しい十六世紀に於ける南の国の殉教者のことは、どこか遠い処の哀れなお話ぐらいにしか思っていないでせう。九州の人達は四百年前のなまなましい悲劇をまだ脳裡に刻みつけていた事でございますが、ここではそんな身の毛のよだつような恐怖の念は微塵もありませんでした。

他人の意見には寛容であつた父の傍にいて、母もその態度を学んでいたことでしょうか、新宗教に対して偏見を持つということはありませんでした。けれども、母は男も女も、なべて人の子の生涯のつとめは、ご先祖様を崇め亡きご先祖への供養を固く守るべきことを信じておりました。私が帰りました当座、母の心は重く、思い悩んでいましたが、キリスト教が祖先をないがしろにするものでないことを知って安心し、喜んだ様子は、見る目にも涙ぐましいばかりでありました。そして母はすぐに受洗を承諾いたしました。

けれどもお祖母さまは！ 忠実一筋の誇を持った祖母は私の心情を理解しては下さいませんでしたし、私が異教徒になる事は、祖母の生涯の悲しみになるのかと思ひますと、この祖母の憂こそ、私の負うべき重い十字架だったので

ございます。

又、親戚やお友達を訪ねるのも辛うございました。誰も彼も、異様な眼で私を見ますので、母がいつも傍についていて説明したり、弁解したりいたしました。年とつた一人の叔母など仏前に私の変わった様子を見せまいとして、いきなりお仏壇の扉にめばりをしたりいたしました。

また、他の叔母は、私を食事に招きながら、私があたりまえの生活から離れてしまったので普通の食事ではいけないと思ひましてかお魚は一切お膳に載せませんでした。この叔母は、あれこれ考えた末、尼として扱うのが、一番無難で、敬意を払つたことになるだろうと考えたのでした。

けれども、幼い頃から親しみあつてきたお友達から親しみのない除け者扱いを受けた時には胸もつぶれる思いでございました。虐待されることなら雄々しく耐えたでしょうが、変人扱いされることは辛いことではございました。そんな時、どれほど父を懐しんだことでありましょう！ 父ならば判つたでしょうが、私は、親切ながら無理解な人々の間に、一人さびしく立つておりました。誰も彼も私を可愛がっては下さいましたが、憫みの目で私を眺めているのでした。

初めのうちは不愉快でありましたが、三カ月も家にいる間に北越の氷が春日に解ける様に、周囲の人々の心のむすびもとけ、学校へ帰る時には故郷の人の旧の友情を身にもどし———あるがたいことに———今日が日まで、変わることも過してまいりました。

私は自分では真のキリスト教信者であると固く信じております。少くも、私の信仰は私にいいがたい慰めと平安とを与えてくれました。が、さりとて、昔の仏教信者の友から、私をひき離れたことはありませんでした。私はキリストの父なる神にまことを捧げると同時に、祖先を敬い故郷の友が最高にして至聖なるものと信じている信仰をも尊敬しております故に、故郷の友もまたこの奇妙な私の信仰をもあがめかつ尊んでくれるのでございます。

十六 渡 米

東京から故郷北越への道路は年々急激な速度で開かれ、夏休暇毎に帰省することができるようになりました。この夏休暇は楽しいうちにも、一つの苦の種子たねでありました。その時分の事として、都の女学生はとかく他人眼たにまなには女学生ぶりに映つたのでございましょう。仲好しの幼な友達にまで敬遠され、辛い思いをいたしました。一体、故郷の人々は朴訥なうちにも、情もこまやかで真実でありましたが、一面また頑固なところもありましたので、休暇に帰省する度に、私は同じ経験を繰返し、前の年に努めて人々の胸に残した印象などは跡かたもなく消え果て、又、出直さなければなりません。お友達は皆私を好いてくれましたけれど、私の信仰に対しても幾らか譲歩してくれましたけれども、やはり私が変わり者で、他人と違って見えるのを喜んでるのだとばかり思っていたようであります。ですから、私はまたしても固苦しい相手の態度に適わせ、妙な遠慮が

ほぐれてゆくのを静かに待って、やっと温い真心に触れることができました。こうして古い生活に落着いたと思うと、今度はもう、アメリカ行きの準備にとりまぎれる有様でございました。

日本の結婚は一族一家の問題ですから、祝いの品としても家から家へ祝うのであります。それで方々の家から、お祝にと、鶴や鴛鴦の形の紅白のお餅が届けられたり、遠い親戚や昔の家の家来達や出入のもの、遠くに家を持つ古い召使達までも、手製の絹地や紅白の真綿など贈ってくれました。

こんな贈物はアメリカの生活には不向きなものばかりでしたが、その真心が胸を打つのでした。またおよばれもたびたびありました——たいていは親戚に招かれるのでしたが、私はいつも母と一緒に上座に坐り、お赤飯におかしらつきの鯛、それにお吸物をつけて七色か九色か十一色のお野菜の料理をふるまわれました。

こうして、静かな中にも、何かとあわただしい日を過しておりましたが、当時東京に住んでいました兄も帰り、出発までの数週間を一緒に長岡の家で過してくる事になりました。兄が帰って帰りました松雄の手紙は奇蹟とも思わ

れる音信をもたらしました。それは親切なアメリカ婦人で

明治二十年に日本へ観光に来られ、その後日本理解者として知られる名家の方があり、その方が私の知人の日本の女学生の親友である関係から、私がアメリカへつくと親代りとなり自分の娘分として、結婚式もそのお宅で挙げるようにとおっしゃったと書いてありました。この手紙を読み終った母の眼にうれし涙のかけを見て、私も思わず涙ぐんできました。思えば、松雄がアメリカに永住する決心をした事を知らせて来てよりこの方、母は胸の奥深くにたたく心配し続けていたのです。母からみれば家風を仕込んで下さるはずの姑も姉姑もない家に嫁ぐというのでは、娘の将来が心配なのでした。けれども、このありがたい便りで見も知らぬ異国の方ながら、思い遣り深い、心からの歓迎のささやきにめぐりあうた気持ちでしたし、殊にこの方が名家の夫人でしたので、母は安心したのでしよう、手紙をおし頂いて、感謝をこめて誰にもなくお辞儀をいたしました。が、一言も何も申しませんでしたので、傍にいた私どももこのもの静かな母の素振のかけに、数年間の心遣いを流し去る程の大きな安堵の波が押しよせていたとは、思ってもかけないことでした。その夜私がふと仏間の前を通り

かかりますと、内から頻りとお香のにおいが流れておりました。見れば、仏壇の扉は開け放たれ、松雄の手紙が供えてあり、お香の煙を前にした母の姿をみたのでした。

兄は私の支度の品を見て、面に不満の色をみせて申しました。

「日本に住む花嫁なら、これも結構ですが、エツ坊には無用ですね。第一こんな定紋つきの雑道具なんか——松雄は商人ですから、こんな不必要なものにずいぶん税金も払わされるでしょう、ともかくこんなものは、あちらじゃ生きた白象で厄介ですよ」

こんなことを話しましても、初めのうちは、祖母も母も黙っておりましたが、とうとう、ある日、母はやさしい中にも、きっぱりと反対いたしました。

「そりゃ、役に立たないかも知れませんが、ともかく、今、エツ坊は日本の花嫁で、この家を出ようというところですから、できるだけ家の習慣通りに支度をして送り出すのが、私のつとめだと思っています。ですからこんな風にするのです」

兄はぶつぶつ不服も申しましたが、家内のことは女の手にあったのですから、支度は習慣通りに運びました。けれ

ども、時には母もアメリカのことをよく知っている兄の意見に従うこともあり、絹地や鶴亀その他おめでたいものの形に作ったものなどは姉や親戚のものに与え、お雛さまも家へ残すことにいたしました。

衣裳のことは仲々重大な問題となり、親族会議を開いたりました。兄の意見は旧弊な古老達には途方もないものに思われましたが、皆正直なかつ控え目な人ばかりで、あて推量で物をいうこともなく、また実際の意見を述べる程の知識も持ち合わせていませんでした。それで、まともらずにいましたところへ、いつも親類中で信望のあつた東京の叔父は、アメリカの服装を賞めて、兄の意見の肩を持ってしまいました。

「欧米人の間では、肌を出すのは大変な無作法とされているので、男でさえ、高いカラーや固いカフスをつけているのだから日本服のように袷元をつけて、裾の狭いのは、あちらで着るにはまずくはないかね」

誰も外国の衣裳を知っている者はありませんので、この意見はかなり強く響いたものでした。母は心配そうに見えましたが、祖母の自尊心と先祖に対するほこりとは傷つけられ、かりたてられたのでした。祖母にとって、神国日本

の風俗は批評を許されないものとなっていましたので、極めて物静かな口調の中にも、威厳をこめて申されました。

「絵で見ると、あの筒っぽ袖は品が悪くて、まるで人足着る半被のようですが、私の孫が人足を真似るまでになる時節が来たかと思えば、情ないことすわい」

この席で、祖母は一番尊敬されていた人ですから、その意見はすぐに取上げられ、結局洋服はあちらへ行つてから夫の意のままにすることとし、当方では日本服ばかりを用意することになりました。

東京の叔父の商売仲間の英人ホームズ一家がアメリカ経由で帰国なさることになっていましたので、私がその一行のお世話になるように、兄が取計らってくれました。

何もかも支度がととのい、暇乞いも終り、いよいよ出発の日になりました。私はまた兄と一緒に東京へ向けて出かけましたが、この旅行では「陸蒸気」はこの山国の長岡にも通じていましたので、先年の八日路の旅は十八時間に縮められていました。車中では、二人とも口数少くしていましたが、大きな停車場へ着くと車外に出て、気分を変えたりいたしました。高崎駅でプラットフォームに出て歩いてから、席に落着きますと、兄はまじめさを装うた顔付です

ぐに窓から覗いていましたので、

「どうしたのですか」と尋ねますと、昔ながらの眼差を見せ、

「また下駄を脱いで来たのじゃないかと思つてね」と申すのでした。

これを聞くと、二人で声をそろえて笑いましたが、その後の三時間の旅は、思い出しても楽しい旅でした。

東京へ着くと、またご馳走になるやら、たくさんの美しい贈物を頂くやら、礼儀正しいお辞儀のかげに心のときめきをかくして、お別れの言葉を交し、とうとう、大きな汽船の甲板に立っている自分を見出しました。傍には兄がおり、見下す海面には、最後の見送人に乗せてゆく小蒸汽が待っていました。

三度目の銅羅が長くひびきわたると、私は妙に咽喉のつまる心地で、低く頭を垂れました。兄は耳もと近くで、常にもなく優しい声で、

「エツ坊、役にも立たない兄だったがお前の兄思いだけは一生忘れぬよ」と申しました。

兄の影がお辞儀をするのを見て、頭を上げますと、兄はや人群に交つて、船梯子を下りながら、頭を高くあげ、

笑顔でホームズ氏に別れの言葉を叫んでいました。

二三日経つと船路は穩かになりましたが、余りお丈夫でないホームズ夫人はずつとご病気で女中さんが赤ちゃんのお世話で忙しうでありました。それで、私は一人で甲板に出て静かに海面を眺めたり、お別れに頂いた雑誌など読んでおりました。ホームズ氏は大変親切な行届いた方でしたが、男の人に馴れない私はいつも余り口を利きませんでしたので、日本人をよく知つていられた氏は判つて下さつたらしく、二日目からは、私がデッキチエアーに気持よきそうにおさまっているのをご覧になると、そつと席をはずして下さり、隣の椅子に果物やお茶をおいて行って下さることもたびたびございました。

私が日本の着物を着て、日本の雑誌を読んでいたものですから、船客はみな、英語が判らないと思つたらしく、私の聞える処で、日本のことや私のことをよく話していました。皆、よきそうな人でしたが、私に聞かせようとも思つていないことを、聞いては失礼と思ひ、ある朝、英語の本を持って甲板に出て読んでいましたら、通りがかりの婦人が立停つて、

「英語がお判りになるんですね」と愛想よく声をかけて

ちよつと話して行きました。この人がいいふらしたので

しょう、それからは「だんまりの小さい日本娘」のことをかれこれと話合わなくなつたばかりか、時には、私に話しかける婦人さえありました。食卓では私の席はホームズ夫人のお隣りでした。夫人は減多に食堂へお出になりませんでしたから、外の船客が夫人に代つて何かと気をつけていて下さりましたので、別にさびしいとも思いませんでした。船客の間には、自由な動作と快活な会話があふれていて、まるで潮風のさわやかさを思わせるのでした。誰彼の別なく「お早う」と声をかけ合うのも親しうに見えました。ある日、美しく身づくろいした婦人が「ほら、いいお天気じゃありませんか、ご一緒に運動しましょう」と楽しく声をかけますと、二人は歩調もきびきびと歩き出すのを見ました。お辞儀もせず、儀式ばつた言葉も交わさず、すべてが自由で親しみにあふれておりました。作法も何もないような態度には驚きましたが大変興味深く、何か心ひかれる思いが致しました。

また、周囲の外国人の服装を面白く眺めておりました。

叔父が日本服の衿あしを見せた着方や、裾の狭いことを批評されたのを聞きました時から、心ひそかに、心配もして

いましたので、五六十人のアメリカ婦人にたちまじって、唯一人の日本婦人の私は、少なからず責任を感じておりました。少女らしい恥らいやら、愛国心やらで衿を頸の下まづめてしっかりあわせたり、狭い裾に気付かれまいとして、できるだけ腰かけるようにつとめました。

横浜を出て暫くの間は、お天気が悪く、甲板に出る婦人は少のうございしましたが、やがて散歩をする人も増して、賢明な叔父の意見が必ずしも正しくない様に思うようになりました。と申しますのは、ある夜甲板で催されたダンスを見て、すっかり叔父の言分を信用しなくなりまして。なるほど、男の人は高いカラーや固いカフスをつけていますが、婦人達の服装は決して衿がつまっておりませんでした。紗や、うすいレースをまとった腰のあたりは上品ではなく、衿あしを見せた着物よりもむしろ肌をあらわした服装を見まして下品だと思ったり致しました。もとより夏のあつい台所で働く日本の女中が片肌ぬいでいるのや、乳をふくませている女を街で見かけたこともありまして、湯殿で裸体の女を見たこともありまして、わざわざ人に見せようとして、肌を出している女の人を見たのは、この夜、この船の上で初めてのことでありました。暫くはまごついた様

子を隠して、努めてとりすましていましたが、遂には恥しさに、両頬が燃えるばかりになりましたので、そっとぬけ出て船室のベッドに入り目指すアメリカの文化とはまたたく奇妙なものではないかと、訝ったりいたしました。

こんなことを書いて、別に批評しているわけではありません。今はこの国に住みついて、私もすっかり変りましたので、微笑ましい気持で、最初の印象を顧みております。どこの国の習慣も、馴れない眼には奇妙に見えるものです。ここの生活を通して、私が一番面白く思っている不思議の一つは、私の心が徐々にではありましたが、避け難い力に押されて進展してきたことでもあります。今では晩餐会やダンスにも出かけて、夜会服を召した方々を好ましい気持で眺めています。私には美しい絵のようにさえ思われ、慇懃な紳士とつれだつて歩いたり、華かな音楽にあわせて、ダンスをする婦人が、海の向うの祖国のしとやかな、言葉少い婦人同様、無邪気な心やさしい人であるということも知っております。

桑港では珍しい経験もし、まごついてしまいました。が、何もかも新しいこととて、嬉しくもありました。パレスホテルの廊下で小さい部屋に入ったと思うと、その部屋が動

き出してどんどん昇り、止ったところは大きな部屋で、まるで山頂のように、眺望の利くところでした。滑かな白い浴槽は、薪もないのに、じきにお湯が出てきます。日本にいた頃には銃などかけたこともありませんでした。ここでは、どこにでも戸には銃がかかっていました。何もかも大きいので、驚いていました上に、こうした数々の珍しいことばかりに出くわして、圧倒されそうでした。

街幅は広く、建物は高く、人は大きく、すべてが際立って大きい感じでしたが、これはホテルの中でも同じことでありました。天井が高く、家具が大きく、椅子は高く、ソファは幅が広くてよりかかりがずつと後の方についていました。何もかも巨人のために造られたという感じでしたが、それもそのはず、アメリカ人というのは、束縛もうけず、長所も短所も大きくて眼につき易く、身体は大きく、財布も豊かで、心は広く強く、仲々自由で、まことに豁達な国民でした。この印象は最後まで変りませんでした。

桑港にはほんの二三日滞在しただけでしたが、唯忙しうに、騒がしく、もの珍しいばかりでありましたので、私の頭は半分麻痺してしまい、先のことを考えてみることもできなくなりました。その頃一つの出来事が起りました。

それは大変単純な家庭的な事柄でしたので、この不思議な桑港の思い出の中に、一きわくつきりと、浮び上っております。白髪のやさしい老教師が、日本にいたことがあるといて、私を訪ねて下さいました。挨拶を交した後、その方は思いがけない白い折箱を手渡して下さいました。

「長旅をなさったのですから、お国のものは、ちょっとしたもので、お気に召すでしょう。あけてごらん下さい」といわれ、蓋をとってみますと、美味しそうな日本料理が入っているではございませんか。アメリカへ行っても、日本料理は食べられると、兄から聞いたのもさして以前のことではなかったのですが、その時は別に気にもとめていませんでしたので、この時は余りのことに驚いてしまいました。

感謝をこめて見上げたその童顔に、剽軽な眼差しとおやさしい微笑を見ますと、周囲の奇異な感じは消え去って、初めて故郷こいしい思いが胸に迫るのであります。ずつと以前、父が亡くなってまもなく、いしに連れられて、五百羅漢のあるお寺へまいった事がありました。どの仏さまも、やさしく、平和に満ちた静かなお顔に拝まれ、さびしい私の心は、その中に、仏となった父を求めて探し歩いた

のでございました。激しい憧れの心は、ふとしたことにも自分の心の反映を見出すものだというようなことを、当時の私は知りませんでした。やさしい中にも威厳をそなえて、笑みを含んだお顔を見ました時、これこそ父の魂のあらわれと思ひ満足したことがあります。が、この時も、この御老人のお顔の蔭に、在りし日の父の面影を見たのであります。見も知らぬ異国——それは、懐しい故国と同じように、私の心に深いつながりを持つ国になったのでしたが——に着いた私を、最初に歓迎してくれたものが、あの微笑でありましたことは、思い出しても嬉しゅうございます。

大陸横断の長い汽車の旅では、子供の頃に大好きだった廻燈籠を思いつづけておりました。すばやく移りかわる窓外の景色は、廻燈籠の絵にも似て捉えがたいだけに美しいものに思われました。

ホームズ氏夫妻は、私の未来の家に近い大都市まで送り届けて下さり、そこで夫人のお友達的女教師の手に私をゆだねて下さいました。その時お別れしてから、お二人は永久に私の視野から消えておしまいになりましたが、お二人のことを思い出している、あのご親切と深い思いやりのお心

とが身にしみて、嬉しゅうございます。

汽車が目的地の薄暗い駅の構内に滑りこみますと、私はもの珍しそうに窓の外を眺めていましたが、ちょっと心配していませんでした。いつでも誰かのお世話をうけてきた私は、見も知らぬ人に会うことも気がかりではなかったのです。混雑したプラットフォームに、真直に立って汽車から出る人を熱心に見守っている日本人の青年を見つけました。それが松雄でした。ねずみの服に麦藁帽子を被った松雄は、その顔を除けば、近代的なアメリカ人としか見えませんでした。松雄の方でも、すぐ私に気づいたのですが、驚いたことに、初めて聞いた言葉は「どうして日本の着物を着て来たのですか」というのでした。その時あの親族会議と筒っぽ袖といった祖母の言葉が私の心にひらめきました。が、思えば、私はその筒っぽ袖の国に来て、筒っぽ袖の服を着た未来の夫を仰いでいたのです。思い出しては笑っておりますが、その時私は長袖の着物を着て叱られた、さびしい一人の女に過ぎなかったものであります。松雄が私の服装に失望したのは、あの母が長年大切に仏壇に供えていた、松雄の手紙に出ているウイルソン夫人の手前を思うためであつたのでした。夫人はご親切にも、ご自

分の馬車に松雄を乗せて私を出迎えさせて下さったのでした。それで、松雄は、この夫人の眼に、私が少しでもよく映るようにと願っていたのですから、長袖姿を見て驚いたのでした。

制服をつけた馭者の駆る黒馬二頭だでの馬車は、つやつやと美しく光っており、私は黙って松雄の隣りに腰を下しました。沈黙のうちに、馬車は雑踏した街をぬけてから、美しい邸宅を目指して、長いゆるやかな丘を上ってゆきました。この馬車の上で、松雄も困りきっていたとはつゆ知りませんでした。が、私は、男の人と二人で馬車に乗ったことがなかったものですから、この時は、全く困り果てたのでございました。

馬車は広い芝生にそうて曲り、灰色の大きな建物の広い玄関の前にとまりました。扉を背にして、見るから気高い感じの夫人と、背の高い白髪の紳士が立っておられました。夫人は手をさしのべて、真心こめた出迎への詞を述べて下さいましたが、余りの有難さに、言葉も出ない私でした。傍の白髪の紳士のやさしいお顔を仰いで、その慈愛に満ちた笑いのかげに、また亡き父を見出して、私の心には平和がしのびよるのでした。

このご夫妻が私共の結婚前後、私共両人にお示し下さったご親切は、靈智が人の眼をきよめると伝えられている天国の輝く門の前に立つまでは、お二方にさえおわかりにならないものであつたことごさいましょ。

この美しい家に迎えられて、二十日ばかり休養して後、六月の美しい日に結婚式を挙げました。陽は輝き、そよ風が老樹の葉かげに囁き、世界中の美術品を飾りたてた招待室は花の香にみちみちておりました。渦巻形の脚の、象眼細工も美しいテーブルの前には、日米両国旗が交叉してあり、そこに松雄とエツが並んで立ち、聖句の朗読があつて二人は結ばれたのでした。松雄の傍には親切な会社の同僚の方が立ち、私の傍には後に私の一生を通して恩母となり恩姉となつて下さった方が立っていられました。誰も彼も、この結婚式は大変美しかったと申されました。私には、何もかも唯ぼんやりとかすみ、見なれぬ人と物とが親愛の精神の鼓動を伝えているように思われ、生れ出ぬ先に神の定め給うた聖き約束が果されたのだと、おぼろに悟り得たことでした。

ウイルソン夫人はいつもご親切にして下さり、お邸におよばれて楽しく過ぎて頂いたこともたびたびでしたが、

私共の家は、近くの郊外の丘の上に、大樹にかこまれて建った古風な家で芝生を曲りくねった砂利道の向うにありました。この家の主人はウイルソン夫人の親戚の未亡人で、きびしいニューイングランドの血統と、やさしいヴァージニアの貴族の血統をひいていた方でございました。

初めは、この方が日本が好きだとおっしゃって、私共をほんの暫くお招き下さったのですが、お互いに居心地よく過すことができませんでしたので、そのままこの家に留ることにいたしました。こうして、私共は「お母上」とお呼びしたこの方と、ご一緒に末永く暮すようになりました。神がこの世にわかまし給いし最も気高くやさしい婦人であろうかと思われる、このアメリカの母上こそ、いつも私の心の奥深くに長岡の母とともに立っていた方でありました。

この家庭の愛情と同情と智慧とによって、私はアメリカの最もよい半面を眺め、同じこの国に渡りながらも、私のたった一人の兄にはかくされてきた数々の知識を理解し、味わうことができたのであります。

十七 第一印象

アメリカの第一年は、まごつきながら、唯あわただしく暮れてしまいました。それは幸福な一年でありました。日本の女は、幼い頃から、定められた家に嫁いで一生を終るものと思いきんでおりますので、花嫁が生家を恋しがるということはありません。結婚は、人生の学校へあがるのと同じに、当り前のことと思っておりますし、学校では、勉強しなければ運動場へ出て遊ぶということはないのですから、家庭に入れば、苦勞なしに幸福をこいねがうということもない筈でございます。

私も一週間一週間の漂うような足どりで進めてゆきました。時に、アメリカへ来たからとて「武士のまつげはうるおうてはならない」と思って、悲しみに耐えたこともありましたが、おおむね、毎日新しい楽しい経験を重ねてゆきました。初めの中はその時分の流行でレース・カーテンの外に重苦しそうな分厚な窓掛を下した窓や、黒ずんだ家具、

大きな額、絨緞を敷いた床などを見て、日射の通らぬ室に閉じこめられたような感じを受けましたが、やがては家庭内のもの総てが気に入るようになりました。

中でも、広い玄関から、曲りくねった小径の間をぬけて、なだらかな傾斜を見せながら低い石塀の方へ続いている美しい芝生は、またとなく好きでございました。塀のつづきは狭間壁になっていて、低いながらお城の櫓をひきのばしたようであり、太い石の門柱は大きな常盤木に半ばかくれて、玄関からは見えませんが、何か堅固な感じでした。月夜の晩など幹をまげた松の古木と銀杏の木が並んでたち、月の光がほどよく照りかかりますと、

見る人の心々にまかせおきて

高峰にすめる秋の夜の月

の古歌も、かくやと思われるのであります。それに戸外の眺めは、初めて見た時から、たまらないほど好きでした。

家の南口、北口、東口と入口が三つあり、私はその何れかに出て時を消すのでした。「母上」もやはりこの入口がお好きで、朝食を終ると「母上」は縫物や編物を、私は新聞を手を、そこに出るのでした。おそばの小さい安楽椅子に陣取って英語の勉強のために私は毎日新聞を読み、解らぬ

処々を覚えていただきました。それは仲々面白いございました。いつも第一に目に留まる事項は裁判時報の離婚の欄でありました。離婚を望む数が男より女の方が多いのを見て、驚いたものでしたが、ある日「母上」に、これでは夫の方が気の毒だと申しますと、

「どうして？ 女にも悪いところがあるかも知れませんが、男の方にも落度があると思えますよ。日本でもそうじゃありませんか」と訊き返されました。

「でも、自分で夫を選んでおきながら、あとで、失敗だなど口に出していうのでは、女の誇りがきずつかないでしょうか」

「では、夫の方はどうなるのでしょうか。」

見初めて、気に入りや、さし招く

娘は恥らい、笑顔で来る

とかいいますね。来るか来ないかを決めるのは、娘の自由ですけれど」

「おや、そうですか、私は女の方が夫を選ぶのが、こちらの習慣かと思っておりましたが」と、意外なことに思いながら申しました。当時は、私ばかりではなく、大抵の日本人は書物や新聞を通して、アメリカでは女が夫を選ぶもの

と思っていました。これも、アメリカの婦人の優勢と男性の柔順とを、誇張しすぎた一例になるわけです。それから「母上」といろいろお話している中に、この国でも、求婚は必ず男の側からあるものだと、このことを初めて知りました。

「では、大和民族の初まりと同じことですか」と申しますと、

「その方が新聞の裁判記事より面白そうですね。そのお話を聞かせて下さらないか」と笑いながら「母上」はおっしゃいました。

「初めから申上げると、ずいぶん長いお話でございますが、かいつまんでお話すれば、伊邪那岐、伊邪那美という二柱の男女の神さまが高天原を出て、天の浮橋の上に立ち給い、日本の島々をお造りになられました。それから、その地に踏みとどまって、神殿を営まれることになりました。それで、天の御柱のところへ行つて、婚礼の儀式をお挙げになりました。女神は右から、男神は左から、その柱を廻られましたが、お二方がお会いになった時、女神が、

あなにやしえ男を！

と仰せられました。

男神はお怒りになり、先ず言葉をかけるのは男神の方だから、これでは儀式を損うたとて、又やり直しをなさいました。そして、今度お二方がお会いになった時は、先ず伊邪那岐命が、

あなにやしえおとめを

と仰せられるのを待つて

あなにやしえ男を

と、伊邪那美命がお答えになりました。

これで儀式はとどこおりなく終り、二柱の神は家庭を営まれ、こうして日本の国が生れたのでございます」

「では、日本の結婚もアメリカの結婚も、もとをいえば、似たようなものですね」と「母上」はおっしゃいました。

アメリカへ来て、意外に思いましたことは、日本にいて、妻のなすべきこととして、殊にきびしく躰られたことを、ここで果そうとすると、仲々むずかしく、しばしば不可能なことさえございました。松雄は二十歳に満たぬ年齢から、この国に来ていますので、日本の習慣には無頓着でしたから、私が困っていることなどつゆ知らず、私は妻としてなすべきことにまごついてしまいました。時には困りはてることもあり、時にはおかしくなることもありました。

ある時など、毎夜つづけて、商用のため主人の婦りが遅いことがありました。丁度、私の体具合も余りよくなかったのですから「母上」は、私が主人の帰りを待っていることに反対なさいました。これには困ってしまいました。夫が働いているのに、妻が休んでいては、女子の恥ずべきことだと思ひこんでおりましたので、毎夜、床に横わったままで、故国の母の言葉を守るべきか、ここの習慣をよくご存じの新しい「母上」の仰せに従うべきかと、思い迷ったものでございました。

また、ある時、この「母上」が親戚の不幸で、一週間ばかり家をあけられました時、困ったことがありました。女中のクララが、日本は「桜の国」と聞いていたものですから、私を喜ばせようとて、夕食に桜桃のパイを作ってくれました。日本では、桜は花を見るものとされていきましたので、桜桃を見たことはありませんでしたが、そのパイが私の前に運ばれて、切りわけた時には、とても美味しそうな香りが鼻をつきました。

「それは何だい？ ああ桜桃のไพかい、すっぱいよ。僕は好かないね」と主人が申しました。

主人が食べないものを、花嫁が口にするのは、わきまえ

のないことと思ひますまに、私はその美しいパイを下げさせました。が、心はそのあとを追ひ、あんなに美味しそうなパイはこれまでに見たことがないように思えてなりませんでした。

クララはいつも大変親切に仕えてくれましたので、何か贈物をしたいと思つて、何がよいか松雄に相談いたしました。すると、アメリカではお金が一番よいということでしたので、私は新しいお札をよりぬいて、日本でしていたように、白紙に包み、「御菓子料」と上書きしました。すると松雄がこれを見て吹出してしまいました。

「ここじゃ、そんな廻り諍いととことをせず、むき出しでお金をやればいいんだよ」

「でも、それでは乞食にやるようになりますもの」と、私がお心配して申しますと、

「そんな心配をしなくてもいいよ。アメリカ人は働きの代償としてお金を考えているんだよ。お金に精神的な価値など認めてはいないのだよ」

私はこの言葉を聞いて、随分考えさせられました。と申しますのは、どのような形式でありましても、感謝を示されることは日本人には嬉しいことでありますので。

私は召使を好いていましたが、いつも、驚きの種になるのもこの召使でした。「母上」は南の国の生れで、一寸日本の旧家の主婦のように下女にも下男にも、家の子といった親切な態度をとっていらっしやいましたけれども、召使の一人上の責任を負うてやるというのでもなく、又召使の側でも、忠義な心で務めを果すという風でもありませんでした。故郷の家では、召使は地位は低くても、家族として扱われ、主人と共に喜び、共に悲しみ、また主人も、召使を親身になって世話したものでありました。こんな風でも主従の間がみだりに狎なすぎるといふことはありませんでした。敷居を境として、見えない境界線がはつきりとひかれていたのですから、召使がこの境を越えたり、越えようと思ったりしたなどということは、聞いたこともありませんでした。日本の召使は、そこに深い誇りを感じていたからでございます。クララは仕事に忠実でしたが、その楽しみは、家の外にあったようでありました。ですから、毎週の午後の定休の半日がめぐって参りますと、驚くほどの勢いで働き、早く片付けてしまうことばかりを考えていたようでした。そんな姿を見るにつけても、日本で見られたおとなしい、礼義正しいしとの姿や別れの時の品のよいお辞儀

の仕方など思い出さずにはいられませんでした。

けれども、クララは、私の乳母より他の人はしてくれそうもないことでも、さっさと手を出してしてくれました。時には下男のウイリアムの仕事になっていた、靴磨きまでひきとって、クララは裏口で小唄まじりに磨くのでした。アメリカの生活には、合点のゆかぬことが数々ありました。日本で相当家事をしこまれた私には、このアメリカの家でどんな風にかが運んでいるのか見守ることはよい勉強でありました。「母上」も疑問を持つことが勉強だとおっしゃって、励まして下さいましたので、クララは私のことを「あのかわいいシュガモト夫人」といっては、辛抱よくいろいろと説明してくれました。すべて物珍しく、面白い中にも、私が特に興味を覚えたのは、台所でありました。が、お道具は重いし、棚も高いので、何かしようとしても、小さい私には不便でありました。この時初めて、日本のもの「小さいこと」に不平をいっていた東京の外人方に同情できるようになりました。女学校時代のお友達で、日本式の家をある外人に貸していた方が、よく面白いことを話して笑わせてくれましたが、その外人は部屋の出入りのたびに頭をかがめなくてはならず、夫人は、女中さんが床板か

ら六インチ位の高さしかない組板で野菜を切ったり、石鹼も使わずにお皿洗いをするのを嫌っていたのださうであります。

私はその話を聞いては、その夫人は変り者に違いないと思ったりいたしました。と申しますのは、石鹼は私達のぬか袋の様なもので、お風呂に入る時にだけ使うものと思っていたからでありました。けれども、アメリカのお料理に脂肪をたくさん使うのを見るにつけて、クララが熱湯や石鹼をふんだんに使うわけが判って参りました。日本の食物は大体お野菜が多く、お魚を頂く時にはお皿を別にして、灰で洗ったものでございました。

毎週金曜日の念入な掃除日に部屋へ入ってみますと、クララが油布で、私の箆笥を拭いているものですから、驚いてしまいました。

「何をしているの」と訊きますと、

「一寸磨いでいるのでございますよ」と答えました。

物を磨くのに、油布をあてるのはどうも合点がゆきませんでした。あとで箆笥を見ると、カラカラに乾いていて、光沢が出ており、きれいになっていましたので、ますます驚いてしまいました。日本では、家の中の木地のところには、

ラッカーをかけたたり、ペンキを塗るといふことはせず、もちろん漆を塗った家具は別で、まず家具をきれいにするためにはお湯で拭くだけでした。たきやきは毎日のように木地のところをお湯で拭き、廊下は朝晩、湯気のたつような雑巾にびったり両手をそえて、木目に添うて足早に走ってゆくのでした。こうしていきますと次第に黒ずんだ光沢が出て来て、人の影さえはつきりと映るようになるのでした。いつも家事には興味を覚えて見ておりましたが、大掃除の日には、またとない面白い経験をいたしました。ウイリアムとクララとが働いている様子を、興味ふかく眺めながら、部屋から部屋へと歩き廻りました。部屋一面に敷きつめた重い絨緞を、戸外へ持出してはたくものだとは夢にも思わなかったことでした。

二階の私の室と隣りあった松雄の部屋の絨緞も造りつけのものではなく、巻上げてありましたし、マホガニーの戸棚も部屋の真中にひき出してありました。なにもかも不思議な事ばかりで言葉も出ませんでした。それにその置戸棚の後の面は——もともとどんな立派な家具も、後はみなこうなのですが——唯の荒板で、これから仕事場へ運んでゆくお道具という形でした。お道具は内も外も、底も後も、

すべて鉦を掛けて磨いてあるものしか見たことのなかった私は、これでまた、重ねて驚いてしまいました。

「母上」のおっしゃるには、このアメリカ式の実用的なやり方は、時と手間とを省くという考えから出たもののだということであります。このお話を伺ってから、私は初めて労働問題に眼を向けるようになりました。

「母上」と私とが、心と心を触れあって、語りあったのも、この大掃除の日でした。「母上」は屋根裏のお納戸部屋のトランクの中の衣類を整理しておられましたので、私は傍で、四角形の樟脳をかいでは、薄紙に包んで渡し、「母上」はそれを着物の畳み目にさし込んでおられました。「母上」は一八二二年の英米戦争の時、お祖父さまが召したという軍服を見せて下さいました。トランクの蓋はあいており、むかしを語る衣類はそこいら中に散らばり、辺りには嗅ぎなれた樟脳の香が満ちていました。私はふと、故郷の虫干の日を思い出しておりました。衣類をかけたつらねた網の間を通り、召使達が忙しそうにたち働いている間をぬけて、父について入って行った祖母のお部屋の様も眼前にはっきりと浮び上るのです。

「エッ、何を考えているの、五千哩も離れたところを見る

ような眼付をしているではありませんか」と、「母上」は微笑を浮かべておっしゃいました。

「もつと遠いところを見ておりましたわ、まだ私が生れない前のことを見ていたのでございます」

私は俯向いて、「母上」の膝の上の古い軍服の大きな袴をなでてみました。すると、アメリカ中で、私の胸に一番びったりするもののような感じを受けました。

「お母さま、家のお納戸にも、戦いの思い出を語る尊い記念の品々がございます。父の手で書かれた薄紙の綴本もあって、私達はお宝にいたしております。お母さまはご存じないでしょうけど、父はずいぶん長い間、敵陣に人質としてとらわれの身となっていたのでございました。人質と申しまして、こちらで考えられるようなものとは違い、周囲は戦場の巷でございましてその陣屋はある静かな森の中のお寺で、そこは陣屋でもあり、又身分ある敗軍の武士の飯の獄屋でもありました。父はとらわれの身ではありません、客分として扱われておりました。

父は忠僕とは切離されてしまいました。敵軍の若侍が傍にいて、何くれとなく行届いた世話をしてくれました。父はこの若侍を相手に、剣術などの武芸に興じては、気を

紛らし、また、時には、武士同志の交りにつきものの作詩とか、謡に時を費すこともございました。物質の上では毎日、何不自由なく、氣持を乱されることもありませんでしたが、外界とはすっかり縁を絶たれておりました。読む本としても、歌集や古えの書物はばかりで、現代には何の関わりもないものばかりでした。単調な一日を送って、枕に頭を横たえますと、心はしきりに遠くにさまよい出て、官軍はもう越後に入ったであろうか、長岡城の運命いかに、家来達はどうかであったであろうか、母は、息子は、妻は、娘はと思い煩うのでした。

昼間は、よく、美しいお庭を散歩しました。おそらくその塀の外には衛兵がいた事でありましょうが、父にはそれさえ判らないのであります。父の周りには、囚われの身を思わせるような何物もないようでしたし、おそらく何もなかったことでありましょう。父が武士の誇りという強い鎖でつながれているということを、監視の者も心得ていたのでございましょう。

こんな物憂い日々、父の何よりの楽しみは書と、敵方の隊長と碁を囲むことであります。教養の高いこの人は、時折り父のところへ話しに來られましたが、二人は趣味も

あい、共に節義を重んじ、たとえ目指す道は異りましても、暫くの間には結ばれた友情は、生涯変わることもございませんでした。共に碁をたしなみ、それが上手でもあり熱心でもありました。お互いに胸中の秘密を打ち明けたことはありませんでしたが、ずっと後になって、父は碁を打つ間にも、二人は心の中で、互いに尊敬しあっていたと、私に話しておりました。大抵は持碁に終るのでありましたが、時には父が勝ち、又時として隊長殿が勝つこともありましたが、いつも敗者はつつましく相手を賞め勝者もまた劣らずつつましい態度で、讃辞をうけたと申します。

こうして幾日が過ぎ、幾月が過ぎてゆきましたことか、父は幽囚の日々を数えながら、それ恐しい気さえたしましたが、寺の門の外の世界については一言も聞かず、一瞥もくれず、その気配さえ探ることもできませんでした。

うらかな春日の夕まぐれ、父は部屋に端然と坐って、庭面を眺めておりました。聞くともなく耳を傾けますと、遠くから読経の声が流れて参り、吹きわたるそよ風に、匂やかな桜ははらはらと舞い、庭石の上に美しく散り敷くのであります。また松の梢には、三日月のかけさえうすくかかり、そのさまは忘れがたい一幅の絵だったそうござ

います。

若侍が近づいて、いつもの忝々しい態度で「お客人、お夕食の用意ができてござります」と申しましたが、その面はいっぴくなくこわばって、はりつめておりました。

父が領きますと、いつもの小さい塗膳が運ばれ、父の前に据えられました。

いよいよ、かねて覚悟の最後の報せが来たのであります。ご飯の椀が右に、お汁椀が左に、お箸は仏前に供える時のように飯椀に突きさされ、皿にもられた焼魚の頭はふつりと落されてあります。これは、武士から武士への無言の命令だったのでございます。

父は常のように食事をいたしました。沐浴の折りにも、若侍がつきそい、父は髪を洗いましたが、もはや重い兜をつける身の上でもありませんので、鬢はほどいて油はつけず、白紙のこよりで髻を結ばせました。それから麻の経帷子を着た上に、武士の最後を語る水色の袴をつけ、静かに丑三刻を待っていました。

そこへ入って来た隊長は、深い思いはかくして色にも出さず、武士のきびしい挨拶をするのであります。

「隊長として今はここに参ったではありません。御身の

友として、御郷里への御伝言を承りとう存じます」

「只今の御志のみならず、かねての御交誼誠に有難う存じます。二度と帰らぬ覚悟で家を出ました故に、はや申すべきことは、言い残してまいりました。今更何の申し伝えるべきこともございません」

と、父は申しましたが、やがて言葉を継いで、わが死によって主を失う家の子たちのこと何卒よしなに御頼み申すと述べました。隊長は深く領いた後、自身の信頼する家来に介錯をさせるつもりであると話されました。父は頭を下げて謝意を表し、互いに相知り、敬しあった二人は、礼儀正しく最後の挨拶を交したのみで、あとは言葉もなく袂をわかちました。こんなことは、アメリカの人々には、大変冷淡な風に見えるかも知れませんが、武士の間では常のことであり、無言の中に共に相手の心の中を読んではいるのです。

いよいよ最後の時が参りました。その夜、丑三刻を待った七人の中、父が一番身分も高うございました。唯一人、水色装束に身を包み、幾百年の誇りをその態度に見せて、静かに寺の庭へ下りてゆき、用意された囲いの中に入りますと、他の人々も経帷子に身を固め、おし黙って、反対側

に並んでおりました。その中の一人は、まだ幼い子供で、すぐ後に近く介添がついておりました。見ずとも、父には我が子の介添である叢田の蒼ざめた顔が見えるのでした。

子供はかすかに——それは身ぶるいほどにかすかに、体を動かしました。叢田は子供の両袖をちよつと仰えました。父は静かに歩を進めました。子供は身じろぎも止めて、真直に坐り、眼は真正面を見つめておりました。それこそ、私の兄の稚児姿でございました。その兄が見も知らぬこの国へ来て、どのように暮したかは存じませぬが、伝統と環境とによって、兄がよく理解してましたその世界では、兄もまた一人の武士でございました。父は雄々しく頭をあげ、真正面に眼を瞞はって——その眼は何も見えていませんでしたが——重々しく最後の座に就いたのでした。けれどもその心の中には——まあ、父の知らない神様も、この時、父をあわれみ給わないことがございませうか？」

私は眼の前の軍服の大きな衿をしっかりと握りしめ、涙の顔を伏せてしまいました——とうとう私は武士の精神を失ったからでございます。ここに来て受けた余りの親切の故に、私の衷のある部分が消えはててしまいました。「母上」の手が肩におかれたのに気付きましたが、私は涙にぬ

れた面をあげて、父を辱かしてはならないと思いました。父のこの不甲斐ない娘は泣いておりました。

「まあまあ、これこれ、お父さまはお亡くなりにはなりませんよ」

私は面を上げました。が、涙を拭おうともいたしませんでした。又、静かに言葉をづけました。

「戦争は終り、新政府はすべての政治犯人を赦したのです。役人方はすでにこの決定を知っていたのです。伝令使は馬を走らせて急いでいたのですが、到着するまでは、一切の形式を踏まなければならなかったのです」

「母上」は悲しそうにおっしゃいました。

「そうなのです、速馬や速飛脚で伝令をした頃には、よくそんなことがあったのを知っています。誰が悪いのでもありません。上からの命令なしで法律を曲げるようでは、国家は臆断に左右されてしまいます。そんなことがあってはなりませんからね」

「母上」は頬を染め、眼は涙にうるみながら、しっかりと軍服を握り、真正面を見つめていらっしやいました。私が驚いて、「母上」の方へ眼をやりますと、また「母上」は言葉をついで、

「世界中、どの国もみなよく似ておりますこと。ねえ、エツ、あなたの乳母が言った通り世界は平らで、日本はアメリカの反対側にあつて、遠くはないけれども、見えなだけなのですね」とおっしゃいました。

そして二人は微笑み交しましたが、「母上」の唇はふるえておりました。「母上」はやさしく私の肩に手をかけて下さいました——それ以来、私は心の底から、「母上」を愛するようになりました。

私の新生涯のもう一つの「一里塚」は、私がクラブの方をお招きした日のことでございます。母上はこの主婦たちの文学研究会に入っており、その会員の人達は、色々な国の劇を研究したり、文章を書いたりしてお集りは会員の家を持廻りで致しておりました。丁度、「母上」がクラブ員をお迎えする番にあたっていたその日に、遠國へ行く親友から丁度この街を通過するという知らせがあり、母上は汽車と汽車との合間に、市内見物の案内をされようとして、出かけられました。母上は会が終るまでには帰って来られることになっておりましたが、私は部屋の用意をしたり、お客さまの接待をすることを任されて当惑いたしました。「何も心配することはないのだ。お母さまがウイリアムに、

を乞いました。

「ピアノは邪魔じゃありませんよ。会員が皆さんお見えになつても、この部屋なら、このままで十分ですよ。もう少し椅子を入れれば、それだけで結構なんです。でも——」
 といって、婦人は二間つぎの広い客間のレースのカーテンや、金縁の長鏡まで見渡してから、「真中のテーブルをとってしまつと、何だか空っぽな感じですね。あなたのお持ちの、日本の装飾品をあちこち散らしてごらん遊ばせ、きっと全体がひきたちますよ」

この婦人がお帰りになると、さっそく私は日本のものを持つて来て、部屋のあちこちに置いてみました。それから、少しばかりのあやめの花を型通りに生けて、二三歩下つて、出来栄を眺めました。

花から、部屋全体に眼を移して、私は失望してしまいました。何がいけないのかしら、日本から持つて来たものは、みな精巧なものばかりですし、花瓶も美しいのに、どうしたことか、「母上」の客間がこんなにひきたたなかつたこととはありませんでした。ふと、私の眼が青銅の香炉の上に落ちました。この香炉は、幼い頃、私のお雛さまのお道具にと、戸田家から頂いたものでしたが、アメリカの書架の

もう少し椅子を三階の納戸から下しておくようにいつつけていらしたのを聞いたよ。だからお前は、教会のように椅子を並べさせたいじゃないか。クララが何でも知っているんだよ」と、出かける時に、松雄は申しました。

「でも、お花も入れなきゃなりませんし、会長の席に小さいテーブルをおくとか、お母さまがおっしゃってましたわ。それに、ピアノをひっこめなくちゃなりませんし、お母さまがいらっしゃるといいますけれど」と、私はほん

とに困つてしまつて心配の余り大声で申しました。
 「針程の事を棒の様に思っちゃいけないよ。クララが心得ているよ」と申して、松雄は鉄門の前に全村専有乗合馬車を停めて、さし招く近隣の人に応えて、門へ駆け下りてゆきました。

考えてみれば、松雄の言う通りなのです。前日クララはお部屋を掃除し、必要なことはちゃんと用意ができていたのですが、やはり私は落着かず、途方にくれておりました。困りはてていましたその時、窓ごしに、芝生の間を登つてくる老人の姿に眼をとめました。この方は近所のご婦人で、時々訪ねて来られては、「母上」と心おきなくお話などなさいました。私は走り出て、丁寧に迎え、熱心に助け

上に置いては、ひどくそぐわぬものに見えるのでした。

眼を上げますと、その香炉の上には、牧神のたわむれているエッチングがありました。私は発作的に香炉をとり去りました。電光のような素早さで、私の心は、ひんやりとして日当りよい故郷の家に飛び帰るのでした。お座敷に置いてあるものは少く、しかもみな所を得て置かれてあつたことを思い、やつと一切が判りました。日本から持つて来た装飾品も、釣合つた周囲の中に入れば美しいのですが、ここでは美しくも見えず、この大きな部屋をひきたてることもなく、唯奇妙な骨董品に過ぎませんでした。急いで、

装飾品をとりわけ、あやめは台所へ下げ、馬車小屋の後の畑に出て、雛菊と羊歯をとつて参りました。それから、家中の花瓶を持出して、色合や形など考えず、無造作にこの生々した野の花をさしました。すると、客間は忽ちに美しくなり、窓の外のならかな芝生の丘によく適うのでした。ほつとして、ソファによつた私は独言を申しました。

「西洋は西洋、東洋は東洋。ここに在る間は、伝統的な美の標準など忘れることにしましょう。自然のままの美しさが、この大きな自由な、くつろいだ部屋に一番びつたりしているんですから」

十八 風習のちがい

大学丘の村には、大きな石造の教会がございましたが、維持が困難でしたので、私共婦人会でバザーや音楽会を催し、時には村の紳士や婦人達で素人芝居などとして、資金の一部にあてたものでございます。

ある夜、「母上」と松雄と私との三人で、そのような音楽会へ参りました。プログラムには何か古典からとった歌の独唱が出ておりました。歌い手は、ある富豪のお嬢さんで、素質もよく、欧州にまで渡って修業を積んだという方でした。日頃、私は、声の美しい、身のこなしにも気品のあるこのお嬢さんを、どちらかといえば、もの静かな方とばかり思っていたものですから、楽の音が起ると気軽に舞台上に進み出て、面をほころばせながら、聴衆に向って、右に左にと会釈し、表情も豊かに唱い出された時には、すっかり驚いてしまいました。甲高いふるえ声は、聞き馴れない私の耳にはわけのわからない騒音のようなもので、唯、

不思議なものに思われました。

私の心に残ったものは、華かさときびきびした動作と甲高い声だけでありました。これに比べますと、日本の古典音楽は、色彩はやわらかに、動作はもの静かに、調べは深く、ものやわらかで、何もかも大変違っております。また、大方の日本の芸術は同様、音楽でも、聞く耳と同時に、きく、眼を要求されるのでございます。

日本のお能の舞台は、いつも同じで、背景は一枚の木地そのままの檜板で、一本の松が描かれてあり、床も檜板で、敷物は敷いてありません。この舞台上に正座する謡い手は、いつも男ばかりで、人形のように、身じろぎ一つせず、落ついた色あいの衣服に肩衣を着けております。皆謡い出す前には、静かに低くお辞儀をし、落着いた手つきで、扇を持ち、合戦や伝説についての物語など朗々と謡い出すのですが、その間中、体を動かすこともなく、表情一つ変えることもございません。

謡い終わりますと、両頬に紅さすことはありまして、表情は変えず、会釈して、またもとの冷静な態度に返るのでした。聴衆もまた静まり返って、口利く人さへありません。深い感銘に涙の流れることはありまして、それは、鼻を

かむ音ともれる溜息にそれと知られるばかりであります。幾百年の間、自制をのみ人情の基調として参ったのでございませすから、聴衆の捧げる最も大きな讃辞も、謡い手や舞い手は、深い沈黙の中に受けることになっております。

アメリカへ来て、どうしても馴染めないもの一つは、婦人と金銭に対する不真面目な態度でありました。あらゆる階級の男女、新聞、小説、講演、時としては教会の講壇から諧謔まじりであったにせよ、女が靴下の内にお金を貯えるとか、夫にねだったり、友達から借りたり、何か秘密の目的でそと貯金したりするというような、おかしい話を暗示されました。おそらく貯えたお金で、客間のカーテンを買ったり、夫の誕生日の贈物を購ったりするのであります。ところが、こんな冗談が、私には合点がゆきませんでした——そして、時が経つにつれて、色々のことから、この冗談の中に、きびしい事実が根柢に横わっているのではないかと思いつき、ますます判らなくなるばかりでございます。

私共の村は小そうございましたから、互いの私事にまで興味を持っていましたので、私も大抵の方とお都合になりました。この婦人方は教養のある方ばかりかと思ってお

りましたが、誰方も一様に金銭についての無責任を平気で口に出しておっしゃいました。身装もよく、お金にも恵まれた方のように見えるのですが、責任ある判断をして、自由に財布の口をゆるめるといふことがありませんでした。ある時、教会のバザーで、私も売手に廻っておりますと、数人の婦人方が、廊下を歩き廻ったり、売店をのぞいたりしたあげく、小さな安物ばかりを買い、高価なものには手も触れず「あとで主人が来たら買わせましょう」とか「男の人が来ると、高いものが売れますよ」とかおっしゃるのでした。日本では、男の人が家庭の品物を買うということ

は、聞いたことありませんでした。またある時、友達と一緒に買物に出かけましたら、途中でその人は夫の事務所へよって、入用だけのお金を貰って来ましたので、ずいぶんおかしいことだと思っておりましたが、もっとひどいのは、「母上」と私とで教会の婦人会に出席した時でありました。この集りでは、何か臨時の支出のために、寄附をつのることになっていたのでした。婦人会では最近、相当な金額を夫の懐から支出してもらっていましたので、この時は銘々、夫に貰わずに、五弗ずつ持寄ることになっていました。そこで、このお集りで、皆さん

がその五弗を出す時に、どうして手に入れたかを冗談まじりにお話になりました。大抵は、少しずつ、色々な方法で貯金したというものでありましたが、ある人はこのために、「大変な犠牲を払った」と前置きしてから、「買ったままで、一度も被らないでいた帽子を、帽子屋へ持って行って、五弗安いのと取替えた」とお話になりました。又、ある人は他人様から頂いていた芝居の切符二枚を売ったとおっしゃられ、余り豊かでないある会員は、一週間、暇をみては、あるお金持で会員でない家庭の子供の靴下つぎをしたが、これからもう一週間しなければならぬと、おもしろおかしくお話になりました。

こんなにして、お話を聞いていますと、大変おもしろくて、私は、日本の歌留多会を思い出しておりました。が、もちろん、このお集りはずっと陽気で、話題もくだけたものでありました。ところが身装も立派な美しい婦人が立って、貯金の仕方も知らず、お金を儲けるすべも知らず、さりとて、勘定書の数字をごまかすことも、夫にねだることもできなかつたので、残されたた一つの方法をとって、夫が寝ている間に、ポケットから無断で持って来たお話をしました。

これ程のものが必要であるかを知ること、妻の教養の一部なのであります。時に、夫が肩をすくめて「それじゃ、都合が悪い」などという事はありましても、家族全体とその地位とが夫の誇りであるからには、全体を傷けては、夫自身の損失になるわけでありますから、先ず必要なものは、一家を支えてゆく為の入費です。男の結婚は、第一には神様と祖先に対する義務であり、第二には、その家と夫のため、上手にきりもりする主婦を得ることであります。ですから、妻が上手に一家を納めれば、夫は周囲の人々から賞められ、もし妻が妻の務めに失敗すれば、夫は軽蔑されるわけであります。

以上は、どの階級にも通することではありますが、上流社会とか大実業家では、家に会計係を置きます。この人も、やはり主婦の命令次第で、入費については主婦が第一の権限を持っていました。会計係の唯一の権能は、いろいろ弁解をしたあとで、「奥様、少々ひき出し方が多いように存じます」というだけであります。が、それはこれだけ申せば総ては通じるわけで、日本の主婦は、責任ある地位にあるものの常として、その務めは、立派に果たしたいと思

すると、一座は湧き返るにぎやかさでしたが、私は悲しくなってしまうました。「残された、たった一つの方法」だと、お話になってからは、今までのお話が、みんな悲劇のように思われてなりませんでした。婦人が自由で優勢な、このアメリカで、威厳も教養もあり、一家の主婦であり、母である婦人が、夫に金銭をねだったり、恥しい立場にまで身を置くということは、信じられそうもないことであります。

私がこちらへ参ります頃は、日本はまだ大方、古い習慣に従って、女は一度嫁しますと、夫にはもちろん、家族全体の幸福に責任を持つように教育されておりました。夫は家族の頭であり、妻は家の主婦として、自ら判断して一家の支出を司っていました。家の諸がかりや、食物、子供の衣服、教育費を賄い、又、社交や、慈善事業のための支出をも受持ち、自分の衣類は、夫の地位に適合せるよう心がけておりました。

それらのための収入は、いうまでもなく、夫の働きにより、妻は銀行家になるわけです。ですから、夫は自分でお金の要する時には、妻からもらい、夫に、地位相応の支給ができるのを、妻は誇りとしていました。夫が外に出て、ど

古い習慣は、年々歳々その厳しさを失うかに思われますが、なお、過去において世間一般に認められていたことは、今も人々を動かして、こうしたさだめを破ろうともい

たしません。祖国日本と第二の故郷アメリカでは、ものごとの標準が大変かけはなれておりますので、二つの国に深い愛情を感じている私は、時々雲の上において、二つの世界を見下して考えているような、妙な感じを持つことがございました。初めの中は、日々眼前に現れる奇異な事柄を、日本の標準に照らして説明しようとしたしました。と申しますのは、毎日くり返しているような習慣の起源や意味を知っている人もなく、どうしてそうした習慣があり、またどうしてそれをこれまで人が守ってきたのか、説明してくれる人もありませんでした。着物の形にも、礼儀作法の一つ一つにも、日常茶飯事にもそれぞれに忘れがたい謂をもっている日本の国から来た私には、アメリカの無頓着さは、意外なことに思われてなりませんでした。

「母上」は博学な方でしたが、私は余りたびたび質問することは差しひかえておりました。と申しますのは、どうでもよいようなくならないことが、私には不思議でなりません。

んでした。たとえば、教会内で、男の人は脱帽していませんのに、どうして、女の人は帽子を被ったままでいるのでしょうか、立派なお宅の壁に陶器の皿がかかっているのは、まるでお寿司屋のように見えますこと、親しいお客様を迎えようと、すぐに寢室へおつれし、寢台の上に、帽子やコートをおかせることの意味、又、日本では、夜分は休息の時と考えていますのに、ここでは、人をお訪ねするのは夜分であることのおかげ、万聖節や万愚節の、あの馬鹿さわぎの謂れ因縁、靴下に贈物を入れる奇妙な習慣の起源というようなことなど。

人の会話の中にも、書物にも新聞にも、このような習慣に触れたものに出くわさないのが、また、私には不思議でなりませんでした。日本では、伝統も口碑も象徴も日常生活の中に織りこまれていきます。街を行く人の服装、暖簾の商標、瀬戸物の模様、呼売商人の呼び声、さては、兵隊さんの軍帽、女学生の袴、それぞれに、その由来を語らないものはありません。人力車の車夫が使う藍絞りの手拭や、労働者がかつかう組重ねのお弁当箱でさえ、古えの歌や伝説にちなんだものであり、アメリカの子供で、「マザーグース」の歌を知らない子がいないように日本の子供もこんな古歌や

伝説をよく知っているのでございます。

ある日の午後、一寸した招待会の席で、一人の婦人が愛想よく話しかけて、私の穿いている草履が健康のためには大変よいとお話になり、当時流行の踵の高い、先の細い靴は非衛生的だともおっしゃいました。

「じゃ、どうしてそんな靴をおはきになるんですか、また、どうして流行りだしたんでしょうか」と訊きますと、

「別に理由はございません。唯、流行なんですよ。まあ、あなたのお召物が右前になっているのと同じことでしよう」とおっしゃいました。

「でも、この着方には理由がござりますよ。左前に着るのは死人だけなのでございますから」と申しますと、その婦人は興深げな様子をなさいますので、私は天子様の玉座から、一寸した紐結びに至るまで、日本では左より右を重んずることなどお話し致しました。それから、その婦人は、私の帯を軽く叩いて、

「このお荷物は一切何ですか、この上に赤ちゃんでもおんぶなさるわけなんですか」とお尋ねになりますので、「いいえ、これは帯で、唯の飾ものでございますよ。赤ん坊は紐でおんぶいたします」

「この帯はずいぶん美しいゅうございますね。失礼ですが、どうして模様が見えるように、おひろげにならないのですか」

この婦人が心から興味深く感じていらつしやることが悟られましたので、私が身分、年齢、職業、場合などによって、帯にもいろいろの結び方のあることをお話しいたしました。最後にその方は、帯にはどうしてこんなにたくさん布を使うのかとお尋ねになりました。

日本人にとっては、衣服の示す象徴が第一で、その材料は第二義的なものですから、私は喜んでこの間に答え、一尺二寸幅と一丈二尺の丈にする由来を語り、古代の東洋人が信じた神話や天文学が、この帯にも表われていることを説明致しました。その婦人は帰りかけてから、

「それは面白いことでございますね。中でも、十二支に型どったのなど、面白うございます。でも、そんなに立派な錦をたたみこんでかくしてしまうのは、いかにも惜しいことでございますね」とおっしゃり、また楽しそうに笑いながら「役にも立たないのに、そんなに長々と立派な布を買うのはいけないことですね。そうはお思いになりませんか」ともおっしゃいましたが、その方御自身も、美しいビ

ロードの服の裳裾を長々と後にひきながらお帰りになったのでした。

「母上」のお道具はみな美しい木でできており、中には彫刻のほどこしてあるものもありましたので、初めの頃は博物館の中へも入ったような思いでありました。ところが、よそのお宅へ伺ってみますと、単純で地味なと思われるようなところは一軒もありませんでした。椅子やテーブル、絵、小さな彫像や、花を挿さぬ花瓶、貝殻、額にはまった写真、又珍しい高価な装飾品など、ごたごたと一杯置いてあるものだから、私にはお納戸にでも入った感じでございます。そして、日本式の常識から考えますと、秩序も場所柄もなく、唯無造作に散ばっているのです。じきにお納戸へ片付けるお積りでこんなにしていらつしやるのであらうと思つた最初の印象は、仲々ぬけませんでした。どの品も大抵は美しくございましたが、中には靴の形をしたものや、蹄鉄の形をしたものもありました。この型は、こちらでは気に入りの意匠なのか、それとも、私が眼ざとく見出したのかもしれないませんが、殆んどのお宅にも文鎮とか花瓶とかにこの靴型をしたものが、必ず一つ二つありました。ある時など、小さい木靴が楊子入れに使わ

れているところさえありました。

足は体の一番いやしいところという考えが長い間しみこんでおりました私には、これがいとわしくなりませんでした。どんなに高価でも、美しくても、履物の形をしたものでは、何の価値も認められませんでした。

それから日本の骨董品！これがまた至る所で、とんでもない、不適當な場所に置いてあるのです。お弁当箱やお茶碗が客間のテーブルの上のせてあったり、安物の軸が高雅な壁にかかっていたり、仏壇につかう鐘が食堂の呼鈴になっていたり、刀の鐔が文鎮に、硯箱をハンケチ入れに、又ひどいのは、竹の唾壺を花瓶に使ってあるのさえ見たことがあります。

そのうち、私の頑迷な心も、ある程度まで、品物と周囲とを切離して考えるようになり、ひいてはアメリカ人の眼で美的価値を判断するようになりました。また、日本のことを知らないことから、思いがけない間違いをしているのを見るたびに、日本でも、これと同じ間違いを犯しているのではないかと、反省してみる習慣もできました。そして、互いに相殺されるような例を一度ならず見たのです。ある時、お若い婦人が、日本についての講演で、上品な日本

の女の人がショールの代りに、安い毛虫糸のテーブル掛を

肩に懸けていると聞きましたが、そんなことがあるのでしょうかと、いかにも信じられないという顔付でお話になりました時、私はすっかり笑ってしまつて、二三年前に、そんなのが流行、ましたというよりほかありませんでした。輸入品は珍しい上に、高価でしたし、日本ではテーブル掛など使いませんから、一眼見てショールとしか思えなかつたのでした。さすがに、私もそれをかけたものですと語る勇氣はありませんでしたが、幼い頃、長岡の家であつたことをお話しました。

父が東京土産に、いしときんに、縁に色づけがしてある大きな西洋手拭を買つてまいりました。いしもきんも得意になつて、それを肩にひろげてお寺のおつとめに出かけました。私は今でも、晴着を着飾つた肩に、白いタオルをひろげ、縁飾りを袖の上でゆすりながら、誇らしげに門を出ていった二人の姿を見るような気が致します。今思えば、ずいぶん滑稽な事でありますが、当時はすっかり感心していましたし、見る人も羨ましがつたことであつたらうと思えます。

日本の物をアメリカ人の眼で見ようとして、いろいろの

経験を行いました。その中で、余り不調和な組合せのため、数カ月も困らされたことがあります。特に美しい邸宅にお住いになっていたホイト夫人を初めてお訪ねしました時、ふと、精巧な彫刻のある孫の手——アメリカでは「背中かき」と申します——が黒檀の飾り戸棚の戸にかかつているのが眼につきました。その傍には、水晶と珊瑚の珠数がかかっているのです。孫の手の美事な象牙細工といひ、珠数は珍しい紅珊瑚、水晶も無きずで、みな珍しいものばかりなのですが、日本人の眼にはこんな奇妙なとりあわせをしては、すっかりぶちこわしになってしまうのです。丁度、聖書と歯ブラシを一緒に客間のテーブルにのせたようなものでございます。

でも、私はこの主人の鑑識に批評めいたことは一言も申しませんでした。夫人の美術品に対する眼識は大変高いものでしたし、アメリカでは、孫の手は単に美術品として見られていたのですから、置場所はこれでよかつたわけです。そう思いつきましてからは、その部屋に入るたびに、飾り戸棚から眼をそらすようにつとめました。二年のおつきあいでずいぶんお親しくなりましたから、思いきつて、初めてお訪ねした時まごつてしまったことをお話

しました。それからというもの、夫人は私の顔さえ見るとお笑いになり、私も笑いますが、今はもう珠数と孫の手が一緒にかかつていないことを思い出しますと、何か心嬉しい満足を覚えるのでございます。

この孫の手と珠数が離れますと、同時にとりのけられたもの、がもう一つあります。それは日本の景色を色刷りにしたもので、昔のものではありませんでしたが、配置も色合いもよく一寸見栄えのする絵でしたので、夫人は眼につくところにかけていらつしゃいました。何もご存じない夫人は、その絵の芸術的な美しさだけを見ていられたのでしようが、私は一眼見て、恥しさに心の痛む思いをいたしました。それは日本の良家を持つようなものではなく、娼家を背景に、東京の有名な遊女を画いたものであります。私はこの絵を見た瞬間「どうして日本人はこんなものを売るのかしら」と自分に問うてみましたが、またすぐに「どうしてアメリカ人は買うのかしら」とも思つて、迷つてしまいました。

またある日、お友達と街へお買物に出かけた時のことであります。電車の中で、向い側に腰かけている女の子が、何か物を食べておりました。日本の習慣のぬけきらない私

は、アメリカでは食卓以外でものを食べてはならないという習慣のないことを知りませんでした。

私は友達と夢中で語り始めて、子供のことなどすっかり忘れていましたが、ふと気づいて子供の方を見ると、驚いたことに、まだ食べているのです。それから二三度気をつけて見ても、やはり口を動かしていたものですから、思いきって、友達に尋ねてみました。

「あの子は何を食べているんでしょうね」

「食べているんじゃないよ。ガムをかんでいるだけです」という答でありました。

また、その子を見ると、ぐったりと腰かけて、膝の上の手はだらりとゆるんでおり、両足は広げて、荷物に絡ませいかにも無恰好な様子をしていました。疲れたような顔を見た瞬間、私は大陸横断の汽車の中の出来事を思い出して、また友達に尋ねました。

「あの子は加減が悪いのじゃないでしょうか」

「そうでもないでしょう、どうしてですか」

「私、あのお菓を汽車の中で頂いたことがございます」と申しますと

友は笑いながら「いいえ、チューインガムはお菓じゃございませぬね。唯かむだけのもの、蠟のようなもので、

「どうして、あんなことをするのでしょうか」

「あれくらいの階級の子は大抵噛みますが、品のいいことじゃございませぬね、宅では子供にとめております」

と聞いて、もう私は何も申しませんでした。車中で起ったことが、少しは判るような気がいたしました。私が汽車に酔っていますと、ホームズ夫人は、これを召上ってはいって、小さい平たい香りの高いお菓を下さいました。

口に入れて長い間かんでおりましたが、どうしても呑み下すことはできませんでした。暫くして、私は飽きてしまいました。夫人はまだかんでいらっしやいましたので、これはずいぶん不思議な効能のあるお菓に違いないと思い、そっと薄紙に包んで、帯の間の懐中鏡の中へ入れておきました。

こんな妙な習慣がどうして起ったのか、聞いたことはありませんが、日本にだって、同じように奇妙な習慣があることを見逃せないと思いました。チューインガムで思い出したのはほおずきでした。あの人ばほおずきの実の中味を上手に押し出して作ったほおずきは、子供やお茶屋の娘

など、よくならしたものであります。遠くに鳴く蛙の声のような音で、美しい音でもありませんし、よい習慣でもありませんが、別に毒にもならず、不潔な事でもありませんでした。悪いことといえは、乳母がよく子供に「ほおずきを口からお出しなさい、口が尖って、ご器量がお悪くなりますよ」というくらいのことでありました。

十九 思うこと

表玄関と脇玄関とが接しているところに、私のハンモックがかかっていました。丁度、大きな林檎の木の蔭になっていましたので、私は大きなクッションを持ちこんで、その上に坐り、読書したものでした。「母上」は時々ハンモックの中でお寝みになりました。私にはどうしてもそれはできませんでしたが、揺れない駕籠のつたつもりで、木の間がくれに、道行く車や牛馬などを、石塀の彼方に見るのが好きでした。

ここから、芝生の向う、跳橋の傍の紫丁香花の生垣の間から、お隣りの家も見えました。この辺りは、お隣りといつても、遠く離れていて、どの家も芝生や植込の間に建っており、隣りあわせた芝生を距てているものは、細い砂利道や馬車道などでありました。

私は、塀をめぐるさなところに入ってしまった。日本では、どの家も石の壁をめぐるしており、田舎の

賤が家でさえ芝垣や竹垣をしつらえておりました。子供の頃、不意に塀をとりこわして、お庭が道行く人にも見えるようになったら、どんなに面白いかしらと空想したことがありましたが、ここへ来て、この幻が現実となったのでした。ここでは、垣といっても、丈の低いものでありますから、庭に植えた草花は、誰の眼をも楽しませるのでした。私はせっかくの美しさを閉じこめて、少数の人の慰めにしかない日本の庭園のことを思い出すのでした。

ある日、ハンモックにのって、縫物をしながら、私はこんなことを考え続けておりました。「母上」はポーチの一部を青々とおおった紅い花の蔓薔薇を結びつけていらっしやいました。

私はふと思いついたことがあって、「母上」に声をかけました。「お母さま、お母さまは日本の女は部屋の中に閉じこめられていながら、鍵をはずしては、無作法なことになろうかと思つてじっとしているような女だと思つていらっしやるでしょう？」

「どうして？ いいえ。一体何を考えていらっしやる？」と、「母上」はびっくりしておっしやいました。

「こちらへ来て、初めてお茶のお招きをうけました時、そ

「じゃ、余り騒がしかったり、興奮したので、疲れたのですか」

「いいえ、そうじゃございません。にぎやかなのも楽しく、いやなことなど何にもありませんでしたけれど、帰り途中で、ヘレンさんが日本で女の人を招く時には、どんな風にするのか話してくれとおっしゃったのです。私はすぐに、故郷の家で毎年、人をお招きした時の様子が目の前に浮んで参りました。母はいかめしい中にも淑かさを見せて坐っており、集った女客は皆御紋付を着ており、表情といつても、にっこり笑ったり、お辞儀をしたり、ちょっとした身振りを見せるくらいのもので、もの静かな中にも、楽しみあうのでした。日本では、お集りの席で大声で笑ったり、余り体を動かしたりするのは無作法なことになっております」「それはきれいなことですね、それに静かで」と「母上」が言葉やさしはされました。

「でも、不自然なことですね」と私は興奮の余り、坐り直して大声で申しました。「それからというものは、私は考え続けております。日本の因襲は余り極端でございますね。人を狭めるばかりです。私はここでこんなに楽しくして、ますのに、国では、女の人は何事も辛抱して控えめにし、

んなことを思いつきました。あのお茶の会は憶えていらっしやいますでしょう？」

「ええ、ええ、そうそう」と「母上」は微笑しながらおっしやり「ヘレンさんと一緒に入っていらした時エッさんはまるで萎れた花の様な恰好でしたね。ヘレンさんが今日の花形はエッさんだなんておっしゃったのに、あなたはそつと縁の上り段に腰かけて、アメリカ人はまるで芝生の様だとかいってでしょう。一体あれは何の事だったのですか、ちょっと判りませんでしたよ」

「あの日のことは忘れられませんが。出かけますまでは、アンダーソンさんの客間で、きれいに髪を波うたせ、美しく着飾った人達が、訪問の時のように、楽しそうにお話をなさる様子を心に描いておりました。ところが、行ってみますと、誰方も腰かけていらっしやらないで、街なかにもいるように、帽子は被ったまま、手袋も外さず、あちらこちら歩き廻ったり、立停ったりして、いきなりお話をなさるんですもの、余り騒がしいので、頭が変になってしまいましたけれど、まあまあお上品なお集りで、面白うございました。妙な質問もなさいましたが皆さん、親切なお方で、楽しそうにしていらっしやいました」

静かに家にひきこもっているのだと思ひますと、たまらぬ気が致します。日本人の生活は、男も女も、まるで、せめ縄をかけた木や、閉じこめた庭のように……といいかけて、急に言葉を切り「余りむき出しになり過ぎて、すっかりアメリカ式になりましたこと。今までの驛を忘れてしまつておりました」とゆっくり申しました。

「母上」はやさしく「余り急いで垣をとりとうとしたのですよ。日本の花は日蔭に咲いた花なのですから、急に強い太陽にあてると、美しさもなくなり、雑草になってしまふかもしれませんね。日本は今、朝なのですから、花は日光に当ってだんだん成長してゆきます。そして、お昼頃にはかこいがすっかりとれますよ。余り急いで垣根をとりかけてはいけませんね」とおっしやり、ハンモックにより、初めてそつと、私の額に接吻して下さいました。

ある時、世界の名優エレン・テリーとアーヴングの「ヴェニス商人」を見に参りました。午後のお芝居でしたので、はねてから、お茶を頂きにまいりました。皆さんは、夢中でこの名女優テリーを賞めていらっしやいましたが、私ばかりは一言も言葉が出ませんでした。と申しますのは、その日のお芝居にすっかり失望していたからです。世界的

なこの名女優の演技を見るのはずいぶん前から楽しみにして、私は、淑かな年若い裁判官が、しずしずと舞台に進み出て、調子もいかめしく、独白をのべるところを想像していました。知らず識らずの中に、私は日本式の理想の型を思い描いていたのです。

ところが、舞台上に現れたポーシャは、真紅の上衣に、同じ色の帽子を被り、まるで、日本の道化役者の身装みまうでした。それに、自由に自然に振舞う様子は、いつてみれば、日本では決して身分の高い姫君の動作ではありません。声は大声の上に、早口で、たとえ仮装とはいえ教養ある、身分ある淑女にはふさわしくないことに思いました。殊に、その所作は、力強く、男性的で、唯、私は驚いたばかりで、何の印象もありませんでした。

ジュシカが恋人に会う月夜の場面でも、二人の男が各々その妻を見出す最後の場面でも、余り接吻が多過ぎて、品がないように思われ、観劇に来たことを後悔した程でありました。

最後の一幕の間中、私を不思議そうに見つめていた、ある婦人が、お茶の席で、私の方へ振り向き、

「日本の舞台でも、恋愛の場面がありますか」とお聞きに

なりましたので、

「ええ、ございます。日本のお芝居は人生のありのままの姿を見せてくれますし、日本人だって、他の国民と変りはありません」と答えました。

「でも、あの最後の場面で、あなたのお顔は赤くなりましたし、何だか、恋愛の場面など、お初めてのように思いましたが」と、笑いながら、その婦人はおっしゃいました。私はできる限りの説明をしました。日本人が過去幾代にもわたって、感情を強く表あらわに現わすことは品を落し、威厳を損うものだとかえられて来たことを一所懸命に説明致しました。けれども、これは感情を抑圧しようとしたのではなく、唯、人前にあらわにすることはよくないとされてきました。ですから、舞台でも、恋愛の場面は躊躇しながら、静かに運ばれますので、アメリカの観衆には何の感銘も与えないかもしれませんが、かくれた心の動きがよく判る私共には日本の役者の重々しい所作から深い感銘をうけます。

「じゃ、恋人同志が……まあ、ひどく熱した時には、どうするんでしょう」

「その時は、お互いに背中を向けあいいます」

「えっ、背中を向け合わせるんですって！ まあ、まあ！」と、驚いた婦人はまた訊くのです。

「日本では、夫婦の間でも接吻しないんですってね、ほんとうですか」

「ええ、お辞儀をするだけです。お辞儀は日本人の心の表現なのです」

「でも、お母さまはあなたに接吻なさいましたでしょう。アメリカへご出発の時に、お母さまは、どうなさいましたの」

「唯、お辞儀をしてから、もの静かに『道中、気をつけてね』と申しました」と答えましたが、まだ、この国に来て日も浅い私は、婦人の顔に浮んだ奇妙な表情や、話題を更える前の一寸した沈黙が、何を意味していたのか、よく判りませんでした。

お辞儀は、唯、体を曲げる動作ではありません。それには、精神的な面もあるのです。父や妹、友達、召使、子供に向っては、それぞれ異ったお辞儀の仕方がある筈です。母が重々しい態度で、低いお辞儀をいたしました時、私にはそこに愛情がひしひしと感じられましたし、傍にいた人も、そのかくれた思いの深さを汲むことができたと思います。

結局、日本人というのは、感情を出さない国民です。ごく最近まで、良家の子女は、強い感情を抑えることを、その心にも生活にも仕込まれて参りました。今では、以前よりずっと自由にはなりましたが、まだまだ過去の教育の影響をうけているものを、美術や文学や、日々の生活のうち、しばしば見出します。親しい友達同士の気のおけないおつきあいにも、どこかに固い作法があり、自ずと感情のみだりにあふれることを避けております。誕生や葬送の儀式なども、これによって律せられ、働くこと、遊ぶこと、食べること、眠ること、歩くこと、走ること、笑うこと、泣くこと、すべて、これによって導かれていくわけであります。感情のすべてに、礼儀作法という枷をかけており、しかも、みなそれを心から喜んでしているのです。ですから、女の子がおかしい時には、袂のかけで笑い、子供が怪我をしても、涙をのんで「泣いちゃいけないよ」といいながら、すすり泣くのです。母がその子の死を告げるにも、失望のかけさえ見せず、微笑んでおり、貴重な陶器をこわしたことを詫げる召使も、内心困りはてていながらも、なお、それと反対の面持でいるものです。こんなことは、外国人には、とても不思議なことに思われるでしょうが、唯、控

えめにひき下つていようとする努力にほかならないのであります。感情を色に出してしまうことは、無作法なこととなっております。

もし、アメリカ人が、日本人の夫婦間の愛情の程度をその動作で判断しようとするなら、それは大変な間違いであります。夫がその妻や子供を賞めるとしたら、自分自身の体の一部を賞めると同じように、決して人柄のよいことにはならないでありましょう。また、妻は、きびしい礼儀作法に従つて、身を処してゆくことを、大きな誇りとしていきます。そして、この礼儀作法によつてこそ、その妻は家庭に威厳と謙遜とを与えるものとせられ、この威厳と謙遜とは、最大の榮譽なのでございます。

もう一言申しますれば、奇妙に思われていることも、説明できるかも知れません。日本語には、代名詞が形容詞で置きかえられています。自分の側には謙遜な形容詞を使い、他人の側には、賞讃的な形容詞を使います。夫が妻を紹介する時には「愚妻でございます、どうぞよろしく」と申しますが、これは、唯「妻にお会い下さいませ」というだけの意味なのです。父は我が子が可愛くて、誇り一杯の折に「豚児」とか「ぶしつけもの」とか申すのでございます。

初めて男女の接吻を見た時のことは、忘れもいたしません。丁度、私が大陸横断の汽車に乗っていた時でありました。私の席の近くに、美しく着飾つた若い婦人がおられ、物ごしはやさしく、内気な人のようにさえ見えませんでした。その方は、結婚後初めて、お里へ行かれた帰りとかでございました。私はその方の、自由な中にも控えめな動作に心ひかれ、どうかして真似たいものと思つていました。ある朝、いつになく念入りに服を着ていらしたので、もうすぐ下車されるのかと思つていました。汽車が速度をゆるめて、駅の構内に入りますと、婦人は夢中で窓の外をみつめておりました。

やがて、停車致しますと、いきなり駆込んで来た青年がありました。そして、その淑かなやさしい婦人を抱きしめて、何度も接吻いたしました。それでいて、その婦人はちょっともそれを気にもされず、唯、顔を赧らめて、笑いながら一緒に下りてゆきました。私は、何ともいえない気持になり、出発前、母が申したことを思い出さずにはいられませんでした。「エツや、異国では、犬のように、お互いになめあう習慣があるとか聞きますが……」

こう申した母は、批評していたわけではなく、ただ、不

思議でならなかつたのでございましょう。私もまた、不慣な習慣が、他人眼にはどんなに映るものであるかを説明するために、母の言葉をひいたままであります。この国に住みついて、この国の感情の表現も、日本のお辞儀と同じく、精神的な面のあることを知りました。接吻が、親切、感謝、友情、愛情を表すものであり、どれもこれも、人の心から心への、聖なるささやきであることを、今はよく理解しております。

松雄は「母上」を大変大切にしておりましたので、日本から新しく商品用の荷が入りますと、何か特に美しいものとか、似あわしいものを見つけては持って帰つたものでした。ある時持つて帰つた小さい漆塗りの箱は、昔の人が腰につけて歩いた印籠のような恰好で、外側には仕切りが入っていました。開けてみますと、重ね箱ではなく、縦二つに分れて、歌留多が入るようになっていました。塗りもよくないし、細工も雑なものでしたが、遊び道具のいれものを印籠に似せて作ったところが、仲々面白い考えだと思われしました。

「アメリカ人はとても独創的な国民です。でも、ここで漆ができるとは、今まで知りませんでした」と申しませ

と、松雄がその小箱を裏返しましたので、見ますと「日本製品」と書いた貼紙がありました。

二三日経ちましたから、私は街のお店へ行ってみました。松雄は棚を埋めつくした日本品を見せてくれましたが、日本人の人がこれを見たら、珍しい欧州の品々だとびっくりなさるでしょう。が、みな「日本製品」のしるしが入っていました。松雄が申しますのに、これは、アメリカ人が自国向きに考案して、日本の工場へ注文し、そこからすぐに船に積んでこちらへ運ぶので、日本では誰もこれを見る人はいないのだとございました。私は聞いていて、ずいぶん変なことだと思いましたが、松雄は肩をそびやかして、「アメリカ人が欲しがって考案し、注文し、手に入れて満足する限り、これを供給する商人があるわけさ」と申しました。

「でも、これは日本のものじゃございませんわ」

「そうだよ。だが、今は、生粋の日本のものだったら売れないのだ。余りもろいし、見た眼にも派手でないから」といつてから、ゆっくりと「唯一の対策は、アメリカ人に日本文化を吹きこむことだよ。やがて、それも始まるだろうがね」

その夜、私はいろいろな考えをつづけて、眠れませんでした。緑や金色のあくだい花瓶や、安い漆塗りの箱や、花簪をさした女の笑顔の絵のついた扇を好む大衆に比べれば、芸術的な眼のある人は数える程しかありません。「でも、もし日本が、その芸術的な標準を下げてしまったら、日本は世界に向って、何を求めたらよいでしょうか。今、日本が持っているものや、今の日本の姿は、その理想と誇りとから生れ出たものであり、高いのぞみも技術も礼儀作法も、みなこの二つの言葉にたまたまこまれているのではないでしょうか」と、溜息まじりに、独り言をいったことであります。

私の知っている庭職人に、時間払いでなく、一仕事ごとに賃銀を貰う人がありました。この人が半日がかりでした仕事を、それも庭石をほんの二三寸動かすだけのことでまたやり直しをいたしました。でも、気に入ったところへ石を据えると、汗をふきふき、その傍に腰を下し、お金にもならない時間を空費することなど、気にもとめず、庭石を眺めながら、煙草をふかしているのですが、その顔には、喜びと満足の色があふれているのです。

この年老いた職人のことを思い出しますと、自分の芸術

を誇り得る喜びを捨てて、何の価値があらうかと思つたこととでありました。私は庭師から職人、教師、政治家のことへと思い及びました。それは皆同じことなのです。誇りをきずつけるということ、努力の結果として到達し得た最高の善なるものをも支え得なくなるといふことは、個人にとつても国家にとつても、その精神の発達を死に導くものでございます。

二十 となりびと

アメリカへ参りました時は、いろいろのことを勉強したいと思つていましたが、となりびとから質問をうけたり、批評を聞いたりして、思いもかけず、様々の角度から祖国を見るようになり、かえって、日本のことを勉強するような結果になりました。

私が一番お親しくしていましたヘレンさんは「將軍」とお呼びしていました隠退政治家のお嬢さんで、宅とは小さな谷をへだてた、すぐお隣りにお住いでした。宅の方の地境には紫丁香の花の生垣がつづき、それが一カ所とぎれて、井戸の方へ続く小径があり、そこにひなびた跳橋がかかっています。ある秋の日、切手を幾枚も貼った小包を膝にのせて、橋のたもとの木蔭に蹲って、郵便屋さんを待ちかまえておりました。郵便屋さんの乗る、妙な恰好の小さな馬車が脇戸をあけた形は、ちょうど、山駕籠のような感じ、ちょうどこの頃、丘を下りてもどつてくるのですか

ら、大事な織模様のある白木綿といろいろな模様のリボンの贈物を、早く日本へ届けてもらいたいと思つて待っていました。

ふと、はなやかな歌声が後に聞えました。

「お口をあけて、お眼々をとじりゃ

お利口になるもの あげますよ」

頭を上げますと、橋の上に白い服を着て、レースの帽子を被つたお友達が美しい眼を輝かせながら、絵のような姿で立っていられました。三四枚の葡萄の葉を莢でつないで、容器をつくり、したたるばかりの紫の葡萄の果を盛つたのを、両手で持っているのです。

「まあ、きれいですこと。日本では、ちょうどそんな風にして、果物をおすすめますわ」

「で、お花はこんな風に持つんでしょう」といって、その葡萄は橋の上り段の上に置き、小脇にかかえた、長い鬼首合の束を差出しました。

「どうして日本人はお花を下向きにしてもつのですか」と訊くのでした。

私は笑いながら申しました。「ここへ参りました頃、皆さんがお花を上向きに持つていらっしやるのを見た時、変

な気がいたしましたわ。お国ではどうしてあんな風になるの」

「そうね——ああする方が美しくみえるからでしょう。それに、花は上に向けて咲くものですからね」

そう聞けば、それももつともなことでありましたが、お花の持ち方など気になる人があろうとは思っても及ばなかったことでありました。私も、日本人は、すべて、ものが適当な地位に置かれるまでは、それを見えないものとして、考えているくせがあります。

「日本人はお寺参りか、お墓参りのほかは、めったにお花を持って歩くことはございません。家の中へ生けるお花は、籠に入れて売りに参ります花屋さんから買います。でも、他人さまに花を差上げたりいたしませんし、殊にお花を身につけるといふことはまあいたしません」

「どうして？」

「それは、お花は潤むからですわ。ですから、ご病人にお花を差上げるなど、一番不吉なことになっていきます」

「じゃ、お気の毒に、ご病人はお花をみる楽しみはないわけですね。日本はお花の国といわれる程ですので、惜しいことです」と

いわれて、驚いたり、考えこんだりしてしまつた私は、そこに黙って坐っていました。が、また、すぐに問いかけられました。

「私がここへ参りました時、何を考えていらしたの。大きな荷物を膝にのせて、黙りこんでいらしたじゃありませんか、まるで、かわいい、きれいな物売りのようでしたわ」

「私が考えていたことは、物売りとはおよそ縁遠いことでしたの。ここに坐って、蹴籠の鎖が下っているのを見ながら、ずっと昔の日本の物語を思い出しておりました。昔ね、ある若者が、想う人の心をとらえようとして、跳橋を九十九度も渡り、百度目の日は、大変な吹雪の日でしたので、橋が上っていたのが見え、谷に落ちて、死んでしまつたのです」

「まあ、ずいぶん、悲しいお話ね。それで、その女の人はどうしたの？」

「その女の人が悪いのです。とても自惚の強い、望みの高い人でしたからね、いよいよその位も高い大宮人との愛を固める段になって、気を変えてしまい、お附の者に命じて、男の人が意気揚々とやってくる百度目の日に橋を上げさせてしまつたのです」

「まさか、その女の人も、殺す気はなかつたのでしょね」

「死んだのは吹雪のためなのです。唯、その女の人は移り気なだけで、悪人ではなかつたのです。男の人は、橋の上っているのを見たら、こちらの心を汲んで、帰って行くだろうと思つていたのでですよ」

「アメリカの女の人も、仲々移り気なところがあると、お母さまがおっしゃいましたわ、でも、ここの人はそんなことは致しません、その女の人は、ほんとの人殺しですものね」

私は自分の話した恋物語を、こんな風に実際的な見方をされて戸惑つてしまいました。それで、急いで、小町はそのことを悔いて、尼になり、亡き人の供養のため、一生、諸国の寺々を巡礼したこと、最後には小町は心乱れ、乞食姿となつて、富士の裾野のあばら家にその生涯を終つたことを話しました。「お坊さまは、よくこのお話をひいて、移り気な娘をいましめたものですよ」

ヘレンさんは深い息をしながら、

「なるほどね。でもその女の人は、自分の愚かさのために、ずいぶん大きな犠牲を払つたわけですね」

私はこの言葉をきいて、又、驚きました。

「さあね、そうかも知れません。でもね、私達は、女が淑やかな慎みを失つてしまつて、真面目な恋人を敬わないようでは、女らしい女でないと思われなりましたの」

「じゃ、男の方で、女を捨てたら、どうなりますか、男としての価値がなくなつてしまいませんか」と、ヘレンさんは、すかさず問いつめました。

私には、どう答えてよいか判りませんでした。私は幼い頃から、男は保護者であり、指導者であるし、女は、自尊心はありながらも、批評をまじえず、真面目な内助者であるべきであると教えられたことを、本能的に守りつつけて参りましたが、その後も、ヘレンさんとは、心を割って話しあいましたが、その質問や批評に、ある時は驚き、ある時は困らされたことでありました。私は日本の習慣の多くを、あるがままに受け入れており、ご先祖さまもこうなされたし、今でもそのままに行われているのだと思う外に、別に深くも考えてみませんでした。そして、賢明な為政者がお定めになった法律に叶っている故に、正しいことだと思つていましたことなどを、問題にしてみますと、自身で判らなくなつてしまい、あわてたこともございました。

「私は余り乱暴になって、男の人のようになったのじゃないかしら。でも、神さまは使うために、この頭脳を下さったのだから、使ったって、ちょっと悪いことではないけれど」と、独りで思ったりいたしました。子供時代には、心の奥に思うことの一切をかくしておりました。そして今でもそれはちょっとも変っていませんでした。アメリカの「母上」はそれが判っていて下さったのですが、私は知らないでいました。ですから、表に出さないようにと、努めては、唯一人で思い迷うのでありました。それも、私のためではなく、愛する祖国のために、高い理想を追い求めていたのです。

ヘレンさんのお父さまは、私が初めてお会いした時、九十歳でいらっしやいました。なかなか面白い方で、お背は高く、肩幅は広く、唯少し腰をかめてはいらっしやいましたが、灰色のお髪は豊かで、濃い眉の方でした。お顔は仲々にかめしい感じでありましたが、お話をなさると、やさしい、剽軽なお顔附になるのです。私は、このお方を、アメリカ歴史に精通した方として、尊敬しております。幼い頃から学校時代にかけて、歴史のお話を聞くことは大好きでしたが、アメリカの歴史については、殆んど何

も知りませんでした。それで、病弱なご夫人と一緒に、將軍のお話しになるアメリカの初期の歴史を、よく伺ったものでありました。將軍は、私が個人の史伝に殊のほか興味を覚えていることを知って、あの時、この広い屋敷は、將軍のお父さまが、アメリカ土人の酋長と、椅子一つ、銃一挺、煙草入一つと交換されたとか、將軍のお母さまの大きなお宅は、もと土人の天幕村だったのを、台所椅子半ダースと取替えたのだと、お話しになりました。どこのお家でも、その祖先は遠い昔にさかのぼっているものとのみ思っていました私は、こんなお話を伺いますと、有史以前のこのように思われてなりませんでした。

アメリカが生れて間もない頃、將軍は外交官として、若い美しい夫人を伴って、パリやワシントンの社交界に活躍されました。この夫人の手にとるようなお話を通して、私は、外国におけるアメリカ人の生活を初めて知らされたことでした。そして、夫人のご経験を伺うにつけ、日本において、日本を理解しようと努めているアメリカ人に同情を持ち、その幾分を理解するようになりました。

この將軍にお会いいたしますまでは、「古代」という言葉に、尊敬の念を持たせられておりました。生家が幾百

年と続いた、古い家柄であり、墓所は故郷の菩提寺では一番古いものであったことを、私は知っておりました。そして、代々、祖先が守りつづけて来た習慣に従うことは当り前のことと考え、世界屈指の古い祖国の習慣に、誇りさえ感じておりました。

ところが、この將軍とお近づきになり、生れて間もないアメリカが、めざましい発達をとげた物語を伺い、「古代」という言葉は、これまでとは異った意味を持つように思われました。ただ過去の光栄を振返って、誇りにしてばかりいないで、むしろ、輝かしい将来を待ちのぞむべきであるか。過去を振返れば、静かな満足があり、未来をのぞむことは、希望に燃えた事業を意味するのかもしれない、などと考えてみたりいたしました。

松雄と一緒に、將軍のお宅へ招かれた夜、ヘレンさん私も私どもを見送って、跳橋のところまで来て下さいました。松雄は家に帰りましたが、ヘレンさんと私は、例のように橋の上り段に腰かけて、お話を始めました。

「お父さまがモレ・ピッチャーのお話をなさった時、あなたは日本の女の人のことを考えていらしたのじゃありませんか」

「どうして？」と訊き返しますと、

「さあ」とヘレンさんはためらいがちに「でも、アメリカ婦人は日本婦人によく似ていると始終おっしゃるでしょう。でも、モレ・ピッチャーのような婦人は、日本にはいないでしょう」とおっしゃいました。

「そんなことはありませんわ。あなたは日本の歴史をご存じないからよ。たくさん女丈夫がいますよ」と、私は思わず熱をこめて申しました。

「もちろんそうでしょう。どこの国にも、時に応じて、ふるいたち、犠牲的なことを成遂げる女丈夫はありますけれど、本で読んでも、旅行者のお話を聞いても、日本婦人は静かで、物言いもやさしく、おとなしい人だということになっていきますよ。アメリカ婦人とは型がすっかり違っていますね」

「教育の仕方が違うのですよ。心の奥底は同じことだと思います」

「そうね、もしアメリカの女に、感情を袖に包むことが流行ったら、やさしく、おとなしく見えるかも知れませんね。でも」といって、立上りながら、ヘレンさんは言うのでした。「先程もご主人とお話して、今読んでいる、日本のこ

とを書いた本で、著者が『謙遜と温順の点では日本婦人が第一位だ』と申しているのと同じく、ご主人は笑いながら、いかにもその通りとおっしゃるようになり、ありがたうとおっしゃいました。」

私は真面目に申しました。「へレンさん、日本婦人はおとなしく、やさしい人に描かれていても、日本の男の人がそのまま受け取られても、日本婦人の温順の中には、火山脈をしのばせているということは事実ですよ」

へレンさんは笑いました。

「シカゴの博覧会以来、日本婦人を見るのは、あなたが初めてですが、あなたが火山のようだとおっしゃるのも思えませんわ。でも、あなたのお説には負けておきます。あなたはモレ・ピッチャーのような人が日本婦人にもあるとおっしゃり、いつだかお話しして下さった、あの女の人は移り気です、そして、今夜は火山だとおっしゃるし、どうも日本の真面目な、田舎臭い人の中にも、ずいぶん素晴しい人がいるので、今度来た時には、ほんとの日本の女性権張張婦人のお話でも聞かせて下さいね」

「おやすいことですね。ほんとの女性権張張婦人は、女性権を求めるのじゃなくて、もう女性権を獲得しているんですもの。」

こんなことになったことの起りは数百年の昔にあります。当時、男はみな四十哩も距てた島へ出かけて行って、八丈島附近ではできない漁業に従事しなければなりません。ところが、この漁業よりも織物の方が有利だということになり、男は島に帰って来ましたが、その時には島の掟は女の手中にあり、男の手には返らなかつたわけです。

私はこんなことをへレンさんにお話し、最後に「あなたに考えて頂きたいことは、こうして島の掟までが女の手にあつても、その島は健全な幸福な生活を続けているという事実なんです。そして、ここは、道徳的にも、日本中で一番きびしい処だときいておられます」と言葉をおぼせました。

「婦人参政派に入つて、その講演をして廻るといいですね、道徳を高めることにもなるし、その主義に賛成する人も出てきますわ。ともかく」といって、へレンさんはもう一度立上り、「日本婦人は想像とはすつかり違つていますから、まずまずアメリカ婦人と似ていないことを確信いたしました。私達はよく話しますし、喧ましい程に公のことに興味を持っていますから、何でもできそうだと思いますわ。どうしても、世界を驚かすようなことはできません。でも、控え目でおとなしい日本の婦人が突然起

女性権というのが男の人の仕事をする権利という意味ならば、私はすぐその例をお聞かせいたします。稲を植えたり、島の掟をつくつたりまで、女の手でしている島がございませう」

「じゃ、男は何をするんですの」

「お料理、家事、子供の世話、洗濯などするのよ」

「まさか、ご冗談でしょう」と言つて、へレンさんは、また腰を下したのでした。

でも、私には冗談でも何でもなかつたのですから、八丈島のお話をいたしました。その島では、女の人は背が高く、美しく、髪の毛は頭の上でひき結び、ゆるやかな裾の長い着物を着て細い帯を前結びにして、田を耕し、椿油をしぼり、特殊な黄色い絹糸をつむぎ、織り、それを頭にのせて、犬ほどの小牛を追いつながら、山を越えて、本土へ売りに出てくるのです。そればかりでなく、なかなか立派な島の掟も定め、それがうまく行われております。一方、男の老人は赤ん坊を背負つて、使い走りをしたり、街角に立つて噂話をしたり、子守歌を歌つていたり、若い者は野菜を洗つたり、切つたりして、食事の用意をし、エプロンがけで川で洗濯をしたりしています。

つて、思いきつたことをなさると聞いて、これまで思つていたことが、すつかりひっくりかえつてしまいました。それに、その島のように、女の手ですべてが静かに、しかも有効に運んでいけると聞きますと、ますます面喰つてしまいましたわ」

へレンさんは橋をわたりながら、振返つていふのでした。「ともかくあなたは草履をはく人の中では、一番やさしい人だと思つていますけれど、あなたのおっしゃることに承知できません。アメリカ婦人は日本婦人とは違いますよ——お気の毒さま！」

むやみに私の肩を持つてくれるこの友の、途方もないお世辞をききながら、玄関の方へ歩き出しますと、橋のむこうの暗闇から、突然、声がかかつて

「ニュートン夫人のことを忘れていましたわ！ 私の負け、あの方こそ日本人をつくりね、さよなら」

私はその朝「母上」が話して下さつたニュートン夫人のことを思い出し、笑いながら玄関の方へ近づいてゆきました。ニュートン夫人はへレンさんとは反対側のお隣りの人で、よく存じ上げておりました。この方はお声のやわらかな、内気なおやさしい方で、小鳥を大変にかわいがつてお

られて、お庭の木々に小鳥のための巣箱をたくさんつるしておいでになりました。ヘレンさんがニュートン夫人こそ日本人そっくりだとおっしゃったわけはよく判りましたが、私にはどうしてもそうは思えませんでした。夫人の物の考へ方は常識的であり、实际的でありました。そして、ご主人にコートや傘の世話をやかせながら、平気でいらっしやるのでした。ある時など馬車の中で、ご主人が夫人の靴の紐を結んでいられるのをさえ見たことがあります。

ニュートン夫人について「母上」から聞いたのはこんなことでした。二三日前、夫人が窓際でお裁縫をしていられると、驚いたような、小鳥の啼声が聞えて参りました。ふと見ると、低い枝につるした小鳥の巣箱を、大きな蛇がねらっているのです。夫人は縫物を投出して、ご主人の銃を持出し、窓から発砲し、蛇の頭をあやまたず打ちぬかれましたので、小鳥は救われたということでした。

「よくもあの奥様にそんなことがおできになりましたこと。あのきしゃな奥様が銃におさわりになったということだけでも信じられそうもございませんわ。街で犬に会ってもこわがっていらっしやるし、お母さまが不意にお話しかけになると、じきにびっくりして、顔を赧らめておしまいにな

なるのに、どうしてまあ、上手に蛇などおうちになれたのかしら」と、私は「母上」に尋ねたのです。

「母上」は笑って、
「ニュートン夫人は、あなたが思い及ばないようなことを、何でもなさいますよ。ご結婚当時は、数年間、西部のさびしい牧場に住まっていたられました。ある吹雪の夜、ご主人のおられぬ留守に、あの銃を腰につけて、暗闇で危険なかを六哩も歩かれて、怪我した労働者を助けて来られたのですよ」と申されました。

私はニュートン夫人のもの柔らかなお声や、もの静かで臆病とも申すべき動作を思い浮べまして、「結局、あの方は日本の婦人に似ていられるのだ！」と自分で自分に申したのでした。

二十一 新しい経験

幾週も幾月も過ぎ去る中に、目新しいと思っていましたことが、遠い過去に深いつながりを持っていたことに気づきました。日ごとの経験を通して、アメリカが日本によく似ていたことに気づいていたからです。時が流れ去るにつれ、もの珍しい周囲の事情は、古い記憶の中にとけこみ、私の生涯は、故郷の子どもの時代から、これまで、少しも乱されることなく、坦々と流れて来たもののように、思い始めて参りました。

教会の鐘が「日——日の——み——めぐみ——ゆめ——な——忘——れ——そ」と響くのを聞きますと、「生——滅——滅——己——寂——滅——為——楽」と鳴る菩提寺の鐘の声かと思われるのです。

朝の八時半頃、学校道具を持った子ども達が街一ぱいに笑い合い、呼びあって行く姿を見ますと、日本の朝の七時半頃、男の子は制服、女の子は袴をつけて、お下げ髪もつ

やつやと、お道具は風呂敷包みにして、下駄の音も高らかに、行きかう様を思い出しました。

ヴァレンタイン節（愛の神の祭、二月十四日）にひざまずく騎士の姿、紅いハート型の紙を薔薇づるに結びつけ、甘い思いを燃ゆる詞に書きなすのは、七夕祭に笹をたてて、色とりどりの短冊をつるし、霧ふかい天の川の岸でめぐりあう牽牛、織女のため、空晴れよと祈るのに似通っているのです。

また、こちらの戦死者記念日（五月三十日）には、米國獨立戦争と南北戦争の戦死者を記念し、演説会に愛国心を鼓舞し、小さい星条旗やお花で勇士達の墓を飾るのを見ますと、日本の招魂社の祭礼に、一日中、ひきもきらず社前にぬかずく幾千の人の群がつづくのを思い出したのでした。七月四日、獨立記念日に、国旗をひるがえし、爆竹をならし、太鼓をうちならし、狼火をあげるなど、二千五百年前、神武天皇が即位し給いし日を記念する紀元節に似ているのです。

万聖節（十月末日）に、奇怪な提燈をつるしたり、魔女を出したり、いろいろの滑稽を見せるのが、故郷北越の作祭にあたっていました。作祭には南瓜の中味をえぐりとって、

巧みに花提燈をつくり、幽霊遊びをしたり、丸顔の娘のいる家の前に、南瓜をうす高く積み上げたり、日頃、吝嗇な農夫の鼻をあらし、とったものは墓場にすてて、乞食が持ち去るのにまかせたりいたしました。

この国の感謝祭(十一月の最後の木曜日)には、遊学中の学生達も帰省し、息子娘達もそれぞれが打揃うて両親を見舞い先祖がそのむかし野山で狩った食糧中で珍味とした七面鳥の料理や野生の蔓苺のバイを作って楽しく過すのが、故郷の年忌日を思い出させました。この日は、やはり他家に嫁いだ娘も、分家した息子も、子供づれで集り、お赤飯におかしらつきのご馳走に舌つづみ打ちつづ、くつろいで話しあい、仏壇の扉は開け放たれて、ご先祖方は、孫子をやさしく見守っていらつしやるのでした。

クリスマスには街中が華やかに飾られ、大きな荷物を持った人々が忙しそうに行きか、クリスマス・ツリーもきらびやかに、贈物も数々取交わされ、輝く星と聖母と聖子の誕生を記念する、この聖き日は、日本のお正月の松の内にも似ておりますが、唯一つ、古曲を奏でるものやわらかなオルガンの音と、嬉しそうなお子どもが声はりあげて歌う歌との違いがあるだけなのです。お正月には門毎に注連縄

を飾り、門松をたて、子どものはなやかな笑い声と、木履のかげに鳴る鈴の音、羽子つきの音、人毎に交すお慶の辞が辺りの空気をゆすぶるのです。どこの家でもお餅をつき、赤ん坊も二歳になり、女の子は新しい帯をしめ、男も女も入りまじって、歌留多とりに興じまして、日本のお正月は楽しいことばかりでありました。どちらを向いても固苦しさはなく、古き藪はうちやぶられ、蝶々は舞いいでて、また新しい世界が始まろうとしているようでありました。

こちらで初めて迎えたクリスマスには、私はすっかり失望いたしました。私も三人は、ある婦人のお招きをうけ、教会のクリスマス礼拝を守ってから、その婦人のお宅に伺い、ご馳走になったり、クリスマス・ツリーを見せて頂きました。そのお宅にはお子様がありましたので、私ははなやかな楽しさの中にも、尊厳さのこもった情景を心に描いておりました。ところがクリスマスの意味を深く考え過ぎ、余り理想化し過ぎていましたためか、精神的なものと物質的なものが妙に入りまじっていましたので、何だかすっきり解らなくなっていました。クリスマス・ツリーにとりつけた星も、惜しまず人にとこそ精神も誠に美しいものでありましたが、それは教会内の事で、一歩外に出ま

すと、そんなものは殆んどみられず、木にとりつけた星の下には、はぜきび(バブコーン)や野生の蔓苺など、食物がづらなっているのです。贈物を交換する他は、この日特有のことといえは、ご馳走をふるまったり、人前に出しては下品に思われる靴下を人目につくところにつるして、玩具や宝石、時にはお菓子や果物まで入れるという奇妙な習慣があるばかりでした。この靴下だけは、日本人には理解できないことであります。

その夜「母上」とヘレンさんのお宅へ伺いました。広い静かな客間には、白い布をしき、その上には白雪を形どった綿をしきつめ、また銀紙できらきらと美しい飾りをつけたヘレンさんの大きなクリスマス・ツリーが立っていました。その木はとても立派でした。アメリカの摩天楼を仰いで、小さな輪塔を思い出すように、この大きな美しいクリスマス・ツリーをみては、故郷の藪玉の枝を思い出さずにはいられませんでした。藪玉の枝というのは、いろいろの形に型どった餅花を細い枝につるし、軽い息にも揺れ動くさまは、この世のものとも思われませんでした。ヘレンさんのご両親もお出ましになり、ともどもに、日本とアメリカのお祭日のことなど語りあっておりますと、姪御さんや、

ご近所のお子さんがクリスマスの歌を唱って下さったものですから、初めて、私の心に描いていたクリスマスが実現された気持で、大変嬉しゅうございました。

クリスマスの翌日、初雪をみました。鳥の羽のように乾いたこの雪片がひらひらと舞うさまがふわふわした絹の霏を思わせると致しますと、越後のうるおいを含んだ大きな雪が、重たげに降りますのは、重い木綿の打綿を思わせるのであります。その雪は一日中ふりつづき夜を迎えた頃にはいよいよ深くくなってあくる日は一面の銀世界となりました。

馬車道が表通りとつらなる曲り角に、御者の家がありました。その三人の子ども達が、裏の芝生に雪だるまを作ってもよいかと、「母上」に尋ねていました。「母上」がおゆるしになられましたので、面白い事が始まりました。子ども三人は大きな雪のかたまりを作って、その上に小さいのをせ、半手袋をはめた赤い手で叩いたり、抑えたりしてから、いい加減に顔を描き、石炭できらめくばかりの両眼を入れ、胸のあたりに一列に黒いボタンを並べたり致しました。父親の古い帽子を被せ、何処から見つけて来たのか、煙管までくわえさせて、仕事は完成しました。いかに

も不恰好なその姿は、勤行精進のあまり、両足を失った印度の達磨大師を思い出させるのでございました。

アメリカで、仏菩薩にお目にかかろうとは、思いもかけないことでありましたが、私はこの似姿を喜んで迎え、子ども達にはお話を聞いて聞かせて、その労をねぎらってやりました。そのお話は、面白い米搗き男が、杵をすてて、新しいお宗旨を起しましたが、自分の像を拜ませたりしないで、面白い玩具に作って、子どもに喜ばれるものになりましたと願っていたというお話でありました。

その後、よそで雪の達磨を見ましたが、驚きましたのは、赤い外套を着たお姿が、かねがね見馴れた達磨さまそっくりでしたが、誰も、達磨の物語はもとより、その名さえ知っていない人はありませんでした。これまでにも、達磨が色々な形に作られて、子どもの玩具になっていたのを知っていましたが、ある夜カルタ会に、小さな赤いおきあがり小法師が賞品に出されていたのを見まして、すっかり驚いてしまいました。

「ずいぶん、妙な賞品ですこと。どうして達磨さまになすったのでしょう」と松雄に尋ねますと、
「ちょっとも妙じゃないよ、丁度いいじゃないか。どんな

に倒れても、すぐまた起き上るんだから、賞品にはもってこいだよ。倒れても束の間というのだよ。判るだろう」との答でありました。

日本では、時に達磨さまに対して、敬いのない取扱いをする場合がありますが、そこには、愛情がこもっていません。その夜、松雄のあとに従って、家路を辿りながら、私の心はいささか乱れておりました。家の鉄門に辿りつきました時、私は粗略な扱いをうける達磨さまをかばいたい気持ちから「あなたか私かが、あの達磨をとってくればよろしかったのにね」といって、松雄を驚かしたことでございました。

数日も雪が消えないことは珍しいことでしたが、「母上」は笑いながら、私がホームシックにかからないようにとの、アメリカのお天気の様々の特別なお祈りだとおっしゃいました。ともかく、雪が降り続いて、襦を見かけるようになりました。襦には毛皮にくるまった女の人達に乗っており、楽しそうに笑い興じ、派手なスカートをなびかせながら、駆けぬけてゆくのはまるで、お芝居でも見ているようでした。深い雪の上を、藁雪沓をはいた男達が「エンヤラヤエンヤラヤ」の声にあわせ、重い襦——それは仕事の

ための襦で、遊びごとではありません——をひいてゆく、越後の雪の日とは、ずいぶん違った眺めでございました。

気もすみきった、越後の国に降る雪の美しさと、真白に浮び上る山腹のすがすがしさを、どれほどこいしく思ったこととございましょう。ここでは、煤煙のため、雪の白さはほんの二三日で失せてしまうのでございました。が、子どもの喜びようは、西も東も変わることはございません。達磨さまはどここの庭の芝生にも立ち、街は雪なげをする子ども達で賑わっていました。ある日、窓際に立って、雪合戦を見ていますと、二つの樽と一枚の板を積み重ねた後に踏止って応戦する数人めがけて、攻撃隊が勇しく攻めよせていました。やがて、攻撃隊が休戦を告げ、援兵を求めて街中を駆けまわり始めましたので、私は窓を押しあげて、心からの拍手を送りました。

男の子達は楽しそうに遊びたわむれましたが、踏みよこされた雪や、雪だるまのすすけた色を見るにつけて、またしても私の思いは昔の物語りにかえって行くのでした。母のまだ若かった頃、ご城内の庭で、よく雪合戦があったと話してくれた、あのいしの物語を思い出すのでございました。当時、大名の生活は、どんなに小さいお城の主でも、

將軍さまの大奥にまねて、なかなか贅沢なものでございました。

冬の来るのが遅い時には、折り折り、軽い乾いた初雪を見ることがありました。そんな雪の降ったあくる日は、越後の空は美しく晴れて、冷たい中にも朝日が輝き、雪につつまれた地面は銀色に光るのでした。すると男はたばさんだ両刀をはずして、袴の股立ちを高くとって、広い内庭にはせ出るのでした。やがて、裳裾をからげて、緋の襦袢を見せ、長袖は、色鮮やかなすきにからめた女の人達も庭へ出てまいります。雪の美しさをけがすまいとて、誰も彼も木沓も下駄も穿かず、白足袋をはいているばかりで、頭にも何も被らず、髪かざりを鳴らしながら雪合戦をするのでした。駆けまわり、さざめきあい、あたりに飛びかう雪、くだける雪だまのかけに、美しい袖が乱れあい、雪をかぶった黒髪が、見えかくれするのです。召使達は、よくこのはなやかな昔語りをしてくれましたが、中にも、一番年かさのばあやほ溜息まじりに、頭をふりながら、今のエツ坊さまのおたのしみといえは、街の雪山をかけるのほったり、学校のゆきかえりに雪沓をはいて、お姉さまと走りくらべをなさるくらいが関の山ですね、といったりいたしました。

この近所の子ども達は、雪沓滑りなどしていませんでしたが、滑走にはなかなか興味を覚えるようでありました。その名のように丘の多い郊外でしたので、どこの家の芝生にも、傾斜の一つくらいない処はありませんでしたが、雪が浅いものですから、その上を滑られては芝生を壊されてしまいますので、どの家でも滑走をいとうのです。歩道の雪はかきのけられますし、車道には出られません。また年かさの子ども達は長い傾斜地を見つけて占領してしまますので、小さい子どもは傍に立って、見物するばかりでした。よくよく親切な友達か兄でもいますと、時に滑らせてくれることもありました。

ある日、四五人の女の子が、赤い櫛を二つ持って、家の門のところ立って、長い芝生をうらめしそうに眺めておりました。

「子どもに滑らせては、跡が汚なくなるでしゅうね」と「母上」に申しますと、

「汚くなるとか何とかいうことではありません。あんな小さい子どもが滑ったって、芝生は何ともなりはしません。危いのですよ。間に二つも砂利道があり、それにぶつかったり、その上、下の石塀につきあたるでしょう。それに塀

が余り高くありませんから、櫛はあれを乗りこえて四尺も下の歩道に飛びだすかも知れません。そんなことでもなったら、大変ですものね」とおっしゃいました。

その日の午後、「母上」と一緒に、クラブのお集りに出かける途中、ミラー博士のお宅の前を通りました。この芝生は小そうございましたが、近所では一番きれいな芝生でした。車道のところからすぐ丘になって、やや急勾配の斜面をつくってのぼり、上は平らな広場になっておりました。そこへ十二三人の子どもが集っておりましたが、見れば、先刻の赤い櫛の女の子達もまじっておりました。長い一筋の跡がついており、その上を、嬉しそうに叫びたてる子どもをのせた櫛がひっきりなしに滑っておりました。下りの櫛とすれちがいに、鼻先も頬も薔薇色に染めた子どもが、喘ぎつつ、叫びつつ、櫛をひきひき上ってゆきます。何のことはない、世界第一の滑走者だと、得意になっていたのです。

毎日毎日、雪の降っている間中、その丘は子ども達に占領され、滑り下る子どもをよじ登る子どもに笑い、浮べ、胸に喜びをたたえ、心の奥深くには、無私と親切と敬虔との芽生えを宿していたのです。こうしたものは、子ども

の立場に立って考えることのできる人の親切のみが植えつけることのできるものなのでございます。

思えば、私の父もこういう親切なことをよくした人でありましたので、その後、ミラー博士のお姿さえ見れば、街ですれ違った時でも、真面目な聡明なお顔の蔭に、亡き父の心を窺うことができずまいかと思わぬことはありませんでした。まだ、はっきりそれと認めたことはありませんが、きっと、父の面影があるに違いないと思っております。三途の河の彼方では、父とミラー氏との美しい魂は必ず友として結ばれるに違いないとも思っております。

一月は私共二人に、しずかな喜びをもたらした月でございました。数週間、日本からはしげしげと使りがあり、時には、大谷叔父の楯形判や実家の角印を捺した小包も届きました。

小包の中には、岩田帯と紅白の鶴の子餅が入っていたのもありました。

これは「五ツ月の祝」として、故郷の母から送られたものでございましたが、遠くにいても考え深く、愛情こまやかな母なればこそと感謝を捧げたことであります。アメリカの「母上」に説明するにも、涙を抑えることができず、

「母上」もまた、この神聖な儀式の意味をよく理解して下され、その用意を日本の習慣通りにしたいとて、しきりに心配して下さるのです。

この式には、夫婦以外には、両家の女ばかりが出席する事になっておりました。若い未来の父は妻の傍に坐り、帯は夫の袖を左から右に通し、それから妻の腹部にまきつけるのでした。それ以後、その妻は「ひきこもりの女」となり、食物も運動もたのしみも読書もみな生れ出るもののためになされるのでした。アメリカのお店でよく見かける、日本から輸入の色さまざまの糸でかがった毬なども、こうした女の人が弄ぶものでした。

岩田帯と一緒に、いしからの護符が入っておりました。この護符を頂くのに、いしは二日ばかりで、鬼子母神のお寺へお参りしたということでありました。いしはその紙の護符が、一切の災禍を防ぐものと信じていたのでございました。

鬼子母神について、こんな伝説があります。まだ、仏様がご在世の頃、たくさんの子持ちの母が大変貧しくて、子どもにろくろく食物を与えることもできず、唯餓死するのを見守るばかりでありました。母親は苦しみぬいたあげく、

その愛の心が変わじて、悪鬼となり、夜ごとに村里をさまよいて歩いては、赤ん坊をうばい、魔法を使って、それを我が子の食物に変えて、与えるようになりました。やがて、その名が国中の人の恐怖の種となってしまいました。仏様は母親がどんなにたくさんの子を持って、末の子を一番に愛するものだというをご存じでしたので、この鬼女の末子を奪いとり、鉄鉢の中へ隠しておしまひになりました。子どもの泣声は聞えながら、そのありかは何処とも知れませんが、鬼女も苦悩と悲歎に狂乱の姿となりました。

慈悲深い仏様は赤子を鬼女の手に戻しながら「聞け、世間の母達は十人くらいの子しかさずからぬに、汝はすでに千人の子をさずかったではないか。しかも、その一人を失ってさえ、さほどに歎き悲しむものを、他人の痛める心の程を、その心をもて察してみよ」と仰せられました。

鬼女は、我が子をひしと胸に抱き、感謝の涙にくれました。その時仏様は熟した石榴の実を鬼女に授け「これこそ汝の好む味わいをもつ木の実であるぞ」と仰せられました。鬼女の心は懺悔と感謝にいやされ、末永く幼児の守り神となることを誓いました。こんなわけで、鬼子母神は鬼面の女神で、幼な子にとりまかれて立ち、帷帳にも飾りにも、

すべてに石榴の模様がつかわれているわけでございます。

小さい産衣を縫いながら、私の心にはこの昔語りの思い出がひろがり、一針ごとに生れ出る子が男の子でありますようにと祈りをこめるのでした。私は男の子が欲しいと思いましたが、それは、必ずしも、家名を嗣いでくれるからという、日本的な考えからばかりではなく、もし私が男の子を生めば、松雄の家でも里方の家でも、一段の誇りをもって、私を見てくれるであろうと考えたからでございます。日本では、どの階級でも、男は女にまさるものとなっておりますが、私どもは二人ともそんなことを思ったことはありませんでした。けれども、現在のような法律や習慣では、日本で男の子のないことは、非常に不便なこと、否、不幸でさえあるわけでございますので、初子が男の子であれば、大変おめでたいこととして祝福されるのでございます。

しかしながら、女の子も喜ばれます。息子ばかりで娘のないのは、娘ばかりで息子のないのに次ぐ、大きな不幸なのです。

日本の家庭内のいろいろの掟は、古えの信仰を基として、築きあげられた風習によって定められたものであり、その

風習はできました当時としては立派なものであり、当を得たものであったでしょうが、世界が動き、時代が移るにつれ、行き詰りを来すことがあり、それは進歩的な人々には殉教を意味することがございます。この少数者が、いずれは消えはてる旧い觀念にもさからわず、主義主張をまげないでもすむような場合は、穏かに妥協してゆく方が、まどえる多くの人々のためには、賢明な、又、親切なやり方ではないかと思われまふ。たとい遅々とした歩みでありましても、人類が進歩していることは確かなのです。自然は決して急ぎません。そして日本人は、この自然を師としているのです。

「母上」は花つくりにかけては、不思議な腕をふるわれたものです。春になると、縁側の一方に重々しい錦のカーテンをかけたかと思われる程に紅のつる薔薇が一面に固い薔薇を宿すのでした。ある朝、松雄を玄関へ見送ってから、何時になつたら、薔薇が咲くかしらと思ひながら眺めておりますと、「母上」が出てこられましたので、

「ずいぶんたくさんの薔薇ですこと、これが咲いたら、さぞかし美事な四阿になりましようね。日本人は薔薇には棘があるので美しいとは思わないのです。が、ずいぶん惜しい

ことをしておりますね」と申しますと、「母上」は笑いがら、

「でも、伝説があるために、日本人にはずいぶん楽しみも深いわけですね。昨夜、あなたに教わった、

はちす葉のにこりに染まぬ心もて

何かはつゆを玉とあざむく

とかいうお歌など、いい歌ですこと。まだほかに教えにみる花はないのですか」とおっしゃるのでした。

「梅の花がでございます。雪の中に咲きはるあの花は花嫁の花とされております。勇氣と忍耐とを象徴しているからでございます」

「では、桜はどうですか」

「それはまた、なかなか意味深い花でございます。

名残なく散るぞめでたき桜花

ありて世の中果てのうければ」

すると、「母上」は手を打って大声でおっしゃる。

「それは面白いことーこれでは、二人で一流とまではゆかないまでも、歌合せをしているようですこと。まだほかに花の歌をご存じ？」

「ええ、ございます。朝顔の句がございます」と、私はす

ぐに、

朝顔や目見えを急ぐ日の御影

の古句を、日本語で申しました。

「ねえ、お母さま、二人でこうしてお話しておりますと、まるで日本に帰ったようでございますこと。日本では、お友達同士集って、お歌の会をいたします。お花見の時は、できた歌を花の枝につるし、お月見には、月の光を仰いで、歌を詠みます。一面の田の面に、月が照り輝きますと、田ごと田ごととその影がうつり、それを、山腹から眺めると、とても美しくございました。皆、静かな、平和な、すがすがしい気持ちになって、家に帰るのでございます」

「ああ、そうそう」と、「母上」は大声にいつて、くるりと向きを変え、入口の方へ行きながら肩ごしに「歌合せで思いついたことがありますよ」とおっしゃり、家の中へ消えておしまいになりました。

この家に日本人がいることを聞いて、ある人が朝顔の種子を下さったのを、思い出していらしたのでした。「母上」は鏡をもってひき返して来て、「すっかり忘れるところでした。日本の朝顔を植えてとられた種子なんですよ。その方のお話によりますと、花が四、

五寸もあつたとかいふことでした。どこへ蒔きましようね。日本の孫種子だから、いい所へ植えたいと思ひますが」

「いいところがございますよ」と、私は大喜びで「母上」の手をひいて、古めかしい井戸端へおつれしました。以前、ここで、私は「朝顔につるべとられてもらい水」の句を、お聞かせしたことがあります。

「母上」も喜びで、井桁の罫りに種子をお蒔きになり、私は傍で「朝顔につるべ……」の句を何度も口誦んでおりました。

やがて芽を出した朝顔が、日ごとに蔓をのばしてゆく様を、二人であかず眺めておりました。

「母上」はよく「この花が咲く頃には、赤ちゃんが生れるでしょうね」とおっしゃるのでした。

ある朝、二階の窓から眺めていますと、「母上」とクララが井戸端でしきりに話していました。二人は朝顔の蔓を見ながら、何か熱心にいいあつていたのでした。私は急いで、階下に下り芝生をよぎって近づいてみますと、花が咲いているのですが、色もうすく、小さい花で、日本で珍重するような大輪の花には似もやらぬものでした。日本の花は異国の土地を嫌い、二年目からは次第次第に枯れてゆく

ということを、何かで読んだことを思い出しました。する

と、はたと胸を衝かれる思いで、これまで、生れ出る子が男の子でありますようにと、我儘な祈りをして来たことが悔いられ、異国に生れる哀れなひ弱ささえなければ、男の子でも女の子でも、感謝して受けたいと、心ひそかに誓ったものであります。

その後間もなく、赤ん坊が生まれました。達者で愛らしく、強く、幼いながらも、日米両国の伝統を見せているのでした。私は男の子をと祈ったことなど忘れはて、松雄も初い子の顔を見て、自分は本来、女の子の方が好きだったなど申して私を労わってくれました。

鬼子母神の護符のお蔭がありましたのかどうか、いしがいてくれたらと、叶わぬことを願っていました数週間、いしの真心を思うだけでも、大きな頼みになったものでした。ともあれ、いしがここへ来たといはしても、このアメリカ式にはなはずめず、困ったことでございます。それに、色とりどりの衣にくるんで、おんぶし、ねかしつけるような、やさしい、もどかしい方法では、この元氣一杯の赤ん坊にはとても間にあいそうもなく、この子はじきに喜びの叫びをあげ、抱きあげる父の頭にむしゃぶりついたり

するようになりました。

この子を健全な自由な空気の中に育てたいとは思ひましたが、名前は日本のものにしたと思ひました。松雄の松は力を意味し、私の姓の稲は有用を意味していますので、松雄は「この子はもう力と実用とを兼ね備えているわけだが、また美しさもなくちゃならないね。だから、お母さまのお名フロレンス、即ち咲く花を頂いてはどうだろう」と申しました。

「それに、『の』という古風な語尾をつけると、異国の野とか、異郷という意味になりますね」と、私も大喜びで申しますと、

「花野——異郷の花だね！それがよい」と、松雄も手を打って喜び、「母上」も賛成されて子供の名は花野ときまりました。

二十一 異郷の花

産後数カ月、私の生活の一切は赤ん坊に向けられておりました。他家へ伺いしても、訪問をうけましても、話すことは、いつも花野のごでございました。故郷の母へ出す便りにも何オンス体重が増したとか、何々という発音ができるようになったとか、笑うとえくぼができるようになりましたとか、書くことは花野のことばかりでありました。母は、私の愛情の中に自己中心的なきざしを見出し、そのか、ある日、父の蔵書の中から、仏法の絵本を送ってまいりました。懐かしいその本をひもときますと、絵ばかりで、何の物語も書いてないその一頁ごとに祖母のやさしい声さえ甦えつつ参りまして、子供の頃に聞いた昔話が、昨日の日のように、私の心に浮んでくるのでございました。母は所々に朱でしるしを入れておりました。その中の一つに「剣けんの山」の絵がありました。そのお話と申しますのは、仏様が、亡き母をこいしたって歎く愛弟子を見て、いと

しみ給い、仏力を用いて、その弟子を母の見るところへおつれになりました。大事な母がけわしい剣の山を、痛々しい姿で登っているのを見て、そのお弟子は余りのことに驚きかなしんで、

「ああ我が師よ、師は我を地獄の七つ山につれ来り給えり。何故、母はかようなところにおわすや。母は生涯、罪障ざいしょうし給わざりしものを」と泣きながら申しました。

「さあれ、汝の母はよこしまの思いを懐けり、汝いまだ幼かりし頃、母の思ひは唯に汝の上に見え、ある日、小さき野ねずみの遊びたわむるを見てさえ、汝の母、その美しき尾を汝の晴着の紐になれかしと願えり、これ、心の中に殺生を行うにほかならず」と仏様はきびしくお答えになられました。

私はこの物語を思い出し、心に微笑みながら、本を閉じました。やさしい母の心づかいが、この無言の忠告を通して感ぜられ、感謝に満たされて、遙か日本の方を伏しおがみ、若い母の我が子に対する愛が、とかく自己中心になりがちなものがございますので、それを、避けやがては世界に向けてやさしく押しひろげてゆきたいものと、心に決したのであります。

赤ん坊が生れた時、まず第一に見に来てくれたものは忠実な洗濯女の黒人、ミンテでありました。ミンテは「母上」に仕えて数年この家に使われていたのですが、私がここに住むようになりましてからは、ミンテには全く奇妙にみえる私の衣類の洗濯をも、心よく引受けてくれました。ミンテは、私の着物が変わっていると口に出していったことは一度もありませんでしたが、時々、物珍しそうに検査しているのを見たことがあります。中でも殊に足袋には興味を覚えたようでした。ミンテが赤ん坊を見たいといつて、二階へ上って来ました時、看護婦が赤ん坊を膝に抱きあげますと、上手にあやしていました。やがて、顔をあげて、「足を見せて下さい」と申しました。

「よろしいとも」といって、看護婦さんは赤ん坊の長いドレスの裾をからげて、桜色の小さい足を見せました。

「おや、私達と同じだーもし違っていたらと、ずいぶん心配致しました」と驚いて、大声をあげました。

「当り前じゃないの、一体、何を考えていたの」と、看護婦もあきれて訊き返しますと、

「靴下がただ二つに分れているので、日本人の足の指は二本だけかと思っておりました」とミンテはこわごわ答えます。

した。

看護婦が松雄にこの話をいたしますと、松雄は笑いこけていましたが、終りに「いよいよ、ミンテは欧州人のために、日本に仇討をしたね」と申しました。

看護婦にはよく判らなかつたのでしょうが、私にはよく判りました。私の子供時代には、欧米人が靴を穿くのは、足が馬の蹄のようなのだと考えていました。それで外国人のことを「一本つまさき」などと呼びなしていたものだったのでございます。

「母上」も私も最近の育児法の知識に乏しかったものですが、花野をゆすぶっては、子守唄で寝せつけたものでした。昔、いしが私をおんぶして、体をゆすりながら唱ってくれた、日本の古い子守唄の

「ねんねんよ おころりよ

ねんねのお守りは何処へ行った

お山を越えて、里へ行った

里のおみやに何もろた

赤のまんまにとかけて

よりも、「ハッシュ、ア、バイ、ペービー」と唱う方が、自然のように思われましたが、これが外国風な雰囲気の中

にいたためであったかどうかは、はっきりいたしません。けれども、やがて花野も大きくなり、寢床につく時、唱えた祈りの言葉は、決して外国風な周囲に影響されたものではありませんでした。これは、私の生涯の一里塚の一つである、あの「泰西史鑑」が手許に届いた昔にさかのぼります。絹糸綴のその本の中に、韻律も美しい小さい詩があり、私はそれを暗誦しておりましたが、当時その詩を異国の言葉についで、わが子に教えようとは夢にも思わなかったことでした。

それは――

われ、今、いねんとす

わが神、わが魂を守り給え

もし われ目さめずして死なば

主よ わが魂を救い給え

これ わが主の名によつて

願うところなり

というのでありました。

「赤子の指が縁のつなぎ」という諺がありますが、日本では、結婚は個人の問題として考えられていませんので、私はこの諺を自分たち二人の上にあてはめてみたことはあり

ませんでした。ところが、ある日、不思議な力がこの一片の心理を一つの出来事にあみ入れて、私の生涯にも松雄の生涯にも、大きな役割を占めるようなことになったことがあります。

元来松雄は事業熱心の人で、子供が生れるまでは、事業以外にその心を描えるものはなかったと、私は思っておりました。私も二人は理解しあってはおりましたが、余り自由に語りあう暇さえありませんでした。それもその筈で、私どもは共通の話題を持っていませんでした。松雄は自分の営業に熱中していますし、私は家のことと新しいお友達のごとくに心を労しているという風なのでした。けれども、子供が生れましてからは、一切が変りました。共に語りあわなければならぬことがたくさんあり、私は初めて夫をよく知ることができたように感じました。

でも私の心の奥深くでは、いつも子どもは自分のものだと思っており、花野を見て、松雄に似たところを辿ったこともありませんでしたし、また、そうしようとも思いませんでした。

ある日、街に出て、夫の店に立寄ったことがございました。丁度松雄は忙しくしていましたので、私は事務室に入

って待っておりまして。夫の机の上はずいぶん乱雑に散らっておりましてが手前の幅広い整理箱の中に、この事務ばかりの部屋には不似合なものが入っているのが眼につきました。それは小さな漆塗の箱で、細工も立派な定紋附のもので、博物館などでしか一寸見られないような品でした。そっと蓋をとってみますと、中には、緑の紙製のはたき、独楽、赤ん坊の指跡のついた粘土、それに破れた風船玉という奇妙なものが入っておりまして。

胸の動悸を抑えて、私はじっとその品に見入っておりまして。が、やがて、見ることを許されぬ他人の心を覗きみたように感じて、顔をそむけました。この時初めて花野に對して、私同様強くやさしい愛情を注いでいた人のあったことを知り、悔いつつ、全く新しい気持ちで夫を感じることでできました。

花野の生涯に強い感化を与えたものは数々ありますが、その一つは、ウイルソン夫人のたびたびの御訪問と変ることなきご親切でありました。夫人はいつも「母上」へのお土産に花を持っていらっやいましたので、復活節や、も

花野がお誕生の頃のある日、「母上」の膝に抱かれて窓近くにおりますと、見馴れた馬車が馬車道を登って来て降り、ウイルソン夫人が出てこられました。夫人は花野をご覧になると白い手袋を穿めた手を振って微笑されました。うす紫の服に身をつつみ、花をかかえた夫人のすらりとのびたお姿が陽にまぶしく照り輝いておりました。

「オーオー！ きれいな花のおばちゃま、花のおばちゃま」と、花野は手を打って嬉しそうに叫びました。

こうして、花野は幼な心に夫人に名をつけたのでした。そしてそれ以来、夫人は私どもにはいつも「花のおばちゃま」でした。夫人が惜しげもなくあちらこちらにまき散らされた花々が、今は死の河を越えて美しい花園に行きつかれた夫人のために、幸福と平和を象徴して、新しく咲き出でんことを祈るばかりであります。

花野がやっと父を見分けるようになりますと、夫は玩具を買ってきましたし、よちよち歩き始めて、何か片言をい

だしますと、松雄はひまさえあれば花野の相手になり、抱いて歩いたり、ご近所の訪問にもつれて行きました。ある日曜日の午後、松雄が花野をつれて出かけたあ

と、「母上」は、

「松雄さんはずいぶん子どもを可愛がりますね。日本の男の方はみんな子ども好きなのでしょうか」とおっしゃいました。

「さあ、如何でございましょう」と私の答ははつきりいたしませんでした。「こちらの男の方は子どもをすかないのでしょうか」

すると、「母上」はすかさず、

「いいえ、好きですよ。でも、松雄さんは花野と遊ぶために夕方早く帰って来たり、せんだっては動物園へつれてゆくといい、午後はお店をお閉めになったと店員からききましたよ」とおっしゃいました。

この時、私の心は遠く祖国の亡き父や戸田氏やはかの子を持つ父の誰れ彼に帰るのでした。そして、新しい角度からその人々を見たのでした。アメリカの男の人達は自由に感情を外に表していますが、日本人は伝統の絆にしばられてその顔に仮面をかぶせ、唇をつぐみ、動作をはばまれて、その胸にあふれる愛情を表現する機会に恵まれていないことを残念に思いました。夫が妻にどれほどの思いを抱いていても、公の場所では妻に対してその愛情を示したり、尊敬の心を見せることはゆるされませんし、妻の側でも、

それを願っておりません。これは決してよいこととは思われません。男がその心情をあらわに示すのは、幼な子と一緒にいる時はかりです。この時は、作法のゆるす範囲で感情を表現しますが、その行動は掟によって律しているのです。父は息子の相手になって、相撲をとり、走りくらし、

武士の勇しい動作も真似てみますが、女の子に対しては、やさしくこれを愛し、甘えてくるのを受け入れるばかりで、その飢え渇く如き心のうちは、見るもあわれであります。

松雄も日本にいれば、ずっと慎しみ深くしていたでしょうが、私に対してはかなり、明らかに感情を表現したようでした。けれども、二人とも作法に固い方でしたから、松雄が家庭に対して懐いていた感情の深さをのみこむまでには、時がかかりました。

「母上」のお言葉で考えさせられた私は、花野の就寝時刻を遅らせて、花野が暫時父とはね廻ることのできるよう計らいました。月の美しかった夜、庭へ下りてみますと、父と小娘は芝生で互いに身をおわしては追いつ追われつ駆け廻っておりました。「母上」は玄関でその光景を眺めながら、笑い興じていらっしやいました。二人は「影法師とり」をしていたのでございます。

「私も月夜にはあんなことをよくしたものでした」と申しますと、

「おや、日本にもお月さまがあるの？」と花野はいかにも不思議そうに訊き返しました。

「これと同じのがあるよ。お前がどこへ行っても、空を仰げば、このお月さまがあるのですよ」と父が説明いたしました。

「じゃ、お月さまは私と一緒に歩きになるのね、私が日本へ行ったら、神さまも私と一緒に日本へ行って、日本のおばあちゃまをご覧になるのね」と花野は嬉しそうに申しました。

松雄も私もこの言葉をいぶかしみながら、互いに顔を見合わせました。花野はいつも月の中の人と神様のお顔を結びあわせて考えていました。が、ずっと後になるまで、この日「母上」を訪ねたお客さまが「日本は美しくございませうけれど、神さまのない国ですね」と歎かれるのを、花野が傍で聞いていたとは、露知りませんでした。

花野の考え方は幾らか唐突なものとは思いましたけれども、満足しているようでしたので、私は別に正しめたいしませんでした。私は溜息まじりに「万事が実際のなこの国

にいたことだから、子どもの持つ夢があまりにはやく破られる」と悲しく思ったのでした。日本では、子ども心の幻をそっとしておいてやるものですから、幼い子が咄嗟に子どもらしい幻を破られて悩まされるということは稀であります。そして、この幻を、時としては、老人になるまでも乱されずに、持ちつづけている人さえあります。ですから、詩的な幻想は仲々にうちこわされることもありませぬ。日本では、日ごとの生活が神秘なものに満ち満ちております。人々の生活の中で、八百万の神々様は親しみぶかい神様、現実的な神々様、実在を暗示する神々様であります。私どもは親しみをもって、この神々様を仰ぎ、静かな感謝と敬愛の心をもって、神々様の祀りのつとめに奉仕しております。祀りを怠ったとしても、天から罰せられることの怖れはさほどでなく、むしろ、敬いに欠けたことを恥しいと思うのでございます。この恥ということこそ、日本人の心の重荷となるのです。家の仏壇を仰ぎますと、ご先祖方が見守っていて下さることを思い、香をたきお経をあげて、感謝のしるしといたします。火の神様は厨房を守り、かまどに立てる御幣はこの神を祀るものです。米の神様は釜の火の穢れをいみ、小川、大河を恵む水の神様は井戸水の汚

れをいみ給い、七福神はいたるところで喜び迎えられ、殊に商人の敬う大黒さまと恵比須さまは、お店の棚に鎮座してその家の繁昌の守り神となっています。寺の大門の両側にあられる、こわい顔の仁王さまも、決してこわい神さまではなく、危険を防ぐ守り神なのです。空の神、雷神、風の神様、雨の神様など、みな人間の守り神様であられ、これらすべての神々様の上に立ち給う日の御神様は、わが皇祖の神とあがめられ、恵みの光をもって、日本全国を守り給うのでございます。

これら数々の神々様は仏教の諸仏と混淆されていますが、これは日本人全体が神仏両方への信仰を懐いているからです。もし、古い仏典にみえているままの地獄の神々様をとり入れていきますなら、恐しい神々になったことでありましょうが、日本の宗教は決して恐怖の宗教ではありません。まして、年二度大祓の日が定まっています、この日には国中の一切の罪と穢を祓い去り清められることになっております。かくして、日本人にとっては、知らず識らず踏みこえた悲しい輪廻の迷い道も、暗いさびしい日々を経ますと遂には希望の彼岸に達するものとなっています。

遠い印度から伝わって来た仏教は、日本に入るまでに恐

怖の要素を多分に失ったのでありましょうか、それとも日本の神々様に和らげられ、恐しい棘を失ったのでありましょうか、私どもはどの神さまをも恐れるということはありません。神道では、死そのものすら、一片の浮雲の間を過ぎる刹那であって、その雲を通りぬけますと、久遠の光の中に到るのだと教えられております。

日本の国民生活の上に、大きな力となり、国民精神を強く特徴づけているものは、神々様よりも、むしろ、人が作った因習です。私どものもつ複雑な宗教は知識ある人々の感興をそそり、まじりけない忍従を教えるものですが、知識を駆って無智な人を導くものでもなく、ナザレの聖者の信仰が与えるような、直接的慰めと希望を、悩めるもの悲しむものに与えるものでもありません。

聞かせました。

「まあ、ずいぶんきれいでしょうね、私も行って見たいわ」と花野は大声で申しました。

その時、後に新聞紙の触れあう音が聞えて、松雄の声が聞えて参りました。

「エツ、そのお月見のことで、何だか話があったね。昔、姉と僕とで臆病者の妹をいじめていると、叔母が出てきて話してくれたよ。あの時はよく憶えていたんだが、何でも意地悪な雨の神と風の神が十五夜の晩、月の女神の楽しみをぶちこわしてやろうとした話だったね」

「あら、そのお話しして頂戴」と花野は父の方に駆けよりながら申しました。

「お父さまはお話は下手だが、お母さまが御存じだよ、エツ、話しておやりよ」と、又松雄は新聞をとりあげながら申しました。

そこで、花野は敷居際に戻って参りましたので、私は忘れかけていた月の女神と雨の神と風のお話を思い出そうといたしました。

そのお話というのはこうでした。

代

千

169

お月さまはどこへでもついて来て下さるし、お友達になつて下さると聞いてから、花野は月の話でさえあれば、大喜びをするようになりました。けれども日本の子どもが満月を仰いで喜ぶ、あのうさぎの餅搗ぎの話は花野に聞かせませんでした。私は、花野が自分で理想化している月の幻から自然にぬけ出してゆくのを待ちたいと思いました。日本でする、お月見の夜、家族、友人打ちつれて、見晴しのよいところを集って、月の桂が紅葉すれば美しい小春日和が訪れることを賞めて、歌などつくつたお月見の宴のこととは話して聞かせました。

ある夜、裏客間の端近く座をしめて、さやかに晴れわたつた空にかかった月を眺めながら、私は、今夜、日本では、上は雲の上つ方から、下は賤が伏屋に至るまで、月のさす縁側や庭に小机をもち出し、それには果物、野菜など、丸いものを盛りつけて、月の女神にお供えするのだと話して

ころろよい中秋望月の夜、美しい月の女神は鏡台に向い、化粧刷子をとりあげながら、独り言を申しました。

「今夜は下界の人々を失望させてはならないわ。一年中で今夜という今夜は、私が一番美しくなる時だというので、この十五夜を楽しみにしているのでしょ」

女神は鏡を傾けて、けばだった衿元をととのえました。

「ここにこ笑ったり、嬉しそうな顔付ばかりしていなければならぬなんて、こんな生活はつまらないこと！でも、これで下界の人達を喜ばせることができるのですもの、今夜は思いの限り照り輝いてみせましょ」といいながら、露台の端に出て下界を見下して、またいい添えましました。

「でも、結局いいお仕事だわ、殊に今夜は！」

女神が満足の笑みをもらされたのも当然で、世界中は女神のために、装いをこらしていたのです。町も村も、山かげの賤が家も、海岸の漁師の家にも、縁側や庭に、丸みをみせた品々を盛った小机が据えてありました。お団子、栗、お芋、柿、豆、すももなど供えた真中には、白紙の飾りもすがすがしい一对の御酒の瓶子が立っていました。円は円

満、完成のしるしとされていきますし、今宵は最善のものではないれば、月の女神に供えてはならないものと考えられていたのです。

月の女神の近くに住んでいた雨の女神は、曇った窓越しに、羨しそうな視線を投げていました。見下ろせば、下界の家々は月の女神をたたえて装いをこらしており、「神さま、私の心を月の光のように清くなし給え、また、私の生涯を満月のごとくかけなきものとなし給え」と、乙女の唇をもれる祈りの声さえ、聞えてくるのでありました。

この声を聞くと、雨の女神はさっと衣の裾を打ちふりましました。すると、その勢に裾を飾っていた傘が開いてしまいましたので、雨の女神は急いで傘を抑えて、雨のしずくを下界に落すまいといたしました。が、その努力も間に合わず、美しい月の光のさ中に、はらはらと通り雨となって落ちてしまいましたので、下界の人々はあわてて、空を仰いだのでした。

怒った雨の女神はまた、申しました。

「こんなことは去年の八月以来初めてのことだ。下界の花瓶という花瓶には秋草がさしてあるらしいし、どの戸口も掃ききよめられており、月を眺めるお年寄りのためには、

立派なお座蒲団が出てある、余り不公平なことだわ」

また、雨の女神は裾を打ちふりましたので、月光に輝きながら、はらはらと俄雨がこぼれ落ちました。

ちょうどその時、風の神が大きな風袋かぜぶくろの口をしつかりととらえて、通りかかりました。雨の女神は風の神の額に刻まれた皺を見て、声をかけました。

「今晚は、風の神さま、ちょうどよいところへお見えになられました。何か珍しいことでもお探していらいっしやいますか」

風の神は立停って雲の端に腰を下しましたが、風袋の口はしつかりととらえていました。

「下界の者たちは全く奇妙な奴等ですよ」と風の神は不平満々で愚痴をいっていました。

「この天上に住んでいるのは月の女神ばかりでもないのに、下界の者達は、月の女神より外のことは考えてもいないんですよ。それにお月さまなどと敬語をつけて呼び、毎月毎月十五日には、月ばかりをあがめているんですからね。三日にだって、三日月様だなんというて月の女神が地下室から出て来たばかりで癖から少しのぞいているのに、下界の者たちはもう二度と月が拝めないかのように、大騒ぎをし

て迎えているんですからね」

「全くそうですよ」と雨の女神は調子に乗って申しました。「それに八月の十五日はなおさらひどいですよ。招きもしないくせに、私どもが出てきはしまいかと心配そうな顔付ばかりしていましたね」

「今夜は八月の十五夜ですよ！ そうだ、今夜こそ下界の者に目にもみせてやりたいものですね」と怒りに燃えた風の神は申しました。

「それは面白いことですね、突然襲ってあのお供物をひっくり返してやりましょ」と雨の女神はずるいことをいうのでした。

「ハアハアハア」と風の神はこれを聞くと満足の高笑いをして、風袋の口を少しゆるめました。すると一陣の風が空を駆けぬけ、下界の人々は騒ぎだしました。

月の女神はやさしい思いを胸にたたえながら、静かに下界に向って笑みつづけていました。風の神と雨の女神はそつと山かげにかくれ、海の彼方からどつとおそいかかるうとして、遠くへ駆けぬけてゆきました。月の女神はこれをごらんになり、心に悲しみを懐かれながらいただけかな女神が下界を荒しまわる間、そつと帳のかけに身をかくして

おしまいになりました。

すさまじい暴風雨になりました。風の神は大袋の口をあげておし進み、すぐあとにつづいた雨の女神は裾を激しく打ちふるのです。すると、裳裾の傘は何百となく開き、雨は滝のごとく降りそそぎました。

けれども、風の神も雨の女神もすっかり失望してしまいました。と申しますのは、下界の人々は山に這いよる雨雲を見ないまでも、風の神が袋の口を少しゆるめて、げらげら笑いをした時に、はやそれと気付き、家々は暴風雨の用意をしておきました。美しく飾りたてた小机を片付け、雨戸を固く閉してしまいました。風の神も雨の女神も吠えつつ叫びつつつきあたり、渦巻いています中に、すっかり疲れてしまいました。そして風の神は吹き、雨の女神はすすり泣きつつ、谷を越えて急いでわが家へ帰りました。

天地が再び静まり返りますと、月の女神は悲しげにその面をあげて、溜息まじりに申しました「私の楽しみはすっかりだいなしになってしまいました。下界の人々の飾りももう見えなくなってしまいました。もう人々は寝静まってしまったのでしょう」

ふとまた満面に輝かしい笑みをたたえて、月の女神は雄

雄しく申しました。

「でも、私のつとめを果しましょう。誰も見ていなくても、一所懸命輝きましょう」

月の女神は帳を押しあげて、下界を見下しました。このやさしい犠牲の心はその報いを受けました。やがて下界の家々の雨戸はくられ、人々は縁側に出て月を仰ぎ始めました。そして歓びの歌声さえ天上にひびいてまいりました。「ごらんなさいよ、美しいお月さまですこと。またお出ましになられましたわ、嵐のあとでは冴えて美しくございませうこと、何だか余計に嬉しゅうございますこと」

「お修身のお話なのね」と思案ありげにいった花野は又「風の神や雨の女神さまもおかわいそうだけど、私は月の女神さまが好きよ。日本でするように、小さなお机を出しましょうよ、色々なお供物はクララがくれますわ。それにこのお縁から、よくお月さまが見えますわ」と申しました。「それよりもいいことがあるよ、ちょっと待っておいで」と松雄は二階の上り口の方へ行きながら申しました。

松雄は小さい木箱を持って来て、卓の上に置きました。それは蓄音機で、蠟の枠の上にレコードをのせ、小さい針をのせて、それに向って物をいえば、その声は録音される

のでした。二三日の中に松雄は商用で日本へ行くことになっていましたので、これで孫娘の声を録音して、里の母への土産にしたいと思っていたのでした。「母上」もお呼びして、松雄が機械を組立てるのを、みんな息をはずませながら眺めておりました。やがて、松雄は機械を前にして坐り、花野を膝にのせ練習を始めました。花野がかわいい声で片言まじりの英語を申しました時、里の母には一言も通じない言葉であることに思いあたりました。

そしてこのことに気付いてから、日本人の両親に育てられながら、花野はアメリカ人であったと思いつき、日本のもつ大きな問題にも思い至ったのでありました。

「もし男の子だったら、大変なことだったよ。市民権さえまだまだ実際には認められないような国には住わせたくないからね」と、その夜、松雄は申しました。

「女の子にしまして、ここは永住の地ではございませんわ。もしアメリカの教育ばかり受けさせたのでは、日本にだって住みよくはございませんよ」と私は答えました。

こんなことを申しあっていますうちに、松雄が日本から帰って来る時には、幼稚園から女学校までの教科書一通りとお雛様の一揃を持って帰ってくることに相談がまとまり

ました。雛祭りは古くから日本に伝わった美しい年中行事の一つであり、教育的意味も深いものがございます。この雛の意味を完全に理解しているほどの人ならば、日本民俗、歴史、習慣、観念などにも殆んど精通した人といってもよろしゅうございましょう。日本では、女の子は皆、お雛様を持っていて、それは嫁入道具の一部であります。松雄が花野へ持って帰った雛は私のもので、私の渡米の折り、兄が反対した思い出深いあのお雛様でした。

雛の荷が参りますと、家中で馬車小屋へ出かけてゆきました。ウイリアムは粗削の板箱を開け、松雄と一緒に形も様々な白木の箱をそろそろ出してくれました。私の眼は里の定紋の入った浅葱木綿の覆布おぼろにひきよせられました。

「まあ、お母さまは小諸のお祖母さまの紙びなを送って下さいましたわ」となつかしさに、うやうやしくおし頂いたのであります。

「あなたがもて遊んだという内裏雛のほか、お雛道具はみな他人手に渡ったのかと思っていました」と「母上」がおっしゃいましたので、松雄が、

「紙びなはまた違うのです」といい、私は静かに説明いたしました。

「そうなんですよ。紙びなはお雛様の家族中でも特別のものでして、これは家についたもので、払うこともできず、他人に差上げることもできず、どんなことがあっても手離せないものでございます。母が永年大事にしていたのを、今とどうも私に送ってまいったのです」

どんなに精巧な雛と道具が揃うておりましたが、この妙な形の紙びながなくては、完全なものとはいえないのです。お雛まつりのはじめは紙で作った清めの人形代でしたが、時うつって富裕な家などでは、金襴や縮緬で作るようにもなりました。が、これはやはり紙びなと申して昔ながらの型に折りたたんだものです。雛を飾りますには、それぞれに位置が定まっておりますが、この紙びなばかりは内裏雛を飾る一番上の段のほかはどこへ飾ってもよいことになっていきます。

雛祭りの起源は遠い古えにさかのぼっています。身の清めの式として人は河水に褌はそして身をきよめたのでありましたが、時代を経るにつれ、非情の物で人の型を作ってこれに替えることと致し、何なりと身近かな大切なものをもって、陰陽を型とって二つの型をつくることにいたしました。機場では一番大切にしている、小さな木製の糸巻や二つ繭

や、霏ひを簡単に結んだものなど使いました。また、農家では、葉の花に紙の衣を着せて簡単な形を拵えたりしました。そして、それを男女二つにして家族を代表させました。これが紙びなさまになったのでございます。

やがて、支那文化をもとり入れ全国にわたって、清めの日を定めることとなり、陰暦の三月の最初の巳の日がそれとままりました。この、蛇虫の脱皮時期は、闇の冬から希望と光明の春に入るということを象徴していたわけでございます。そしてこの日が今も守られております。雛祭りも段々時世とともに移り変って、幕府の中頃からは、御門ごもんは九重の奥ふかくいまして臣民一般には御姿を拜する事がゆるされませんでしたので、この雛の節句が朴訥な臣民のためには年一度御姿の御影を祭る時となり、皇室に対する臣民の忠誠の心を鼓舞したのでございます。また雛祭りが實際的に役立たされたのは封建時代になってからのことでした。当時の武士の家庭では、主人は一身を主君に捧げ、いつな人時でも君の馬前に討死の覚悟をいたしておりましたので、主婦は留守がちな主人の分まで負わなければなりませんでした。それで、子女の教育は教養の高い侍者の手にゆだねられることになりました。こうして、女の躰の中でも大切

な家事を仕込むには、この雛祭りがこよなき機会となったのでございます。

太陰暦では上巳は三月三日ですので、花野のお雛様が届いてからは、毎年私共も日本同様、この日をお祝いいたしました。客間に五段の雛壇をしつらえ、緋毛氈をしき、お内裏さま、三人官女、五人囃子、お道具など飾りました。そして一番下の段には、私が手伝いながら花野に作らせたご馳走を供え、お招きした小さいお客様に、それを花野の手で給仕したものでありました。それで花野の幼な友達は米国流に男の子も女の子も、年毎に日本の子供が待ちこがれたと同じ気持ちで三月三日を心待ちにするようになりました。

花野が六歳の年の雛祭りの日に、花野は主人役としてのつとめの上に、あちこちからお祝いの電話がかかり、これにもったいをつけて応えたりしたものですから、殊に忙しくしておりました。楽しいこの日を一層楽しく致しましたのは、仲好しのスーザンがやっとな歩き始めたばかりの金髪のお客さまにも、行儀よく応対しておりましたが、このよちよち歩きのお嬢さんには一しお心をこめてもてなしました。その夜、いつものお祈りの時、真面目な顔で私を見つ

めながら、

「お母さま、私の好きなことを神様に申上げてもよろしいでしょうか」と申しました。

「えええー、よござんすよ」とは申しましたが、小さな手をくんで小さい寢床ふしどのそばで頭をたれた花野が「もしもし神さま」といった時には、思わずはっといたしました。

私は手をのばしてその言葉を止めようとしたのですが、ふと、神さまの次にはお父さまを敬いなさいと教え、父が見えない時には、いつもこの呼び方をしていたことを思い出しました。それで手をひきました。続いて花野が「スーザンのように、私にも小さな妹を下さいませ」と重々しい声でお祈りするのを聞きました。

余りの意外なことに、私は言葉も出ませんでした。花野は次いで「われ今いねんとす」の祈りの言葉を終りまでいってしまいました。

私は子どもを小さな寢床にねせつけてから申しました。「お前、どうして妹を下さいなんて神さまにお願いしたの」「スーザンもお祈りをして妹を頂いたんですって、長い間お祈りしていたら、妹が来たんですって」と花野は答えました。

私はこの祈りが聞かれることを知っていましたので、畏れの中にも感謝の心もてその部屋を出ました。

三月の雛の節句も過ぎて、五月も末に近いある朝、松雄は花野に妹が来たことを告げ、赤ん坊のいる部屋へつれて参りました。花野は眼を大きく腫って、髪の毛の黒い千代をじっと見つめておりましたが、一言も口を利かずに階下を下りて、「母上」のところへまいりました。

「あんな妹を下さいとお願ひしたのじゃなかったわ、スーザンの妹のような、黄金色の髪の毛の赤ちゃんが欲しかったのよ」と花野は困ったような顔をして申しました。

丁度そこにいあわせたクララは、アメリカの女中らしい気軽さで「日本の赤ちゃんに黄色い髪の毛じゃ変でしよう」といって吹きだしてしまいました。

「日本の赤ちゃんじゃないわ、私は日本の赤ん坊を下さいとお願ひしたのじゃないわ」と花野はむっつとして叫ぶのでありました。

「母上」は花野を膝に抱きあげ、これでこの家の中に二人も日本の子供ができて大変おめでたい事だといつて聞かせて下さいましたので、花野の失望も少しづつ慰められてゆきました。

その日の午後、花野が客間の表側の窓の間にはめこんだ大鏡の前に立って、長い間じっと鏡の面を見つめていたのを「母上」がごらんになり、

「何を見ているの」とお尋ねになりました。

「私も日本の子なのね。私はスーザンのようでもないし、アリスにも似ていないわ」とゆっくり答えました。

花野は暫くまばたきをしていましたが、黄毛碧眼に誠を捧げていた心も、愛の心には打ちまかされたのでしょうか、やがて涙を抑えてむせぶように「でも、お母さまの髪は黒いのね、私の髪もお母さまのおなじだわ」といって、椅子を下りました。

子ども心ほどに測りがたいものはございません。花野はその日から日本のものごとくに心を動かされるようになりました。松雄は好んで花野の片言を聞いたり、花野と戯れたりいたしましたがお話となると、いつも私のところへまいりました。

それで、夜な夜な、私は日本の英雄の話や、子供の頃から聞きなれた歌やお伽噺を聞かせました。黒い髪の毛の美しい子ども——私はいつも美しいと申しました——が、糸を桜の花びらに通して鎖を作ったり、石燈籠があり、池に

太鼓橋のかかった庭の花むらの中で遊ぶお話が、殊に花野を喜ばせました。私がこうして日本のことを話したり、夕あかりの中に立って、日本の子守唄を歌いますと、傍に居る花野が小声でそのあとをつけて歌っています時など、故郷こいしい思いが胸に迫るのでありました。

花野が見たこともない故国を急に愛するようになりましたのは、その体内を流れる血の故だったのでありましょうか、それとも子どもは時として思いがけない直観力を持っているのですから、あるいは前兆というものだったのでございましょうか。

ある日、忽然としてたのしさの充ち満ちた世界が終りを告げてしまいました。なつかしい思い出も悲しい思い出も、憂いとおのきの渦巻の中に包まれて残るばかりとなりまして——私は夫亡き身となり、二人の娘は父なき身となつてしまいました。喜びの一言と安らかな微笑を最後に松雄は静かに速かに目に見えぬ、古も今もなき境に旅立ってしまいました。

そして、今はいとしい我が子と私に残されたものは、別離の悲しさと長いさびしい旅路ばかりでありました。あれほどに快よい歓迎の手をさしのべてくれた国、私の無智と

誤謬とをゆるしてくれた国、二人の子の誕生した国、言葉にもつくしがたい親切をうけた国——この素晴しい、忙しい、実際のな国に対して、私は何のなすべきところもなく、又心弱き私如きものなすところを望んでもいかなかった国。私にとりまして、子どもにとりまして、広く懐しい、愛すべき故郷ではありましたが、それも唯しばしの間のみで、子ども達が成長して、ここで役立つべきものとなるべき望みもなく、老いてゆく私の何のなすべきところもないのでございます。人が唯字ぶのみで、分ち与えることをしなかつたら、その生涯は無意味なものに終るのでありますまいか。

過ぎた年月は唯一場のたのしかつた夢に過ぎませんでした。幻にかすむ詩の国を出て、実際のな錯綜した国にさまよい込み、たのしく、漂いつつ、つきない数々の知識を得た私は、今また幻と詩の国に帰ろうとしています。行く先、どのようなことが私を待ちうけているのであろうかと、唯思いまどつてみるばかりでありました。

二一四 東京の家

私ども母娘三人は「すず」という忠実な女中を雇うて、東京のこじんまりした家に落着きました。松雄の家では時親戚のものをこの東京の家に遣わして、安否を尋ねさせることに決め、万事は若い未亡人にふさわしく親戚に相談して定めるようにといひ渡されました。

私は一種の束縛を感じながらも、それで満足していました。

里方の親戚では私のことを一方ならず心配してくれました。若い未亡人の一人暮しではというので、母が上京して一緒に住まってくれることになりました。けれどもすぐにその用意もできませんでしたので、代りに「たき」をよこしてくれました。たきもその時はすでに寡婦になっていましたが、その父も祖父も代々私の家に仕えた関係から、また私の家に身を寄せていました。たきは上京するとすぐに、附添婦、料理人、裁縫師、またすずまで加えた家族全員のこと

支配人という責任をいっさい負ってくれました。

二、三日もたたない中に、近所のよい魚屋を見つけてくれば、一週間もたたぬ中に、八百屋や果物屋は田舎出のたきの鋭い眼にあつて、品物の古いのを見破られるのを恐れのか、お勝手の前を素通りするようになってしまいました。最初から私はこのたきにすっかり任せきっておりました。

けれども時々当惑することがありました。と申しますのは、たきは私が「奥さま」と呼ばれるようになっていくことをよく知っており、又、私自身は考えも変り、二人の子どもまである身でしたけれども、たきの心の中では私はまだ昔のままの「エツ坊さま」なのでした。

たきが来たその晩から困ったことがありました。たきは門の戸を閉ざし、玄関や台所の戸締りをすませますと、緑側の雨戸をしめ始めました。

「たきや、雨戸をびったりしめないで、少しずつ間をあけておいておくれ。空気の流通が悪くなるからね」と申しますと、たきはあきれ返つたような声で、

「まあまあ！ 奥さまがお里をお出ましになつた頃には、まだまだお若くて、何にも御存じなかつたのでございます。お天道さまに照らされない夜の気は体に毒でございます

よ」と申しました。

「でもね、たき、ここは異国の家と同じことで、ガスを使つていますから、夜分でも外の新しい空気が入らなきやいけないんだよ」と反対しますと、たきは困つたようにためらいながら、

「異人さんの家では、空気が違うのかも知れませんがね、何だか妙な気が致しますよ。それに、こんな広い東京の町では、泥棒があぶなくて……」と呟きながら、小頸をかして立て去りました。

やれやれ思い通りになつたと、私は安心して寢床に入りましたが、やがて忍びやかに、途切れ途切れに雨戸を閉める音に目をさまされ、耳をすましますと、たきが最後の雨戸の棧をはめる音が聞えて参りました。

私はじれつたような、おかしいような気持で独言を申しました。「そうそう、たきは万事自己流を押し通す人だつた。故郷の警察官にさえ自分の思い通りにさせた人だといふもの、私のいうことを聞かないのも致し方ないこと」とたきと警察官の話というのはこうです。

日本の労働者階級の女の常として、たきも生活の重荷を負わなければなりません。たきの夫は心根のよい働

き者でしたが、大酒をのむ癖があつて、せっかくの給料もばたばたと費い果すばかりか、乱酒の上で度々借金までしては、入牢するという始末でありました。

そうなると、たきはいつも男のする仕事までして働き、貯えができると夫を迎えに行くのであります。一度こんなことでたきが私の家へ来ていたある日、警察から夫をむかえに来るよう呼出しがありましたとき、たきは警察へ出頭はいたしました。

「警察の旦那様、どうぞもう二三週間そうしておいて下さいませ。そうすれば、借金も払い先の用意も少しはできますから。どうぞ、もう暫くそのままにお預り下さいませ」と、どうしても夫を引きとることを承知しなかつたといふことを子どもとき聞いておりました。

私もたきには負けるが勝と覚悟をきかして、もうそれきり雨戸のことは申しませんでした。数日後、大工に頼んで、廂と雨戸の戸道の間に、菖蒲——これは健康の花といわれてます——を荒く彫りぬいた幅広い欄間をはめこんでもらうことにいたしました。これくらいの隙間から入る空気なら、たきも毒だとは申しませんし、処々には竹に鉄棒を通したものをはめこみましたので、万事が安全になり

ました。旧弊な家の召使には中々權威を持つものがござい
ます。

子ども達がわけもなくこの家の風習になずんでゆく様は、
見ていて驚くばかりでした。花野は幼い頃から、珍しいこ
とにはじきに心をひかれる性質でしたので、色々の変化に
まぎれて、故郷をこいしたうこともなかったことと思つて
おります。また、四歳になった千代はいつでも満足そうに
している子でしたが、姉が仲よくしてやっつて、嬉しそうに
していましたので、この子に子どもなりの考えや慾望があ
つたなどとは、思いもかけませんでした。あちらこちら見
物して廻っていた間は、千代は眼新しいことに心を奪われ
ていましたが、いよいよ家庭に落着いて、着物は箆笥に納
め、お玩具は手の届くところにあるとなると、何かと不満
を感じるようになりました。

ある日、お針をしていた私の肩によりかかつて、千代は
「お母さま、千代は……ほしいのよ」と申しました。

「千代は何がほしいの」と訊けば、千代は私の手をとつて、
六間の部屋部屋と歩き廻り出しました。客間の床の間には
軸がかかつており、花も美しく生けてあり、一隅にはピア
ノも置いてありました。絹ばりの襖を隔てて、私の部屋と
泣きました。

けれども、こんなことをしてはいられません。私のうけ
た武士の血はどこへ行つたのでございましょう。子ども時
代の躰はどこへ姿を消したのでございましょう。何の束縛
もないアメリカ生活が私の性格を弱め、私の勇気を挫いた
のでございましょうか。亡き父がさぞや無念と思うこと
ございましょう。

「さあ、千代、お前はこのお家にないものばかりを見せて
おくれただから、お母さまはこのお家にあるものをお見
せしてあげましょう」と私は勇気を出して、笑いながら申
しました。

私は千代をつれて今度は晴々とした気持で同じ処を元氣
よく歩き始めました。客間では円窓の下の絹ばりの襖を押し
あけますと、奥に柵が二段あり、花野と千代のアメリカ

子ども部屋が並んでおり、二部屋には渋色の壁によせて、
桐の箆笥が置いてありました。私の机も花野の机も桐製で、
書物とペン皿がのせてあり、障子をあけますと、狭い縁側
を距てて、小ぎれいな庭が見え、植込みには手入が行届い
ており、踏石もあれば、泉水もあり、九尾の金魚さえ泳い
でいました。

食堂はこの二つの部屋に直角の位置にあり、やはり庭に
面しており、家中で一番日当りのよいお部屋でした。一方
には押入があり、抽出のついた長火鉢も置いてありまし
た。この長火鉢の一方には、いつもお座蒲団が置いてあり、
私はここに坐つて、女中を呼んでは家事のことを話すので
ありました。湯殿、すずとたきとの女中部屋、召使の出入
口など台所につづいておりました。

部屋から部屋へと千代は私をひき廻し、あちらこちらで
立停つては、あてもなく指さしながら「千代はね……」を
繰返すのでした。私は余りごたごた物を置くことは嫌いで
したが、千代には又、その空虚が耐えられなく淋しかった
のでございます。千代は「母上」の部屋の天蓋附の寝台や、
ふかふかとした椅子、大鏡、グランドピアノ、花模様の絨
緞、レースのカーテンをたれた窓、高い天井、広い部屋、

土産の美しい本が並べてありました。鏡板はと見ますと、
薄い木目細かな美しいその板は幾百年もの波にもまれて、
自ら不可思議な模様を浮き出しているのです。それから
又、床柱を見ますと、元は唯の鱗皮のついた曲りくねった
木の松に過ぎなかつたのでしょうか、磨きこまれて、今は
黒水晶を包んでいるのかと思われるようでございます。床
板に眼をやりますと、黒ずんで豊かな光沢をたたえており
「おはあちゃまのお鏡のようですね」と私が申しますと、

千代はそつと覗き自分の真面目くさつた小さな顔を見て、
忽ち歪んだ笑顔に変えるのでした。次の部屋でまだ使つた
ことのない仏壇の扉を開きますと、細かな彫刻をほどこし
たその中に、アメリカで縁に納めたままのお父様のお写真
が安置してありました。これは、そのうち職人の手を借り
て、ピアノの位置を決めましたら、その上に掛けることにな
ってしまいました。それから又、押入をあげて夜具を見せま
した。ここでお蒲団は昼間、眠りくらしており、その美し
い花模様の中にお話や歌や笑いさざめきを包み、夜になれ
ば、千代の枕にかくれて、楽しい夢に織りこまれるのであ
りました。それから、茶の間の長火鉢の灰の小山をそつと
かきよせますと、炭火が赤く燃えていて、お茶をいれに来

る人を待ちもうけているのでした。火鉢の引出しを千代に覗かせますと、一つには、子供のお客様を迎える用意に、小さな紅白のお菓子が入っており、次の引出しには来客用のお箸が入っており、残りの一つには、小さな茶壺に木匙がそえてありました。一番下の広い大きな引出しには、おやおや、これは私達には用のない引出しですこと。いまにお国からおいでになるお祖母さまが孫にお伽噺を聞かせたあと、そっと手をのべて、ここから細い煙管をとり出されるのですね。三服なさると、ほら、丁度この処ではたはたと煙管をお打ちになるのですよ。それからいい薫のする絹の煙草入と一緒にお片付けになられるのですね。そして暫くはさびしい物思いに耽っていらっしゃるとか、他家のお祖母さまが話しにいらっしゃるのをお待ちになって、又三服、重ねて又三服なさっては、お友達同士のお祖母さまはお茶をあがりながら、昔語りをなさるのですよ。

「それから、ここはさすがに食物のお舟を入れているところですよ。美味しい美味しい荷物積むばかりになっているでしゅう」と言いながら茶の間の戸棚の戸をあけますと、中には浅い棚がいくつもあって、お椀、お茶碗、お皿、漬物用の深めの皿、その他、様々のお皿や鉢など、それぞれ

にお伽噺の模様を美しく染出したものが、五枚ずつ重ねて並べてありました。下にはお膳が入っており、少し離れたところにお座蒲団が積んでありました。すぐがこれを持ち出す時に、

「一イニウ三イ

あの子とこの子と私のと」と花野はいつも歌うのでした。

「さあ、今度はお台所ですよ。この戸はすべて開かないのよ。この銅の松毬をグルリと廻すとあきますよ。さあ、そのお草履を穿いてゆきましょう。お台所へ足袋のまま出たり、靴下のままで出たはいけませんよ。さあ、ここですよ。半分は黒ずんだ板の間ですね、それから残りの半分は——さあ下りてごらんささい——三和土でしゅう。ほら、ここにガスのコンロがありお隣りにはお釜をかける素焼の大七輪がありますね。ここは、ご飯を炊く大切なところですから紙屑など燃してはいけませんよ、焚きつけには木片、そのあと炭を使うだけです。おや、たぎが来ましたよ。何か見せてくれますよ。そうすると千代はすっかり寒くなり、そして樟脳のおいのする木函のところへ飛んで行って、去年のクリスマスにお祖母ちゃまから頂いた毛皮の襟

巻きを出して来て掛けたくりますよ。さあ、みていらっしやう」

たぎは床板の小さい二つの穴に二本の指をさし入れてひきあげました。その次のも、又その次のもひきあげました。すると、たぎの手の届くところに、氷の塊がいっぱいにつまった穴倉が見えて来て、そこには木皿にもった魚、野菜、卵、果物などが詰っていました。

「毎朝、男の人が薬の背覆いに入れて背負ってくる冷たいものがこうなっているんですよ。それから、あちらに木のお流しがあるでしゅう」

「今度右の方を見てごらんささい。狭い廊下を歩いて行きますよ。お母さまは五ツ足、千代は八足、歩きましょうね。ここはお湯殿ですよ。卵形の湯槽は上に二つ口があり、下の方にガスの火口がありますね。この湯槽は、ほら、こんなに深いでしゅう、だからお母さまがしゃがむと、お湯が顎まできますよ。ここには小さい棚が三段あって、糠袋やうがい茶碗や歯ブラシをのせ、下には手拭掛がありますね。それから、上の方の隅には、大きな籠がかかっています。洗濯ものや、庭の打水に使うゴムホースが入っていますよ。ねえ、千代、とても面白いお家じゃいかしら。まるで大

きな玩具の家のようでしょう。花野が学校へ行っている間には、お母さまはいつでもお家について、千代と一緒に遊んであげるのですもの」と申しました。

二十五 困ったこと

千代の学校をじき見つけることができたのはしあわせでした。宅からほど遠からぬ処に、幼児の教育に興味を持たれ、お宅を解放して家庭的な幼稚園を経営していられた御夫婦があり、ここへ千代を入れることにいたしました。千代は日本語が話せませんが、幸い、アメリカ人の宣教師のお子さんが二人、同じ組にいらしたものですから、通訳をして下さいました。こうして芽生えた国際的な友情を千代は今も忘れがたく感謝しております。

ところが、花野の教育が問題でありました。学校を決めようとすれば、私自身、楽しい女学生時代を送った思い出から、すぐにミッジョンスクールが頭に浮ぶのですが、よくよく調べました結果、ミッジョンスクールの雰囲気はある点において優れてはいても、なにしろ米国生れの児ですから特に純日本式な教育の必要を感じて公立学校を望みました。

に編入されたのちは、私もノートを持って、教室の一番後の一隅に座をとることを許されました。

当時のことは生涯忘れることもございますまい。生来、花野は鋭敏な注意深い子でしたし、すでに、三年年生の力はありませんでしたが、文字が読めず、先生の御説明は殆んど判りませんでした。花野は初めのうち緊張しきって眼を輝かせていると思いますと、次の瞬間には怪しげな表情にかわり、やがては茫然自失の色を見せてしまうのを、たびたび見たのでした。毎夜、家が学校に変わって、私が英語で説明しながら、その日一日の学課を復習してやるのでした。食事中にも、ちょっとした時間を利用しては、やさしい言葉を遊戯に織り込んで憶えさせようと努め、たきが台所で物売りと言話を始めると、花野はすぐに駆け出して行って、二人の言葉に耳を傾けるといふ風でありました。が、何よりも助けになったのは、学校の運動場であつたと思います。花野は忽ち運動場の名物になりましたが、お友達遊びの仲間入りをして、人が走れば花野も走り、手真似をすれば花野もし、皆がお喋舌をすれば花野は英語でお喋舌をしなから、とても楽しそうでした。ここで花野はたくさんの言葉

それで、すぐ近所の学校で、東京中でも厳格で知られている学校に入れることに決めました。これについては松雄の親戚方も異存はありませんでした。

花野は日本語の知識は貧弱でしたが、算術が進んでおりました点と年齢相応の知識をもっていましたので、適当な公立小学校の教育を受けさせたいと願ったのでございます。けれども、学校当局は日本語のできない生徒の処置に困ってしまわれました。文部省令に従って昔ながらの伝統に忠実なことをこの上ない誇りとしているそこでは、規定の線から少しでもはずれようものなら、忽ち混乱してしまふというのでした。

たびたび頼んでみても、日本語の解らない生徒を入れる組がないといわれ、心は滅入るばかりでありましたが、くず折れてはならないと、自らをいませしめつつ、外国生れの子供でも日本臣民なのでから義務教育の制度がある限り、何とかして頂けそうなものだと、熱心こめて当局へお願いいたしました。

幸いに子供は日本の小学生徒となることができました。が、今度は又慣れない形式を重んずる校則を子供心にどう受取るだろうかと大変心配いたしました。辛くも三学年

もなくなつて参りました。

私は大谷叔父への報告は怠りませんでしたし、様子を見に来て下さる親戚の訪問も喜んで受けておりました。どんな小さなことでも、計画を変更する時には親族会議にかけようといわれておりましたが、これは少々面倒なことで、時には不要だと思われたこともありました。親戚のものには花野が以前どんな勉強をして来たのか、一向にご存じなく、気にもかけては下さらず、女の子の教育は家庭の妻としての教育のほかは不必要だとばかり考えておりますので、学校の課業外の教育方針などで困ったことも時には経験いたしました。時が経つにつれ、お互いはだんだん親しく結ばれてゆき、相談をかけたとしても、私一人の考えで決めるようにという便りを受取るようになりました。

やがて、花野が街頭の看板も読めるようになり、周囲の話も理解するようになりましたので私は学校へ行くことを止め家事の方に気を配ることにいたしました。すると、ここにもまた、たくさんの問題がございました。取るに足らぬ程に小さな問題にみえていることでも、蚊のさすように煩わしいものでありました。街には立派な洋服を売っていましたし、進歩的な家庭では、儀式以外には子どもに洋服

を着せるむきもぼつぼつございました。そんなことから、子どもには洋服を着せるのがよからうと思っていました。寒くなりましても、広い教室に火鉢二つ出るだけでありましたので、下着をたくさん着せ、毛の靴下もはかせました。いろいろ注意していましたがかわらず、ある日、千代が風邪をひいて帰って参りました。翌朝ははじめと寒うございましたが、学校行きを何よりの楽しみにしている千代を休ませるだけの勇氣もなく、それかといつて、この上、風邪が悪くなつてはと心配いたしました。思い迷つた私は、ふと、いけない考えを起しました。やわらかい毛織のコートのことを思い出して、服の上にこのコートを着せ、ボタンもすつかりかけてしまい、千代にはこれを脱がないようにと言ひ含めて家を出しました。

それから私は坐りこんで考え始めました。日本では、家に入れば靴も外套も帽子もみな脱ぐ習慣ですから、千代は教室に入れば、帽子と一緒にコートも脱がなければならぬのですが、レースの衿飾りや袖飾りのついた赤いコートは先生の眼には常の服としか見えないであろうと思つていました。私は先生がこの方面のことを御存じないのにつけこんで、こんなまやかをしたことを恥しく思いました。

そして、鬼子母神の物語も思いあわせ、人の母の心にはただただ自己中心の根性を宿しているのではなからうかと思ひました。

やがて溜息をつきながら私は立上り、外出の用意をしようとして、鏡台へ近づいてゆきましたが、何か心恥しく、鏡に写るわが顔に心の奥のごまかしが現れるのではないかと思つて、一瞬ためらうのでした。

私はすぐ近所の店へゆき、被風を作る布を求め、たきとすずを相手に特に綿をたくさん入れて縫いましたので、次の日、千代は洋服の上にそれを着て、大喜びで出かけてゆきました。

こんなことから、私は子どもの服を又着物に変えることにいたしました。

こうして、次第に日本の生活に順応してしまつた頃の思ひ出の鎖の中に、もう一つ悲しい出来ごとがございます。

人力車に乗りますとき、目上のものを先にたてるのが習慣でございますから、子どもは親のあとに従うはずでございます。ところが、元氣一杯の二人の娘は何をしでかすか測り知れない気がいたしましたので、二人を一緒に前の車にのせることにしてしまいました。ある日雑沓した街中を駆け

ておりますと、花野が後を振向いて、頻りに手を振り始めました。やがては夢中になって立上り、店の飾窓に出ている小さな卓と二つの椅子を私に見せようとするのでした。

二人とも口を揃えてそれを買ってくれというのです。家へ椅子を入れては、畳をきずつけますし、日本間に洋風な家具を入れては不調和なものですから、買ってみても無意味なものだと思ひましたけれども子供が余り欲しうにしていたものでございますから、買うことにし、椅子の脚に薄い板をあてるように頼みました。そしてそれは翌日届けてくれることになりました。

次の日、私は朝早く買物に出て、お午頃帰って参りました。すると客間の真中に例の竹のテーブルを置き、両側に椅子を置き、二人の娘が向いあつて腰かけているではありませんか。二人とも本も持たず玩具も出さず、唯坐っているのです。すずには聞けば、二人は一時間ばかりもそうしたままで時々、席をとりかえたり、低声で何か話していたそうでございます。

「何をしているの、だまってそこに坐つていて」と申しますと、

「まあ、面白いのよ」と花野が答えました。

暫くすると千代が申しました。「アメリカのお祖母さまのお椅子はやわらかいけど、このお椅子はここにこぶがあるのよ、お姉さま！ またかえましょうよ！」

それからまた、夜具の問題がありました。日本の女は立派な夜具を作るばかりでなく、身分相応なものを作ること、主婦の誇りとしています。母は二人の子供のためにとて絹と麻の蒲団の布地をたきに託して下さいました。花野にはその名に因んで、薄桃色の地に色さまざまの四季の花を散らしたものであります。千代には長寿を現して、空色の地に雲と飛び交う鶴の群を染めなしたものであります。数日、たきとすずは蒲団縫いをしてくれました。でき上つた夜すがそれを並べてのべるのを待つて、二人の子供は私が寝させるからと言ひおき、女中たちには近所のお寺の縁日を見にやりました。ところが、子供の着替えをさせている最中に、客がみえましたので、私は子供同士に任せておいて、客を迎えました。

客は遅くまでいられました。たきとすずが帰つて来た物音を聞きましたが、暫くすると子ども部屋で大騒ぎをしている気配でした。花野が英語で「ひどいわ、およしよ、ひどいわ」といつているのが、はっきり聞え、日本語で呟く

声がしたと思うと、眠そうな不足を云う声、「おやかましゅうございませう。お寝み遊ばせ」とやさしくいう声が聞え、襖のすべる音、囁く声など聞えて、あとは静まり返ってしまいました。

お客さまがお帰りになると、急いで子ども部屋に入ってきました。二人とも静かに眠っておりました。さすが門に錠を下してくるのを待って話を聞き、初めて事の次第を知りました。忠実一筋のときは縁日から帰ってくるはず、子ども部屋の様子を見に行きました。すると、どうでしょう。花野は鶴の模様の蒲団に休み、千代が花模様の蒲団に休んでいるのでした。生れつき几帳面なときはこのままにはしておけなかったのです。いきなり掛蒲団をとって花野を抱きあげ驚いた花野をそこに立たせておいて、「判らないお子達だ！ お子達だ！」と眩きながら、千代を抱いて花野の寝床に入れたのでした。「ちょっと替えてみたのよ」とぶつぶついつている花野には耳もかさず、たきは花野を寝かせ、掛蒲団をかけてから、丁寧に「お寝み遊ばせ」の挨拶をし静かに襖を閉めると、子供の眼をさますのを恐れるかのように、そっと退ってゆきました。

私は寝床に横たわりながら「たきはやっぱり昔のままなよくお昼寝をし、お父さまが千代ちゃんと一緒に腰かけうになさったところよ。それからこれは、七月四日の独立祭の日に花火をした大きな石段よ。それからこれが井戸、これが跳橋。それからここはクララが雛どりに餌をやったところよ。すっかりいいわ、この通りよ。ね、千代ちゃん、私が決めたのだから忘れちゃ駄目よ。お母さまにいつちゃ駄目よ、御心配なさるから。それにお母さまは大事な人ですものね。この他のものはみんなもうないのよ。もう来やしないわ。仕方がないから我慢しましょうね。でも、今のことと忘れないでね、大事な大事なところなのよ。ね。じゃ、今度は歌いましょうよ」

二人は立上り、手をとりあって歌い始めました。子供っぽい、澄みきった声でアメリカの国歌が流れてきました。

私は次の間に入って忍び泣きました。そしていつぞやの、異国に移された朝顔のことを考えておりました。将来の幸福のためとはいえ、かわいい花をこの見知らぬ、新しい土地に植えて替えて、小さく生いたたせてもよいのであろうか。もちろんこの園は力と靈感に満ち満ちたものではあります。が、これほどの犠牲を払ってまでも、この子ども達を敢てここに植えるべきなのであろうかと疑いつづけておりました。

のね。日本の女はやさしいばかりだと思っている人は、少し考え直さなきゃならない」と思って、一人で苦笑いたしました。

けれども、笑えなかったのは子どもの心の中を秘かにのぞきみた時でした。その日二人の子どもが掛蒲団をとり替えたのにもなにか子供心に考えがあったに違いないのです。が、わざとそれは聞きただしませんでした。花野は何とも致し方ないような小さな困難には黙って耐えてゆくという性質でした。そして、日本に帰ってからの新しい生活に対しては、興味深げに見えておりましたので、この子が心の奥深くで、アメリカの家を憶れていたとは露知りませんでした。宅の庭には入口が二つあり、一つは家の方から通じており、又、木戸から勝手口に通ずる小路に面して小さい枝折戸があり、ここからも庭へ入れるようになっていました。ある日、外から帰って来た私は、家の傍まで来て俄雨にあり、急いで木戸から入り、踏石づたいに縁側にかけてみました。そして自分の部屋へ行きかけますと、子供の声が聞えてきました。

「この日蔭はアメリカのお祖母ちゃんのお椅子があった縁側よ。この木の下にはハンモックがあって、千代ちゃんが

二十六 お祖母さま

「お祖母さま いらっしやる いらっしやる

お祖母さま 今日 いらっしやる」

と、千代は嬉しそうに歌いながら、小さな足袋の足をばたばたと響かせて、母を迎える準備に忙しい私のあとにつきまとうのでございました。

靴下を足袋に更え、ゆるやかな服は緋の裾廻しも愛らしい花模様の着物に更えて、袖をひらひらとなびかせておりました。

私は千代の黒髪をおかっぱにした様子を見ては「日本人には、やはり着物が美しいこと」と思ったりいたしました。千代に洋服は余り似合いませんでしたが、着物を着てみると、ずっと可愛くなりました。けれども、体だけはアメリカ人のように、のびのびと達者になってくれたらと願い、溜息をもらすこともありましたが、外部の影響をうけて、致し方なく母の上京前に子供に着物を着せるように致しま

したことをよかつたと思うのです。

母から旅行の準備が整ったという便りを受けましてからは、家中が急に忙しくなりました。私と子どもが同じ部屋に越し、家中で一番居心地のよさそうな、使い勝手のよい部屋を母の居間に決めました。それに、部屋の中のものはいっさいが母に親しみ深いものに見えるようとり計らいたいと思い、天井から下った電燈を止め、故郷の行燈に似せて、高さ三尺許りの黒い塗骨に紙をはった雪洞風のものを用心にすることにしました。ガストーブは真鍮細工に巧みな装置がしてありましたので、炭火の火鉢のように見えていました。母は生来、新奇なことをも微笑しつゝ受け入れるという性質の人でしたが、私は母に受け入れてもらうのではなく、何の努力もなしに心地よく融けこんで頂けるように、万端の用意を整えたいと思いました。

仏壇棚はこれまで子供の帽子や書物を入れるのに使っていました。たきさえこの「お高いもの」——とたきは呼んでいました——を入れることには反対しませんでした。たきも日本人として、書物は貴いものとし、帽子も頭に戴くものですから、尊ぶことを知っていたのでした。けれども、私が書物や帽子をとり出して、母が故郷から持って来られ

る飾りのないごく質素な仏壇を入れる用意をいたしました。時のたきの喜びには、一方ならぬものが見えました。「お祖母さまの持っていらっしゃるお仏壇を何処へ置くの」と花野は尋ねましたが、多分大谷叔父の家の大きな漆塗の仏壇を思い出したのでございましょう。

「お祖母さまはお仏壇やそのお道具はじきに取りまとめおしまいになりますよ。クリスマスチャンが聖書と祈禱書をもって歩くのと同じことですよ。ですから、このお仏壇入れの戸棚を片付けてきれいにしておきましょうね。お祖母さまは悲しい時にも嬉しい時にも、ありがたいものは大切になさるんですよ」と私は答えました。

「お祖母さまの神さまは、私達の神さまを御存じなの」と千代が尋ねました。

私はその戸棚へ頭をさし入れて埃を払っていましたが、花野がこれに答えました。

「そうよ。神さまはみんなが親切なよい人になるようにと願っていらっしゃるということを教えようとして、エスさまもお釈迦さまも、とてもお苦しみになったのよ。お祖母さまもアメリカのお祖母ちゃまもどちらもよい人だって、お母さまがおっしゃったじゃないの」

こうして三人が語りあっている間中、隣りの部屋では、ばたばたばたとたきの音が聞えていました。結びあげたばかりの髪に藍染の手拭をかぶり、たきがけのすずが元氣よく掃除をしているのです。ふと音が止んだと思うと、すずが入口に顔を見せ、手早く手拭やたきをはずして、「たきさんが申しておりましたが、ガス風呂では大奥さまのお弱いお身にはあたりが強すぎは致しませんでしょうか。桶屋へ行って参りましょうか」と申しました。

田舎の人が弱い人や老人には薪でたいたお湯に限るといつていたことを、私はすっかり忘れていました。急いですずを使いに出しますと、二時間ばかりした後には、もう湯殿のガス釜は木炭かまどに取替えられ、これで用意はすっかり整いました。

その夜は子ども達にとって、忘れがたい晩となりました。たきを残して、家族全部、打ちそろって駅に母を出迎えました。居残ったたきはお赤飯とおかしらつきの焼魚を温めて待っていました。母を迎えて、家中が嬉しいざわめきに湧きかえっている間に、たきはお仏壇をととのえ、お燈明をあげるのでした。お仏壇の扉を開きますと、香のにおいがあたりにただよい、小さなお膳に御霊供をのせてお供え致

しました。それから、私ども銘々のお膳も運ばれ、久々に私は母と隣り合せて坐り、子どもとともに、ご先祖さまに迎えられて、楽しい団欒に入ったのでございます。そのあと、客間にひきとって、一時間ばかりも花野のいう「お近づきの時」を過しました。母の疲れがそのお顔の色に見えて参りましたので、たきやすすも敷居際にひかえ、皆一緒に前につどいました。珍しくも又なつかしいことでした。念仏の声といい、鉦の音といいすべてがかつて聞きなれた音ばかりでした。殊に、母の読経の音が太平洋のあなたで永年ききなれた愛する人の口から幾度も聞いた声とも思われました。何もかも静かに穏かなこととございました。私がアメリカの「母上」に守られて楽しく過した日以来、味わったことのない平和が私の胸に這いよって参りました。

東洋も西洋もまあ、よく似ていますこと！ 数々の神や仏はあるとしても、結局は唯、全智全能にいまし、愛と理解に富み給う真の「力」があります故に、いっさいの人類が互いに理解しあう時が来るに違いないのだと、考えたりいたしました。

それから続く教週間、数々の新しい思いがけない教訓を得ました。それまで、母と子どもを結びつけるものは、親

身の愛そのものとのみ信じておりましたが、やがて、その親身の愛のほか互いに対する思いやりがなければ、将来の希望は達せられないことを知りました。

旧きものと新しきものとを適わせてゆこうとする私の努力は唯むなしく挫かれ、どちらか一方をたて、他方を捨てた様な結果に終るのが時折の落胆でありました。これは物質的な方面では唯、不便を感じるくらいのものでありましたが、母の古風な考え方と、学校の近代的な進歩した訓練の仕方が衝突した時など、全く困りはてるのでございました。母は決して批評がましいことは申さず、笑って受け流したり、軽く「世が変わったのう」とのみ申しましたが、女の子が男の子の学ぶべき学科にばかり時をかけ、生花、茶の湯、お琴など女のたしなみを軽んずることに對して、大きな疑いを抱いていたことは明らかでございました。又、子どもが体操の時間には運動場で元氣よく行進したり、歌を歌ったりしたことを、夢中になって話しますと、母は全く品のないことに思うのでございました。

私は、こうした運動が健康と発育のために必要なものであることを説明いたしました。又、女の子が真直に坐るのも、頭を高くあげて歩くのも、今では無作法でもなく、男

の人のようだとも思われなくなりましたと語り、花野が食事の中に学校のことなどを楽しく話すのも、母には下品な風情にみえるかも知れませんが、これも学校の教育に影響されてのことであることを話したりいたしました。

千代はおとなしくしているものですから、じきに母の氣に入りましたが、花野は賑やかで元氣一杯なものですから、母はいつも驚きまどうていました。花野はきびきびしていて、話しかけられない先に口を出したり、厳格な作法からみれば礼を失するようなことでもずんずんしてのけるものですから、私は絶えず氣を配っていて、突飛なことをしかけると、とめていなければなりませんでした。ですから、私が氣をゆるめていられますのは、花野が学校道具を持って玄関に出ると、下駄を穿くなり陽氣に駆けだしましてから、午後「たたいま」の声も高らかに帰ってまいりますまでの間ばかりでございました。

けれども、こんなことも長くは続きませんでした。いつもとなく、どうしてとも氣づかぬうちに、黙って張りきってました私の心持が次第にゆるんで参りました。花野は徐々に話し方も静かになり、動作も淑やかになりました。千代と並んで火鉢の傍に坐り、お祖母様の物語に耳を傾け

ていましたり、本の読み方を教えて頂いている光景など見かけるようになりました。ある時には、二人の娘がお祖母様の両側に寄りそって坐り、お祖母様が花野に「アメリカのお祖母さま」という漢字を教えているのを見たことさえございました。

千代は最初からお祖母様が好きでした。初め千代が祖母になつき甘える様を見ました時にははっとするほどでしたが、次第にその激情は和められて、氣のあつたお友達になつてゆきました。そして、二人を結びあわせたものが、一つには宗教でありましたことは、意外な事に思われます。幼稚園がお寺のすぐ先にあつたものですから、千代はよく道を知っていましたので、すがが忙しい時には代りに千代をお祖母様のお寺参りのお供につけてやりました。千代は広い本堂の中に坐つて、読経に聞き入ることを好いていました。おつとめが終つて、やさしい尼さんがお祖母様にお茶をふるまわれる時、千代にもお菓子を下さるのが嬉しかったのでございましょう。ある日、母は「千代や、いつも私のお寺のお参りについて来ておくれたから、今度はお祖母さまが千代と一緒に教会へゆきましょね」と申しておりました。それから千代はお祖母様をつれて教会へまいり

ました。それ以後、二人つれだつてはお寺へ参り、母が数珠をつまぐりながら念仏を唱えている間は、千代は頭をたれており、教会へ行きますと、母は熱心にお説教に耳を傾け、牧師の祈禱の間はうやうやしく頭をたれていたのでございました。それから二人は手をとりあつて帰りながら、聞いたお話について、あれこれと語りあつておりました。ある日、門のところまで帰りついてから、母が「牧師さんのおっしゃったことが本当かも知れないけれど、お祖母さまはお祖父さまの行かれたところよりもよい処へは行けないよ。お祖父さまが寒い地獄にいらしても、お祖母さまはそこへ行くのが務めですからね。耶穌教はお前のような当世の人のもので、お祖母さまはご先祖さまのあとに従わなきゃなりませんね」と申すのが聞えました。

ある日、縫物をしていますと、隣りの部屋で、千代が「お祖母さまはいつ死ぬんですか」という声が聞えましたので、あわてて襖を開けました。見れば、千代はじつとお祖母様に寄り添うて、その座蒲団の上にあがっているのでした。私は子供の頃、目上の人にこのようになれなれしくしたことはありませんでしたので、全く驚いてしまいました。二人は前に並べた小さな漆塗の箱を一所懸命に見つめ

ているのでした。傍には大きな箱があり、その中に小さい函がびったりと納まっています。私はその箱をよく憶えておりました。子供の頃には、それはいつも母の鏡台の引出しに入っていて、母は折り折り取出しては、香をふりかけていました。そして、今も母は香を振っているのです。「私、この箱をお人形のに欲しいわ」と千代が申しました。「いいえの、千代や。これはお前、お祖母さまが生れた時からの爪がしまつてあるのですよ」と母は小箱をとりあげて、青い貝殻を切ったような爪を振ってみせながら申しました。

「お祖母さまの手の爪や足の爪。何だかおかしいわね」と千代は大声で申しました。

「ねえ千代や、お前はご先祖さまから伝わった習慣しよぐわんを知らないのですよ。爪の切つたのでも産毛うぶげの切つたのでも大事にしまつておいて、人がもう帰らぬ長旅に出かける時には、この身のどこにも欠けたところのない様にするのですよ。その時ももう遠くはないからね」と母は庭面に眼をやりながら、物思わしげに申しました。

千代は不思議そうに小箱の中を覗いていましたが、その顔は急に真面目になり、又、お祖母様の傍にすりよって申

しました。

「お祖母さま、何だか心配よ。それはまだまだずつと遠いことかと思っていましたわ。お祖母さまは子供の頃からそれにお香を入れて、きれいにして、いつでも死ぬるようにお支度をしていらしたのでしょ」

母は皺だらけの手で、いつくしむように千代のおかっぱ頭を撫でていましたが、

「そうだよ。でも、もう長くはありませんよ。お祖母さまはもうこの世のお仕事をすませましたから、お慈悲深い仏さまが蓮はすの台たいの用意をしていて下さるに違いないのですよ」と申しました。

「仏さまはお祖母さまが蓮はすの台たいの処ところへいらっしやる時に、爪を持っておいでとおっしゃるの」

「いいえの、仏さまはお祖母さまの体のことなど気にかけてはいらっしやらないよ。唯、お祖母さまにおいでなさいとおっしゃるだけです」

「じゃ、どうしてお祖母さまはそんなに爪を大切になさるの」

母は扉を閉じた仏壇に眼をやりながら、

「ねえ、千代や。お仏壇も中に何にも入っていない時には、

唯の箱でしょう。それと同じことで、この体をお祖母さまはお借りして、その中に住んでいるだけなのですからね、お返しするまでは丁寧に扱うのが礼儀なのです」と申しました。

千代の眼は一瞬、鋭かな深い眼差に変わりました。

「じゃ、それで毎日お風呂に入ったり、歯を磨いたりするのね。それが神さまにお行儀よくすることだなんて、今までちょっとも考えたことはありませんでしたわ」と申しました。

初めのうち、私は子どもが作法に欠けていることで心を碎いたり、その子達が次第にしとやかになつてゆくことを喜んだりいたしました。自分自身がアメリカ生活を通して、変つて来ていたことには気づかずにいました。ある日、急ぎの用事を終えて、足早に帰つてまいりますと、門口に母が立って、じつと私を見ているのでした。私ははっとして、このあわてた、軽々しさを見咎められたのだと思いました。和服を着て、あわてる程、みにくいものはありません。母は例の如く会釈をして私を迎え、やさしく微笑みながら「エツ坊はまあ、次第にお父さまに似て来たこと」と申しました。

この言葉を聞いて、私は笑いました。この無言の叱責をうけいながらも、私の両頬は恥しさに燃え、母に従つて道を歩いてゆきました。日本の女にとって、男のような歩き方だといわれて、喜ぶ人はありません。母から受ける折り折りのこうしたほめかしにあって、進歩的になろうとする私の行動は阻まれ、元氣一杯の異国生れの二人の娘達も同じ感化をうけて、次第にしとやかな日本娘になつてゆきました。二年も経たないうちに、娘達は上手に日本語を話すようになり、着物の着方なども、板について来て、他人眼には日本生れの子のように見えておりました。

私は花野が母の好み通りに適わせてゆく様を見て喜びながら、母と一緒にいて頂くと、娘の躰がよくできて、と考えたりいたしました。それに、日毎の忙しさにとりまぎれ、また家庭がうまく融けあつてゆくのに満足しきつていましたので、年寄りの方で気持を撓めても、年若い子供を中心に考えてやるべきであるということをつかり忘れておりました。私は得ることのみを考えて、その蔭に横わる大きな損失を忘れていたのでした。

桜の花咲く頃のことでした。ある日、花野は私の机の傍に自分の机を近づけて坐っていました。軒に近く咲き誇つ

た桜の梢に微風が過ぎますと、花びらははらはらと散って、机の上にも舞って参りました。花野はその一片をとりあげると指先でもんで、ぶいと投げすて、指にのこったしめりをじっと見つめているのです。

「花野、何を考えているの」と訊きますと、花野はびくつきしたように頭を上げてから、静かに視線をそらし、暫くするとこんなことを申しました。

「アメリカにいた頃ね、きつと、お茶にお友達をお招ひした時よ、私は疲れて、芝生へ出て行つたの。それから、あの『お城』、憶えていらっしやるでしょう、お庭の大きな林檎の木ね、あれに登つたのよ。丁度花が散っていて、私の手の中に一片落ちて来たのよ。この桜の花びらと同じに、私の指がしめつたわ。ねえ、お母さま、何んとかしてアメリカのお祖母ちゃんにお目にかからせて下さいよ。あのお玄関やあの木も見たいわ」

おかつぱ頭が急にうつむいてしまいましたので、急いで近づこうといたしますと、すぐに頭を高くあげ、

「いいのよ。私、もう日本が好きになったのよ。でもね、時々この胸に火がついたようになるのよ、そんな時、ずいぶん駆けたりしたわ。それから一度、お母さまのお留守の

時、お縁側の傍の松の木に登つたのよ——たった一度だけ——もう登りませんわ。これでいいのよ、私は日本が大好きなんですもの」と申しました。

この時初めて、私は花野がお庭を駆け廻って袖をひるがえし、下駄を踏み鳴らしたことを今更のように思い出しました。そして私はその時、娘を部屋に呼び入れて、もっと静かにするようにとたしなめたりして、誠に無智な思いやりのない母だったのでございました。

けれどももうそれは遠い過去のことになってしまいました。花野は物いいも静かになり、畳の上を歩いても足音をたてなくなり、目上の人のお話を伺う時には、静かに頭を垂れて聴きいるようになってしまいました。唯、母ばかりは喜んで、先日「花野はなかなかいい子だよ、しとやかになり、品もよくなりましたの」と申すのでした。

私は坐りこんで物思いに耽りました。はたして花野はほんとに幸福になれるのであろうか、ちよつとも悲しそうには見えないけれど、すっかり変ってしまいました。眼はもの柔かになりましたが、昔のように輝いてはおりませず、口許はやや下^{さぶ}つて、晴やかな快活な話しぶりは消え、もの静かに和らいできました。これが上品な、しとやかなとい

うものでございましょうか？ 左様に違いありません。けれども、私の一声に答えて、飛上ってくるすばやさはどこへ行つたのでございましょう？ 見たい、聞きたい、したいのあの愉快さ、熱心さはどこへ行つたのでございましょう？ 生活の一切に興味をそそられて、元氣一杯だった、あのアメリカ生れの娘の姿はどこへ行つたのでございましょう？

沈みかかる心を抱いて、机の方を見やりますと、嬉しいことに、花野は早や故郷こいしい思いも忘れたかのようになり、忙しそうに勉強に余念もない様子でございました。

一時間ばかりも過ぎた頃、ふと花野の部屋を覗いてみますと、花野は箆笥の前にうすくまり引出しから古いサージの服を出して、それに顔を埋めているのです。私は忍び足でそこを去り庭へ下りました。余りのことに眼先はかすんで、しかとも見えず、私は盆栽の松の植木鉢につまずきました。張り出そうとする根の力で、鉢にはすでにひびが入っていたのですが、私が足を触れたはずみにばらばらに砕けて、もつれ絡んでいた松の根があらわになってしまいました。

「ちやうど花野もこの通りなこと。松の植木は明日また植

木鉢に入れられることでしょう。松も花野も同じなのだ」私は深い溜息とともにひとりごちました。

二十七 無縁 仏

その夏、母は大変弱りました。持病の喘息の発作がたび重なって苦しうでした。そんな様子を見るにつけても、郷里の里の近くに住んでいました姉に来てもらえば、母には久々のことでもあり、隣り近所の噂話も聞けて、気もひきたつかと考へ、そのことを姉に申し送りました。二三週間も経ちました頃、姉は上京し、一家の喜びは一方ならぬものでございました。母には慰めとなり、私には相談相手となり、子ども達のご先祖方のお話をお伽噺でもきくかのように面白がりました。幼い頃からそうでしたが、姉は里の家の歴史を語ることが何より好きでありました。

その年の夏中は、殆んど毎日のように、お隣りの高い屋根の向うに陽が沈んで涼しい夕影が庭に這いよるころ、私どもは一風呂浴びて、浴衣にかえ、打揃って庭に面した広い部屋に集りました。母は座蒲団に昔ながらの礼儀正しく坐りましたが、姉はくだけて座蒲団をさげ、ひえびえした

敷草座の方に坐るのでした。姉は美しい人でした。その切下髪をあるかなきかに波打たせ、今にもやさしく微笑みかけようとするものやわらかな顔つきで、静かに坐ったその姿は、今も眼の前に浮んでまいります。姉と母との間に、子ども二人が坐り、花野は忙しそうに指先を動かして色鮮かな友禪の絹布を切つて、豆袋を作つたり、千代に紙人形を切つてやつたりいたしました。千代はかわいい手を膝に重ねて、器用な姉の手先に見とれているのでありました。こうした団居の時、その日一日の小さな出来ごとを何くれと語りあいました。子どもの学校での出来、不出来、家の中のこと、さてはご近所の噂話まで持ちだされるのですが、いつも定つたように「あれは面白いでしょう」とか「そのお話をして下さい」とか「ええ、憶えていますわ」とか「子どもに話してやつて下さい」とか、誰かがいい出すのでございました。

ある夕方、母が今日お坊さまがみえて、毎年家で営む「無縁仏」の供養の相談をされたと申しました。すると花野が、

「どうして無縁仏なんていうの、何だかさびしそうね」と申しました。

「そりゃお前、悲しいお話なのですもの。そのお話は三百年も前に始つて、まだ終らないんですよ」と母が答えました。

「きくのことと、あの廊下のはずれのお部屋とどんな関係があるんでしょう」と私は突飛な質問をいたしました。

私は忘れかけていた開かずの戸のことを思い出していたのです。

「あの家であつたことじゃないのでしょうか」

すると姉も話につりこまれて、

「そうなんですよ。でも、あのお部屋はお化けが出たといわれていたところに建っているんですよ。ねえ、お母さま、家が焼けたあとで、誰かがお庭に菊を植えたら、気味の悪い光が菊の花の間に見えたと申しますのは、あれはほんたつたでございませうか」と申しました。

花野は手に持っていた縫物を膝に落し、二人の子どもは熱心に大きく眼を睜って、姉を見つめておりました。

「お姉さま、お夕飯までのお仕事ができましたわ。子ども達がお話の香を嗅ぎつけてしまいましたよ。さあ、せんだつて、料理屋で菊の模様のお座蒲団をお敷きにならなかつたわけをお話してやつて下さいませ」

「エツ坊のように文明開化の人には、私が馬鹿げて見えるでしょうね。でも、私はやっぱり菊の花が不吉な花のように思われてなりませんよ」といいながら、姉は恥しそうに微笑しました。

私は姉の心持に同情して、

「私にはよく判りますわ、私もアメリカへ参りますまでは、そう思つておりました。あちらでメリーという名前は日本のきくと同じによくある名前なのですけれど、私はメリーと聞くとすぐに聖母マリアを思い、神聖なもの、尊厳なものを聯想するのです。この名を唱えてお祈りをする人もあるんですよ。ところが、アメリカへ行つて間もない頃あるお店のお内儀さんが『メリー、ちょっとおいで』と大声で申しますと、顔の汚れた身装も貧しい女の児が飛び出して参りましたので、すっかり驚かされたことがありました。それから又、ご近所のメリーという女中さんは間抜けでしたものですから、初めのうちこそびっくりしましたが、ついには、聯想など狭いものだと思つようになりました。広く使われてしまうと、最初の印象など、ついで廻らなくなるものですね」

姉は静かに語り始めました。

「私の子どもの頃には、家の中へ菊の花が持込まれたこともなし、襖やお皿や着物、扇子などにも菊の模様を使ったことがありませんね。家にも花からとった名前はいくつもありませんが、きくだけはありません。女中でも、きくという名の女中は、家にいる間だけは名前を更えるつもりでなければ、使ったことはありませんよ」

「どうしてなの、どうぞ、そのお話をして下さい」と二人の子どもは口を揃えてせがむのでした。

そこで、私は幼い頃から聞き馴れた物語をもう一度聞くことになりました。でも、考えてみますと、私は年を重ねるにつれて、その物語の意味を変え、今では、裡にもつれあう、やさしい情と、務めに忠実な冷静な心の二つを称えた古武士の物語として、心に刻みつけられております。

その物語の祖先が当主でした頃、当主は必ず二人の側女を持つことに定まっています。これは当時、後継のない家は断絶となる掟があり、嗣子のないことはいい難い禍いでしたから、これを防ぐためのものでありました。この側女は大概奥方の家柄に準じた身分の家から選び、側女は勢力はありませんでしたが、その地位は正妻に次ぐ扱いをう

けたものでございます。

このご先祖の側女のうち、一人はきくのと申しました。主人はすでに年たけて、きくのは父親にもあたるくらいに年配でしたが、家の記録から考えますとこの側女は主人から余程の寵愛をうけていたものと見えます。もちろん、家の記録というものは、よくないことは避けられるものですから、必ずしも一々信頼すべきものとも思われませんが、この先祖の遺業にはなかなか立派なことがありますので、私は記録のままを信じたいと思います。

当時、格式ある武家では奥向と大表とははっきりと分れており、大表でのいっさいの表立った事務は男の手でなされました。その役人衆の中で御小姓というのは来客の接待を初め使者の役目をするのであります。そしてこれは武刃一方になり勝ちな大表にみやびさをも失わぬような制度なので、お小姓には年若く美しい男子が選ばれ、女の子のように華かな着物を着せられ、髪も前髪や髻をとって、美しい髻に結びあげさせたものであります。

この御小姓の中に、特に目をかけられた若者がありました。若者は家の譜代の家に生れ、氏も育ちもすぐれておりました。奥向と大表とはすっかり離れておりましたが、一

目の中には何度も使いが行き帰りし、職務の上でも、遊びの上でも、両方の男女が出会すことも幾度かありました。こんなことから、きくのとこの御小姓とが相知る仲となりました。きくのはまだ十七という若さでしたが、主人はその二倍の年齢であり、考えていることも、戦争のことや厳しい務めのことばかりでした。が、若い御小姓はそのやさしい声で歌や花のことなども語るのですから、きくのはこの御小姓に心を傾けてしまいました。そしてテニソンの物語のランスロットとギネヴァの物語のような始末になったのであります。

若い二人の心中に、真の罪と名附くべきものはなかったと思います。けれども、日本の女は幼い頃から己を抑えることを教えられ、いよいよ結婚すれば——側女となることも一つの結婚であります——女は一切自分を殺して生きなければならぬものとされておりました。

二人の噂は主人の耳にも入りましたが、主人はこれを問題にいたしませんでした。ところがある日、中庭に面した広間に入ってみますと、この二人が低声で話しあっていたのでした——しかも二人きりでいたのですから、それは男女間の作法として、許されないことであります。これこ

そ家名の汚れであり、当時の掟からは、唯、血をもって拭いけすことができるのみでありました。さもなければ、死にまさる幾千倍もの不面目ではあります。二人を水門から追放するほかありませんでした。

年進んだ主人は情ある人であり、自らの刀にかけて二人の面目を保つてやることにいたしました。二人は運命のさげがたいことを覚悟しておりました。きくのはすぐにお手討の支度にとりかかりました。若者は自若として、帯びていた長刀をはずし、右肩から上衣を脱ぎ下着をあらわにして、帯をゆるめ、短刀を片手に静かに死の筈についたのでした。

家名を汚された主人がそこに黙々として端坐していた姿を思い出しては、私はその心のうちを思うて、同情に耐えなかったのであります。その胸のうちには哀憐と怒りと無念の思いが乱れあっていたことごさいます。あふれる激情を抑え、当時の掟を固く守って、微塵も動かすことはできなかつたのでございました。

可愛そうなきくのはその生んだ男の赤ん坊のもとに赴き、乳母の腕に眠っているその子に、愛情をこめて最後の手をふれたのみで、誰にも一言のいとま乞いも告げませんでした。

た。口紅をふきとり、髪を解いて、ただ白紙で根元を結び、白無垢に着替えました。やがて、主人と恋人の待つその部屋へと返りました。

作法は少しのゆるぎもなく固く守られました。きくのはひざまずいて、まず主人に、次いで若者に低くお辞儀をいたしました。礼を終わりますと西方に向けて坐り、しごきをほだいて両膝をしかと結び、それから暫く数珠をかけた手で合掌して後数珠を左手にかけ、右の手に懐剣をとって、我と我が咽喉を突こうといたしました。主人は敵しい人ではありましたが、側女に対する深い愛情の故か、すばやく進み出て、きくの手から懐剣を奪い、自分の短刀を手渡したのです。この短刀こそ正宗の名作といわれ、先祖時代の家宝として伝えられたものでございます。

こうして二人は死んでゆきました。男は年若い武士として立派に死に付いたのでしたが、きくのは倒れる時に、ふと一方の手をさしのべ、それが白壁に永久に汚れを残したのであります。

若者の骸はその突然の死を悼む鄭重な辞を添えて、親もとへ送られました。誰も彼も事の真相を知っており、この若者自身さえ悲しい運命は覚悟していたことであります。

きくのの生んだ子どもはのち杉の老樹の繁茂する山に一寺を興しました。そこには、無縁仏の墓が観音の像に守られて、さびしく立っております。

思えば、愛と哀れみの思い出は消えはいたしません。殆ど三百年近くの間、このご先祖は朱と木炭の豪華な柩に横わって、代々の子孫とともに眠ってきました。そして、その三百年間、代々この家の者達は、この家名に忠実な祖先の心の中を汲んで、毎年、無縁仏の供養を捧げて参ったのでございます。

若者は真夜中に埋葬され、親もとと菩提寺では、それ以来、命日ごとにこれも無縁仏として供養を続けられてまいりました。他方、きくのためには、幼君の母にふさわしい手厚い葬儀が営まれ、きくの名で多額のほどこしもなされました。それ以後、主人は子孫に菊を植えることを許さず、家内にきくの名を用いることを禁じたのでございます。きくのの生んだ幼君は母の不義のため、嗣子の地位を奪われ、子孫に汚名をのこすことを恐れ出家とせられました。そして、そのご生れた子が家名を嗣いだのであります。

血に汚れたその部屋は閉ざされ、代々開くことはありませんでした。父が戊辰の前に新築いたしました時にも、親戚の誰彼は思い出の部屋の跡は空けておくようにとすすめたのですが、父は今、世にある我々がこうして親しみあっているのを見れば、祖先の皆様も同じように親しみあっておられたことと思われるからと申して、このすすめを受入れませんでした。父はさすがに開けた人であったと思いません。けれども、召使達は忘れようとはいたしませんでした。

新しい部屋の壁にも、開いた手の跡が昔のままに、うす黒くついでいると申し、様々な幽霊話も作り出される有様に、母は致し方なくその一間を閉じてしまいました。

二十八 日本の婦道

ある日、私の部屋で姉と私が縫物をしておりますと、花野が入って参りました。もはや夏も近づいておりますので、障子はとりはらわれ、庭に面した部屋はみなあけ放たれておりました。茶の間の火鉢に寄りながら、細い煙管を手にして、どこか遠いところでも見つめているような眼付で、庭面に眼を落している母の姿も、こちらから見えていました。

「ここへいらしてから、お母さまはお嬉しそうね。あの穏かなお顔つきをごらん下さいよ。まるで仏さまのようです」と姉が申しますと、花野はまた、思案ありげに、「お祖母さまが私達のようにほんとにひどくあわてたこととおありになるのかしら」と申しました。

姉は奇妙な笑いを浮かべながら、花野の顔を見ました。静かに「お祖母さまがあわてていらしたらしい御様子は見たことはありませんね。子供心にも一生で一番怖い

と思うた御維新の戦争の時、おうちを逃出した時でもお祖母さまはとも落着いていらして、まるで戦場の大将のようであられましたよ」と申しました。

「おや、そのお話を聞かせて下さいな。みんなお話しして下さいな」と、花野は急に坐り直して、声高くせきたてました。

「お姉さま、その方がよろしゅうございますわ、花野ももう大きくなりましたから、判りましょう。お姉さまの憶えていらっしやるだけをお話してやって下さいませ」と私も言葉添えました。

それで姉は話し始めました。母は僅か十三歳という年齢で花嫁の駕籠に乗り、槍持を先頭に新しい家に入ったのでした。父は藩の家老の一人でしたので、屋敷もずいぶん広く、母は嫁いだから一度も足を踏み入れない部屋もあった程でした。何しろ明治維新の風雲をはらんでいる頃でしたから、父は職務がら、たびたび江戸へ出向きましたので、母は余り父に会うこともなく、姑御に仕えたり押絵細工に耽ったり女中達を相手に雛遊びなどして過していました。花嫁とはいえ、まだほんの子供に過ぎませんでした。

そのうちに男子一人女子二人の母となりましたが、娘達

には乳母がついていて、一切の世話をしていましたので、母にとってはまるで玩具のようなものでした。又、息子は家の嗣子として、附人の役人がありまして母は時々その顔を見るだけにすぎませんでした。母にとってこの息子は、寶石のようなもので、深い愛情よりも、誇りを感じる方が強かったわけでございます。こんな風でございましたから、若い花嫁は平和な年月を送っていました。

そのうち、幕末の戦雲が次第にここにも襲いかかって参りますと、この静かな家にも様々な変化が見舞いました。父は母に大事の数々を語り聞かせておりましたので、母も覚悟はいたしておりました。ある日、父が役目を帯びて家を後にいたしましたので、いよいよ母の心労は重なるばかりでございました。母はまだ二十歳を越したばかりの若さでありましたが、武士の妻としての務めはよく心得ておりました。女の人格に目醒めた母は、父に万一のことがあれば、嗣子の生命は一家存亡にかかわることに思い至り、譜代の家来である忠義な簀田殿に託して、菩提寺にかくれさせました。母は様子を窺っていました。戦雲は日々を急を告げるばかりでありました。ある雨降りの真暗な夜、一人の若侍が訪ねて参り、父は捕われの身となり、江戸に送

られることになったのであるが、今夜、真夜中頃城外を通りかかる故、その時母に会見をゆるされる由の報告をもたりました。

母は使いの者を見つめ、もしや何かの計略をかけられるのではないかと疑いました。

「御身は武士か」と問いました。

その男は重々しい態度で刀の柄に手を置いて答えました。

「仰せの通り武士でございます」

「味方にせよ、敵方にせよ、御身が武士ならばその言葉を信じましょう」

母はこの使者を疑わなかったとは申しますものの、当時は物騒な頃でございましたので、懐剣を帯にさしはさみ、忠僕の芳太に姑御の身の上のことをとくと頼んでから、使者に用意ができた旨を告げました。

使者と母とは雨について暗夜の道を進みました。雨にぬれた使者の武具は、提灯の光に照らし出され、その後に続く母は覚悟の装束を内につつんでいたのでございました。人足も絶えた街をぬけさびしい畦道を過ぎて、城下をめぐる道の程遠いところへ辿りつきました。そこで立停って行列を待ちました。

間もなく、彼方の闇を破って、灯かげがゆれるのが見え始めました。そして駕籠かきの土踏む足音さえ近づいて来て、やがて駕籠はとまりました。網乗物が地上にかき下されますと、両側に武士が附添い、駕籠かきはひき退りました。母が目をおげますと、父の蒼白い顔が小さな角窓から覗いているのでございました。二人の間に武士の差立てる二本の槍が交叉されていました。暫しの沈黙を破って、父が申しました。

「奥か、刀を預けるぞ」

唯、それだけでした。二人は聞き耳をたてている人のあることを知っていましたから、息子のことには触れませんでした。母は唯お辞儀をしただけでしたが、気が母に通じたことが父にはよく判ったのでありました。

駕籠の簾は下され、警護の武士は槍を肩にもどし、駕籠かきは柄を肩にかけました。そして小さな行列は再び暗闇の中に消えてゆきました。先刻の使者は伏した頭をおげ、元きた道に向いました。母はその後に従いながら、重い務のほどをひしひしと感じておりました。父の言葉は少のうございましたが、早や死は迫っている、家名を嗣いで先祖代々の祀りを守るべき息子のあとを頼むぞという意味であ

つたことがよく判っておりました。

再び母は不安と心配の重荷を負う身となりました。やがて官軍の隊伍は続々越後の平野に押寄せ、長岡城も危うくなりました。かねて覚悟のこと故、母は恐れる色も見せず落着き払って、家中に賓客を迎えると同様の準備をするように命じました。床の間に秘蔵の軸をかけ、置物も立派なものにとりかえました。それから、家来や召使を落ちのびるようはからいました。

その頃、姉はほんの七つの子供でございましたが、恐しい一夜のことどもは細大もらさず憶えているのです。乳母はこの姉と次の姉とを起して、大急ぎで着物をかえさせ、帯をしめ、——帯こそは日本の女の徳を表現するものとして、どんな急ぎの折りにも、武士の家に仕える召使の忘れてならないものでした——暗夜にまぎれて、山の方へ落ちて行き、母と祖母が召使二人をつれて、あとから来るの待ちあわすことになっていました。

母と祖母とが農婦の姿に身をやつし、狭い山道を登って参りました時の様子を話しながら、姉はかすかにほほ笑みました。祖母の着た簀の前の前が合わず、紫の着物が見えていたのでございます。この紫の着物と申しますのは身分ある

家の夫人が隠居した時に用いる色でございまして、祖母はその夜もこれを脱がないと言ひ張ったのでございます。それに、祖母は農婦のように爪先を開いて歩こうともいたしませんでした。

母は祖母と娘二人を安全と思われる竹藪に残し、供の芳太をつれて再び屋敷へ帰って行きました。二人が紙製の松明をとめて道の角々を曲るのが、山の上からはよく見えました。芳太が藁を積みあげ、母がこれに火を点じ、我が家を焼き落しました。祖母は静かに我が家に上る火の手を見つめておりましたが、召使たちは地上にうずくまって、すすり泣くのでございました。やがて母は髪を乱し、煤けた顔で山路をよじ登って参りました。暁のほのあかりを頼りに僕が背負って来た包みからとり出された着物で、二人の姉は下様な着物に着替え、母の命令で乳母は姉をつれてそれぞれ銘々の在所へ逃げのびたのでございます。その頃の召使は誠に忠実なものでありません。銘々一振りの懐剣をわたされ、万一捕われるようなことでも起りますなら、それを用いるようにと申し渡されておりました。この定紋つきの懐剣は今も乳母達の家の家宝として大切に保存されております。

姉が母に会ったのはそれからずいぶん後のことであつたと申します。姉は乳母に伴われて、ある農家に身を寄せ、そこで農夫と同じ生活をし、乳母はその家の人達とともに野良に出て働きました。毎夜、お風呂のあとでは、姉の顔が色白にすぎるといっては、柿の渋を顔に塗られ、言葉使いもその家の子どもを真似るようになると言いきかされました。食事だけは最初に致しましたが、姉の生活のいっさいは農家の人々と同じでありました。「その家でも、私の身分は知っていたらどうと思ひますがね、お父さまがその村の名主に帯刀をお許しになった関係から、私も裏切られずにすんだのだと思ひつています。妹もやはり農家にかくまわれていましたよ」と、姉は語るのであります。

その頃、祖母も母も、身装を農家の女房にやつして、笠を被って、所々方々をさまよい歩いておりました。ある時は山蔭に、ある時は農家に、又時にはお寺に身をかくしたこともございました。こうして追われ、逃れつつ、放浪の生活は二年ばかりもつづきました。

「とうとう、お母さまが私のいた農家へいらっしやいました。お母さまはすっかりお瘦せになり、日焼けして昔の面影もなく、変りはてていらしたものですから、私は泣いて

しまいました。その夜、養田もお兄さまをつれて参りました。養田の話ではお坊さまは幼いお兄さまの命だけは助けたいと辛苦なさいましたが、探索が厳しいのでお寺をお出になり、つまりは、お兄さまもお父さまと御一緒に捕われる身として数カ月をお過しになられたそうです。お父さまもお兄様も切腹を仰せつかるどころでしたが、ちょうどいくさが終り、総ての政治犯人は赦されることになつたという命令が出て助かつたのです。が、お兄様がお寺にかくまわれていらつした時にこんなこともありました。ある日、和尚さまは搜索隊の兵の姿を御覧になると、お兄さまを本箱の中に入れ、お経の本を積み重ねて、お兄さまのお体をすっかりかくしてしまい、蓋をはずしたままで、和尚さまはその前で書類の整理でもしているかのようにしていらつしやいました。お兄さまは本箱の中で、荒々しい足音やお道具の倒れる音を聞いていらしたそうですが、やがてその音も静まると、和尚さんが箱から出して下さいましたので、辺りを見廻しますと、お兄さまの入っていた本箱のすぐ傍の箱など、蓋が閉っていたものは槍をつきさした跡が見えていたそうですよ」

まず戦争も止み、お父様も帰って来られ、粗末ながらも

一家の生活が始ったのであります。

「ですからね、お祖母さまは大変でいらしたのよ」と姉が申しますと、花野はおびえたような声で、

「まあ、ずいぶん大変だったこと！ それに恐しいわ、お祖母さまはずいぶんお働きになられたのね」

見れば花野は背を伸ばし、頭を高くあげ、膝に小さい両手をしっかりとくんでゐるのであります。まるで若い母そっくりの姿のようにも見えました。古い誇りときびしい躰の時代には一代遅れ、自由の世には一代先立ち、この子はまあ、まどいっつ、誤解されつつ、さびしく現代に生きてゐるのであります。

姉はその年の秋から冬にかけて宅に留ってくれました。私は姉に二重の意味で感謝しています。と申しますのは、その間には母の臨終があり、しかも姉がいてくれましたため、母は安らかな最後の日々を過して下さったのでした。母と姉との昔語りを傍で聞いていますと、母娘の語らいというよりも友達同士のようにさえ見えていました。それもそのはず、二人の年齢の差は僅かに十五歳でございましたので、姉は何かにつけて母と同じように古風な人でありました。ですから母の最後が来ました時も、姉は昔の習慣通

りに事を運んでくれましたので、ほんとに有難かったと思つています。

柩のあとに従つて、お寺までの道すがら、私は十二歳の時、父のお位牌をしっかりと握りしめながら、葬列に加わつていた昔のことを思い出していました。狭い畑中の道を、僧侶のあとに従つて歩みますと、葬儀人足が竿の先にさしかざす籠の中から五色の聖紙がひらひらと舞い下り、浮雲の如くに空に漂つて、やがては野辺送りの人の笠や白無垢の上に散りかかつてくるのでした。

今は何もかも変わってしまいました。葬いごとさえ、世の遷り変わりにつれて変つて、母の最後の訣別としては極めて質素な葬儀でございました。けれども、母は自分の供養とともに無縁仏の供養を忘れず営んでくれるようにと言ひのこしてゆきました。

すべてに忠実な母でございました。女の道と夫の家に真心を捧げた母は、その最後のきわみにさえ、哀れなきのこのことを思い出し、この機をのがしては、その後世を弔う人もあるまいと思ひついたのでございます。嗣子の兄はキリスト教信者でありましたので、無縁仏の供養を営むことはあるまいと思つていたのでございましょう。

もの柔かな木魚の音にまじつて、静かに響く読経の声に耳を傾けながら、私はあのやさしい母が最高の信念に対しては微動だにしないで過された生涯を思い、何が母をあれほどに強く真実にあらしめたのかと訝つたりいたしました。ふと気づきますと、柔かな音楽は物悲しげな読経に変わつていて、私の思いは罪障深く、成仏の道を失つたさびしい昔の魂のことに及ぶのでございました。しかし、人の心の誠は、必ずこの哀れなきくの魂を成仏させたことでございましょう。慈悲をこい願う経文を導師が声高らかに読みあげました。すると、なみいる僧侶は鏡鏡を高くかかげ、静かに下して打ちならします。又、やわらかな木魚の音がこれに和してひびき始めました。私の両眼はかすみ、紫に、緋に、黄金色にひらめく法衣の袖ははずれがはずれとも見えわかず、三百年の昔からつづいて立のぼる香煙のまにまに捧げられてきた読経の、泣くが如く訴えるが如く響くうちに、私は罪を罰し善行をめずる神もこの母の私なき誠の故に、きくのに対する最後の祈りを聞きあげ給うのではなからうかと思つたりいたしました。

私は寺の門に立って、懐しい母に最後のおわかれをいたしました。そして、疼く胸を抑えながら、屋根の反りと金

色の蓮華の光を残して柩が火葬場に通ずる路に曲つて消えてゆくのを見送りました。それから皆、うちつれて家に帰り、四十九日の間は白木の仏壇にお燈明をかかげ、香を焚きつづけました。忌明けの夜、私は母が坐りなれた場にうずくまり、一切を理解し給うキリストの父なる神に祈りを捧げました。母の旅路が安らかに終り、母がどこにいて、何をしていまして、必ずや神の御摂理にあずかつていられることを確く信じて、静かに仏壇の扉を閉じました。

牧師は私がこうして母のとむらいを仏式で営んだことで心を煩わされ、私がキリスト教信者であるなら、母の野辺送りもキリスト教式であるのがふさわしいとの御意見でありました。それで私はもし私が洗礼をうけた翌日死んだといたしましたも、母は私を慰めようとて、キリスト教式の葬儀を守つて下されたことと信じております。そして私はこの母の娘なでございませう。これは感化というものでございませうか。たしかに、これこそ、理解と同情と真心の感化なのでございます。そして、これはすべて私の神、また母の神を特徴づけているものなのでございます。

二十九 姉の家で

花野が十五歳になりました時、かねて私が心配してしました養子の問題が親族会議でとりあげられることになりました。それまでも、養子の話もちあがるたびに、私は色々と思ひ煩って参りましたのでございますが、二度三度と申出をお断りしたからには、もう自分から進んで何とか決りをつけなければならなくなりました。

日本では、女が品格を保とうといたしますれば、何事につけてもできるだけ口数を少なくするのが賢い手段でありました。自分の思い通りにしようと思えば、口でいうよりも行いで示すに限るのでありますが、今となつては、どうしても口を開かねばなりません。それで私は真心こめた、思慮深いアメリカの「母上」からのお手紙をもつてその会議に列なり、子供の教育のため、もう二三年、アメリカへ行かせて頂きたいとお願ひいたしました。これについては、みなそれぞれの議論もありましたが、松雄の親族側にも、

生家の側にも、私の肩を持って下さる方がありましたのは、それまで親戚の希望に従って忠実につとめてまいりました私の努力が報いられたのでございます。私の望みは入れられ、欣喜雀躍、アメリカ行きの準備を始めることができました。

千代のためには今度の渡米を喜ぶべきか、悲しむべきか判りませんでした。せっかく親しみあつた幼な友達と別れ、好きな学校を離れて、お祖母ちゃんその他には記憶も思い出も腫ろな国へ参りますことは、大きな問題でありました。けれども、花野の喜びは大変なものでした。落着いてはいませんが、始終小声で歌を唱いながら、足どりも軽く動き廻っているのでございます。その顔には、いつも明るい微笑を浮べておりました。渡米準備に追われながら、花野の明るい顔つきを見る度に、たとえ花野が心から恋いもとめていた幸福に浸りきることができないという、みじめなことが起つたといたしましても、希望を夢みつつ、あふれるようなこの静かな歓びを与えられたことだけでも感謝しなければならぬと考へておりました。誠に、何ものもこれほどの楽しい思い出を拭い消すことはできないことではございません。

多忙な数週間が過ぎ、指折り数えて出発の日を待ちわびていた子供達が、いよいよ両手を掲げて、あと十日と嬉しそうに叫ぶ朝となりました。殆ど用意も整いかけていたが、いくら計画を樹てて進めてみしても、あとからあとからとたてこんで、最後の日まで片附かないものがあるようでした。

考へてみますと、子供達はまだ故郷へ行ったことがありませんでした。これまでに何度も連れて行くとうといたしましたが、生活に追われて、いつもその計画が阻まれたのでありました。けれども、祖母や祖父のお墓、ご先祖代々のお墓にも詣らず、子供をアメリカへやることは忍びがたく思われ、いよいよ日ながな春の暁に故郷へ向つて出発いたしました。

私が遊学のため兄につれられて初めて上京した頃に比べますれば、この頃の旅はずつと変つていました。数日間、馬の鞍にのせられたり、駕籠にのせられたり、時には凸凹道を人力車にゆられながらの道中とは事変り、小さいながらも乗心地のよい汽車で十四時間、しかも途中には世界屈指の出来栄を誇る二十六のトンネルをぬけて、山を上つてゆくのでありました。トンネルのあい間あい間には、日

当りのよい山腹に稲田が見えたり、今もなお私の記憶にあつたな、つづれ折れの道が見えたりいたしました。夕方、油井の高櫓が幾本となく立ち並んでいる丘を背景にした繁華な町の停車場につきました。私は故郷の町が變つたことは聞いておりましたが、余りに變りはてた姿を目のあたりに見て、思い出の長岡は、早や昔の夢に過ぎないことを悟りました。

子供達が初めて見るその故郷が、折りよく桜の花に彩られていましたことを私は嬉しく思っております。と申しますのは、久々に見る故郷は、私が物語に描いていたよりも小さく、街幅などもあまりに貧弱でございました。その土塀から枝をさしのべたり、寺のお庭をひきたせたり、街の並木に彩を添える桜の輝きとすがすがしさがございました。子供達には何もかも失望に終つてしまつたことと思われず。

着いた翌朝は吹く風も穏かで、人力車を連ねて、変りはてた通りを抜け、菩提寺に詣る道すがら、あたりは花の香に満ち満ち、微風に吹かれて散る桜は、雁木の屋根に舞いおちるのでした。

「武士の死に際のいさぎよさを表す、この美しい桜の木を

日本人はどれほど愛したことであろうか」などと、私は溜息をつきながら考えておりました。昔お城のあった丘に目をやりますと、何がなしに満足を覚えるのでした。街を護った古えの精神は、今も尚その廢墟の中にこっそりいて、礎石の上には火の見櫓が立ち、半鐘さえ見えました。

旧宅はもうありませんでした。いつの日か、兄がこの地に帰って来て、青年時代を過ぎたなつかしい家に老後を通されればよいがと思ったりいたしました。それと申しますのも、兄が中年過ぎて迎えた妻は、一人の男の子をあけて家の後継者をのこしたのみで、静かに若木のままその生涯を閉じたのでございました。しかし、兄の関心は遠く離れた大都會の工場の雑音や近代生活の上にかかっています。息子の教育のほかに、何ごとにも耳を藉しませんでした。

ですから、何か役にたつとか、商売に関係のあるとかいうことにはばかり支配せられて、家に伝わった宝物などは無価値なものとして、姉の家のお土蔵に移してしまいました。それに、爺やもいしもそれぞれ我が家へ帰ってしまい、やさしい思い出の数々を秘めた、萱葺屋根の傾きかけた、だだっぴろい家の跡には余り見栄えもせぬ洋風の学校が建っていました。「白」のお墓の傍にあった栗の古木も、父と

戸田氏とが片肌ぬいで笑いながらも熱心に業を競いあった的場も、あとかたもなく消え、今は三々五々と袴をつけ、靴を穿いた女生徒に行きあうのでした。全く奇妙な思いが致しましたが、心の奥底では、疼くような痛みを覚えずにはいられていませんでした。私はこうした変遷が将来の希望と利益を意味していることは判りましたし、それをさまざまげようとも思いませんでしたが、過去の静かな喜びと絵のような生活が、手薄でやすっぽいものの中にかき消されてしまったように思えました。懐しい故郷に逗留して歩いた数日間、美しい昔の習慣や理想の思い出が、これから歩まなければならぬ新しい道に少しの影をもなげかけることなきようにと努めることは、私にはつろうございました。

親しい人々への挨拶を終わりますと、私どもを迎えに長岡まで出て来てくれました姉とともに、人力車にゆられながら山あいの姉の家へ参りました。その村は又、趣の異ったところでありました。山腹の崖の上のびたその村の通りは道幅が狭く、下の谷から見上げますと、緑の山肌を背景に、白壁や萱葺の屋根がピンで押しつけた玩具のように見えるのでした。

私ども一行は車一台に引手二人、押手一人といういでた

ちで峡谷を出発しました。曲りくねった急な坂道で、両側には雑木が茂りあってどこまでもなく続いていました。時々、車夫は車をとめて、棍棒を腰に支え、顔の汗を拭うのでした。

一人が笑いながら下の谷を指して、

「全くこの上りは息がきれいなあ、でもまあ赤黒い岩のこちらに青田を眺めたり、下の流れにちらちらうつる青空を見ると、上って来た甲斐はあるなあ」と申しました。すると他の一人が、

「そうだと。町の衆は何の変哲もない街や、塀の向うの埃っぽい屋根ばかり見て暮しているんだから、全くかわいそうだなあ」と申しました。

又、車夫は喘ぎながらも、満足そうに坂を上り始めました。

「この背の低い、曲りくねった木は何ですか、灰色の木に芽がたくさん出ていますのね」と、花野は車がとまった時に申しました。

「桑の木ですよ。ここはお蚕場でね、お山中みなお蚕さまを飼っていますよ。どこのお家でも、蚕棚を組んで蚕座を置いていますよ。ですから、静かな日には道を歩いていて

も、お蚕さまが桑の葉を食べる音が聞えるのです」と姉が説明いたしました。

二人の子供は姉の言葉に心動かされて、道々互いに蚕のこと、桑のご馳走のことなど大声で問いつ、答えつていました。が、やがて坂道がややけわしくなってきたかと思うと、急に道が曲り、低い広い庇を連ねた通りに出ました。その道のつきあたりには大きな家があり、それが姉の家でした。丸石を積み重ねた塀の上には更に板塀があり、その向うに萱葺屋根がそびえている眺めが、故郷の旧宅に余りよく似ていたのですから、私の胸には、又故郷こいしい思いが影のようにしのびよってくるのでございました。

大門のところまで出揃うた召使達は、田舎人らしいねんごろな態度で私どもを迎えてくれました。人力車が進んで行きますと、聞き馴れた「お帰りなさんした」の聲が響いて参りました。

長い道を車にゆられて来たためか、この静かな家に入ると、一段と休まる様な気がいたしました。それから一風呂浴びますと、さわやかさは一層増すのでした。日本の家庭では、お客様のおいでが判つていれば、必ずお風呂をたてたのでございます。私は子供をつれて居間に帰りお座

蒲団に落ちて、縁側ごしに眺めますと、谷も世間も遙か下に横わり、青空が手にとるように見えるのでした。と、やがて二人の女中が昼食のお膳を持って入って参りました。「ここじゃお肉がありませんのよ、家でできた雞とお野菜、それに川魚だけですよ。お肉やパンは手に入らないので」と、姉は急ぎ足で部屋に入って来て、詫びるように申しました。

「そんなことはちょっとおかまいませんのよ。子どもたちはお魚とご飯が大好きですし、私は小さい時から、お野菜好きでしたでしょう。お姉さま、あの白牛のことを憶えていらっしやいますかしら」

姉は思い出したのか笑っていました。お話となると素早い花野は、すぐに「白い牛って、何ですの」と尋ねました。

それで、私もはお昼食を頂きながら、姉の話す私の幼い頃のことを伺うことにいたしました。ずいぶん以前のことでありますから、私自身の記憶は殆んどなく、当時のことは他人に話してもらって、知っているばかりでございます。

「あなた方のお母さまは、小さい頃、別に大した病氣はなさらなかったけれども、余りお丈夫でなかったのですよ」

を咄くのでありました。やがて一瞬静まり返ったと思うと、巫女は神さまから御告げを受けたといつて、こんなことをいうのでした。エツ坊は前世には小さな白牛で、山の奥に建てるお社の材木をひいていたのでした。小さいながらも真面目に毎日、岩山道を辛抱よく登って働き、お社のために力を尽したというので、神々様が生れ變りの時を早めて、人の世に生れ出ることをお許しになったのです、と。

すると花野は驚いた眼を大きくみはって「じゃ、お母さまがその白い牛だったの」と申しますと、千代も箸を止めて、不思議そうに私の顔を見つめるのでした。

姉は笑いながら、又話しつづけました。「お父さまは巫女のいうことなどお信じにならなかつたのですけれど、お祖母さまをお喜ばせしようとて、そのお社へずいぶん寄進をなさいましたよ。でも、お父さまは別に寄進というわけじゃない、エツ坊がお魚を嫌って、お野菜ばかり食べるわけが判って、安心したからだとおっしゃっていました。そんなことはほんとのことだからどうか判りませんけれど、まあお伽噺のようなものです。でも、花野も千代も仕合者ですよ、お母さまが辛抱よくひっぱって下さるからこそ、これまでだって、いろいろの障りのある険しい途を切りぬ

と姉は語り始めました。その頃、こちらの人達は思い迷ったり、困ったりすることがあると、村はずれのお稲荷さまの社に住んでいる巫女のところへ行つたものでした。それで、お祖母さまもこの巫女を家へお呼びしてくれまいかと、お父さまにお願い致しました。巫女の来る二日前から、エツ坊は鯨汁とかお葱など、臭気のある食物を絶ち、お行儀よくしていたのでした。

いよいよその日の朝になると、いしがエツ坊に沐浴させ、御紋附を着たエツ坊はお祖母さまのお部屋へ入って参りました。そこには、家族のものはもちろん、親戚の女の方たちも集っていました。お母さまに手をひかれて、エツ坊がちょこちょこ入って来た様子を今でもよく憶えていますよ。エツ坊は入ると皆さまにそれぞれお辞儀をし、お母さまはお祖母さまの傍の少し前の方へお座蒲団を出して、エツ坊を坐らせました。床の間にはあら孤を敷きつめて、神式に飾ってありました。巫女は上座についており、白い衣裳で、お下げ髪は肩の辺りで薬で結び、髪の毛元に白紙の御幣をつけていました。お母さまとエツ坊が座につきますと、巫女は二三度平伏して拝み、床の間の幣帛をとって、エツ坊の頭の上で左右に振りながら何か呪文のようなこと

け、今じゃ、アメリカまであなた方をひっぱって行つて下さろうというんですもの」といいながら、姉は楽しそうに子供達に頷きつつ、私には屋敷でとれた竹の子のお煮付を添えて下さるのでした。

二三日も経つた頃、姉の家の近所の方で、御子息が東京で成功していらっしやる方が訪ねて下さいました。花野も私もこの方にお目にかかるとうぐ、御子息さんの奥さまのことについておもしろいことを思い出しました。私どもが東京に落ちて間もない頃、この成金のハイカラな奥さまが訪ねて下さいました。奥さまは美しく着飾っていらっしやいましたが、無論、洋服は召していられませんでした。當時はどれほど近代的な婦人と申しましたが、改つた場合にはやはり和服を着ておりました。

丁寧なお辞儀や、一通りの挨拶が終り、床の間の活花も一わたりお賞めになつてから、奥さまはぬいとりも美しい風呂敷包みを開き、控え目な中にも誇らかに、舶来の紙箱をとり出されました。以前、日本では、人を訪問する時には手土産を持ってゆくのが礼儀となつておりました。その箱の上には英語でこんなことが書いてありました。

花の香もかぐわしい、外国の珍菓

欧米上流の紳士淑女の愛用品

それはチューインガムの入った大箱でした。一挙一動にも敵しい作法を弁え、儀式ばった、その婦人がこんないわばアメリカの駄菓子子の贈物をされたことが、いかにも不釣合な、滑稽なことに思われましたが、考えてみれば無理もないことでございました。数年外国に暮した人なら、趣味も外国風であろうと思われ、適当な贈物を見出すことは仲むずかしいことでした。ですから、この婦人も舶来品を売っているお店へゆき、ずいぶん慎重に考えた末、これを選んで下さったに違いないのです。

花野も千代もその場に居合わせました。千代はいちはやくその英語に注目しましたが、読めませんでした。花野は差出された贈物に対して会釈をした時に、見るともなくそれを見たのでしようが、すばやく又一眼見て、急に顔を歪めたかと思うと「失礼させて頂きます」と丁寧に一礼し、そのまま部屋を出てゆきました。

お客さまがお帰りになるとすぐ、花野は私のところへ来て、おもしろそうに申しました。

「ねえ、お母さま。中山さまの小母様はお母さまに大変な

ものを持って来て下さったのね。アメリカにいた頃、私がチューインガムを噛みながら帰って来た時、お母さまにあなたに叱られたことをお話ししたら、小母さまはずいぶんびっくりなさるでしょうね。あの時、お母さまはすぐに塩水で口をすすぎなさいとおっしゃり、もし日本にいたら、あの懸命な口の動かしようを見て、いしは餓鬼道の餓鬼のようだとおっしゃるかおっしゃいましたわね」

このお話をいたしますと、姉は大変面白がって、チューインガムを噛むのもずいぶん妙な習慣ですけれど、お歯黒の起源ほどに害にもなりませんまいと申しました。

「あのお歯黒の起りは何でしょうか。アメリカで時々訊かれたことがあります。私は致し方なく、余り美しくもなかった婦人が過って歯を汚したのを見て、夫が大変器量がよくなったといつて賞め、他の女房からも羨ましがられたという、滑稽なお話をしたのですが」と申しますと、姉は、

「日本の古い習慣には、よくそんなような変なお話が伝わっていますね。私が初めて歯を染めた時お祖母さまがこんなお話をなさって下さいました」

「何でも、ずっと大昔には、皆、歯を染めていなかったそ

うですよ。その頃、大変な焼餅やきのご亭主が若妻が美しい白い歯並を見せて笑ったといつて叱言をいっただけです。その日、その若妻は茄子を切っていて、ふと思いつき、茄子の皮で白い歯を包んでみたのです。すると外から帰って来た夫は、茄子の皮の紫が小麦色の肌と赤い唇に映えて、大層美しく見えたのですから、どうしてそんなおしやれをしたのかと怒って尋ねました。妻は白い歯をかくしただと申しました。夫は妻の慎しみ深さに打たれて、もう焼餅をやかなくなりまして。こんなことから、妻は歯を包んで一段と美しく見えるようになり、ついには、歯を染めるのが貞節の妻のしるしとなったそうですよ」

これはお祖母さまのお話ですが、姉が聞いた、父と戸田氏の話は、お歯黒の習慣を最も合理的に説明しているものと思います。最初に日本を平げた民族は中部アジアの熱帯地方から移住したに違いないという事は、歴史的事実とされています。この民族は日本に上陸するとすぐ南方の温い島に、檳榔子を植えました。その果を噛んで歯を染める習慣があったのです。けれども地質も気候も違いますので、うまく成長しませんでした。それで、二三年経つと、この檳榔子の実を噛む習慣は富者、貴人の間にのみ限られるよ

うになりました。千余年前の貴族が用いられた牛車の中で最高な御輿は檳榔毛車と申しました。

上流階級の人ばかりが檳榔子を噛むので歯が染まります。上を真似るが人情で、これが流行となり、とうとうそれに代るものも発見されました。中世紀に入って、檳榔子が手に入らなくなると、男も女も山からとった野生の五倍子の果を粉末にして、これで歯を染めることにしました。公卿、貴族は明治のはじめまでもこの風習を守りつづけ、畏れ多くも高尊の方までもお歯黒を召させられたと、もれ承わっております。唯、武士は歯を染めませんでした。武士の誇りは武芸にあるのでしたから、栄華や安逸を思わせるような風習はよせつけようとしたしませんでした。この虚飾の風も御維新後は西洋文化の影響をうけて消えてしまいました。けれどもお歯黒は見た目に美しく、いかにも上流生活をほめかしているという風に見えますので、この習慣は婦人の間にだけ残り、これを結婚のしるしとするようになりました。それで、女は嫁すと歯を染め、一生お歯黒をたなかつたのであります。

この習慣は決して醜いものではありません。毎朝、染めていますと、まるで磨きこんだ黒檀のようになり、珊瑚色

の唇の底に黒く光ると、小麦色の肌に映えて、日本人の眼には大変美しく見えるのでした。これは、アメリカ建国時代の風習の流れで象牙色の処女の肌に、入れはくろしたのを欧米人が美しいと思つて眺めたのと同じことでございます。今ではお齒黒の習慣は廃れかけていますが、片田舎に入りますとまだ見られます。又、街中でもごく上流の老婦人とか伊達社会の女の人には歯を染めている人があります。いづこの国でも進歩のさががけをするのは中流社会のように思われます。

三十 死蔵の宝

小さな養蚕地の姉の家に泊つて、楽しい一週間を過ぎましたが、滞在も終りに近づいたある日、姉は私達を大きなお土蔵へ案内しました。そこには生家から届けられたものも、しまつてありました。家のお宝であつたものも、今では価値のないものになってしまいましたが、私は子どもに見せておきたいと思ひました。どれもどれも昔には、役立つたものですし、その一つ一つに私には貴い思い出がまつわつていたからでございます。

土蔵の戸は厚さ一尺もある漆喰の防火戸で、それを入りますと広い部屋の四方に棚がつつてあり、どの棚にも一杯に何か積んでありました。書籍の入つた幅の狭い丈の高い箱が幾列も並んでおり、お膳や食器、お盆の類が詰つた大きめの箱が幾つとなく置いてありました。掛軸を入れた細長い箱があるかと思へば、青銅の花瓶、香炉、木や象牙の彫刻など、絹や木綿の風呂敷に包んで、装飾を変えようと

思えば何時でも間に合うように、手の届くところに置いてありました。

又、幾竿かの箆筒が背中合せに並んでおり、隅には燭台、屏風など大きな家具が置いてありました。

「ちょっと見てごらんなさいよ。こんなにたくさんものを一度に見たのは生れて初めてだわ」と、花野はあきれはてたようにあたりを見廻しながら申しました。

「お店のようね。みなきれいにしまつてあるけど、何だかごちゃごちゃまじつていますわね」と千代が申しました。

「まあまあ、叔母さまの家持のことなど、かれこれ申さないでね。お倉は家財道具の一番よい博物館で日本中どこにもあるのですよ。それはそうね、すぐに用のないものは何でも入れられるんですものね。私など毎日、出したり入れたりしているもので、きちんと片づくことはありませんね」と笑いながら姉は申しましたが、ほんとにここのお土蔵は片づいてはいませんでした。半分あいている棚とか、梯子段の向うの広いところには、外に置場もないのか、生家からのお道具が、そのまま積み重ねてありました。油紙づつみの高張懸や大小の箱の間に大きな駕籠がありました。これは、まだ東京をお江戸といつていた時代に、父が公務

を帯びて上京するのに使つたものでありました。漆ははげ、金具は錆び、緞子のふともも色あせていましたけれども、花野はそのみやびた趣に感じましたか、駕籠の中に入り、厚い蒲団の上に気持よきそうに坐り、漆塗の脇掛によりながら、前方にとりつけた絹の物入れの中の化粧道具を覗いていました。それから、金属の掛鏡におぼろに写る顔をのぞいたりしながら、お祖父さまの駕籠はとても乗心地がよく便利です。アメリカまでも行けますね、といつていました。

花野が駕籠から出て来ますと、私は駕籠の屋根を押してみました。蝶番は錆びついていました。以前は屋根を開いて、後にはねることができました。この駕籠は父が江戸上りのとき用いたもので、駕籠を停めずに駕籠の中で身支度をしたので屋根が後にはねられるように作られたものでした。

「あら、ここにも駕籠があるわ、それよりもっときれいなお姉さま、これには戸がないのよ」と千代が梯子段の後の方から申しました。

「まあまあ千代ちゃん、これはお駕籠じゃなくて、お盥」と姉は千代の方へ近づきながら笑つて申しました。姉は千

代をその中へ抱き入れました。それは大きな盥で、私が見えてからずっと、お土蔵の隅に置いてありました。家では、この盥を繭入れにしてありました。盥の縁は痛んでいましたが、昔の漆塗だけあって、ひび一つ入っていませんでした。未だにビロードのような感触をもっており、竹のたがまでも漆の光沢を受けて、清流にただよう浮き草のようにさえ見えるのでした。ずいぶん古いものでございましょう。これは曾祖母の曾祖母のその又曾祖母がお興入れの時のお道具のなごりだそうでございます。

「千代、出ていらっしやいよ。ここへ来てごらんさい、木のシルクハットがあるわ」と叫んだ花野は内部を覗いて「中がちょっとおかしいのよ」と申しました。

花野は薄暗い片隅の棚一枚に数々の品が積重ねてあるところに立って、私が見ても見えないところのある首桶を見つめていたのです。これはむかし父の室の床の間の脇の袋戸棚の中にもしまっていました。

「さあ、お二階へ行きましょう。お姉さま、綿帽子を子どもに見せてやって下さいませんか。この子達はあの綿帽子を被る結婚式など見たこともないのでしょうから」と私は急いでいいながら、追いたてるように二人を二階に上らせ

ました。私は子供に首桶の説明をするのが厭だったので、ざいませす。近頃の実地的な教育ばかりを受けた子ども達は、おそらく首桶にちなむ昔の武士の深い名譽の心持など理解することはできないでありましょう。武士が一度過って罪を犯せば、公の処刑をうけて家名を汚すよりは、むしろ自決の道を選んだものでした。そんな時、武士は自身の最も信頼する朋友、あるいは譜代の家来を介錯人として自刃し、首は首桶に納められ、白洲に持ち出されて首実検を終えますと、死者の罪は消え、首級は丁寧な遺族に返され、立派に埋葬されたものでした。これも武士道の一つでありました。

私の幼年時代には首桶もそのような恐しい役はありませんでした。唯、祖母やいしが芋を績む時、芋糸を首桶の中の尖とまにぐるぐる巻きつけました。首桶は芋桶に使って、とても重宝なものでした。首桶は芋桶の形によく似ているものですから、お嫁入道具の中、芋桶だけは持たずに嫁いだものでございました。

お土蔵の二階は漆喰に深くとりつけた小窓から明りをとるようになっていました。この小窓には鉄棒の格子がはまっており、漆喰の罅戸をあけると、涼しい微風が部屋を吹きぬけるのでありました。壁によせて、幾竿かの箆筒と鉄

の帯輪のついた長持があり、中には生家の定紋のついているものもありました。元来田舎の旧家では、嫁取り婿取りやご先祖の法事などの用意は何もかも整っているのが例でありましたので、この箆筒の中に何が入っているかは、容易に想像できるのでした。絹布の夜具、男の方が使う括り枕、婦人用の漆塗の箱枕、蚊帳、座蒲団も多種多様で、柔くて厚い冬用のもの、うすい麻の夏蒲団、縁側の竹の敷藁座、台所用の織蓆、形も丸い物もあり、四角なものもあり、無地のものもあれば模様をついた物もありました。

姉はやや低めの箆筒を指しながら申しました。「これには私の大事な衣裳が入っていますよ。不断着るのは出し入れに便利な階下に入れてありますがね、ここには二百年以上も家に伝わったものもあります」

姉が取出しましたのは、細かな刺繻刺繻も美しい桶桶で、緋の裾廻しは眼もさめるばかり、裾には重いほど綿が入っていました。古いものながら、色鮮かで真新しいもののように見えました。これも手まめに手入れをするためで、毎年、虫干の時には必ずとり出して目を通していたのでございましょう。

「東京のお芝居で見たようなのね」と花野が申しました。

全くその通りで、この頃では、お芝居の舞台よりほかではこんな衣裳は余り見られません。

次の箆筒には、姉の嫁入衣裳が入っていました。白無垢は里方に死ぬことを意味し、緋の衣裳は夫の家に誕生することを象徴しているのです。その他の婚礼衣裳の模様は婚礼に因んで松竹梅をあしらったものでした。

「先刻お話の綿帽子はこれですよ」といいながら、姉が差出しますと、千代は、

「まあ、きれい！花野さん被って見せて頂戴よ」と大声で申しました。

私ははっと胸をつかれるような思いをいたしました。次の瞬間、花野が笑いながら、かぶりを振りまわしたので、はっといたしました。どうして花野が嫌いましたのか、はっきり判りませんが、多分、母の葬式の時見た白無垢のことも思い出したのでございましょう。婚礼がすみましてから式服を着ることは別に迷信からではありませんが、決していたしません。式後白無垢は、しまっておいて次の機会を待つことになっています。祖母も母も最後の旅立ちの時には、経帷子経帷子の下に花嫁の時の式服を着て逝きました。すぐ次の長持には——日本人の生活には結婚と死との二

つの重要な儀式がつながり合っているのです——葬式用の品々が入っていました。高張持の人夫や放鳥の籠を持つ者、柩をかつぐ人夫らの着る揃いの着物が半分くらいを埋めていました。葬儀用には絹を用いないことになっていますので、これらはみな麻でありました。定紋なしの袴や白い紐のついた召使の着物もあり、脚絆や巡礼わらじ、その他葬式に列する人に必要な細々したものが数えきれないほどに入っていました。涙の顔を日の御神からかくすために使う薬の大笠のほか、一家の葬儀に入用なもののみなここに入っていたらうと思います。死は思いがけず訪れるもので、日本のの儀式は厳格で変るといふことはありませんので、確かにした家庭では、こうした品々はいつも用意ができていなければならぬことになっていました。

姉は長持の蓋をして、三つの止金に棒を通しながら申しました。「まあ、こんなものですよ。昔は立派でしたし、役にも立ったのでしょうが、今では、麻の布を切りとって、畳替えの時畳の縁につかったり、人足が草鞋をすり切った時に、この中のを代りに与えたりするくらいのもので、すももいつまでもあるものですね」

更に、姉は白木の箆筒を軽く叩きながら、

姉は経帷子を畳み直しながら、子供達のまじめな顔を見て面白そうに笑い、

「どうしてそんなに悲しそうにしているんですか。すぐに帰っていらっしやいという電報が来た時、旅に出る着物もなくちゃ、大変な恥になるでしょう」と申しました。私もすぐに言葉を次いで申しました。

「ねえ、日本人は誰でも最後の旅立ちの支度をしているものですよ。アメリカでどこのお宅にもトランクがあるのと同じことですよ」

「こちらへいらっしやい。これはエツ坊のものですよ。見ておいてもいいでしょう」といいながら、姉は別の壁際へ私達を案内しました。

姉が狭い引出しを開けますと、中には里の定紋のついた紫の袱紗包みの長さ一尺ばかりの細長いものがありました。私の胸は躍り上りました。これこそ私の家の三つのお宝の一つで、関が原の戦で先祖が家康公から賜わった采配だと言ひ伝えられたものです。

私は采配をおし頂き、子ども達にも頭を下げさせて、静かに包みを開きました。皆静かに坐っていますと、姉は勇敢な先祖が危急の折りに主君の一命を救い、そのため家

「でも、これはこれから先で役にたちますよ。いつかは必ず入用なものですからね」

「何ですか」と訊きますと、

「私の死に支度なのです」との答えでした。

「おや、お姉さま、子どもに見せてやって下さいませ。お母さまの見るには見たのですけれど、まだ説明してもやらずにおりますから」と私は熱心に頼んでみました。

姉は引出しをあげて、経帷子とり出しました。畳んだままで見ますと、先年母に着せたのと同じように見えるものですから、皆静まり返ってしまいました。それは糸細いとこの麻で仕立ててあり、帯の代りに、赤ん坊が生れて初めてしめるような付紐つひもがついていました。これは赤子あかことなって来世に生れるという意味なのです。姉はお坊様の訪ねられるたびに、この経帷子にお経を書いて頂くのでした。まだ帷子の前身には白いままになっているところもありました。傍には小さい白い袋があり、これには姉が生れて八日目の命名日に刺った産毛と臍緒、夫を失った時に切った髪の毛の半分、三途の河の渡守に払う六文銭、木玉の数珠、それから極楽往生の護符など入っていて、長の旅に出る時にこの袋を頸にかけて出かけるのでした。

康公は自らの血に汚れた鎧下と一振の銘刀、それに家康公御自身戦場に振りかざして三軍を指揮したこの采配を褒美として賜わったということを子ども達に語り、終りに「この三つの品は家宝として家に伝わったのですよ」と結びました。

「唯の棒のようね」と千代が花野に囁きました。

「そうですね。昔の偉い大将がお使いになった采配は皆質素だったのですよ。それに、家康公の時代は、まだ三河武士の気性そのまま、飾り鞆の中はなまくらといわれた時代でしたからね」と姉が申しますと、又花野が、

「この紙は黄色っぽくてぼろぼろね。以前は真白だったのでしょう」と訊きますので、私が、

「食べたんですってー」と叫ぶのでした。

私は子供に説明しながらも、笑いがこみあげてくるばかりでした。昔の人々はこの采配が家康公のものであったというので、病を癒す魔力があると信じたのでした。母の話

によりますと、病人のある遠方の家から訪ねて来て、丸薬にして飲みたいから、ほんの少し頂きたいと乞うたそうです。父は笑いながら、毒にもなるまいし、鯛の頭も信心からだ、病気が直ると信ずる者に分けてあげなさいといひたそうです。

皆で階下に下りようとして、私はかぶせ蓋の白木の櫃の傍に立停りました。その櫃にはお寺の経机のように曲った脚がついており、一段高いところに置いてありました。私は子どもの頃、虫干の日にこの櫃を見たことがありました。いつも注連縄がはりめぐらされていました。ためらいつつも私は姉を呼び戻しました。

「お姉さま、ずいぶん思いきったことを申しませんが、この桐の箱をあけて下さいませんか。昔とは心持も変りましたし、子どもにも見せてやりたいと思えますので……」

「まあ、エツ坊が勿体ないものを見たいって——」と姉はちょっと思案した後で、「どうせ女の人を見た人もあるし、この頃では皆だんだん敬いの心も薄くなったことですもの」といい足しました。

そこで、姉と私とその箱の両側にひざまずき、蓋をとりあげました。中を覗いてみた私はさすがに何か畏れ多い感

じに打たれました。鎧下と刀とは分家に伝わり、家の系図は兄が持っていましたので、目の前には一枚の衣が経帷子か何かのように静まり返っており、白かった色も時代を経て黄ばんで見えませんでした。その上に烏帽子と薄板造りの扇子が載せてありました。これは祖先が廟所で祭司をつとめる時に着る祭服で、霊験あらたかなものと信じられていました。祖母に聞いたことですが、祖父がこの衣を着ました時、その広袖の蔭で不思議なことが起ったとかいうことでした。私達はほんの一瞬櫃の中をかいま見ただけで、黙々として又蓋を覆うてしまいました。姉も私もこのことについては二度と話しあつたことはありませんでしたが、私も子どもの時にはこの櫃を納めた部屋の入口にさえ、女は穢れたものとして一步も踏み入れることができなかった程のものを、その中を覗いてみるなどはずいぶん時代が変つたことだと、姉も心の中では感じている様子が、私にはよく判りました。私は、子ども時代にこうした品々に対して抱いていました信仰を失っていましたけれども、当時の記憶からはぬけきっていませんでした。美しくも敵かな思ひがひたひたと胸に湧きあがつてきました。その時、ボタンと音をたて、重いお土蔵の戸が閉りました。これは下男が

長い竿をさしあげて外から閉めるでしたが、私達が中にいるのも知らず、時刻通りに閉めたのでした。

「まあまあ遅くなりました。気のおけないお客さまですから、急いで下さいね」と姉は笑いながら申しました。私達はそろそろと狭い梯子段を下りて、お土蔵を出ました。後にはボタンボタンと一つずつ戸の締る音がして、お宝も何も暗闇の中に消えてゆくのでありました。

三十一 黒 船

出帆の前夜、東京の叔父が船出のテープを持って訪ねてくれました。

色あざやかな紙リボンが包みの中からころがり出ますと、千代は大声で申しました。

「敏子さんにはピンク色、邦子さんには青、先生には白、紫を叔父さまにするわ。ねえ、叔父さま。叔父さまのお好きなのをもう二つ持ちますわ」

すると、花野もまた、

「私は日本のために赤と白とは全部持つよ。もう二度と帰ってこないから、ほんとにさよならよ。日本の人はみんな好きよ、でももう私はいつまでもアメリカの祖母ちゃんのところまで暮すのよ」といって面を輝かせながら、ホーム・スイート・ホームの歌を口ずさみつつ、部屋を出てゆきました。花野は将来運命の手がこの国に導くことがあろうことを夢にも思っていないのでした。

花野も千代も床に入ってしまったから、私はあれこれ荷造りの残りを片づけていました。すると、すぐがトランクの上につめ合せたショールをとりあげながら、「少しゆる過ぎるようでございます。お座蒲団を入れましたら、よろしかろうと存じますがアメリカのような大きなお国へお座蒲団などおかしゅうございますね」と申しました。

ところが、トランクの底には他の大事な座蒲団が入っていたことをすずも知らなかったのです。それは姉の家のお土蔵の中で見つけた青い古風なお座蒲団で、色もやや褪せておりましたが、いつも祖母のお部屋火鉢の傍に置いてあったものであります。

私は誰もいない時、それを包んでトランクの底に納めたのです。そのお座蒲団にほどこされた刺繡の花にさわる、遠い昔のことが思い出されるのです。或る日腕白盛りの孫娘が、縮毛の黒髪を風に吹かせながら下駄を踏みながらしてご門を駆けこみ、家族のもとへの挨拶もそこそこ、このお座蒲団の上に坐っていらした祖母の許へ急ぎ、大きな平たい本を広げました。

その子は世界地図を指しながら、

「お祖母さま、ずいぶん心配なことがございます。こんな大きな世界の中で日本はこんな小さな島が少しばかりあるのですと、先生に教わりました」と申しました。

祖母は大きな眼鏡をかけて暫く地図を見入っていました。が、静かに地図を閉じて申しました。

「それはそのはずですよ。エツ坊、これは黒船に乗って来た人達が書いたものですからの。日本人がこの地図を書けば、日本をもっと大きく書きますよ」

「黒船に乗って来た人って何ですか」

「あから顔の異人さんでの、来てくれともいわないのに、この神国へ渡って来たのですよ。帆なしで走る大きな黒い船に乗って来たのですが」

「ああ判りました。いしが歌ってくれましたわ」といって、女の子は高い声で歌い始めました。

「雨の夜に日本近くねばけて流れこむ唐模様

黒船に乗りこみ、八百人大砲小砲を打ちならべ、

羅紗猩々狒のつつぽじゅばん

黒坊は水底仕事する

大将坊は部屋にこもりて、じっと真面目顔

中にもおひげの長いじゃがたら唐人が

沖を眺めてドラマミョウ鉢たたいて

キクライキクライキンミョウライと

お庭の大根、土産にかついで逃げてゆく」

「どうして黒船っていうのでしょう」

「それは、船が海の向うにいと、黒い煙が雲のように見えて、それがだんだん近づいてくるように見えたもので。それに、黒い大砲もついていて、どんだん打ったので。黒船の人達はきれいな物などちょっとも判らないものですよ。日本人が美しい錦で帆をこしらえていたり權には彫物がしてあったり、珊瑚や真珠がはめこんであるのを見て、笑ったそうですよ。それに皆商人きんとうのような人ばかりで、神国日本のことは判らないのね」

祖母は言葉を切って頭を振りました。

「それからどうなんですか」と女の子は熱心に話のつづきをせがみました。

「黒船もあから顔の異人さんも帰ってゆきました。けれど、もね、それから何度もひき返して来ましたよ。今じゃお船はいつも往来しているし、この日本人までが商人のような

ことばかりいうようになりましたからの。もうもう泰平も何もありませんよ」

女の子は心配そうに尋ねました。

「両方のお国は泰平で安心していられないでしょうか。船はお互いの国を近づけるものですと先生はおっしゃいましたが」

すると祖母は姿勢を正して申しました。

「エツ坊や、異人さんと神国日本の人々がお互いの心の中が判りあうまでは、何度船が往来しても、決してお国とお国とが近づきあうことはありませんよ」

このお話から年月は流れました。一度、あから顔の異人さんや黒船のお話に耳を傾けていたエツ坊は黒船に乗って、異人さんの住む新家庭へ遠い旅をしたのでした。そしてそこで、西洋も東洋も人情に変わりないことを知ったのでした。けれども、これはまだ大方の東洋人にも西洋人にもかくされた秘密なのです。それを説明するためには、祖母のお話に話の統編を付け加えなければなりません——そうしてもまだ終らないでしょう。あから顔の異人さんも、神国日本の人々も、今尚互いの心を理解しおうてはおりませんが、この秘密は今も尚かくされたままになっておりますが、船

の往来は今なお絶えることもしません。絶えることもしません。

訳者あとがき

原著者杉本鍼子夫人は明治六年越後の国、長岡藩の家老、稲垣家に呱呱の声をあげられました。維新の嵐はこの城下町をも大きくゆすぶりましたが、夫人はその名残もまだ消えやらぬ頃生いたたれたのでした。武士の伝統の色濃い家庭の中にあつて、祖母君母君の語られるやさしくも又雄々しい昔語りには耳を傾け、乳母や爺やの炉辺のものがたりを聞きながら、武士の娘としてのきびしい躰と教養を身につめました。こうした夫人が兄君の親友であり、アメリカ東部で貿易商を営んでおられた杉本氏に嫁がれることになり、若いみそらで単身渡米されました。見るもの、聞くもの、すべて不思議とも思われる彼の国で、新しい生活を始められた夫人は裡に深く滲えられた古い日本の女の道を忘れることなく、賢明に冷静に周囲を見守られました。そして、あるがままに受け入れておられた祖国の真の姿をいよいよ明らかに見きわめられたのでした。この頃「武士の娘」はすでに夫人の心の中に成長し始めていたのでございましょう。

二女をもうけられ、幸福な日々を送られるにつけても、夫人は、日夜遠い黒船の国に思いを馳せておられたお里の母君の上を案じられるのでした。又、なつかしい祖国のことも偲ばれて、いよいよお二人のお子様とともに日本へ向つて出発されましたが、出帆後間もなく、夫君は盲腸を病まれ、不帰の客となられました。当時の夫人の御心中は察するに余りあるものがございます。然し、この大きな試練が名著「武士の娘」の生れ出る機縁となつたのでした。夫人は暫く日本に留まり、お子さま方は日本的な教育をうけられました。数年で再び渡米され、今度は二女の教育のため、ニュー・ヨークに住まわれました。貯えも次第に手うすになられ、物価の高い都の中

で、お子さまの世話をなさりながら、収入の道をとお考えになつてみれば、文筆より外には思いつかれなかったのです。さまざまの雑誌や新聞に投稿され、それが毎日のように返されて来るので、お子さま方の手前さえ恥しい思いをしたと話されました。幾度か筆を折ろうと思われましたが、生涯の友、故ミス・ウイルソンに励まされ、投稿をつづけられました。

当時の夫人の苦闘は思い半ばに過ぎるものがありますが、大きい苦しみの蔭にこそ大きな歓びも秘められていと申せましょう。夫人のひたむきな努力はついに実を結び、文豪クリスファ・モーリーの認めるところとなり一九二三年十二月から翌二十四年十二月まで雑誌「アジア」に「武士の娘」と題する夫人の原稿が載せられ、一九二五年ダブルデー・ドーラン社から単行本として発行されました。この本はドイツ、フランス、デンマーク、スエーデン等七カ国語に翻訳され世界に多くの友を得たのです。

夫人は当時をかえりみて、次の様に美しく述べておられます。

Memory is a rainbow

Where tears drop amidst the sunshine

On life's wandering path——

思い出は虹の橋

人の世のさすらい路にはふり落ちし涙も

燦たる陽光にきらめきとかわりつ——

〔婦人之友〕昭和十五年一月号『武士の娘』の見たアメリカより

夫人は数年間コロンビヤ大学で日本文化史の講義を担当されました。一九二八年、前後三十年にわたる米国画活をきりあげ、帰国されました。

「あちらに渡つて以来、いろいろの方から日本についての様々の質問をうけました。私はそれを書きとめておき、お友達の問にお答えする積りで書いたのがこの『武士の娘』となったのです」と、夫人は申されます。又、これは自伝ではないので「The Daughter of the Samurai」とせず「A Daughter……」とされたとのこと。それです。夫人と同じ時代に士族の家に育ちの方ならうなずかれることがらばかりが書かれているわけですが、大正の世に生れた私は大変珍しく面白くまた有益に読ませて頂きました。

この「武士の娘」の蔭に咲いた夫人と故ミス・ウイルソンとの友情ほど美しいものはあまりございません。影の形にそう如く、夫人の御結婚当時よりその苦難の航路の日毎夜毎夫人を励ましその仕事を助けられ、お子さま方の教育には一入の力をこめられたのはミス・ウイルソンであられたそうです。杉本氏が臨終に残された「家族を頼みます」のお言葉に答えて「Yes」と云われたこの一言を生涯守りつづけられたこのお方の操志の高さを思うにつけてもこれほどの厚い友情をうけられた夫人のお人柄もさこそと思われ、頭の下る思いが致します。

ミス・ウイルソンは今は青山の杉本家の御墓所に眠っておられます。

訳出にあたりましては、杉本夫人が手をとらんばかりに導いて下さいました。夫人は御高齢をおおいといたなく、前以て送り届けておきました原稿を毎月曜日私と交互に音読して下さい、細々と御教え下さいました。朝早くから掃ききよめられたお部屋で夫人とこうして勉強しましたことは、私には生涯忘れられない思い出となります。

夫人と御同郷の元東京高等商船学校教授目黒真澄先生が先年本書を翻訳、北越新報に紹介されましたが、私が夫人の近著「お鏡お祖母さま」の訳者であり、女性であるところから、本書の翻訳を私におゆずり下さいました上に、原稿をもお貸し下され、何かとお励まし頂きました。この大きな御好意を深く感謝いたします。

書店の長崎様はじめ松谷様、秋山様から細々と御注意頂きました。御好意を感謝致します。こうして、これらの方々の御好意と御協力とによって生まれた訳書ではありますが、本書の不備の責任は一切私が負うていますことは申すまでもございません。

私どもの結婚当時より、変らず何かと御導き頂いております本位田祥男博士御夫妻が本書のことを大変御喜び下され、静子令夫人が題簽をして下さいました。御心入れを深謝致します。

最後に、最大の感謝を阿部知二先生にお捧げ致します。私の拙い訳文が陽の目を見ましたのは全く先生のお蔭であります。長崎書店に御紹介下さったばかりでなく、巻頭に序文を頂きました。この序文は先生が南方へ御出発の前日、御挨拶に参上した主人にお渡し下さいましたもので、お忙しい中にも、ささやかな私の仕事をお覚え下さった御好意に対して、心より感謝する次第であります。

以上は初版の序文でございますが、明治百年を迎えようというこの時、再び筑摩書房の御好意で世に出る運びとなり、有難いことに存じております。様々の面で大きな断層が感じられるほどに変わってしまった若い世代の方方に読んで頂けたらと念じております。

昭和四十二年八月二十五日

大岩美代

大岩美代 (おおいわ みよ)

1914年 岡山に生まれる
1936年 津田英学塾卒業
現在 津田英語会講師
訳書 「お鏡お祖母さま」

武士の娘

筑摩叢書 97

昭和42年10月30日 初版第1刷発行
昭和44年10月15日 初版第2刷発行

¥ 520

著者 杉本 鉞子
訳者 大岩 美代
発行者 竹之内 静雄
発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
TEL 東京 (291) 7651 (代表)
振替 東京 4 1 2 3
郵便番号 1 0 1-9 1

CS 01097

映印刷・永興舎製本

- 19 古典ギリシア ■高津春繁 ギリシアの実生活と芸術を語り、その精神と文化の形成過程を究明 ¥ 380
- 20 渡辺崋山 ■石川淳 画家、蘭学者、政治家であり、先覚者としての生涯を簡潔な筆致で浮彫りした卓抜な評伝 ¥ 320
- 21 斎藤茂吉ノート ■中野重治 大歌人茂吉を独自に論じ、すでにその声高きだった名著 ¥ 600
- 22 鎖国〈日本の悲劇〉 ■和辻哲郎 世界的視座の中で鎖国を精神的に解明し、日本文化の命運を省察 ¥ 800
- 23 無用者の系譜 ■唐木順三 業平、一遍、芭蕉、荷風ら“文人”を追って、日本文化の底辺を探る。 ¥ 380
- 24 斎藤茂吉 ■上田三四二 医師であり、歌人である著者が多年の研究をもとに巨人茂吉の人間と文学を解明 ¥ 520
- 25 森鷗外 ■洪川曉 学殖ある作家として信頼される著者が、文豪とその名作の秘奥を実証的に考究した好個の海外研究 ¥ 380
- 26 柳田国男対談集 日本民族学の開拓者であり、一世に卓絶した碩学との興味豊かな対談、座談十一編を収む ¥ 580
- 27 中國書畫話 ■長尾雨山 描方、書方の変遷を實際に即して明快に論じ、併せて中国書画の歴史を語る ¥ 680
- 28 聴耳草紙 ■佐々木喜善 日本民族学のメッカ〈遠野〉地方の昔話や民話を集大成した民俗学の古典の覆刻 ¥ 480
- 29 新版中国の赤い星 ■エドガー・斯诺 中国革命の偉業を始めて報道した歴史的名著 ¥ 680
- 30 初期キリスト教とパイディア ■イェーガー 野町啓訳 ¥ 360
- 31 古代芸術と祭式 ■ヘリソン 祭式から芸術への移行過程を論じ、芸術とは何かに答える ¥ 400
- 32 中華飲酒詩選 ■青木正兒 陶淵明、李白、白楽天など、諸家の名詩から美酒をたたえる名品を厳選 ¥ 680
- 33 新版寒村自伝(上) ■荒畑寒村 日本の社会主義運動とともにあゆんだ著者が鋭く感銘深い記録 ¥ 450
- 34 新版寒村自伝(下) ■荒畑寒村 今回の改訂に当り、大訂に加筆し、書下しを加えた決定版自伝 ¥ 580
- 35 創造的要素 ■スペンダー 深瀬基寛 英国詩壇の第一人者による文明批評的作家論 村上至孝訳 ¥ 580
- 36 司馬遷 ■ワトソン 博士の多年にわたる研究の成果であり、最新にして詳細、卓抜な司馬遷、史記研究である。新稿。 ¥ 520
- 37 私の「漱石」と「龍之介」 ■内田百閒 二文豪を語る意味溢れる随筆集 ¥ 450
- 38 国語学新講〔新改訂版〕 ■東条操 明治から昭和に至る国語学の推移と全般に亘る鳥瞰的展望 ¥ 550

筑摩叢書



既刊

- 1 萩原朔太郎 ■三好達治 「地上に存在した無二の詩人」として敬愛を捧げる著者の卓越せる期太郎論 ¥ 350
- 2 西洋の美術 ■井手則雄 原始時代からフランス革命までの西欧美術の発展過程を清新平明に説く好著 ¥ 350
- 3 戦後文学の回想 ■中村真一郎 第一次戦後派である著者による独自の戦後文学論 ¥ 290
- 4 人間最後の言葉 ■アヴリーヌ 古今の有名人が死にのぞんで残した言葉を集めた人間省察の書 ¥ 550
- 5 正法眼蔵随聞記 ■水野弥穂子 道元禪師に参侍した懷辨の歴史的名著の原文対訳 ¥ 600
- 6 千利休 ■唐木順三 利休の生涯を世阿弥、芭蕉のそれと比較し、時の権力と結びついた利休芸術の真諦を追求した ¥ 320
- 7 大正文学史 ■白井吉見 多端な大正期の社会思潮的な推移の中に、この期文学の史的再評価を行なう ¥ 380
- 8 わが心の遍歴 ■長与善郎 名門長与家の歴史とともに著者の文学的生涯を吐露する自叙伝 ¥ 450
- 9 明治文学史 ■中村光夫 近代への文学的開花の道程を鋭利に分析、併せて近代文学の持つ病根を抉る ¥ 380
- 10 モンテーニュ・エッセー ■原二郎選訳 名著エッセーを一巻に精選。 ¥ 380
- 11 論語 ■武内義雄訳注 訳者六十年の攻究の成果を結集して成った權威ある訳注書。原文、読下しを対照。解題を付す ¥ 380
- 12 ニッポン日記 ■マーク・ゲイン 戦後の大変革の内実と日本官頭の驚くべき実態を鋭く抉る記録 ¥ 680
- 13 新版現代史への試み ■唐木順三 新しい世界観による人間性の回復を探求した論著 ¥ 380
- 14 わが古典鑑賞 ■小島政二郎 「かげろふの日記」など、特色ある王朝の五作品の鑑賞と論考 ¥ 600
- 15 昭和文学史 ■平野謙 初期の社会的不安から、めまぐるしく変化したこの期文学の特性を究明した力作 ¥ 480
- 16 東西の美術 ■ローランド 八代修次 高橋敏・梅津忠雄訳 ユニークな比較美術学入門 ¥ 420
- 17 ふらんすデカメロン ■鈴木信太郎・渡辺一夫・神沢栄三訳 〈サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル〉の完訳 ¥ 680
- 18 歎異抄 ■増谷文雄 親鸞がその言葉を語った歴史的時点に立ち返って考究し、後世の宗学の影響による誤りを正す ¥ 460

59	新編人間・文学・歴史	■武田泰淳	機知と独自の発想に溢れた異色の評論集	¥ 580
60	私の見るところ	■ポール・ヴァレリー 佐藤正彰・寺田透訳	偉大なる知性の人の犀利な所見集	¥ 550
61	河上肇	■大内兵衛	「求道の戦士」河上肇の波風に満ちた生涯を調達な筆で描き、多角的に論じた卓抜な人物論。	¥ 450
62	常識について	■小林秀雄講演集	「文学と自分」を初め氏の殆どどの講演を取録。	¥ 580
63	古典について	■吉川幸次郎	明治時代と古典、漢学受容と江戸の学者たちを語る学問論	¥ 400
64	魯迅作品集 1	■竹内好訳	中国近代文学の父、魯迅の作品を三巻に取録。本巻は「朝花夕拾」「彷徨」	¥ 540
65	魯迅作品集 2	■竹内好訳	作品「野草」「朝花夕拾」「故事新編」の三作を取録。	¥ 540
66	魯迅作品集 3	■竹内好訳	評論「フェアブレイは早すぎる」その他の評論二十数篇を取録。	¥ 680
67	河上肇詩集	■解説 白石凡	河上肇の思想と感受性のいかなるものかを如実に示す、格調高い詩歌集	¥ 480
68	友情論	■アベル・ボナール 青柳瑞穂訳	友情の本質、種々相、男女間の友情を語る名著。付録に「ローマ」を付す。	¥ 380
69	中国 もう一つの世界 (上)	■エドガー・スノー 松岡洋子訳		¥ 880
70	中国 もう一つの世界 (下)	■エドガー・スノー 松岡洋子訳		¥ 680
71	黒船前後	■服部之総随筆集	■解説 松島栄一	古典的名隨筆の数々。 ¥ 780
72	陶淵明	■李長之 松枝茂夫訳	六朝の大詩人、陶淵明の生涯と時代を描き、その詩を論じた異色の論考。付録に全詩文を取収	¥ 580
73	三木清	■唐木順三	昭和前期の思想的先覚・三木清に様々な角度から照明をあて、その全体像を浮彫りにした好著	¥ 450
74	宋詩選	■小川環樹訳	文運隆盛を極めた宋代の豊かな文学遺産から代表作二百余篇を精選し、訳注を付した好著	¥ 650
75	ミメーシス	■ヨーロッパ文学における現実描写 (上)	■E・アウエルバッハ 藤田一士・川村二郎訳	¥ 620
76	ミメーシス	■ヨーロッパ文学における現実描写 (下)	■E・アウエルバッハ 藤田一士・川村二郎訳	¥ 680
77	文学の理論	■R・ウエレック 天田三郎訳	■A・ウオーレン 訳	理論と価値評価の統一を目指す ¥ 620
78	日蓮	■増谷文雄	書簡を通してみる人と思想	信徒たちに与えた書簡を通して日蓮の人間像と思想を究明した力作 ¥ 450

39	無常	■唐木順三	王朝の「はかなし」が、中世の「無常」に移行し、道元の無常観にいたる過程を跡づけた名著	¥ 680
40	神話と宗教	[古代ギリシャ 宗教の精神]	■W・オッター 辻村誠三訳	神々の精神と役割を創造的な視点で論考 ¥ 400
41	十二年の手紙 (上)	■宮本 順治 宮本百合子	十二年の長きに亘って獄中にあった順治との往復書簡	¥ 450
42	十二年の手紙 (下)	■宮本 順治 宮本百合子	暗黒の時代をいかに生きたかを伝える感銘ふかい記録	¥ 450
43	墮落論	[歴史のなかに 論があるか]	■G・ハード 深瀬基寛 安田章一郎訳	歴史的に墮落と救済を追求 ¥ 550
44	日本知識人の思想	■松田道雄	近代日本の思想の流れを独自の視点で論考	¥ 500
45	中国革命の先駆者たち	■島田虔次	中国革命の原点を探る待望の書	¥ 420
46	民俗学について	[第二対談集]	■神と靈魂、民俗学、招魂などを語る座談九編	¥ 420
47	現代人は愛しうるか	[アポカリ プス論]	■ロレンス 福田恒存訳	現代文明への批判 ¥ 400
48	中国散文論	■吉川幸次郎	中国語の表現能力の特質を形式と意味の両面から鋭く追求した論文	¥ 380
49	エラスムス	[宗教改革 の時代]	■ホイジנג 宮崎信彦訳	激動と混沌の時代を生きた中世最大の文人を描く伝記 ¥ 600
50	志賀直哉論	■中村光夫	一般に流布された志賀直哉像に抗して、独自の視点から大胆に論断する	¥ 420
51	わが落語鑑賞	■安藤鶴夫	著者独自の見識によって編む古典落語十六編。俗語の語釈付。	¥ 600
52	残酷物語	■リラダン 斎藤磯雄訳	人間性の美と醜悪を離すことなく描かれた不滅の名作。全面的に改訳した決定版。	¥ 600
53	西欧世界と日本 (上)	■サンソム	金井圓・芳賀 徹 多田実・平川祐弘訳	¥ 600
54	西欧世界と日本 (下)	■サンソム	金井圓・芳賀 徹 多田実・平川祐弘訳	¥ 600
55	哲学入門	[哲学の 根本問題]	■田辺元	哲学の本質的な問題を平易、明快に論述した最良の入門書 ¥ 320
56	中世の文学	■唐木順三	すきからすきびへ、そしてすきびに至る中世の芸術理念の変貌過程をきわめる	¥ 420
57	創造的人間	■湯川秀樹	現代文明の先端をゆく科学と人間世界とのふれあいへの深い思索の書。	¥ 480
58	諸国崎人伝	■石川淳	いずれも芸術の道に遊び偏奇の言行を伝えられる芸術文人の風貌姿勢を描く	¥ 450

- 99 セザンヌの手紙 ■池上忠治訳 近代絵画の巨匠の全書簡未紹介の30余通を含めて集大成。 ¥ 650
- 100 トラークル詩集 ■G・トラークル 若くして逝ったオーストリアの抒情詩人の全詩集 ¥ 560
- 101 (増補版) カフカとの対話 ■G・マノーホ カフカの世界 ¥ 650
吉田仙太郎訳
- 102 古川柳名句選 ■山路閑古 代表的名句五百句を精選、鑑賞した古川柳入門である ¥ 680
- 103 エリオット ■深瀬基寛 処女詩集より名作「荒地」をへて「うつろなる人々」を訳解した名著。 ¥ 620
- 104 歴史主義の成立(上) ■F・マイネッケ 第一部 啓蒙期の研究 ¥ 650
菊盛英夫・麻生健訳
- 105 歴史主義の成立(下) ■F・マイネッケ 第二部 ドイアの運動 ¥ 720
菊盛英夫・麻生健訳
- 106 ドストエフスキー ■E・H・カー 公正・正確・鋭く豊かな筆で描かれた伝記の傑作 ¥ 650
松村達雄訳
- 107 草庭 ■堀口捨巳 数寄屋造の第一人者が実作体験をもとに、その峻厳な美的融合の世界を究めた名著。解説 太田博太郎 ¥ 600
- 108 サルトルのマルクス主義 ■W・デサソン ¥ 720
玉井茂・宮本十蔵訳
- 109 近代化の人間の基礎 ■大塚久雄 近代社会の成立と発達を跡づける好著。 ¥ 560
- 110 都市 ■増田四郎 都市の誕生と発達を東西の都市の比較により、文化史的考察を試みた都市研究第一人者の名著 ¥ 520
- 111 古代・中世の哲学 ■速水敬二 ギリシア・ローマからアラビアをへ中世に至る哲学史 ¥ 880
- 112 日本の建築 ■太田博太郎 伊勢・法隆寺・桂をもつ独自の伝統を、学問的に、興味深く論じた好著 ¥ 620
- 113 仏教とキリスト教の比較研究 ■増谷文雄 ¥ 620
- 114 カフカ論 ■ブランシヨ 二十世紀の最も問題的な作家カフカを、 ¥ 560
栗津則雄訳 フランスの代表的批評家が論究する。
- 115 京の町かどから ■松田道雄 五十余年の京都住いの日常病目に、自由な魂が流露する。 ¥ 520
- 116 ロダン ■ブルデル 近代彫刻の絶頂を極めたブルデルによる、師 ¥ 580
清水・関訳 ロダンへのオマージュと自らの精選の記録。
- 117 魯迅回想録 ■許広平 魯迅の妻許広平によって描かれた「近代中国文学の文」の生々とした姿。 ¥ 520
松井博光訳
- 118 南方熊楠随筆集 ■南方熊楠 不世出の頭脳熊楠翁の書簡、随筆は無類の面白さに満ちる ¥ 700

- 79 郷土生活の研究 ■柳田国男 郷土生活のあり方を調べる 不可欠の研究法を説く名著 ¥ 450
- 80 一数学者の回想 ■小倉金之助 科学的精神の確立のために闘った先駆者の自伝。 ¥ 480
- 81 ルネッサンス期の哲学 ■速水敬二 文藝復興期の精神を跡づける。 ¥ 580
- 82 ドストエーフスキー覚書 ■森有正 文豪の精神にせまる力作 ¥ 560
- 83 不幸なる芸術 ■柳田国男 民衆の間に浸透し、確固たる位置を占める美しい文学の系統を探る ¥ 520
- 84 沙門空海 ■渡辺照宏 伝説、俗信に包まれた虚像ではなく、真の弘法大師の生涯を再現した空海研究の白眉 ¥ 580
宮坂有勝
- 85 海上の道 ■柳田国男 日本人はどこから渡来したか、碩学生涯の課題にとりくんだ記念碑的な名著 ¥ 560
- 86 東西抄 ■石田英一郎 広く世界史的視点の中で日本人である意味を考究した文化人類学者の卓抜な論考 ¥ 560
- 87 円朝怪談集 ■解説 安藤鶴夫 名作「牡丹灯籠」中編「乳房夜」の二篇を取めた好読物。 ¥ 580
- 88 芥川龍之介 ■宇野浩二 芥川をよく知る著者が、彼の素顔を心をこめて綴った交友録である ¥ 680
- 89 中国の革命思想 ■小島祐馬 中国古来の革命思想の系譜とその展開を辿った力作。 ¥ 480
- 90 夏目漱石 ■森田草平 多年、文章に傾斜した著者が師の人となりや思い出を綴った名エッセイ集。 ¥ 480
- 91 古代中国の精神 ■貝塚茂樹 悠遠な古代中国の世界と古代人をめぐる歴史論考 ¥ 450
- 92 東山時代における一縉紳の生活 ■原勝郎 ¥ 520
- 93 ロシア革命前史 ■荒畑寒村 皇帝専制下に持続した革命運動と革命家群像を画く。 ¥ 580
- 94 中国詩史(上) ■吉川幸次郎 先秦から六朝に至る詩の推移を説いて、詩の精神をさぐる ¥ 650
- 95 中国詩史(下) ■吉川幸次郎 唐より近代の文学革命までの詩の変遷を迎える恰好の文学史 ¥ 650
- 96 美について ■高村光太郎 秀れた彫刻家であった著者の代表的芸術論を現代的視点で集成 ¥ 650
- 97 武士の娘 ■杉本鏡子 激動の維新期に生れ、開化期の自由な空気のなかで成長した一女性の心暖まる自伝 ¥ 520
大岩美代訳
- 98 辛亥革命の思想 ■島田虔次 当時の概文、意見書等の詳細な注解つきの紹介。 ¥ 580
小野信爾

- 119 中国戦乱詩 ■鈴木虎雄 屈原、曹植、李白、杜甫等の代表的戦乱詩50篇を取めた異色のアンソロジー ¥ 600
- 120 室生犀星 ■中野重治 北陸に生を享けた二人の稀有の詩人の出会いと温く厳しい交遊と精進の歴史 ¥ 600
- 121 ある心の自叙伝 ■長谷川如是閑 近代日本の推移を内面的に見つめた貴重な記録。 ¥ 720
- 122 イタリア・ルネサンス ■J.H. プラム 西洋の青春を石上良平訳 浮影りにする ¥ 650
- 123 非政治的人間の考察(上) ■トーマス・マン 前田敦作・山口知三訳 ¥ 750
- 124 非政治的人間の考察(中) ■トーマス・マン 前田敦作・山口知三訳 ¥ 650
- 125 非政治的人間の考察(下) ■トーマス・マン 前田敦作・山口知三訳 ¥ 650
- 126 人間性の破産と超克 ■E.グートキント 現代文明への警告 深瀬基寛訳 世と予見の書。 ¥ 500
- 127 新編歴史の暮方 ■林達夫評論集 混沌の現代に、新たな視点を投ずる評論の数々。 ¥ 600
- 128 呪術[魔女と異端の歴史] ■P.ヒューズ ヨーロッパの黒い裏面史であり“人間、この奇怪なもの”のパノラマ 早乙女忠訳 ¥ 600
- 129 中世日本文学 ■斎藤清衛 中世美学の精神を独自の視点で捉えた世評高い名著の特選復刊 ¥ 680
- 130 アウグスティヌス ■C.ドーンソンほか 偉大な基督教父の服部英次郎訳 現代的意義を探る ¥ 680
- 131 音楽文化史—音楽とヨーロッパ精神— ■ダンヴェル 村田武雄ほか訳 ¥ 680
- 132 ギリシア哲学と宗教 ■D.フォーゲル 藤沢令夫ほか訳 ¥ 600
- 133 稲の日本史(上) ■盛永俊太郎・柳田国男ほか ¥ 850
- 134 稲の日本史(下) ■盛永俊太郎・柳田国男ほか ¥ 800
- 135 人間的時間の研究 ■ジョルジュ・ブーレ 井上究一郎ほか訳 ¥ 880
- 136 詩学 ■西脇順三郎 近代詩の源に透徹し東洋の叙知に通ずる自在のポエジイを体得した巨匠による新鮮無類の詩学 ¥ 650
- 137 日本人の結婚観 ■神島二郎 結婚、家庭生活を創造への観点として捉えた示唆豊かな書 ¥ 600
- 138 社会科学としての経済学 ■宇野弘蔵 知識人の学としての経済学 ¥ 680